

「コスモ」改題

UFOと宇宙 第14号 昭和50年10月1日発行(年6回刊)第3巻第14号

昭和50年2月28日国録首登特別扱承認雑誌第2170号

# UFOと宇宙

UFOs & SPACE  
隔月刊・1975・10月号

UFOと宇宙科学

★★★★★★★★★★

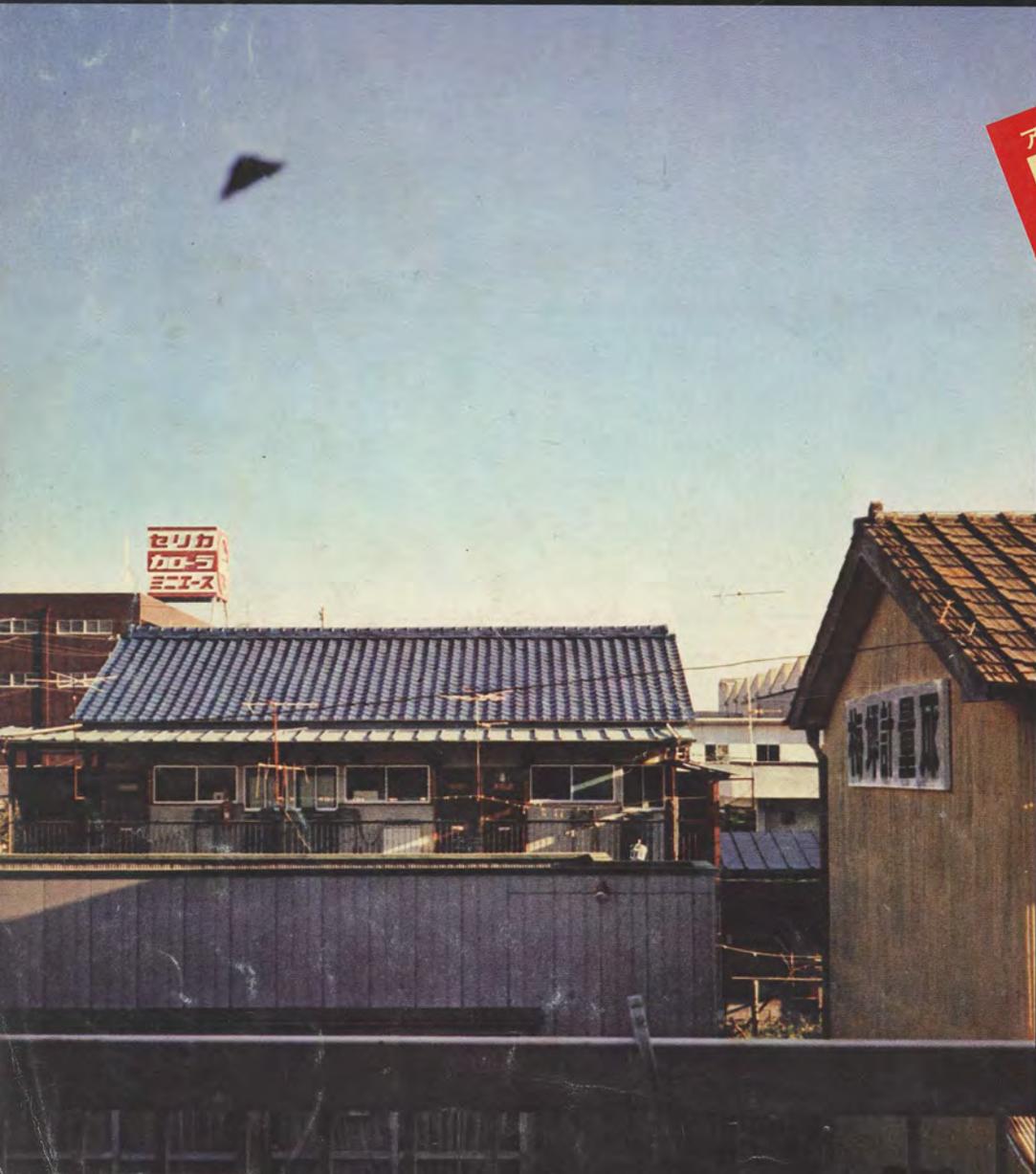
## 円盤をよく見る人

ひんぱんに円盤を目撃する特異な人  
池田雅行さんがその“秘訣”を明かす

特別取材

≡1897年の謎の飛行船≡米国各地に出現した不思議な飛行船の正体は?  
UFO情報/大気圏外生命体とのコンタクト?/UFO目撃レポート/科学ニュース  
実在する超感覚と念力 工学博士 関 英男 ■ 科学教養講座 中学生にもわかる微分積分(2)  
ユーゴスラビアのUFO出現騒動 ● 連載ソ連圏のUFO現象(3)

# No.14



アダムスキー型  
**円盤**  
豊田市  
に出現!  
解説は本号94頁

空飛ぶ円盤シリーズ

# 衝撃のUFO

— 過去・現在・未来 —

平野威馬雄編

¥980

UFO研究の謎をあばき出した最新の注目書

今、世界的に騒がれているUFOとは一体何なのか？ どんな事件が起こり、これから予測されることはどんな事だろうか？

UFO問題は日々新しい目撃、出現がくり返されているが、在来の科学者達はいたずらに否定ばかりしている。本書は米空軍や他の研究団体が古くさい常識をもち出して、円盤の謎を無視しようとするカラクリを胸のすくほど、はつきりとあばき出して注目される。  
(口絵写真19葉収録)

- |                                   |                                  |
|-----------------------------------|----------------------------------|
| 空飛ぶ円盤は実在する<br>A ミッシェル 田辺貞之助訳 九〇〇円 | 空飛ぶ円盤の秘密<br>T・ベサラム 久保田八郎訳 九〇〇円   |
| 空飛ぶ円盤ミステリ<br>G パーカー 平野威馬雄訳 九五〇円   | 空飛ぶ円盤の真相<br>G アタムスキ 久保田八郎訳 九〇〇円  |
| 空飛ぶ円盤実見記<br>G アタムスキ D・レスリー著 九八〇円  | アポロと空飛ぶ円盤<br>平野威馬雄 荒井欣一著 九〇〇円    |
| 空飛ぶ円盤同乗記<br>G アタムスキ 久保田八郎訳 九〇〇円   | 空飛ぶ円盤の跳梁<br>高梨 純一著 八五〇円          |
| 空飛ぶ円盤とアダムスキ<br>久保田八郎編 九五〇円        | ヒューマンノイド<br>平野威馬雄編 九八〇円          |
| 空飛ぶ円盤のすべて<br>平野威馬雄編著 九〇〇円         | 空飛ぶ円盤実在の証拠<br>高梨純一著 九〇〇円         |
| 空飛ぶ円盤と宇宙人<br>黒沼 健著 九五〇円           | 空飛ぶ円盤騒ぎの発端<br>高梨純一著 九〇〇円         |
| 空飛ぶ円盤の謎と怪奇<br>黒沼 健著 九八〇円          | 火星からの空飛ぶ円盤<br>C・アラン・カム 岩下肇訳 八〇〇円 |

・東京 文京 本郷5-30 振東141750・

**高 文 社**

・京都 左京 百万遍 振京23523・

OBUNSHA NOVELS

## 旺文社バルス



純愛・青春・ユーモア・SF…現代の若者の共感を呼ぶロマンの世界！  
中・高校生のための楽しい読物がいっぱいです。 新書版 各380円

- 絶 紅燃ゆる 唱 星の城
- 還らざる城 (SF小説) 吉岡道夫  
若者たちの (純愛小説) 赤松光夫  
夜明け (純愛小説) 諸星澄子

- ふしぎな関係 (青春小説) 富島健夫  
思春期戦争 (青春小説) 石堂淑朗  
青春蛮歌 (SF小説) 柳川創造

旺文社 東京都新宿区横寺町162番



### 雲の中の第一歩

〈青春小説〉 北園哲也  
幼なじみの英子が自殺した。透は、自分が英子に何もしてやれなかった自責と自己嫌悪に苦しむ。やがて澄子と知り合うが、澄子もまた、死を考える女性であった。

青春期の正義感と挫折感との葛藤の中で、悩みながら成長する高校生の姿。



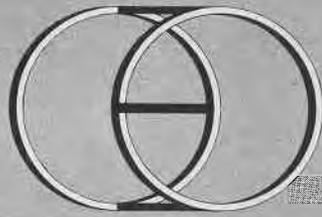
### 赤外音楽

〈SF小説〉

佐野 洋

ラジオの深夜放送で、法夫は番組にない音楽を聞いた。法夫たちごく一部の人間にしか聞こえないふきみな怪音波とは？ それをあやつる者の正体と目的は？

ふしぎな赤外音楽で人間をあやつるのは、  
だれか？ その目的は？



<口絵写真> 5月18日のUFO—西の羽曳野市と東の岩槻市で出現!

●カラー 館山市の奇妙な光跡/UFO、鎌倉市に出現!  
東京上空で乱舞する神秘の円盤!  
またも東京上空に金色のUFO—みごと8ミリフィルムにキャッチ!

目次イラスト 松岡吉樹  
作 図 石坂 清

その人・池田雅行さんは、円盤を目撃する秘けつは「真実の生活」にあるという

## 円盤をよく見る人 **本誌特別取材!** 8

### 1897年の謎の飛行船 ジェローム・クラーク 18

地上でまだ飛行船が建造されなかった1800年代末期に、米国の上空にしばしば出現した神秘的な飛行物体の物語!

### 円盤と人体保護装置 宇宙人の援助によって宇宙船を造ろう ジム・エンツミンガー 29

### 私は金星文字を解読した! バシル・バン・デン・バーク 30

この発見はアダムスキーの体験の真実性を証明する?

### マルセル・オム教授の不思議な発見物 南米の奥地にあった 奇妙な古代文字の謎 常岡理太郎 36

### 世界最古のUFO写真 1883年8月、メキシコの天文台で太陽観測中に出現した不思議な物体 39

### フランスの大臣、UFOを語る ゴードン・クレイトン 40

### UFO情報 <国内外の最近のUFO関係ニュースを網羅> 12

### 大気圏外生命体とのコンタクト? ある謎の通信 増野一郎 48

### UFO目撃レポート —— 国内の目撃例を図入りで掲載 54

### 科学ニュース 国内外の最新ニュースを速報 62

### 「太陽熱発電」テストプラントの開発に成功 69

### 原子・銀河系・理解 有名な円盤搭乗者による連載科学記事 (4) ダニエル・フライ 70

### 実在する超感覚と念力 現代科学でとらえられないからといって、超 工学博士 関 英男 76

### これは何だ? UFOか、それとも—— <写真> 86

—科学教養講座— 「ナーンだ。こんな簡単なものだったのか!」今までの常識を変えるやさしい解説 三好要市

### 中学生にもわかる微分積分 (2) 93

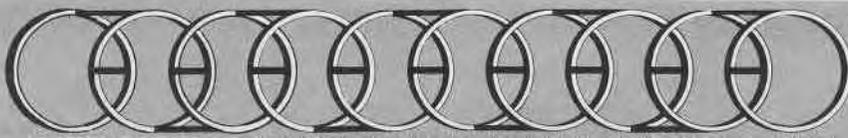
### <表紙写真説明> アダムスキー型円盤、豊田市に出現! 94

### <連載UFO情報> ソ連圏のUFO現象 (3) イオン・ホバナ // ジュリアン・ウェヴァーバーク

### 「ユーゴスラビアのUFO出現騒動」 95

ピソキ・テカニ修道院の壁画は古代の宇宙船を描いたものか? 世紀の謎の現象追跡の手はユーゴスラビアに及ぶ!

### 声— OPINIONS





●大阪府羽曳野市に住む新井善富君(14歳・中3)が今年5月18日に高鷲の自宅の庭で鳥を撮影していた晴天の午後3時30分頃、突然円形のネズミ色の物体が無音のまま西方から飛来して上空に静止したあと、約1分後に急上昇・急降下・急反転して東方へ飛び去るのを目撃し、その間連続5枚の撮影に成功した。目撃継続時間は約3分間で、大きさと高度は不明だが、かなりの高空を飛び、天体観測を趣味とし、鳥なども見なれている同君によれば、断言はできないが、まずUFOに間違いないと言い、しかも同君が通学している高鷲中学校ではよくUFOが目撃され、すでに20名くらいの目撃者がいると語っている。この写真は連続5枚のうちの4番目で、部分拡大したもの。  
(キャノンG-III17・キャノン45mm F1.9・シャッターは自動・サクラカラーSII)

# 5月18日のUFO

西の羽曳野市と  
東の岩槻市で出現!



●同じ5月18日に今度は東の埼玉県岩槻市でUFOの目撃・撮影事件が発生した。川口市の中学3年生・野沢正明君(14歳)が同市の祖父母の家へ遊びに行った同日の午後、通称「おっぼり沼」といわれる沼のそばにいた午後3時15分頃(天候は曇り)、東の雲の中から突如奇妙な丸い物体が出現し、上空に停止した後、飛び去って西の雲の中へ消えて行った。目撃時間は約3分間で、同君の記録によると、物体が停止したときは銀とオレンジを混ぜたような色を帯び、動きだすとオレンジと赤の間ぐらいの色になったという。仰角は35°~40°、推定速度は約50km、推定高度150m~200m。沼へ魚釣りに来ていた数名の人も同時に目撃している。この写真も部分拡大。(ヤシカエレクトロX・レンズF50mm・絞り開放・1/250秒・フジカラーFII)



## 館山市の奇妙な光跡

●今年6月24日午前0時30分頃、千葉県館山市の自宅の屋根の上によじ登った福原道雄さん(19歳・会社員)は、何かが写るのではないかという衝動にかられて三脚にカメラをセットし、夜空に向けてシャッターを切ったところ、現象夜に不思議な光跡が写っていた。目撃はしていない。福原さんは今月3月20日夜にも急にUFOが飛んで来るような予感がして、屋根の上で空を撮影したあと、やはり奇妙な光跡が写し込まれた写真を撮影している。日頃UFO研究に非常に熱心で、各種の研究グループに入会して超能力の開発トレーニングも行っており、これまでに数度UFOを目撃しているという。(ヤシカエレクトロ35・ヤシノン45mm F1.7・絞り開放・約30秒・フジカラーN100)

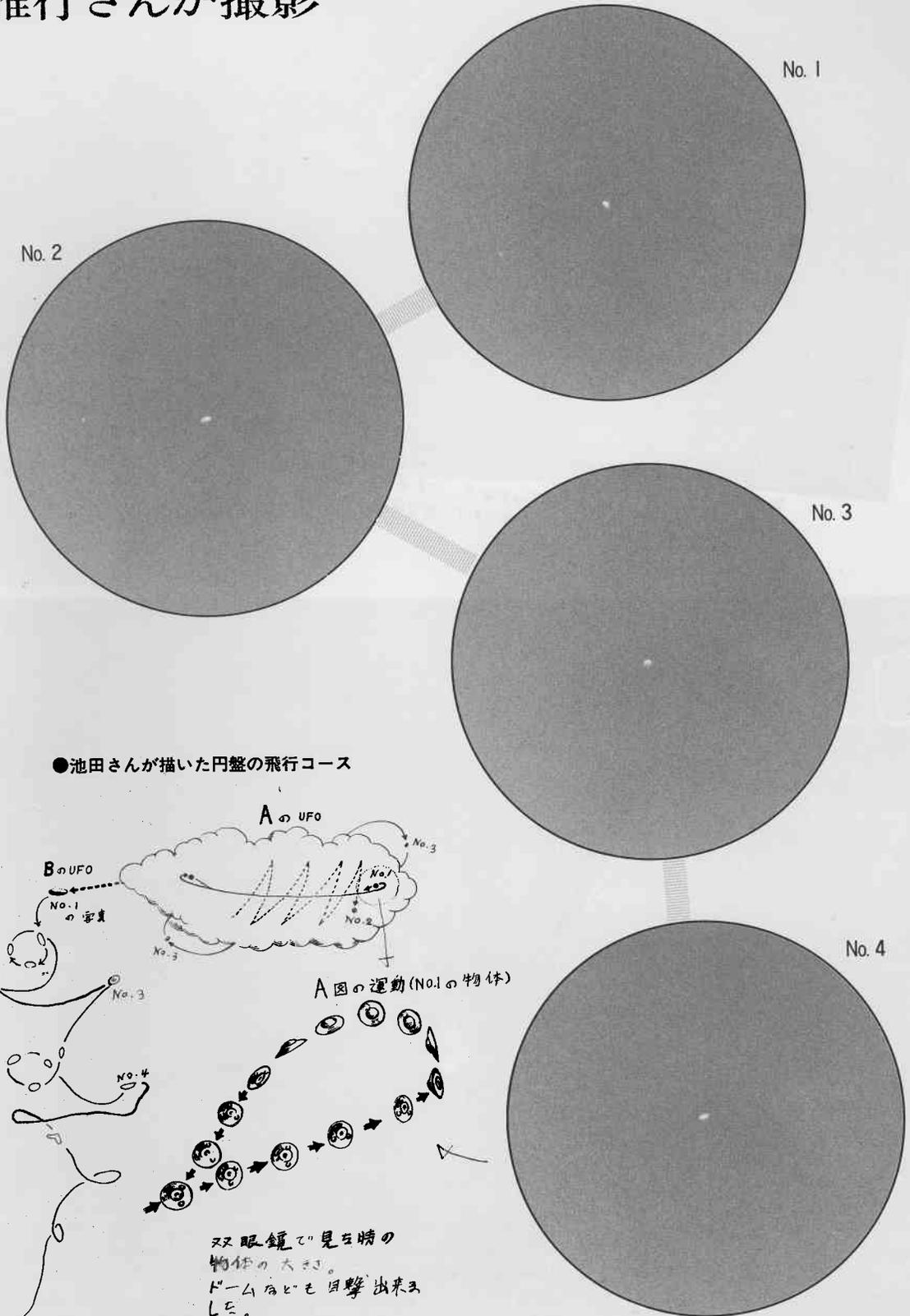
## UFO、鎌倉市に出現!



●神奈川県鎌倉市の女子中学生・高橋由美(ゆみ)さん(13歳・中2)が入浴をすませて夕涼みに自宅の前へ出たのは今年7月22日午後9時半頃だった。すると9時33分にふと空中にあやしい光体が静止しているのを発見し、お兄さんの誠君(14歳・中3)と弟の圭三君(10歳・小5)を呼んで3人で観測すると(仰角約40度)、物体は約1分後に南から北へ少し上昇し始め、自宅上空に来るとゴーンというものすごい音を立てて飛び去った。この写真はゆっくり上昇しているときに、カメラを持って飛び出た誠君が連続2枚撮影したうちの1枚で、手持ち撮影のためブレている。オレンジ色の物体は静止しているときは大きく円形に見えたが、飛行中は楕円形になり、その中に2つの小円形の光る物があつたという。(ベトリ・55mmレンズF2・開放・約20秒・フジカラーFII)

# 語る神秘の円盤!

池田雅行さんが撮影



# 東京上空で乱舞

“円盤をよく見る人”——也



●右のNo.2の物体を拡大した写真。タマコ型に見える

●本年5月7日(晴)午後2時30分頃、中野区の池田雅行さん(26歳・イラストレーター)がアパートの自室のベランダから上空約4~5000mの雲の下でUターンを繰り返す黒色の物体1個を発見。双眼鏡(テルスター30×50)を持ち出して観測したところ、別の物体が2~3個飛行しており、それぞれ円形で黒・白・グレイなどの色を帯び、白とグレイの物体は肉眼では見にくく、黒色の物体ははっきりとしていた。おのおの独自の運動をしていて、数秒後には雲の中に消えた。すると5~6秒後に同じ雲の横に回転している1個の乳白色の物体を発見(右の図のうちの〈BのUFO〉)、室内よりカメラを取り出して連続4枚撮影した(右の写真No.1~No.4)。そのあと物体は木の葉運動を繰り返してアパートから約100m、地上約20mの位置まで降下し、続いて上空へ飛び去った。この間、池田さんの自室には友人の行田実さん(24歳・作家)がいていっしょに目撃しており、アパートの前の川向かいの道路にいた小学生4~5名、おばさん1人も目撃した。図の〈AのUFO〉と〈BのUFO〉のいずれも約30秒ずつ見えたという。目撃地点は中野区大和小学校の前。池田さんはしばしばUFOを目撃される特異な青年で、その体験は本号8頁より「円盤をよく見る人」と題して詳細な記事が掲載されている。

(オリンパスOM-1・ズイコー200mmF22・ $\frac{1}{1000}$ 秒・コダカラーII)

# みごと8ミリフィルムにキヤッチ!

●物体の拡大写真(フィルムの原写真より約30倍に拡大)

今年8月3日早朝午前3時20分頃から、大田区西馬込の吉川達也氏(40歳・造船の板金加工業)は第二京浜国道から100メートルぐらい離れて台地になっている団地の自宅で「金色に輝く物体」の8ミリ映画撮影に成功した。

事件発生の前、息子の伸君(小2)が目覚まして起きているのに気づき、暑苦しいので自分も起き上がって窓の方へ寄って行った。すると西の方角の自宅のそばにある樹木の上(仰角45度ぐらい)にピカピカと光を放つ星のような物体があるのに気づいた。しかし光り方が星とは違うし、左右に小さく揺れるように動くので注意して見ていると、その物体は西から北へ約10~15分の間ゆっくりと動き出した。北の方角を見ると同じような光を放つ別の小さな物体が高速で大きい物体の方へ接近して来た。大小2つの物体は接近しても重なり合わない。まもなく小さい物体はボールが壁に跳ね返るようにして大きい物体から離れたまま、スピードを増した大きい物体と共に自宅の方へ向かって飛んで来た。その間約4~5秒ぐらい。自宅の上空まで近づいたときは大きい物体が強烈な光を放ち、怖いほどだったという。驚いた吉川氏は、いっしょに起きていた奥さんの征子さん(37歳)に8ミリカメラを持ってこさせて写し始めた。ところが物体は自宅の真上を飛んで南側の方へ移動して行ったので急いで南側のベランダへ出た。

前よりも明るくなった南西の空を見ると、仰角60度ぐらいの高さに大きい物体が静止しており、金色の輝きを増し、まぶしいほどの光を放っていた。(8ミリフィルムにはこのときの状態が写っており、明るくなった青空に輝きを増した物体がハッキリとどらえられている。撮影時間は約2~3分ぐらい)まもなく小さい方の物体が東の方向からすく速いスピードで接近して来た。近づくにつれて両方の物体はさらに輝きを増したが、すぐに小さい物体は向きを東の方(羽田空港の方向)へ変えて、ものすごいスピードで消え去った。大きい物体はジグザグに動いているように見えるときがあるが、ほとんど静止の状態ですのまま上空へ上昇して小さく消えるようにして去って行った。

吉川氏は8ミリカメラを買って3年ぐらいになるそうだが、物体の動き方はすく速いのでカメラでとらえるのは非常に困難だったという。それでも最初発見してから、かなり明るくなった午前5時頃まで2時間ぐらい大きい方の物体は見えていたので8ミリで撮ることに成功したのである。奥さんの征子さんもそのときの様子をずっといっしょに目撃、2人ともUFOを初めて見たというが、星のように青白く光るのではなく金色に輝き、大きく楕円形に見えることもあり、高速で飛んだり静止したりするので絶対に星や飛行機ではないと断言している。ここに掲げた写真は、フィルムの終わりのあたりで大きい物体が写されたコマを拡大したもの。

(フジカシングル8 Z 700・レンズ=フジノンZ 1.8・7倍ズーム付きEEカメラ・焦点距離f = 8~56mm・絞り=自動(1.8~45)・18コマ/秒・フジR T 200)

今度は8月——

# 金色のUFO



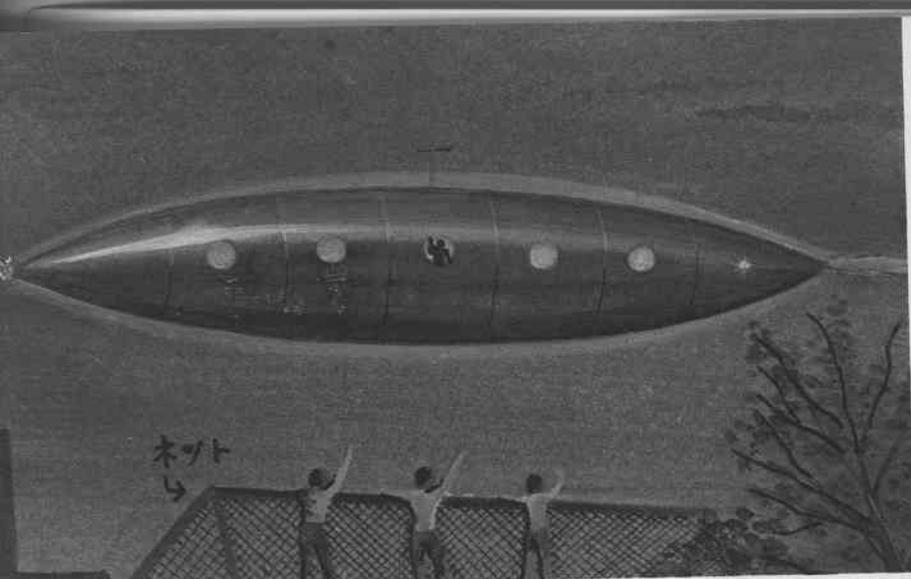
またも

東京上空に

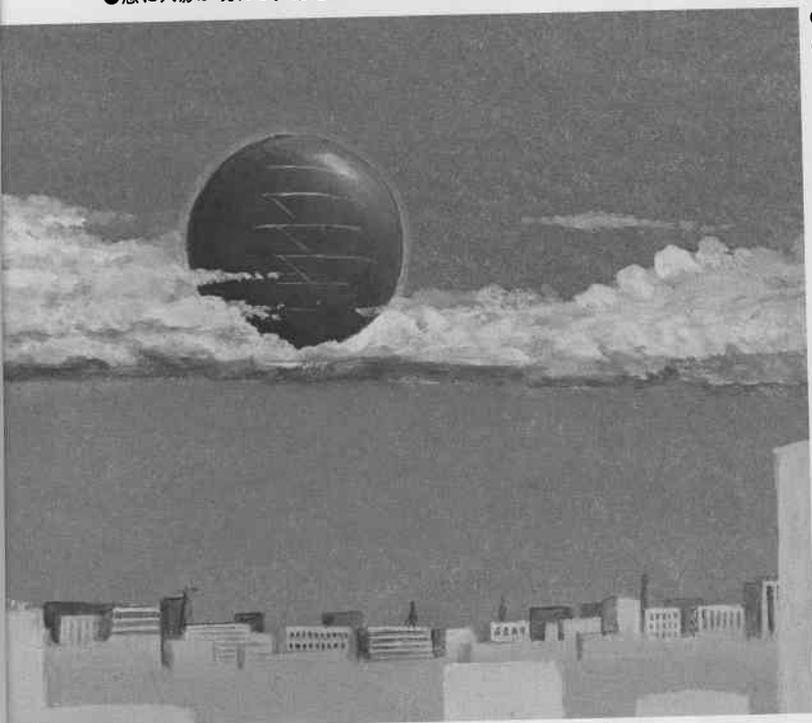
# 円盤をよく見る人

特別取材!

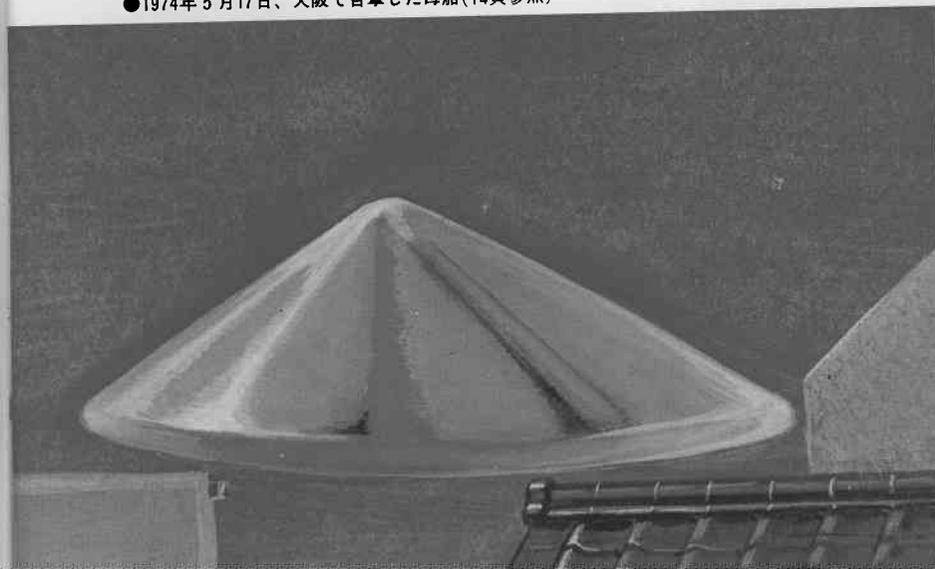
その人・池田雅行さんは、毎日のように円盤を目撃している。秘けつは「真実の生活をすることにある」と言う。その「真実」とは何か？ 生活の中から探ってみた。



●窓に人影が現れる。市電より大きく見えた(9頁参照)



●1974年5月17日、大阪で目撃した母船(14頁参照)



●この球体はユリ・ゲラーのいうスペクトラーかもしれない(12頁参照)

# 円盤目撃能力は天性のもの

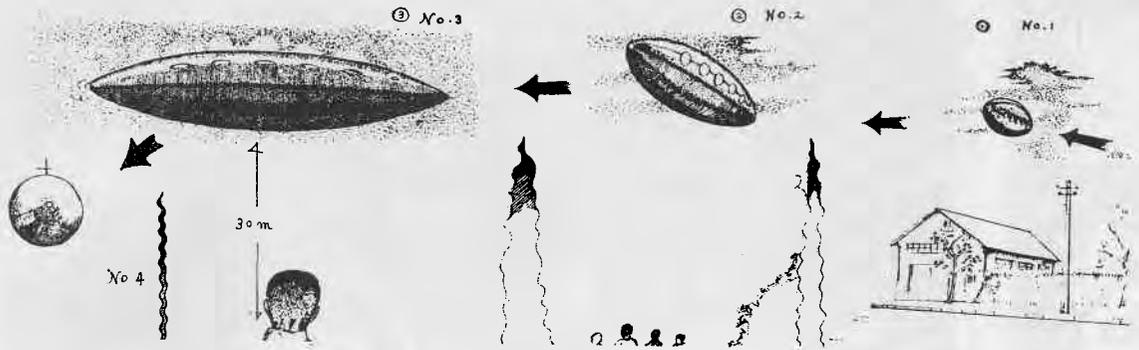


●円盤を毎日見るといふ池田さん。(新宿の京王プラザホテル近くで)

池田さんが生まれて初めて円盤を日撃したのは小学校五年生の頃である。(八頁のカラーイラスト参照)フットボール状のもので、長い方の径が少し

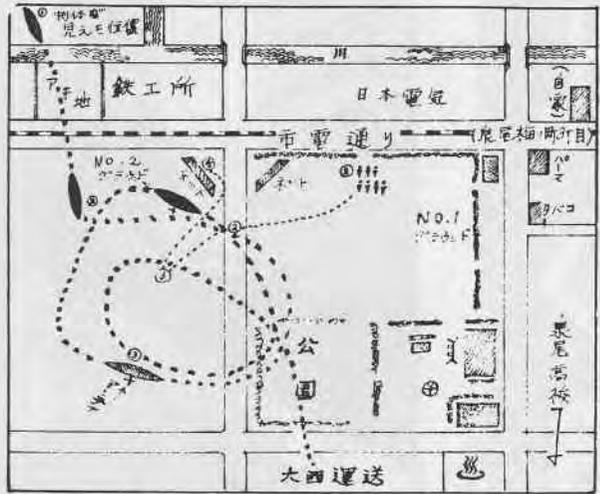
どうしたら円盤を見ることが出来るか。円盤が空中によく出現していることは知っていても目撃した経験が全くないという人たちの声を聞く。ところが、ここに円盤をひんぱんに目撃する二六歳の男性がいる。この人の生活は円盤とともにある。空を仰げるチャンスがあると必ず目は空を向いている。彼は円盤を見るのに都合のいいようにメガネをつくり、双眼鏡と二〇〇ミリ望遠レンズ付きカメラをつねに携行しているが、これらは生活の必需品である。その円盤目撃を最近は昼夜分かつずほとんど毎日行っているのだ。今では円盤を単なる興味本位のものとしているのではなく、自分の心を正す対象として見ているという。その手記に「…真実の正しさとは何であるかも心身全体である魂で感じる事がわかるでしょう…」と記している。円盤の目撃はだれにでもできるというその人・池田雅行さんは、これまでの経験から目撃するためのカギを次のように明かしてくれた。

伸びている形をしていた。かなり大きく見えていたが、それまでテレビなどでUFOのことを述べたものを見たり聞いたりしたことがなかったものだから、それがUFOとは少しも気づかなかった。「変わったものが飛んでいるな」としか考えず、それが今日、世界のあちこちにぎわっているものだとはい全く考えられなかった。大阪市大正



区泉尾の公園とグラウンドの上空三〇〜四〇メートルのところをゆっくり二〇〜三〇分間旋回していた。同時に目撃した子供も七、八人いた。午後六時三〇分から七時三〇分頃の出来事。円盤に乗っている「人」は左手を上げているだけ。小学生の池田さんは、手を振って円盤内の人に合図をしたが、円盤内の人にはただ手を上げていて振るようなことはしなかった。

それまで円盤の形は丸いものとはかり思っていたので、こんなフットボール状ののを見ても、地球人の作った乗物以外の物とは思っておらず、変わった乗物だなあぐらいにしか考えられ



●昭和36年頃の地図で現在ではかなり変わっている

え」と聞くと、一言「円盤を見ていた」と答えただけで、あとは円盤の話が続けなかった。なぜか円盤が出現するのはあたりまえといったふん囲気がその家庭にはあった。

よく池田さんの口をついて出る言葉だが「血だ。宇宙人の血が体の中に流れていたたり、円盤に乗っていた過去の人のつながりがあるから、よく円盤を見ることができると言う。だがそれはあまり努力しないで見れる人にあるはまる言葉であって、努力しただけはだれにでも見れるようになるとも言う。

それから一〇数年後まで円盤にさほ

ど留意しなかった池田さんは、円盤出現事件で騒がしくなった一昨年頃から、再び円盤を目撃するチャンスをつかむことができた。それ以前一年三ヵ月あまりテレバシーで円盤を呼べると思い機会あるごとに心の中で想念を空へ向けて発していた。「円盤を見せてください！」

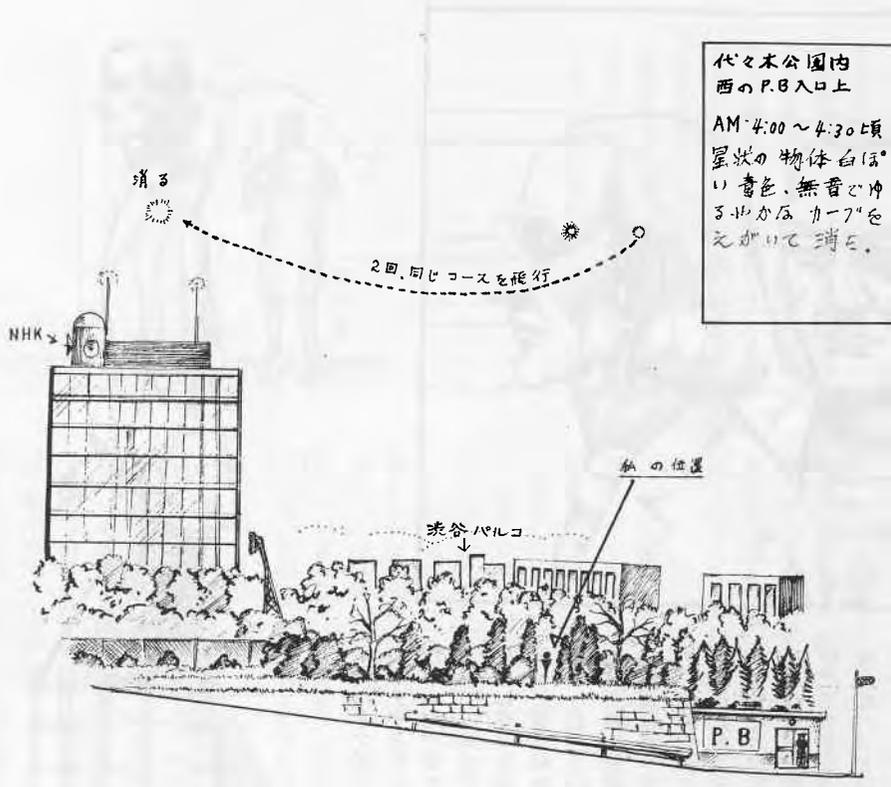
この「テレバシー」について池田さんの説明はこうだ。

「心の中と意識の中で考え出されるものが合体したのだ」。具体的に言えば無心の状態をつくることだという。無心の状態とは「子供が絵を描いているとき絵の中に自分がすっぽり入り込んでいるが、ふと肩をたたかされると突然びっくりして我に返る状態と同じ」と説明する。

もう少し詳しく言うなら「一日一回は必ず無心の状態がある。それは、フトンに入り、眠ろうとする直前かその状態である。何も考えない無条件の状態」と説明を加えている。

こういう精神状態のとき円盤に向けてテレバシーにより想念を送るのである。「円盤を見せてほしい」というテレバシー送信だ。

ただ問題なのは相手あってのこと宇宙のどこかに円盤をあやつっている知的にも精神的にもすぐれた「人」がいてその「人」を念頭に置かねばならない。



テレバシーで呼んだのは、一昨年の八月のある日のことだ。東京・渋谷区代々木公園のポリスポックスの近くにいた。それまで日本テレビのテレビ番組「11PM」に出演した「刈屋さん」

のテレバシーで円盤を呼ぶ方法を応用して夢中になって呼んだ。朝、山手線の始発電車を待っている時間、小学生時代、初めて見たフットボール状の円盤を思い浮かべて円盤を呼ぶこと約五

六分、一等星の横の星がすべるように動き出しそれはすぐ消えてしまったが、「もう一度見せてください」と想念を二〜三度送ると、また先ほどのように一等星ほどの大きさの星の横からゆるやかなカーブを描きながらNHK放送センターの上空まで動き、スーッと消えたのを目撃した。

こうしてテレバシーによる「交信」の可能性を確かめることができた。また、池田さんは、テレバシーの力は訓練によって増大させることができると言う。

「たとえば、朝出かけようとするとき、今日は外出しない方がよいという印象を受けるが、それもテレバシーの一種だ。ただ、人はテレバシーに頼らなくなつたため、その力が減少している」と言う。

## 宇宙人に会う

ところで昨年三月一五日に池田さんは宇宙人に出会つたという。新宿駅の切符売り場、東口中央広場に行き奥さんと一緒にいた。奥さんが「切符を買ってくる」と言うので一人で待っていた。そのとき、「宇宙人が来るよ」というはっきりした印象が心の中に湧いてきた。テレバシーの受信なのだろう。池田さんは驚いてあたりを見回し

ると言える。

その力を増大させるには、その力を信じて物事にあたることと増大法を実行することだ。その増大法の一つはローソクの火を風の吹かないところでもし、思った方向に炎が倒れるように想念を送るとよい。そして初めは思った方向に動かないが、何度か繰り返し行っているうちに思った方向に倒れるようになってゆくものだ。あるいは大きく燃やしたり、小さく燃やしたりすることもやってみるとよい。

ほかの訓練法には、サイコロを二つ以上投げてゾロ目を出すようにすること。一〇回投げてゾロ目が何回出るかをみてゆくことだ。これは個人差があるが、飽きずにやってみると高い成功率を出せるようになる」

た。やって来る方向もはっきりわかつた。その方向に目を向けたまま見すえた。たしかに近づいてくる。そのうち頭が重くなり、イライラしはじめた。すると身長一九〇センチくらいの大柄の外人風の人が近づいて来た。かなり接近して来たとき想念を送った。「いろいろと想念を送ったが、知らん顔をして目の前を通過するので、テレバシ



回したが、外人風の宇宙人の姿はどこにも見当たらなかった。その人がいなくなつてから「インベーターなどと」言わなければよかった」と反省したが、それきりになつてしまつた。それ以後、確実に宇宙人らしき人には会

つていない。池田さんはイラストレーターである。これまで何度も円盤を描いてきては、雑誌(本誌も含めて)に掲載してきた。「私が円盤を見るのは、正確な円盤を描かせるために宇宙人の方から示してくれるのだ」と言う。これまで何度か描いてきたが、それまでどこにも発表されたことのない形の円盤もある。

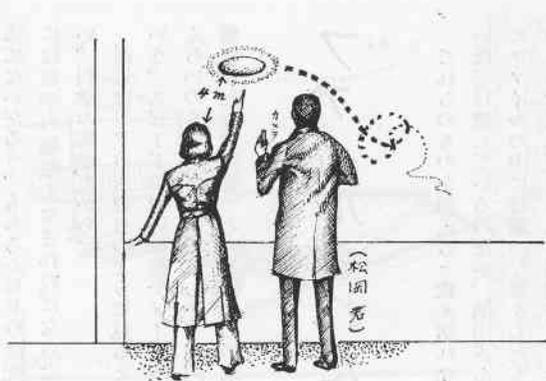
## スペクトラーを目撃!

「インベーター!」と叫んでやった。すると、宇宙人はおそろしくつり上がった目で私をにらむと、三〇円区間の切符販売機の前に立ち、切符を買うかに見えた。それでもなお、私は想念を送り続けた。すると宇宙人はパッと白く輝いて消えてしまった。これはテレポテションだと思う」。そのあと池田さんは奥さんと二人であたりを見

全く新しいタイプといえは昨年三月三十一日に見たもので巨大さと形のユニークさは抜群だった。「球体の大母船」というものだ。港区の農林年金会館に行こうと中野のアパートを二二時四〇分に出て、四谷見附から浜松町行き都バスに乗ったが、池田さんは朝から頭が重くイライラしていた。空は曇りがちで、いつも見ているUFOはこの日あまり期待できないと思つていた。バスが乃木坂に近づくとつれ、ますます頭が重くなつて押さえつけられるような重苦しさになつていった。そのうちバスは乃木神社を過ぎ視界の開けたところに出た。そのとき「円盤が出る」という感じがわき起こつてきた。雲間を見ると巨大な球状のものが

現れた。その球をよく見ると横に二、三本の線が見える。大きさは満月の二、三倍ほどのもので、距離が一五、一六キロはあると思われた。奥さんも一緒だったが、指さした方向を見ても見えず、見たのは池田さん一人である。「この物体は直径一キロはあった。ひよつとしたらユリ・ゲラーのいうスペクトラーかもしれない」(八頁のカラーイラスト参照)

円盤を目撃する場合、このように見ている人が隣の人に「あそこにある。ほら見てごらんよ」と言つても本人しか見えず、隣の人が見えなことを、池田さんは「円盤に乗っている人からの操作で見えたり見えなかつたりする。それはちよつとした角度が原因と



なっているのではないか。地球に来るくらいだから、我々の図り知れぬ科学力もあるだろうし、そうしたこともできるだろう。だから円盤はこちらから見るというより見せてもらうといったほうがより正確ではないか」と言う。

池田さんの場合、円盤が出現する前はきまって頭が重くなり、イライラした精神状態になる。まず後頭部が痛くなるような感じがして、次に円盤の出現を目撃するという順序なのである。もちろん偶然に近い状態で発見することもある。

池田さんの友人に松岡正憲さんという人がいる。松岡さんも池田さんと同じように円盤の出現を前もって感知

し、二人で行動すると、ほとんど間違いないで円盤が出現する。

昨年一月二四日、松岡さんが池田さんの家に来た。「きょうは来そうだと松岡さんが言うので、同感した池田さんは、新宿の京王プラザホテルの四七階に昇った。すると午後六時二〇分頃、青色の物体の三〇〜四〇センチで小型の風船を平らにした状態の物を目撃、窓ガラスの前方四メートルあたりをめまぐるしく飛びまわっていたが、しばらくしてビルの谷間に消えていった。

二人は目撃回数の多い京王プラザホテルに行くが、UFOの出現は場所と関係があるかについて、池田さんは「必ずしも一〇〇%場所と関係があるということはない。関係があるとしたら二〇%程度のものでらう。残りの八〇%が大切なことで、それは円盤を目撃したいという本人の心の持ち方だ。ただ「見たい」でなく、それなりの努力をしなければならぬ。上の方に関心を也得らわなければならぬ」と言う。

「上の方」とは、もちろん円盤を操作している「人」たちのことである。「上の方」の関心を引くにはどうすればよいか？ それは「円盤に対してただ興味本位に一時的に関心を寄せるだけではだめで「永遠に見たい」との気持をもたないとだめだ。真剣に円盤問

題に対処しようとする、その人の印象を感じとっている上の方で関心を示してくれるようになり、円盤を見せてくれるようになる。だから私にとって一番恐ろしいことは、円盤が見られなくなったときだ。あるとき一カ月ぐら

い円盤が見られなくなった。全然印象が起らない。上空に円盤がないような気がするのだ。そのときほど苦しかったことはない。何か自分に落ち度があるのではないかと、ただ空を見つめるばかりだった。上の方に見放されたのではないかと、そのときはどうしようもなく寂しかった。地球の人に見放されるのはたいしたことはない。しかし上の方に見放されるのはたいへん苦しく、これほどの痛手はない。そこで自分の心とか意識を高めることに夢中になり、自分を正しくしてゆこうと努力を重ねた。その結果かどうかははっきりしないが再び円盤が目撃できるようになったときには、何にも代えられないうれしさだった。

それに池田さんはUFO現象についてユニークな考えをもつ。その出どころはあくまで池田さんのインスピレーションによって感じられたものだ。いわく「心と意識が合体したあとテレパシーで上の方に想念を送る。そのあとにはオーブン・マインド（受容的な心）で上からの反応を待つ。そうすると答えが出て来る。そのうち激しい衝

撃を感じるようになる。それから円盤を見られる状態になる」

「人によってオーラの見える人があるが、それは宇宙人にとって大切な人になった証拠である。そうなった人は決して宇宙人に見放されるようなことはない。イエス・キリストは言っている。「わが道はいばらなり」と。イエスの生涯を見るとそれが良くわかるがそのイエスに比べて我々の方はずっとたやすい条件の中で生活している。それだっただけで自分を正しくしてゆくこともできるはずだと考えなければならぬはずだ」

「円盤は我々に光を指し示している。それは人間の歩むべき道を教えているのだ。その道を行んでいくと何にも代えられない喜びと幸福の感じを味わうようになる。それによって人間の生きてゆくべき道もわかるようになる。だが、その道は宇宙人が作ってくれるのではなく、自分が作り、歩いてゆくものだということを忘れてはならない」

池田さんの言葉はきびしく自分自身に問いただしているように重く述べられてゆく。

「もし日本の政府が円盤は存在し研究する価値があると表明するようになれば、日本中の犯罪は消えてゆくだろう。古代遺跡や、歴史、宗教などを研究してゆくと全く同じことだがUFO問題は人の心をひきつけるものは

他にないだろう。もちろんUFO研究には数学の勉強もなされねばならない。科学の基礎だから」

最近UFOを毎日のように見るという。スピードの速い直径一メートルくらいのものである。これら小さい円盤は「記録用円盤」といわれ、この地

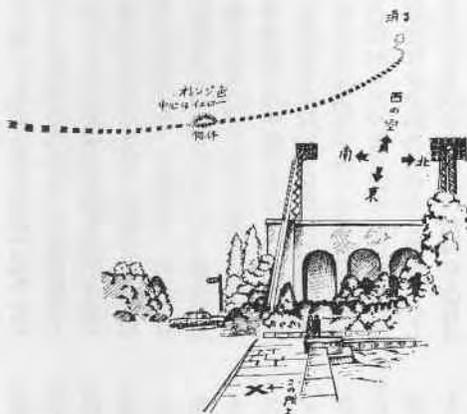
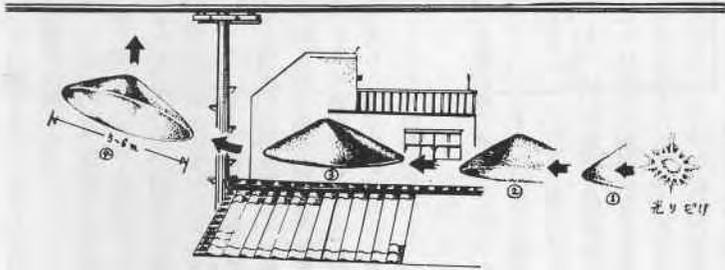
上のありとあらゆるものを記録し、宇宙の知性体(宇宙人)が何かの資料にしているものだという。特にある個人の資料を求めるときは、常にその記録用円盤が本人の周りを回っているかスイッチ・オンの状態でどこかに待機しているという。

## ファイルされたものから

これらのものを加えると数え切れないほど目撃しているのだが、池田さんのファイルの中には確かな形をしたものとか、これぞまさしく円盤だ！というものしか記録されていない。いちいち書きつけていたら、そのために一日が忙しなものになってしまうのだ。以上あげた目撃録のほかに、代表的なものをファイルから引き出してみると――

●一九七四年五月一七日(晴)、大阪で母と目撃。(八頁のカラライラスト参照)朝から頭が重く押しつけられる感じを受けていたが、そのときは上空に一機の円形の物体が薄い雲の中を旋回しているのを見つけた。

午前一〇時三〇分頃、大阪城横の家庭裁判所上空にも同じ物体が旋回していた。午後二時三〇分、天王寺、新今宮間で母と円盤を目撃、円盤は天王寺



動物園上空を、太陽光線を反射して私たちの電車と平行に飛行していた。七、八分間の出来事だった。その円盤の特徴は光を反射している部分しか見えなかったが、その光だけの物体が頭の部分を鏡の中から出すように飛び出してきた。色は青、白、銀と黒に変化して、電線の下をくぐりテレビ・アンテナをかわしてすべるように飛行、上空に飛び去った。その間母に「見えるか」と聞いたら「見える」と答えた。この円盤は次の日も現れた。

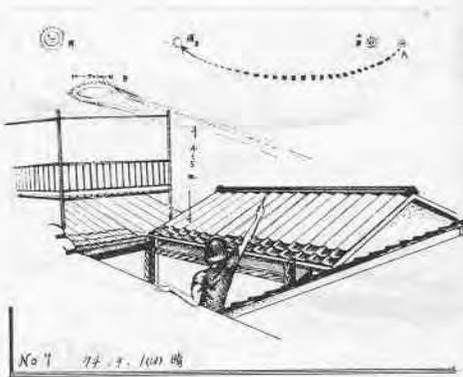
●一九七四年六月一日(晴)  
妻と私はUFOを神宮外苑絵画館の前の池のそばで待っていた。約三〇分間テレビシーで呼び続けた。妻は呼び続ける私を哀れむような目つきで見

いた。あたかも呼んで来るものではないと言っているかのように。それで帰ろうとすると、突然、後頭部に衝撃を感じ「来た！」と思うなり後ろをふり向くと、月の四分の一程度のオレンジ色の物体が近づいて来るのを妻と共に見た。午後八時頃で一〇秒から一五秒の間の出来事だった。

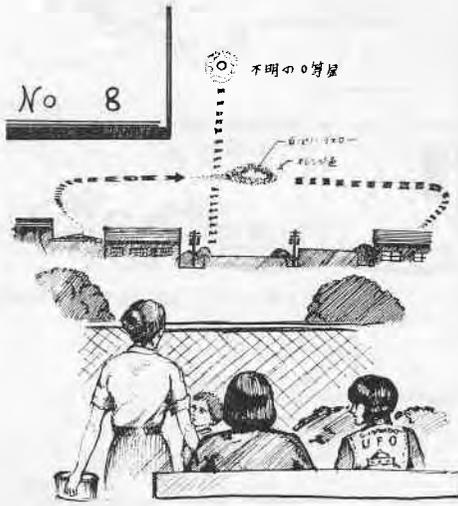
●一九七四年七月二五日(薄曇)

信濃町の専売公社研究所前で午前五時から三〇分間に一〇数回目撃。この日は朝四時からテレビシーで呼び続けた。この日の一週間前から呼び続けていて全く現れないので不安になっていた頃だった。もう帰ろうかと立ち上がったとき、黒い影が音もなく猛スピードで飛んで来た。そして上空で旋回し始めたが、たとえようもないハイスピードのため形を見ることができず、がっかりして降り始めたけれど、やはり物体は上空を旋回していた。スピードが速いため見えないので、停止してほしいと願っていたら、物体は正面上空約四〇〇五〇メートルの位置にピタリと停止した。私は目を見張りながらただ、ありがたうを繰り返したただだった。

●一九七四年九月一日(日)  
晴  
新宿区のアパートの屋根の



上から目撃。午後七時二〇分図中Aの物体が現れ、午後七時四五分から八時頃までの間にBの物体が現れる。Aは六〜七秒間、Bは四〜五秒間で頭上約四〜五メートルのところを飛行してい



た。Aは青白い星そのものの感じ、木星の三倍大。Bは月の三〜四倍大。青白くかなり強い光を発していて、私の周りは明るく照らし出された。同時目撃者なし。



●一九七四年九月二五日  
新宿区のアパートの物干し場より見る。午後五時頃、薄い雲の中に星が見えるといった感じだったが、金星だろうと思っていると星はしだいにふくれ上がってきたのでびっくり。

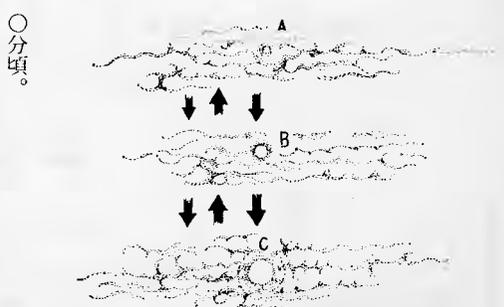
大きくなったり小さくなったり、それを三度ほど繰り返して見えなくなつた。色は白、オレンジ、イエローと変わっていった。同時目撃者なし。

●一九七四年九月七日(土)晴  
渋谷区富ヶ谷一丁目付近で、東の空に認める。午後四時四五分頃、オレンジ色、月の三分の一程度の無音の飛行物体。全体がぼんやりとかすんだ感じの発光体で、中央部分は黄色っぽく、滑るように飛行した。外三人が目撃。

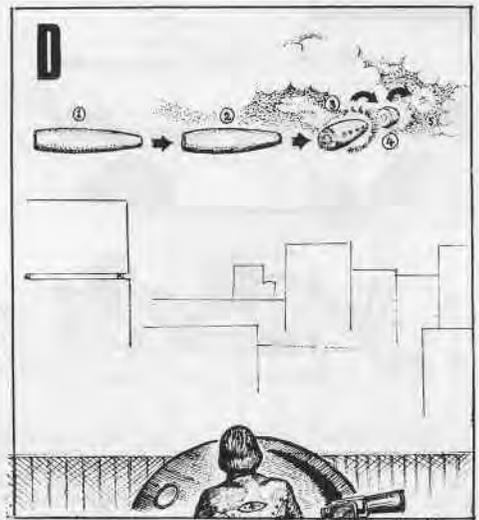
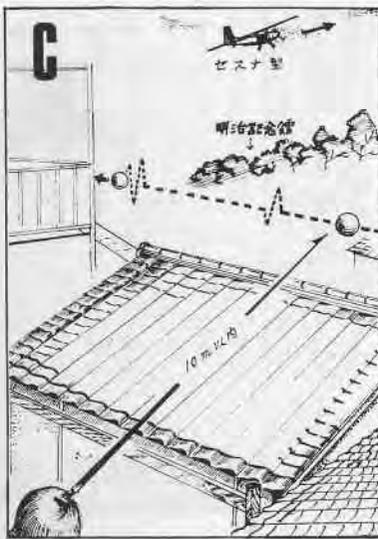
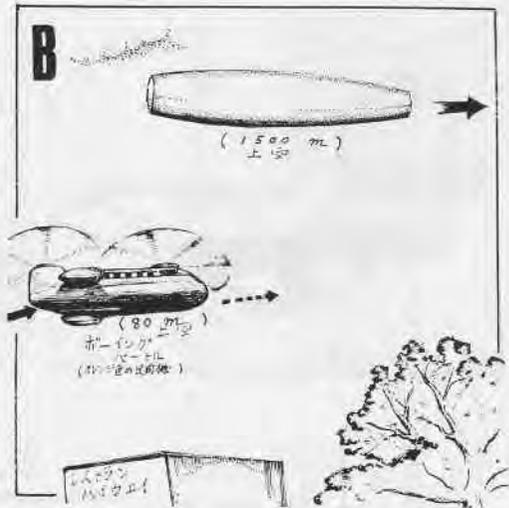
●一九七四年一〇月二八日(月)晴  
図中のA。国電の中央線上空、四谷駅を出て間もなく母船を発見、市ヶ谷、飯田橋まで見ることができた。時間は午後一〇時四〇〜五〇分の間。

●〇分頃。  
信濃町の下にあたる南元町の自分のアパートから記録用の二〇センチ程の銀白色物体が上下に激しくビクビク動きながら飛行していた。

●D 渋谷区の五島プラネタリウム屋上の双眼鏡のある高台から南西の空に「念じた」通りに現れた。時間も三時一五分さっかり。母船。夕日をあびてオレンジ色に輝く。船体に窓があるのを確認



●D 渋谷区の五島プラネタリウム屋上の双眼鏡のある高台から南西の空に「念じた」通りに現れた。時間も三時一五分さっかり。母船。夕日をあびてオレンジ色に輝く。船体に窓があるのを確認



した。他に目撃者なし。

●その他、昨年の一二月一日に母船を友人・松岡君と目撃、九日には夕日の流れる雲の中に三本の雲のようなUFO現象を発見、ことし一月二五日には新宿のメイン・ストリートでジグザグ

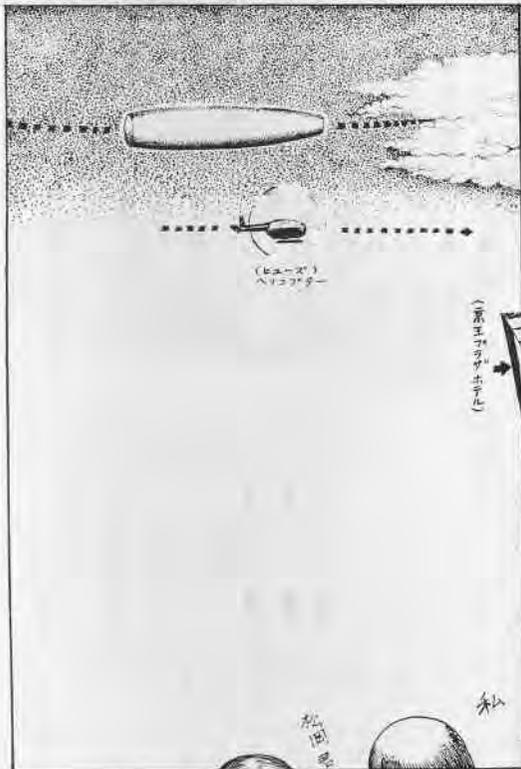
堂医大のエンツツのところにハトと入り混じっているのを見つけた。

これらの目撃記録を見ると機会あるごとに空を見上げていることがわか

飛行のUFOを発見。二月八日は五機の編隊。一六日には松岡君ら友人とテレバシーで送信、スカウトシッ

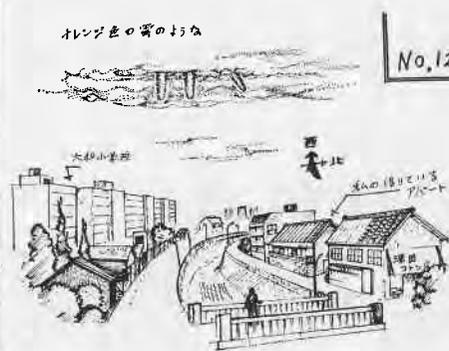
大のUFOを二個、四月三日には西武新宿線の都立家政から野方面にエンツツ近くに停止しているを発見、また、同日中央線お茶の水―水道橋間で順天

●1974年11月1日に見た母船

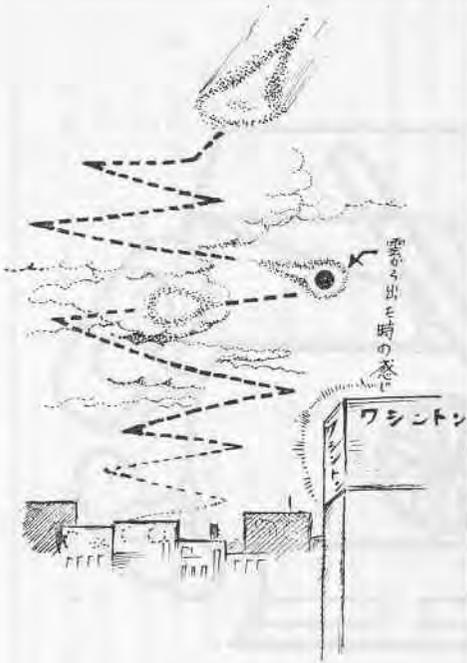


る。池田さんの目はいつも大空に向けられているのだ。

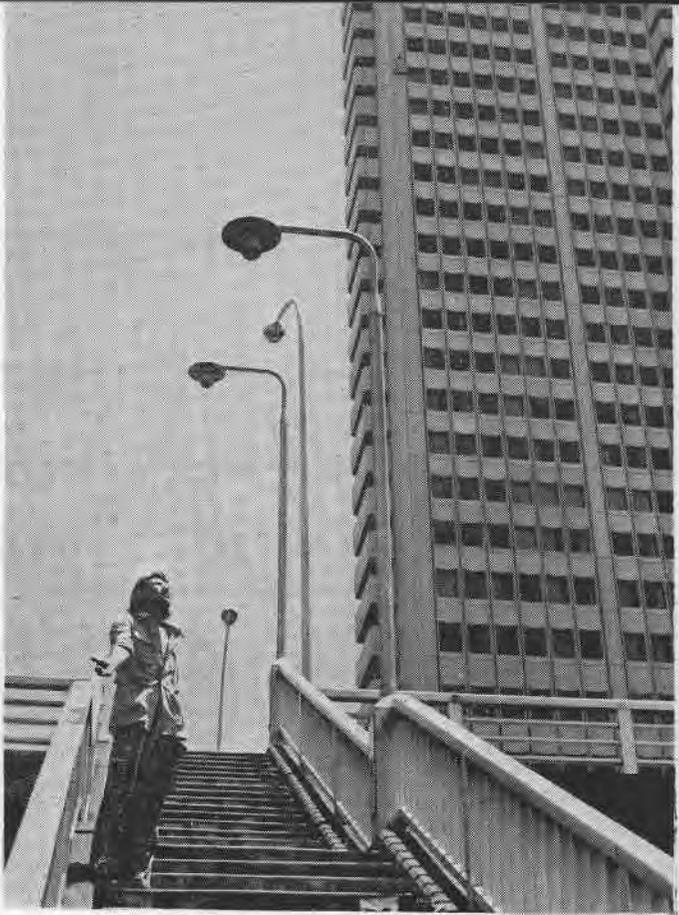
●1974年11月9日に見た3本の物体



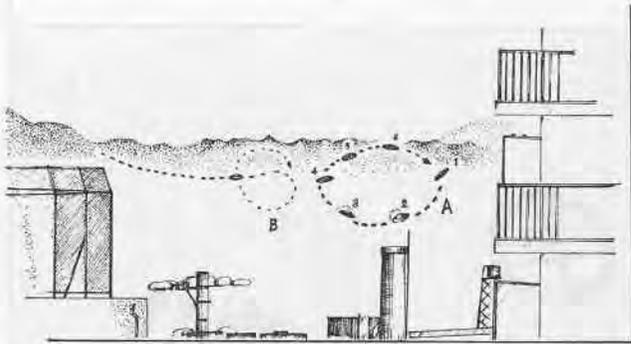
池田さんは宇宙人に魅入られた地球人の一人なのかもしれない。  
 (記事中のイラストは池田さん自身が描いたもの)



●1975年1月25日に見たジグザグ飛行の円盤



●池田さんの後方のビルが京王プラザホテル。よくここで目撃する

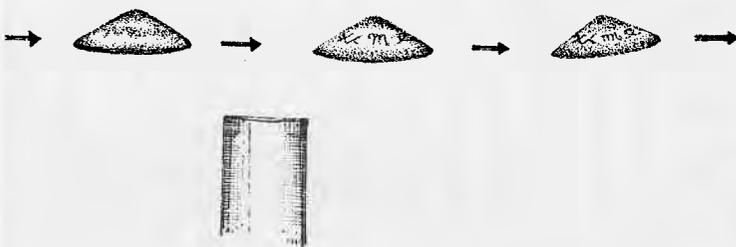


●1975年2月16日テレバシーで呼んだ円盤

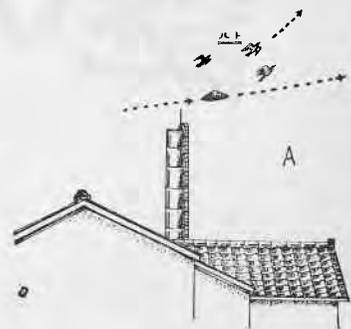


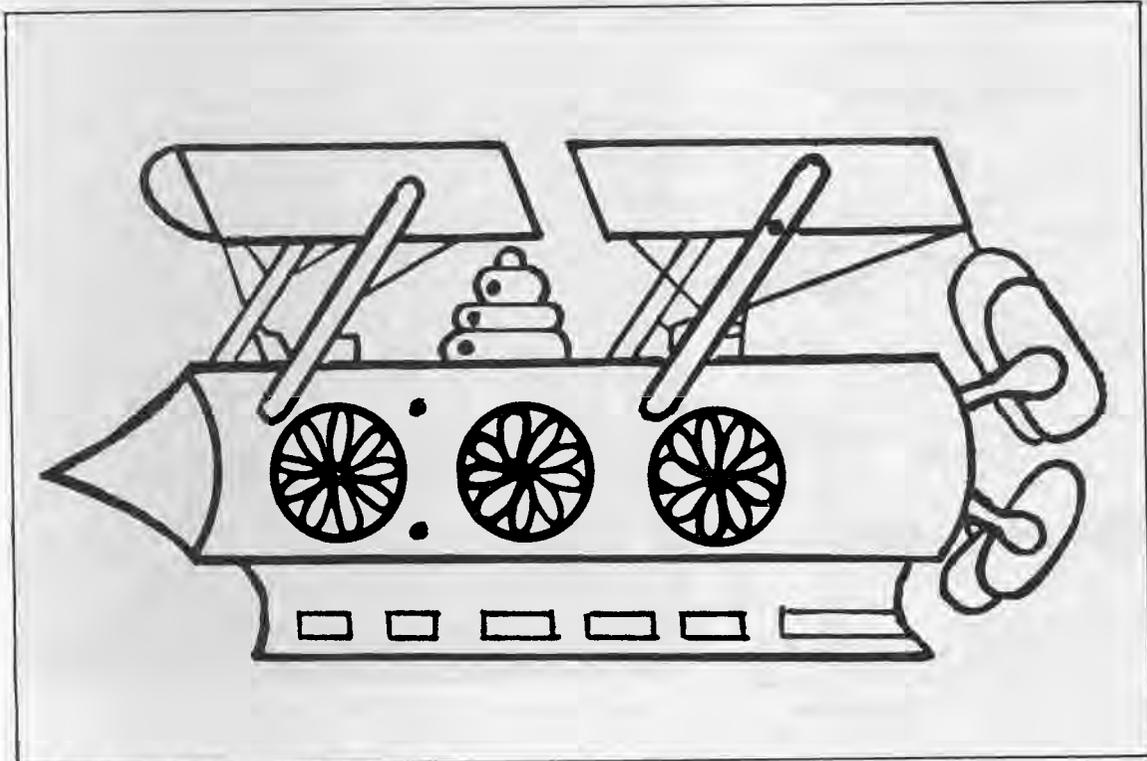
●1975年2月8日に見た円盤

●1975年4月3日順天堂医大のエントツの所にいた円盤



●1975年4月3日都立家政で見た円盤





●フートンがスケッチした謎の飛行船

# 1897年の 謎の飛行船

ジェローム・クラーク

●地上でまだ飛行船が建造されなかった  
一八〇〇年代末期に、米国の上空にしばしば出現した神秘的な飛行物体の物語！

それは一八九六年一月に米国カリフォルニア州北部に始まった。莫実、半分真実、全くの虚報など混乱した雑多な記事を書き流していた北部の各新聞はその月中と一二月にかけてどれもが全然知らなかった物の出現についてセンセーショナルな記事を書いた。ただしほとんどの人は意見を持っていた。その物を見なかった人は多数の間がそれによって全く狂っている証拠とみなした。その物を見た人は自分の正気を鑑定するのは自分こそ最資格者だと自任しながらその物を「飛行船」と呼んだのである。その「飛行船」は人間の操縦するある種の航空機で、強烈なサイクリイトを持ち、人間らしき乗員が乗っていて、風に逆らって飛ぶことが可能で、接近したときに着陸して離陸したと彼らは主張している。

ところが、一八九七年三月になってまたも飛行船が——または飛行船群が——現れた。今度は米国中西部と西部一帯にかけて数千名の目撃者の面前で大挙して出現したのである。この現象が過ぎ去った頃までには——それは五月のことだが——このUFO物語の最も重要な、しかも無視された章の一つが終わっていた。

この記事において私が強調したいのは、飛行船の「出現」という事実よりもむしろ一般のUFO問題に関連したその有する意義である。私や他の数名の人にかこまれておおやけにした報告は、一八九七年の前記の事件に関する報道のごくわずかな部分にすぎないが（もっと決定的な、詳細をきわめた研究が今後発表されることが望ましいのであるが）、この不思議な事件を絶えず調査することはきわめて重要なバタン（原型）の存在をたしかめるのにもつばら役立つのであって、目撃報告のいくらかを調査した後こそ、そのバタンの持つ意義に我々は注目するようになるのである。このバタンのなか

に我々は過去と現在のあらゆるUFO事件のナゾが見られるような気がするのである。

一八九七年の三月下旬に例の飛行船がキャンザス州とネブラスカ州上空に再び現れた。現代のUFO騒動の初期の段階に見られるように、その目撃も徐々に始まったのではない。そして私の通信者の一人が述べた、この飛行船が一八九六年二月以後はカリフォルニア州から東方へ移動したという見解が正しいとは言えない。一月から三月中旬までは飛行船の報告が全然なかったが、その後突然驚くべき数の報告が開始したのである。

我々が知る限りでは三月二五日にキャンザス州ベルビルから最初の報告が行われている。その町で午後一〇時に一機の「ナゾの飛行船」が（形状は不明）町の上空を通過したのを少なくとも五〇名の市民が目撃したと新聞は述べている（それは続く二夜にも出現した）。しかしこれに先立って、主としてキャンザス州北部とネブラスカ州南部の牧場労働者や農民たちによって目撃されていたようであるが、ロバート・ヒバードの証言が信頼にたいするものならばアイオワ州も少なくとも一回は飛行船の訪問を受けたかもしれない。スー市の北方一五マイルのところ

で農業を営んでいるヒバードの話によれば、三月下旬のある夜、飛行船の後

尾についている引き綱からぶらさがっている「イカリ」が彼のズボンのたるんだ部分をひっかけて数一〇フィート引きずったが、ついに、ズボンが裂けて助かったという。一新聞は伝えた。

「彼はこれまで正直な人間だという評判通りの人間であった。世論としては彼がその異常な体験を持ったか、または夢を見たということになっている」

ネブラスカ州内のリンカン、ピートルズ、その他の場所やキャンザス州メリーズビル、ワシントン、ハダムなどにおける目撃の別な情報がある。

二九日の夜、ネブラスカ州オマハの一教会から出た参詣者たちは、空中を通過する一個の不思議な物体を見た。それは空中に停止して、再び去った。

それは三〇分間も見えたのである。その後まもなくオマハの南東地区の住民たちも大きな輝く光を放つその飛行船を見たが、「気球にしては大きすぎる」物であった。ゆっくりと、しかも地面近くを飛びながら、町の郊外で一連の示威運動をやったあと北西に消えて行った。

この飛行船の最上の報告のいくつかは四月一日の夜に出されている。この

ミズーリ及びキャンザス両州で目撃が発生したのである。八時一五分にキャンザス市で「数千の人々が不思議な光

体を見た」とその町の新聞は報じている。それは西から北へ南へと動き、次

に北へもどった。高度はさまざまであった。地面近く下降したかと思うと急速に飛び上がる。

キャンザス市「タイムズ」紙によれば次のとおりである。

「その光体は街燈ほどの大きさで、雲の高さにあるようには思われなかった。サーチライトによく似た一条の光線を放っていた。しばらくはその光が白かったが、次に明るい赤色に変化した。その物体の進路は北西に向かっていったが、数度後退してしばらく逆の方向へ進行した。規則的な運動によって動き、スイ星のような運動ではない。北方の地平線の彼方へ消えて行くのを見たという人もある」

キャンザス州エバレストの市民は同夜その飛行船を一時二〇分ほどして、その現象のとりわけ詳細な光景を見ることのできた。

いつとき五分間ばかり飛行船は空中に低くたれて雲の下端に沿って動くように思われたが、船中の強力な光線（複数）が雲に反射したために船体の輪郭がはっきり識別された。

ゴンドラは二五ないし三〇フィートばかりの長さに見え、インディアンのカヌーのような形をしていた。四枚の軽快な翼が舟から突き出ていて、二枚の翼は三角形である。大きな黒い船体がゴンドラのすぐ上に見られ、これは大体に膨張したガス袋らしいと観測者

たちは考えている。光を放つと同じ力が船体の浮揚に應用されていることは、飛行船が上昇するときには光が弱くなり、地表に近寄ってくる時は光は機関車のように強くなることからして明白であった。白や赤以外に青色が現れたと目撃者は述べている。

「一八九七年のメンゼル」ともいうべき一匿名氏は（注）メンゼルは現代の有名な円盤否定論者、それは全然飛行船ではなく金星だったのだと説明したが、これを聞いた目撃者が鼻息を荒くして言った。「金星がすばやく動きまわったり、地平線を横切って急速に飛んだり、地上に向かって急降したり、大きく飛び去って南の空に消えたりするものか」

同夜キャンザス州レブンワース砲台の一衛兵が飛行船を見たを報告したがこれは結局、本人がこのことをしゃべり続けるならば精神病の理由でクビにされるかもしれないと注意されるに終わっただけだった。しかし、大抵のキャンザス州民はこの神秘的な飛行体についてほかに心が広いように思われた。それで飛行船は州民のあいだで好みの話題となったのである。飛行船というものはいつか武器として使用されるかもしれないとほめかしたレブンワース砲台の一技師は言った。「ちょっと考えてみたまえ。軍団を乗せた飛行船が都市の上空へやってきて、あら

ゆる大きな種類の爆弾を下界の人間のなかに落とす光景を。殺りくはものすごいもんだらう。あるときの戦争

## 人間の声のする飛行船

キャンザスからはるか離れたミシガン州の中西部高地にあるゲールズバーク村の上空を飛行船が飛んだのは四月一日の夜のことであった。これは一八九七年中の出現騒動に二機以上の飛行船がいるということを示す多くの証拠の一つである。目撃者たちは強い光を見たが、それは船体のぼんやりした輪郭をあらわしていた。しかも船体からモーターの音らしい奇妙なバチバチいう音と、はっきりした人間の声とが聞こえてきたのだ。

四日後に数百のオマハの住民は約四分の三マイルの高度で飛ぶ一個の葉巻型物体を目撃した。五分間見えてから風に逆らって雲の中へ入り込み、まもなく現れてから、依然として、風に逆らいながら高速で北の空へ消えて行った。

九日と十日の夜には三つの州にわたって飛行船の目撃事件が爆発的に発生した。目撃の行われた地域をあげると次のとおりである。

四月九日にオクラホマ州ノーマンでノーマン州立銀行の現金係次長の「まじめな人で、敬けんな教会メンバーで

は別なときの戦争にくらべれば子供の遊びみたいなものさ」

ある「T・J・ウィギンズ氏は「長くて黒い物体を見たが、それは端にたいそう強い光を放っていて、両横腹には赤い閃光がきらめいていた」と言う。（これから二日後に、ノーマンのほとんど四百名の人々がこれと同じ現象を目撃したと言っている）

イリノイ州ではバンズトン付近の湖の上空に強く光る物体が低く出現し、それから西方へ向かって町の上空を妙な飛び方をして行った。これは同時にナイルズ・セクターとシャーマービルでも見られたが、距離はうんと遠かった。

九時三〇分にはシカゴの南部市民が湖の上空を横切る飛行体を目撃。これは奥地へ飛び、ゆっくり北西に転じて、暗黒のなかに消えた。シカゴ「トリビューン」紙四月一〇日付には次のように載っている。

「その動く驚異的な物体は、数力所において小望遠鏡や双眼鏡を用意した人々によって観察され、この人たちは光を帯びた物体の輪郭をスケッチしたと言っている。高度不明の空中を進行する物体の容積の見積もりとしてはあ

やぶやな根拠だが、一同の意見として一致したのは、胴体の長さは約七〇フィートで、細長く弱そうな構造であるという点であった。

この胴体には動くヘッドライトや他の光がついていたといわれる。数名の目撃者は胴体のすぐ上に翼または帆に似た、横に突き出た物を見たという。この物は幅約二〇フィートあるように思われ、一方の側から見たときはその長さは正確には測れなかった。

最初の目撃者の一人である若い宝石商は、その飛行船は実際には二つの葉巻型の胴が桁でもって連結されていたと主張している。この目撃はたそがれどきに起こったので、他の目撃のほとんどが暗闇のなかで発生しているところから、私の意見では、この宝石商の目撃こそたぶん飛行船出現に関して最も正確な記述として、まじめに取り上げねばならないものと思う。

物体の長さの判断を文字通りに受け入れてよいとすれば、次の例がある。エバンズトンやシカゴ南部の物体より小型の飛行船が午後八時四〇分にイリノイ州キャロル山の上空を通過し、西方に転じて「ものすごいスピードで」あつというまに消え去った。目撃者によれば、この物は長さ約八ないし一〇フィートで、高さは二ないし三フィートばかりであった。形は長円形で大きな赤色光を放っていた。

次はアイオワ州の四月一〇日。ニュートンでは午後八時に二千の市民が一個の飛行船を見たが、そのとき四〇分間も市の南西部上空に停止していた。そのあと北西に向かったが、光のついたパラシュートの如き物を落とした。

目撃者のなかにはこれは乗員からのメッセージではないかと思つて探しに出かけた人がいたが、新聞記事は探索者たちが何を見つけたかどうかを述べていない。

この飛行船はまた七時二五分にエルドン、七時四〇分にはオタムワ、八時一〇分にアルビア各町の上空にも出現した。

イリノイ州では強烈な白光を放つ不思議な物体がゲールズバーグ上空を飛ぶのに一五分を要した。双眼鏡でそれをながめた観察者たちは高度を四分の三マイルと見積もっている。

こうした活動のすべてはノースウェスタン大学のジョージ・ホウ教授を笑わせた。「オリオンのアルファ星が一千万年天空の一定の軌道を進行してきている。それで過去三週間それが停止して不思議な空中の物体のヘッドライトとして認められた理由が私にはわからない」。もちろんホウ教授は彼のいう「まぬけな同胞」が飛行船と呼んだ物体を自身で見たわけではない。自分には、もっとよい仕事があると彼は言う。

エバンズトンのジョーゼフ・ピアースンは赤、緑、白などの色光を見たがそれは、二個の葉巻型物体を映し出した。その物体はヒューツという音を放

## 汽車を追いかけた飛行船

一五日の夜、サウスダコタ州のハーワードからアーティージャンまでずっと一機の飛行船が汽車を追いかけた。車掌のジョー・ライトがマデイスン「センチナル」紙の記者に語ったところによると、日没直後に現れてしだいに地面に近づきながら飛び、やがて「視界から消えた」という。どうやら着陸したらしい。

別な飛行船がキャンザス市ユレカで同夜九時に人々により目撃された。うわさによれば別な飛行船が高度六〇〇フィートでワシントン市のワシントン記念碑に接近し、それからジョージタウンに向けて飛び、市の背後の丘の彼方へ飛び去った。

二四時間後にテキサス州の六つの都

つた。いかにも皮肉そうに彼は強調する。「この物体はオリオンのアルファ星とは完全にはずれたコースをとっていたなあ」

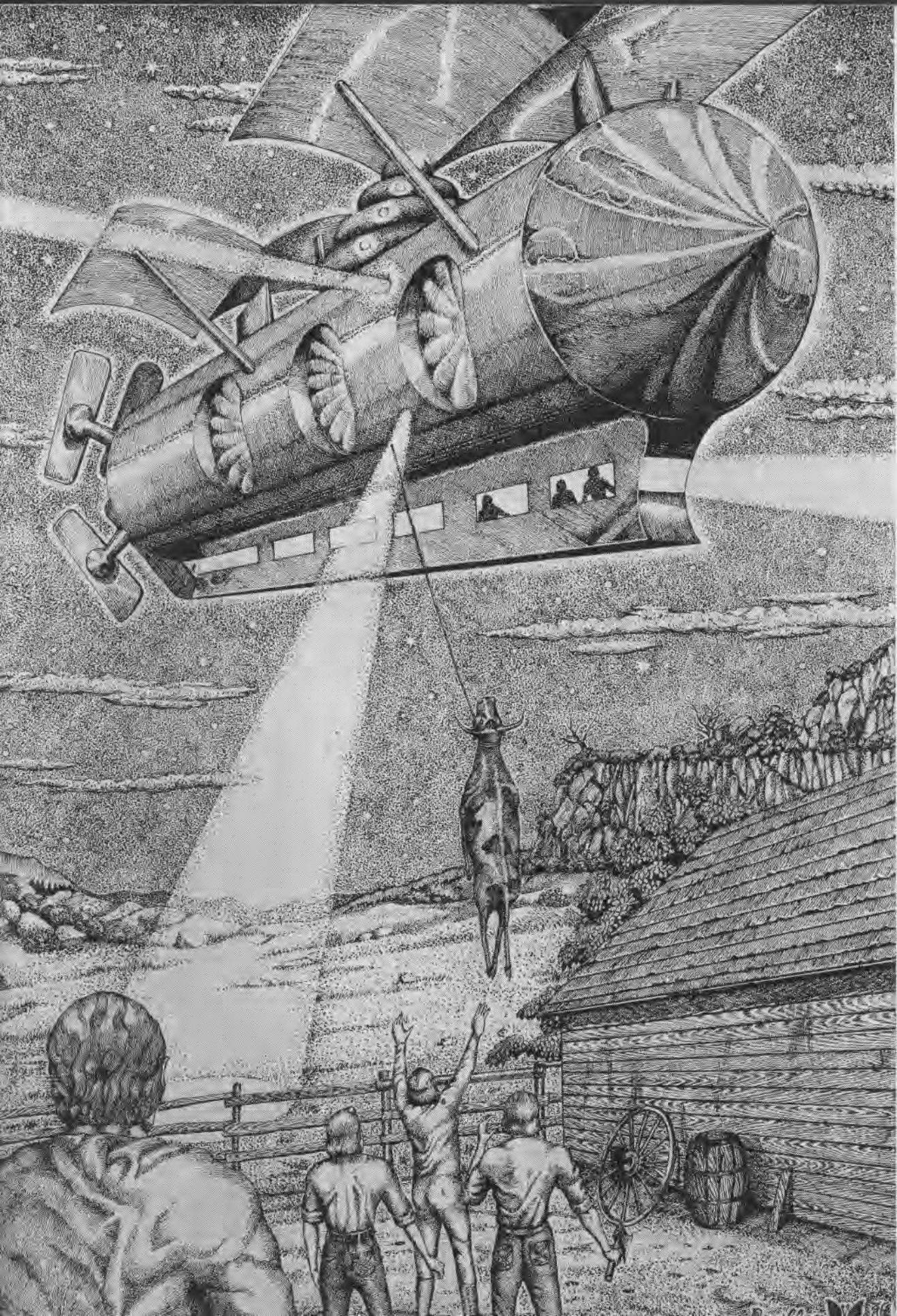
市で「メキシコ葉巻に似た形の飛行船を見たが、これは真ん中が大きくて、両端が小さく、巨大なチョウの如き大きな翼を持っていた。それは二つの大きなサーチライトの光線によって明るく照らし出されたが、風のような速さで南東の方向に航行しており、壮大な外観を呈していた」(ニューヨーク・サン紙)

三日後の午後九時に一個の巨大な物体がウェスト・バージニア州シスターズビルの地上をサーチライトで照射した。一記者によれば次のとおり。「強力な双眼鏡で調べたところ、両側に大きなヒレのついた一八〇フィートの長さの巨大な円錐形の物体であるという印象を受けた」

## 小牛をさらった飛行船

四月一九日にはこのUFO騒ぎのうちで最も興味ある報告類の二つを生じた。一つは有名なシスターズビル事件(前述)で、これはキーホーの著書「空飛ぶ円盤は事実である」にもっと

詳細に述べてある。他の一つは最近まで公表されなかったキャンザス州レロイの技手の報告で、UFO物語の記録中最もすばらしいものの一つである。目撃者はきわめて信頼にあたいる人



だったようで、しかもキャンザス州の一通信者の努力によって、本人の主張にたいする詳細な裏付けを私は入手することができた。

一方キャンザス州イエイツセンターの「ファーマーズ・アドバケイト」紙一八八七年四月二三日付は次のように報じている。

バーノンのアレグザンダー・ハミルトン氏は前の水曜日（四月二日）にこの町へ来て、うわさの種になつてゐる飛行船を見たと声明してかなりの反響を起こした。氏は古い移住者で、初期の州議会の議員であつたので、ウツドスン、アレン、コフィー、アングーソン各部にわたつて知られてゐる人である。氏は新聞社に次のような話をした。

「先週の月曜日の一〇時半頃、家畜の騒ぎで目が覚めた。たぶんブルドッグがいたずらしてゐるのだらうと思ひながら起き上がったが、戸口まで行つて仰天したことには、家から約四〇ロッド（二二〇ヤード）離れた牛の囲いの上空から一台の飛行船がゆつくりと下降するのが見えるんだ。

小作人のジド・ヘズリップと息子のウォールを呼んでから、みんなはオノをつかんで家畜囲いのほうへ走つた。一方飛行船は静かに下降を續けて、やがて地面から三〇フィートばかりのところまで来た。われわれは五〇ヤード

以内に近づいた。それは長さ三〇〇フィートと思われる巨大な葉巻型の胴体とその下部につり下がつたゴンドラから成つてゐた。

ゴンドラはガラス板または他の透明な物質と、何かほかの幅のせまい細長い材料とが交互になつたものでできてゐた。内部は明るく照らされてゐて、あらゆる物のはつきり見えた。照明は三つあつた。一つは強烈なサーチライトに似た光で、他の二つは小さい光だ。前者は赤色で後者は緑色だ。大きな光はあらゆる方向に向けることが可能だつた。

内部には私がかつて見たことのない奇妙な人間が六人乗つてゐた。二人の男と一人の女、それに三人の子供だ。彼らはペラペラしゃべつてゐたが、我々は一言も理解できなかった。その乗物の透明でない部分はすべて暗赤色を帯びてゐた。

我々は驚異と恐怖に満ちたまま黙つて立つてゐた。すると何かの物音が相手の注意をひいたので我々に光を向けてきた。ただちにこちらの姿をとらえて、何かわからないパワーにスイッチを入れ、飛行船の下部でゆつくり回転してゐた径約三〇フィートのタービン車が、ちょうど選別機のシリンドラーの音のように唸り始めて、飛行船は鳥のようにふわりと浮かび上がった。頭上約三〇フィートまで上昇したと

き、それは停止して、サクの中でわめて飛びまわつてゐる三才の若い牝牛の真上にとまつたようだった。その方へ行つてみると、太さ約半インチで同じ赤い材料でできた綱が、その子牛の首のまわりに引き結びで巻きついてゐて、一方の端は船体へつながつてゐるのがわかつた。

我々はそれをはずそうとしたが、できなかつたので、綱を切り離した。だが船体や牛やすべてがゆつくりと浮かび上がつて飛び始め、北西の方に消えて行くのを驚きあきれて見ながら立つてゐた。一同は家へ歸つたが私は全く恐ろしかったので眠れなかつた。しかし火曜日の朝起きて馬に乗り、牛の行方を探しに出かけた。だが夕方レロイに歸つてみると、レロイから約三〜四マイル西方の、コフィー郡に住んでゐるランク・トーマスがその日彼の畑であの牛の皮や足や頭を見つけたことがわかつた。

だれかが盗んだ牛を殺して皮を投げ捨てたのだと考えたトーマスは、身元確認のためにそれを町へ持つて行つたが、柔らかな地面に何の跡も発見できなかったので、すっかり首をひねつてゐたのだ。私は昨夜家へ歸つたが、眠り込むたびにあの強烈な光を放つ、い

やな人間たちの乗つた、いやらしい物体を夢見るのだった。あれが悪魔なのか天使なのかはわからないが、我々みんなはあれを見出し、私の家族の者もみな飛行船を見たのだ。だがあんなものともう関係を持ちたくない」

ハミルトン氏はショックから完全に立ち直つてゐないようだった。また氏を知つてゐる人のすべてが、氏の言葉はすべてまじめであるをよく知つてゐたと「アドバケイト」紙は結んでゐる。同紙はハミルトンをよく知つてゐる町の知名人の証言も次のように掲載してゐる。

「ありそうもないような物事の真相が提示されるときは必ず疑う人や信じない人がいることは現在もそうですし、過去もそうでしたし、未来においてもそうでしょう。無知か疑い深い人は右のハミルトン氏の陳述の真实性を疑うであらうことはわかつてゐますので、私たちが署名人一同はここに次の宣誓書に偽りのないことを宣誓します」

私たちは一五年ないし三〇年間アレックス・ハミルトンを知つてゐますし彼の言葉が人から疑われたことがないという事実からして、彼の飛行船に関する話が真実で正しいものであることを心から信じます。

E・V・ホアトソン（州油田監督官）  
H・H・ウィンター（銀行家）

H・S・ジョンソン (薬剤師)  
アレックス・スチュアート (治安判事)

F・W・バトラー (菜屋)

H・C・ロリンズ (郵便局長)

M・E・ハント (郡治安官)

E・K・ケレンバーサー (医学博士)

J・H・ステイッチャー (弁護士)

H・ウエイマイアー (菓屋)

ジャス・L・マーティン (証書検認官)

右は公証人立ち会いのもとに署名宣誓されたことを証す。

一八九七年四月二一日 公証人 W・C・ウィリー

ハミルトンの物語をコピーしてから  
バリーントンのデイリー・ニューズ紙  
は別な宣誓書に掲載した。

「キャンザス州バリーントンの住民た  
る私たち著名人は、アレグザンダー・  
ハミルトン氏が一八五五年にミズーリ  
州から追放されて以来氏を知っている  
こと、(これはどうやら当時のミズー

リ州とキャンザス州が闘争中の奴隷解  
放問題に巻き込まれたことに言及した  
ものらしい)氏がコフィー郡の最初の  
郡主事であったこと、どの点から見  
ても全く誠実で信頼できる人物であるこ  
となどをここに証言します。真実を愛  
する人は氏のいかなる陳述をも決して  
疑わないでしょう」

J・M・レイン

H・E・カウジェル

オーソン・ケント

W・マンソン

M・E・グリメス

J・E・グリメス

J・M・ポールドウイン

デービッド・グリメス

右は公証人立ち会いのもとに署名宣誓されたことを証す。

一八九七年四月二九日 公証人 H・B・チェニー

ハミルトンの誠実さを示す証拠の最  
後のものは彼の孫娘たちによって示  
されている(この物語で「ウォール」  
という名で出てくる息子ウォーレス  
・ハミルトンの娘たち)。  
最近一九六五年にキャンザス州トビ  
ーカのハリー・フリーナー氏が彼女ら  
に会ったが、二人の婦人が氏に語った

## 修理されていた飛行船

ところによると、この物語はハミルト  
ン家では有名な話となっていて、祖父  
は一九一二年に死ぬまで不思議な乗船  
者が子牛をさらって逃げるのを見た  
主張していたという。彼女らの父(ウ  
ォーレス)は人から嘲笑されるのを恐  
れてか、この問題を語ろうとはしな  
かった。

申し立てによれば同じ頃に発生した  
という次の「技手」の物語は(正確な  
日時不明)、裁断がさほど容易では  
ない。目撃者の人柄に関する情報が少  
ないからである。だがこの人はかなり  
すぐれた人だったらしい。彼のうわさ  
は一体に良好である。まだはるかに  
「俗っぽい」飛行船目撃者事件類をか  
つては嘲笑していた「アーカンソー・  
ガゼット」紙でさえも、この事件を  
「最も真実な物語」と称した。

余暇がとれることがわかっていたので  
少しばかり狩猟をするためにホーム  
(アーカンソー州)へ行った。その場  
所へ着いたのは午後三時頃だった。狩  
猟はうまくいった。それで駅へ引き返  
そうとし始めたのは六時すぎてからだ  
った。ヤブの中を歩いていて聞きな  
れた物音が耳についた。どうみても機  
関車の空気ポンプの作動音に似た音  
だ。

話の主はジェイムズ・フートンで、  
「よく知られたアイアン・マウンティ  
ン鉄道の手掌」と述べられている。  
「もちろん私は飛行船を見た。これは  
絶対に間違いない。だから私が話すこ  
とを信用してよろしい。それはこんな  
ふうに起こった。

私は臨時列車を回送するためにテク  
サーケアナへ行っていた。そしてテク  
サーケアナで八時間ないし一〇時間の

私は臨時列車を回送するためにテク  
サーケアナへ行っていた。そしてテク  
サーケアナで八時間ないし一〇時間の

いたが、その男は黒メガネをかけてい  
た。彼は船体の後尾と思われるあたり  
で修理をやっていた。近づいてみて私

「失礼ですが、その音はウェスティン  
グハウス社のエアブレイキによく似  
ていますね」と私は言った。「たぶん  
そうでしょう。これは圧縮空気と飛行  
翼とを使っているのです。だがあなた  
はあとでくわしいことがわかるでしょ  
う」  
「準備完了です」とだれかが叫んで全  
員が下へ姿を消した。見ていると、各  
車の前にある二インチの管が車にたい  
して空気を噴き出し始めて車は回転を  
開始した。すると船体はシューッと  
いう音をたてながらしだいに浮かび上  
った。突然翼が前方へはねて鋭いフチ  
を空の方へ向けた。次に船体の後尾に  
あったカジが一方へ回転し始めた。車  
が急速に回転したので回転翼はほとん

ど見えなくなった。そしてあつという  
間に視界から消えてしまった。  
ここに描いた絵はこのような事情で  
私が描き得る最上のものである。私は飛行  
船を見ることができて幸運だったと思  
う。船体が静止していたあいだ、何か  
のエンジンの空気ポンプみたいに、ポ  
ンプを使用していたと言つてよいだろ  
う。私がおぼえている一つの特徴は排  
障器（機関車や電車の前につけて線路  
上の障害物を取り除く装置）に似た物  
がナイフの刃のように鋭くてほとんど  
針のようになつていたという点だ。

●1897年4月22日付アーカンソー・ガゼット紙に掲載された  
謎の飛行船の記事

April 22, 1897.

### SAW THE AIR SHIP

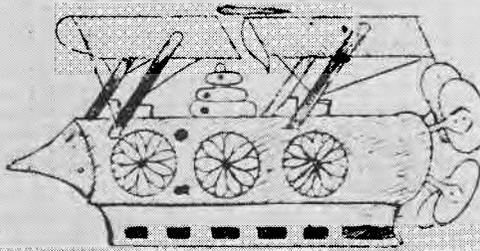
Conductor Hooton, of the Iron Mountain, Tells of It.

MOST AUTHENTIC STORY PRINTED

He Has Across the Aerial Ship in an Open Field Near Homan and Talked With the Man, Naming It—He Gives a Graphic Description of the queer Looking Ship—Five Men Were Passengers in It—Mr. Hooton's Statement.

Capt. "Jim" Hooton, the well-known Iron Mountain railroad conductor, who was in the city yesterday, not only verified the report that he has seen the air ship, but has furnished "The Gazette" with the following sketch, which was made by him. Those who know Mr. Hooton will search for the truth of his statement.

"Of course I saw the air ship," said Mr. Hooton to a "Gazette" reporter, "there is no doubt in the world about



THE AIR SHIP AS SKETCHED BY CAPT. HOOTON

and you will be safe in banking on what I tell you. It came about in this way. I had gone down to Texarkana to bring back a special, and knowing that I could have some eight or ten hours to spare at Texarkana, I went to Homan to do a little hunting. It was about 3 o'clock in the afternoon when I reached that place. The sport was good, and before I knew it, it was after dark when I started to make my way back toward the railroad station. As I was tramping through the brush one afternoon was attracted by a familiar sound, a sound for all the world like the working of an air pump on a locomotive. I went at once in the direction of the sound, and there in an open space of some five or six acres I saw the object making the

sharp ends skyward, then the rudders at the end of the ship began to revolve, and the wheels revolved so fast that one could scarcely see the blades. In less time than it takes to tell you, the ship had come out of sight. This drawing I have made you is the best I can do under the circumstances. I consider I was fortunate in seeing the ship. You may add that the air pump of an engine. One particular feature I remember is that what I would call the cap-sucker was sharp as the blade of a knife, and almost as pointed as a needle. There was no bell or bellows about the ship that I could discover. Also I should think every well regulated air locomotive should have

ど見えなくなつた。そしてあつという  
間に視界から消えてしまった。  
ここに描いた絵はこのような事情で  
私が描き得る最上のものである。私は飛行  
船を見ることができて幸運だったと思  
う。船体が静止していたあいだ、何か  
のエンジンの空気ポンプみたいに、ポ  
ンプを使用していたと言つてよいだろ  
う。私がおぼえている一つの特徴は排  
障器（機関車や電車の前につけて線路  
上の障害物を取り除く装置）に似た物  
がナイフの刃のように鋭くてほとんど  
針のようになつていたという点だ。

船体のまわりによく整つた機関車には  
当然についていると思われるベルまた  
はベルのヒモはなかった」  
フートンがスケッチした飛行船の図  
は、見たところバカらしくて、ありそ  
うもない物のような印象を与え、この  
物語を全面的に受け入れるのに障壁と  
なるかもしれないが、一方それは飛行  
船存在の状況証拠となるかもしれない  
のである。これにやや似たような飛行  
船（複数）が以前に報告されているし  
（特にシカゴ南部の飛行船目撃者事件  
に注意）、横腹の扇風機型車輪は、一

八九六年のカリフォルニア州の目撃  
（複数）でも目立っていた。そのこと  
をフートンが知っていたとは考えられ  
ないことだ。前述のアレグザンダー・  
ハミルトンが推進機構と関連した「車  
輪」の存在を報告したことを忘れては  
ならない。  
ただし、この場合は車が大きくて、  
横側ではなく船体の下部にあった。更  
に、フートンの見た飛行船は、一八八  
〇年にニューメキシコ州を横切つた不  
思議な物体との明確な類似性を帯びて  
いる。

## 三人の男女が乗った飛行船

一八九七年の飛行船目撃騒動は四月の第三週以後、たしかにピークに達した。ただし五月まで散発的に発生は続いていた。しかし一つの実例だけは詳細に述べるにあたいする。

以下の証言はアーカンソー州のホットスプリングズの二人の官憲サンブター警官とマクルモアー郡保安官補の目撃談で、申し立てによれば二人は公務中に一機の飛行船とその乗員たちを見たという。

「一八九七年五月六日の夜、この町から北西に向けて馬で疾走中、我々は天空高く一個のきらめく光体を認めた。突然それは消えたが我々はそれについて一言も発しなかった。犯人を捜査していたので物音をたてたくなかったからだ。丘々のあいだを通り抜けて四、五マイルばかり乗りまわしてから再びその光を見たが、今度はかなり地上に近いように思われた。二人は馬をとめてそれが降りてくるのを見つめた。やがて急にそれは別々な丘のかけに消えてしまった。二人が更に半マイル前進したとき、両方の馬は動かなくなつた。すると約百ヤードむこうにライトを持って、動きまわっている二人の人間が見えた。銃を手にながら——というのとは今や事の重大さを十分

に認めたので——我々は呼びかけた。

『だれか？ 何をしているのか？』

長く黒いヒゲをはやした一人の男が片手に燈火を持って前方へ出てきた。

そこで我々二人の身分を明かしたところ、相手は自分と他の二人——若い男

一人と女一人——計三人でもって飛行船に乗ってこの国を旅国中である旨を語り始めた。我々は飛行船の外形をは

つきり識別できた。それは葉巻型で約六〇フィートの長さがあつて、最近の

新聞に出ている飛行船の図にきわめてよく似ていた。あたりは暗くて雨が降

っており、若い男は三〇ヤードばかり離れたところで大きな袋に水を入れて

いる。女は暗闇の中で一人だけ背後に控えていたが、手にカサを持って頭上

にさしていた。ほおヒゲをはやした男が我々に飛行船へ乗らないかと誘いか

けて、雨の降っていない場所へつれて行こうと言う。我々はぬれているほう

がよいのだと言った。

船体の強い光がたびたび点滅するのはどういふわけかと男に尋ねると、そ

の光はきわめて強力なのでパワーを多く消耗するからだと言った。ホットス

プリングズに数日間滞在して温泉に入りたいのだが、時間の余裕がないので

それができないと言う。彼らはこの国

を十分に見てからテネシー州のナッシュビルで解散すると言った。急いでいるので我々は別れたが、掃途四〇分後に

ジョン・J・サンブター

ジョン・マクルモアー

右は公証人立ち会いのもとに署名宣誓されたことを証す。

一八九七年五月八日 公証人 C・G・ブッシュ

フォート・スミス市の「デイリー・ニューズ・レコード」紙は、「サンブターとマクルモアーは手ひどい嘲笑をこらむたけれども、両氏はその体験が絶対に真実であると主張している。

しかも両氏のその真剣さは、その物語を事実として受け入れられぬ一方で両氏がふざけているのでないことを知っている多数の人々を迷わせている」と

報じ「アーカンソー・ガゼット」紙は両氏は疑いなく誠実な人なので、両氏の陳述は真実なものとして十分に信用

できるものであると述べている。

右の物語の一節に特に注意を払う必

## やはりUFOか？

こうした飛行船の存在を認める人々は、この乗物が地球人、それもおそらくアメリカ人の発明家によって操縦されているということをほとんど疑わなかった。キャンザス州コロニーの「フリー・プレス」紙のある主筆を除いて

は何も見えなかった。その飛行船が飛び立つ音を聞きもしなければ見もしなかった」

要がある。すなわち船体の光とその光源との関係である。これまでも互いに無関係なさまざまな目撃者が「飛行船が加速するときはいつも光が暗くなる」と述べている。

サンブターとマクルモアーがウソをついているとすれば、両名は他の目撃事件類や、入手しがたいと思われるような新聞記事にさえにも精通していたということになる。(偶然の一致か否か、四月中旬にイリノイ州の作男(複数)が、二人の男と一人の女とが操縦する飛行船に出会ったと称している)

(この人は飛行船が火星から来るという説をたてた)、飛行船がそれ以外の何かであるかもしれないという考えが人々の心に浮かんだとは思えない。

一八九七年の諸事件は我々が現在知っているようなUFO活動の典型的な

ものでないことは当然明らかである。実際には飛行船をUFOの部類に入れることを差し控えてきた。というのはそれが文字通りの意味をなす物(未確認飛行体)である一方、我々が今日UFOと呼んでいる物とは全然異なるからである。一八八〇年、一八九六年、一八九七年に米国で見られた現象は(一九〇九年にはウェールズとニュージラランドで、一九一四年にはアフリカで見られた)、飛行船であつて、この大氣中を限られた飛行をするために作られた一種の空気より重い建造物である。それは現代の「空飛ぶ円盤」の如き宇宙船でないことはまず疑いない。

その時代のあらゆるコンタクト物語において、飛行船が地球の建造物であるという考え方は当時の科学技術や物質を都合よく支持するのに都合よく用いられていた。当時科学において比較的急速な進歩をとげつつあったのであるから、ある種の航空機が近い将来に發明されるだろうと広く信じられていた。これは現在、惑星宇宙船が数年後に完成するものと期待されているのと同様である。想像による飛行船のあらゆる機能が一九世紀のアメリカ人によって予言されていた。ここには彼らの理解力を超えた概念はなかったのである。「反重力」によって推進するUFO「高度に進歩したデザイン」の飛行

体”とか“小人”とか“金髪金星人”といった考えは存在しなかったのだ。要するに今日UFOの存在を認めている我々にとって事新しく期待すべきものはないのである。

一八九七年のコンタクト事件(複數)は避け得られないものであつた。ただし制限されたコンタクトは起ることもあるし、また起つていゝう前提を人が認めるならばである。飛行船の特殊な性質のためにコンタクトはそういうふうに行われねばならなかつたのだろう。したがつて地球の建造物であるという信念を強めたのである。もし乗員たちがその出現にたいする地球人の反応に無関心であつたならば、当時の新聞に掲載されたような、さわめてコッケイな物としてよりも、もつと進歩したデザインの機械を飛ばしたことだろう。

一八九七年の飛行船目撃報告類を研究して、一人の著名なUFO研究者は、これらの飛行船は米国の一科学者によつて發明されたのだと結論づけている。いずれ著書でそのように述べるだろう。彼をこの結論に導くような特殊な情報を持っているのかどうかは知らないが、むしろその考えは、存在する資料の皮相的な不完全な調査に基づいていてのではないかと思う。たしかに一二度その時期を研究したことのある人のほとんどすべての人は、これ

は全く地球人の仕業ではないかと考えている。人を迷わせるに足るほどのデマが新聞に載つたからだ。しかし結局はトーマス・エジソンが言つたように「だれかがうまく飛行船を作つてそれを秘密にしておくことができるとは絶対に考えられない」と結論づけねばならない。

しかも右のUFO研究家の言葉を信ずるには、一八八〇年にニューメキシコ州に、一八九六年にカリフォルニア州に、一八九七年には全米に、一九〇九年にはウェールズとニュージラランドに、一九一四年には南アフリカに、匿名の發明家と飛行船を操縦する役目の数一〇名の人間が出現したと信ずる必要がある。またこのことすべては實際上完全な秘密裏に遂行されたと信じなければならぬし、しかも、そのとき以来、最初の「空気より重い飛ぶ機械」の創造においてライト兄弟が果たした役割を無に帰せしめるような物は、何も現れていないと考える必要がある。

私が意見として述べたいのは、本記事で推定したように、真相はこの飛行船はその素性において現世のものではないらしいということである(必ずしも惑星間宇宙船とは言えないが)。このように臆測すると、UFOをあやつる人間は(1)我々を惑わそうとして居るのか、または(2)観測者の環境を考えて

出現すると仮定するならば、この神秘は解明されると言いたい。この二点は重複するかもしれないが、これはUFO乗員の目的に関する正反対の推測に基づいたものである。

まず右の(1)においては「どこか他の場所」から来た人間によつて行われた長期の航空作戦行動と考えられる。必ずしも敵意ある者ではないが、この人間たちは自分の正体や目的が何であるかをこちらに知らせようとしないし、それゆえに巧妙さ、より明確な行動、コンタクトにおいて伝えられたメッセージ等によつて、彼らに関する誤つた概念をこちらに植えつけようとしてきたのである。彼らがこの地球上でやっていることは右の仮説を立てる上に特に関係があるわけではない。ただし、いずれ別な記事でこの問題を論じようと思つて居る。

地球人に勘違いさせるために、UFOに乗っている連中は、自分たちこそ地球人に最も容易に信じて理解してもらえる人間であるかの如く振舞つて居るのである。古代においては迷信にとらわれた人々はUFOを神または魔法使いと呼んだ。W・R・ドレークが述べたある奇妙な物語(「ノルマン時代の宇宙人」と題する記事)で、人間たちが自分らは「マゴニア」または「マクス(魔法の国)」から来たと言つたと述べて居る。またポール・ミストラキ

「(ポール・トーマス)はそのすぐれた著書『各時代に現れた円盤』の中で聖書に出てくる天使なるものは実際にはUFOに乗った人間であったと論じている。今日この宇宙時代において我々は空飛ぶ円盤が宇宙船であると信じさせられている。とすると、一八七九年四月に——これはライト兄弟が初めて飛行機に乗った年よりも六年前だが——ナゾの飛行船が地上のものであったという説よりもっと話のわかる説があるとすれば、それは何だろうか？」

前記二点のうち(2)の場合は多分に同じ推理に基づいているが、UFO訪問の動機については私はさほど疑わしい見解をとっていない。思うに、おそらくUFO乗員はUFOの性質そのものによる理由で、地球人とおおっぴらなコンタクトができないのだろう。着陸して彼らの存在をはっきりわからせることが不可能なために、目撃者が理解できるようなかたちで自分たちを見せることによつて自分たちを知らせようとしているのだ。一九七四年には宇宙船で、というふうにも。もし彼らがその真の姿で現れるならば、それはあまりに奇妙なために我々は彼らを全然認識できないかもしれない。たぶん時代の流れとともに人間の知識が拡大するにつれて、UFOの神秘も発展し続け、ついに我々はその真の意味を理解するようになるだろう。

明らかにここで我々は一つの重大な論理に関する思索におちいっている。だが右の後者の推測は大体に私の独創ではなくて、米国の数種類のUFO誌にピーター・コールという筆名で記事を發表したあるUFO研究者による説であることをはっきりさせねばならない。UFO問題に関連して一連のきわめて高度に複雑な仮説を打ち出したコールは、UFOの神秘の意義を研究者連は完全に解釈し誤っていると論じている。彼らは必ずしも完全な自信を持っていないが、重要な新しい領域を開こうとしているので、これを無視してはならない。

とにかく真相が究極には何であろうとも、一八九七年の騒ぎは一般の状況から「空飛ぶ物体」を引き離そうとする試みの無意味さを示している。コールが書いているように、個々の報告はこのナゾにたいする我々の理解を妨げるにすぎないというのもっともなことでだ。たぶん個々の円盤は何も意味しないだろう。一般の円盤こそ何よりも重大なことを意味するのである。

そこで例の飛行船はナゾを解くための最大のカギの一つであるかもしれない。ケネス・アーノルド以後の時期にわたる研究者にたいするその教訓は明らかである。我々が故意にだまされていても、またUFO人が彼らの側の条件で地球人と会えないにしても、とに

かくUFOは我々のほとんどが喜んで認めようとするよりもはるかに深遠な

神秘を生み出しているのである。  
久保田八郎訳

●1930年にニューヨークのマンハッタン上空を飛ぶツェッペリン・ヒンデンブルク号 (AP提供)



いう記録はない。

訳注||飛行船のアイデアはかなり昔からあったけれども、近代においてこれを実用化させたのはドイツ人技師ツェッペリンである。彼は一八九四年、五六歳のとき、アルミニウム骨組にアサ布、絹布を張った硬式飛行船の設計、試作に着手し、第一号LZ-1が完成したのは一九〇〇年であった。資金難で第二号は一九〇五年に、第三号は一九〇六年に建造され、これにより飛行船の実用性がやっと認められるようになった。したがって第一号は使いものにならず、それ以前すなわち一八〇〇年代に各国を周遊できるほどに進歩した飛行船がどこかで建造されていたと

ツェッペリン飛行船は全部で一一九隻作られたが、それらはすべてガスによって浮揚する方式のもので、「車輪」をそなえたのではない。ツ伯の死後、ツェッペリン飛行会社はLZ-127を二七年に建造し、これが二九年八月に世界一周を二〇日間でなしとげて新記録を作った。しかし、最新鋭のLZ-129(ヒンデンブルク号)が一九三七年五月六日、レークハースト飛行場に着陸の瞬間に大爆発を起こした事件は、訳者の記憶に残っているが、これをもって飛行船時代は終わりを告げたのである。

# 円盤と人体保護装置

米国GAP ジム・エンツミンガー

フリークエンシー（Frequency）という言葉の意味としては「それは一定時間単位における調和ある運動、または振動、または周期」と言えるでしょう。時代がすすむにつれてこの地球上のますます多くの人が生活に影響を及ぼす多くのフリークエンシーに気付いています。科学者によれば人体のあらゆる運動、自身を感じる物事、触覚、臭覚、聴覚などは電気的な衝動によって脳に記録されます。赤ん坊が生まれて最初の息をするとき、心臓の働きは通常の鼓動と考えられ、きわめて急速な鼓動に変わります。これは幼児の体中の「ささいな事から活動を始める或るメカニズム」によって起こされます。

飛行機で旅する人のなかには東部から西部へ、またはその逆を飛んだ後に疲労感やときには体力消耗感を起こすことがあり、たとえ数千マイルの旅がわずか3、4時間しか要しなかった場合でもそうなることがあります。旅客機のパイロットたちは長年にわたってこの異常な疲労感を訴えてきました。これは人間に覚醒時や就寝時を告げる人体の内部にあるタイピング・メカニズムすなわち「物質交替時計、または「生物学時計」ともいうべきものの干渉によるものであることを科学者は発見しています。この干渉は人間が地球の自転に沿ってかまたは反して進行する場合にわかります。南北のいずれかへ進行するときはよくわかりません。この肉体的干渉ははっきりものを考える力を失わせます。またこの変化は出発してから数時間内に起こることに注意するべきです。ただし旅行者が少し早目か遅目に眠ったりする場合と混同してはいけません。

1954年4月23日にジョージ・アダムスキーは金星の母船に乗り込んで月への最初の旅行に出発しました。このときブラザーズは、月の薄い大気に肉体を適応させるのに必要な調整時間がないために、そのときは着陸できないとアダムスキー氏に説明しました。これを読んだ「肉体の構造を変えるような処置をとって人体を変形させねばならないのか」といぶかる人もありましたが、事実はそうではありません。これは肉体に磁気作用を及ぼして呼吸器官に影響を与えるような処置なのであって、こうして生物の呼吸量を少し変える或る化学的変化を起こします。このとき肉体に幾分苦痛が生じるのです。一定の期間がすぎると肉体は徐々に変化し始め、苦痛はなくなってきました。

これをアダムスキーは次のように説明しています。「低い平地から高い所へ登ると、完全な正常さを感じるようになるには数週間の調整期間を必要とすることがある。本人

は心身の変化によく気づいている」

われわれは宇宙飛行士が地球の周囲の軌道を飛ぶ際に体内に発する種々の肉体的変化について部分的に知らされています。たとえば異常な体重の減少とか、呼吸の際に感ずる奇妙なニオイなどです。真相を知らない人にはこれは奇妙なこと、理解が困難であるかもしれません。こんな異常な現象がなぜ宇宙空間で発生して、装置の完備した地上の実験所で発生しないのでしょうか。彼らの宇宙船は惑星の活動の原理に基づいて作られているとはいっても、それはうんと安定しています。地球上では磁力線は常に変化していて、その影響力は諸状態を理解するのを困難ならしめています。宇宙のブラザーズはこの磁力線を利用しているのであって、それを船体の内部と外部に平等に分配しています。このために電磁場を生じ、船体自体の「大気圏」を船体の周囲に持続せしめています。ゆえに乗員の肉体に影響を及ぼすことはありません。

地球の科学が長足の進歩をとげたとはいっても、将来の宇宙旅行に必要な知識はまだはるかに浅薄です。上記の大気圏外飛行中に宇宙飛行士が体験した不快なガスの悪臭は、呼吸装置に入れてあった浄化流動体の残りが洩れて起こったものです。この装置が地上でテストされたときは結果は良好で、ニオイなどはありませんでした。しかし大気圏外では円盤のようなフォースフィールドによる保護がないために、ガスが洩れたのであって、これは磁力線や宇宙線などの攻撃によるものです。

人々のなかには宇宙空間で起こる各種の病気その他で宇宙飛行士の人命を失う危険が大であると思う人もありますが、これにたいしては「ノウ」と申しましょう。ポイントは次のとおりです。我々は万物にたいする知覚力が増進すればするほど自分自身を理解するようになるからです。人間といふものは自分自身を理解するならば簡単に迷うことはありません。

ブラザーズが行っている仕事にたいしてもっと受動的にならうではありませんか。そうすればいつかは彼らの援助によって地球人も保護装置内蔵の宇宙船を…ブラザーズが宇宙船の船体の周囲にフォースフィールドを帯びて保護装置を内蔵しているような宇宙船を建造することができるようになるでしょう。

この地球も我々が「大気圏と呼ぶフォースフィールド」を持っていますが、これは地球が空間を急速に運動することによって生じたものです。

久保田八郎訳

UFOと宇宙哲学の研究グループ

\*\*\*\*\*日本GAP\*\*\*\*\*



会員募集

わが国UFO研究界の先駆者久保田八郎はジョージ・アダムスキー研究者としても著名であるが、1961年よりアダムスキー主宰の世界GAP(知らせる運動)組織網の日本代表となり、日本GAPを設立。以来あらゆる困難と障害を乗り越えて、アダムスキーの特異な体験と宇宙の哲学の促進活動を展開してきた。機関誌「GAPニューズレター」をすでに56号まで発行。毎月上野公園の東京文化会館で月例研究会を開催。「生命の科学」講義、テレビ番組練習、研究発表などを行い、宇宙の法則と人間の真の生き方を探求。また英語研究会を設け、UFO関係原書を無料で講義を行い、奉仕的個人活動として啓蒙運動を続行中である。真剣な探求者のご参加を歓迎いたします。

機関誌「GAPニューズレター」第56号発行中!

- 本格的活版印刷 B5版 極上アート紙40ページ
- UFOに関連して、他の惑星の偉大なる人類存在の認識と宇宙の法則の探究専門誌

〈主要記事〉  
アダムスキーに関するコメント(1) ……デズモンド・レスリー  
真の教育とは何か(2) ……ジドゥー・クリシュナムルティ  
奇蹟を起こす方法 ……デッド・オーウェン  
超能力開発の意義 ……久保田八郎  
永遠に生きるためには ……ジョージ・アダムスキー  
〈改訂〉空飛ぶ円盤同乗記(9) ……ジョージ・アダムスキー

入会希望者は切手20円を同封の上、「UFOと宇宙」で見たと書き添えてまず案内書をお申し込み下さい。

〒133 東京都江戸川区本一色365-818

高度な哲学的研究グループにつき、中学生の入会はおこわります。機関誌の1冊売りはしません。

日本GAP 代表 久保田八郎

●この発見はアダムスキーの体験の真実性を証明する？

# 私は金星文字を解読した！

バシル・バン・デン・バーグ

バシル・バン・デン・バーグ氏は南アフリカ共和国ヨハネスバーグの人でアダムスキーの著書「空飛ぶ円盤実見記」に掲載されている金星人から与えられたという「金星文字」を解読して

画期的な反重力モーターを発明したというので世界のUFO研究界に大センセーションをまき起こした。少々古い話だが、内容の重要性にかんがみてここにその詳細を伝えることにした。

(訳者)

世界のできるだけ多くの読者に対して、UFO問題で最も論議的のとなつた書物が刊行された一九五三年に始めてから以来一〇年間を通じて私が(バン・デン・バーグ氏が)発見した物事の真相をここでお伝えしたい。その書物とはジョージ・アダムスキーとデスマンド・レスリー共著の Flying Saucers Have Landed (邦訳版「空飛ぶ円盤実見記」高文社刊)である。

UFOに関して多数の書物が書かれているが、私自身の発見により心から断言できるのは、あらゆる書物のなか

で最も重要なのはジョージ・アダムスキー氏の著書だということである。私がこう言うのは、彼は徹底した誠実と正直とによって、しかも偉大な勇氣をもつて、円盤に関する明白な事実を世界に伝えようと努力したからである。

私はアダムスキー氏に関してはいくぶん公然と「誠実・正直」という言葉を用いるが、これは科学者と素人の両方に対して、ジョージ・アダムスキーの主張が非の打ち所のない真実なものであるという決定的な証拠を私が持っているからである。

金星文字には

重大な意味が含まれていた！

私は自分が読むあらゆる書物の内容について、注意深く賛否両論を考えることなしにウウミに信じてしまうような男ではない。両論を考えるとときでも私の判断は別にしておく。正当化に必要な証拠なしに他人の言を判断することは賢明でないということを知つたので、初めて彼の書物「空飛ぶ円盤実見記」を読んだとき、多くの人がやるように無造作にアダムスキーを非難

することはしなかった。イカサマ師かホンモノかを示す証拠は何もなかったからだ。

彼の著書を読むに先立って私の円盤に対する関心はゼロだった。それ以前のことを聞いたり読んだりしたことがなかったからである。したがって賛否のいずれをとるかは何とも言えなかった。私の興味を呼び起こしたのはアダムスキーの著書に掲載された円盤の写真と、第二次大戦中三時間にわたって私の乗った爆撃機を追跡してきた奇妙な物体が驚くほどよく似ていることだった。その件については基地に着陸してから情報部へ報告したが、その結果この種の不思議な現象の目撃はそれまでたびたび報告されけれども正体は不明だということを知らされた。

アダムスキーの物語と私の戦争中の目撃とのあいだに何かの関連があるらしいという結論に達してから、私は金星人がそのような乗物からアダムスキーに投げ落とした象形文字のメッセージの写真にすぐ興味をおぼえた。私の意見は次のとおりであった。もし彼の著書に何か真実があり、私自身

の目撃と関連があるならば、この象形文字が何かの解答を与えるかもしれない。

そのとき以来私は長く象形文字と取り組み、確実な意味をもつように各文字を組み合わせようとあらゆる方法を試みた。そしてついに正確な「径路」を発見することに成功した。それを用いれば象形文字が解読できるのである。ここに至って、これはアダムスキー氏がやった賢明なはずだったのか、それとも実際に別な惑星の人間によって彼に与えられた象形文字だったのかと私は大いに考えた。

このことは真実を発見するのにもっと多くの理由を与えた。なぜならこの象形文字は科学の最大の進歩のための基礎となるかもしれないし、さもなければ時間の浪費になるかもしれないと思つたからだ。そこでアダムスキー氏に手紙を出して象形文字の鮮明な写真を送ってくれと頼んだ。著書に出ている写真は鮮明さを欠くからである。写真を受け取ってからあらん限りの力をこめて各文字から意味をひろい集めるといふ至難の業にとりかかった。年



●ジョージ・アダムスキー（右）とデズモンド・レスリー。1954年夏、パロマー・ガーデンズにて。

月が経過するにつれて次第に意味がわかってきた。それは地球上のなにびとといえどもいたずらのタネとして用いることなど絶対にできないような情報である。その文字は円盤の真相を詳細に伝えたすばらしい知識を示しているからだ。それは母船と小型円盤の推進法、二個の強力な磁気モーター、船体の内外の詳細な設計などを伝えているのだ！

そのモーターだけはまだ地球で発明されていないし、しかも象形文字によって解明されたからには大きな疑問が起こってくる。「その象形文字メッセージはどこから来たのか」。明らかにこの地球上の人間からではない。——それは子供にでもわかる——科学者がどんなに権威を保とうとしてもこの

ことは否定できない。しかも科学者は大衆を迷わしているのである。以上の発見はアダムスキー氏の真実性と別な惑星から来る宇宙船の実際的な証拠を生み出したので、アダムスキー氏の線に沿って、まさしく大衆のものである事実を大衆に伝えたいというのが私の意図である。

政府にせよ何にせよ、いかなる干渉妨害を行うのはもう遅すぎる。この種の妨害は数年前に予測されて、そのため過去に種々の計画が実行され、真実が人類にもたらされるのを妨げようとする運動に対立して世界中で極秘裏に実施されたからである。今や世界はこの証拠を有しているし、それは誤っているどころの段ではないので、アダムスキー氏は断然弁護されるだろう。

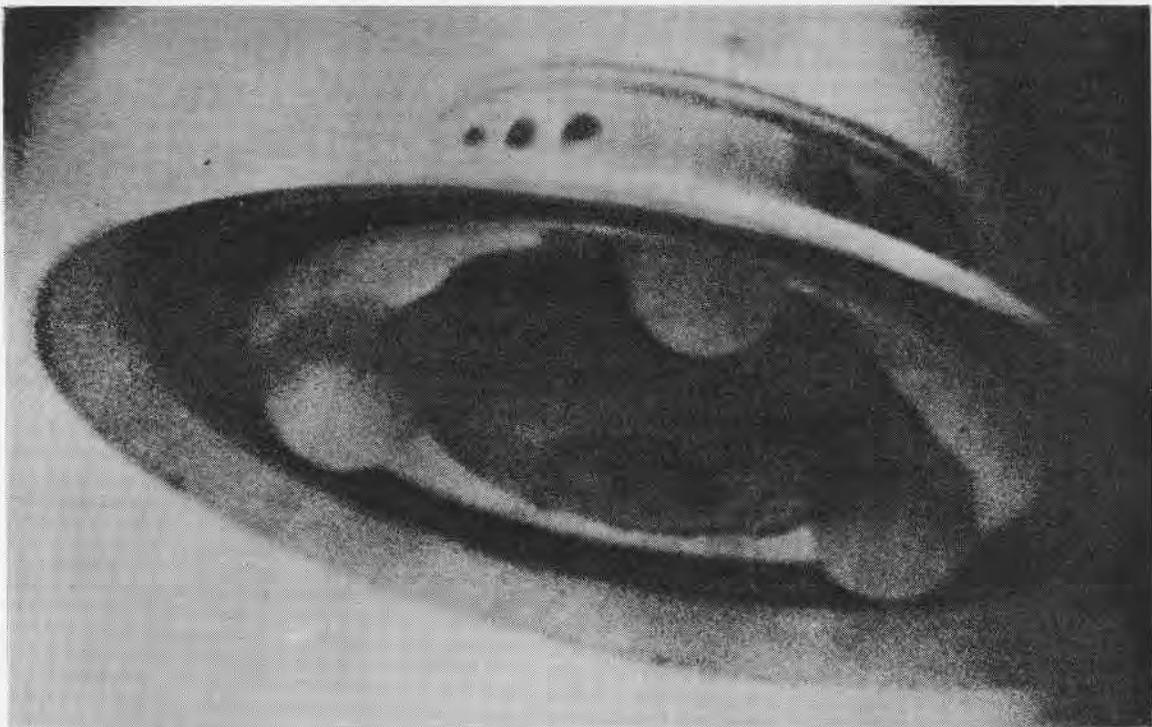
## バーク氏との会見

英国フライング・ソーサー・レビュ通信員

フライリップ・J・ヒューマン

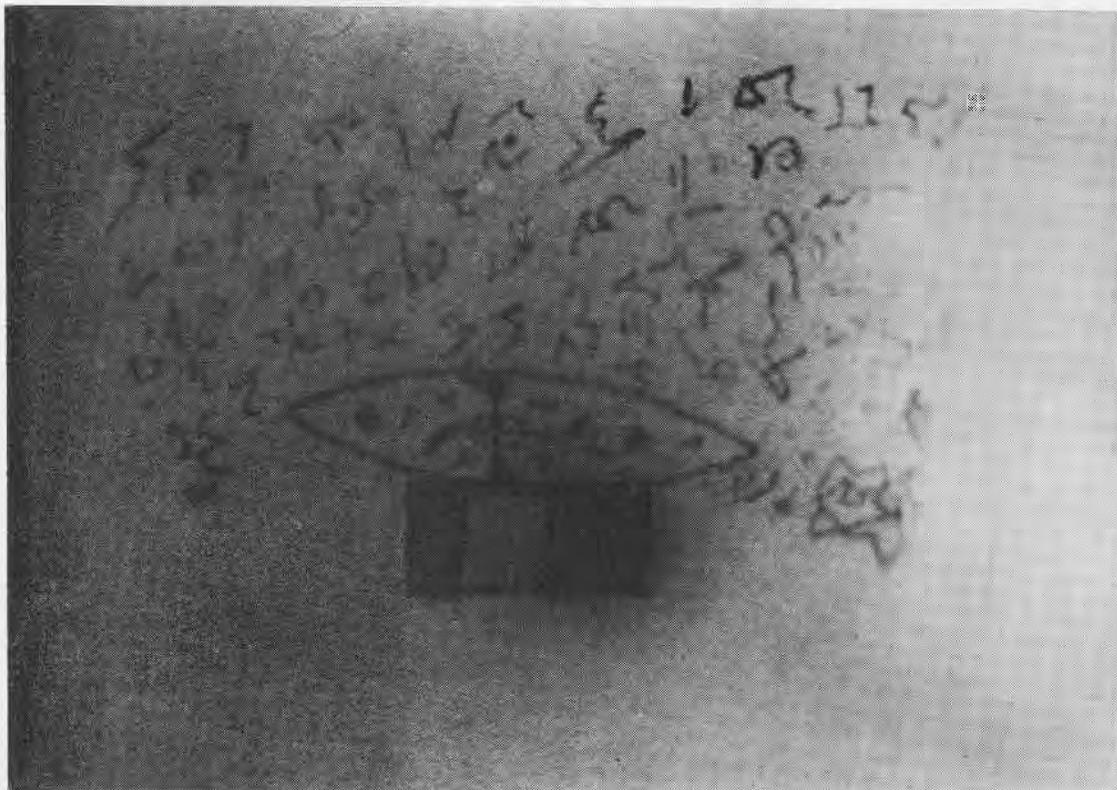
一九六二年四月二九日の朝、別な惑星から来た人間とのコンタクト事件がアフリカの一流日曜紙「シュテム」の大見出しとなった。この事件におけるコンタクティ（宇宙人に会ったと称する人）はヨハネスバーク（注：南アフリカ共和国トランスバール州の商業・金鉱の中心地で南アフリカ最大の都

市）のバシル・バン・デン・バーク氏であった。私はいつもジョージ・アダムスキーを信ずる傾向にあり、このコンタクトも主として問題のアダムスキーの象形文字に基づくものなので、個人的にバン・デン・バーク氏に会うことに熱中していた。二人は文通を始めたが、私は彼の謙虚さ、誠実さ、率直



●1952年12月13日午前9時30分、パロマー・ガーデンズに飛来し、アダムスキーめがけてバックホルダーを投下した円盤。

●投下されたバックホルダー中のフィルムに焼き込まれていた奇妙な文字と図形。この写真はアダムスキーから訳者に贈られたもの。レンズ状図形を文字類の下にして見るのが正しい。



さに感銘を受けた。ついに第一回の会見に相互の都合のよい日がとりきめられた。

一九六二年八月二日、木曜日の朝、会見のためにヨハネスバークのエロフ街を歩いて行くときの私の感情と想念を説明するのは困難である。ある町角に接近したとき一人の背の高いすらりとした親切そうな目付きの男が、流れゆく買物客の列を見つめているのに気づいた。それがバシル・バン・デン・バークだった。そのコンタクト物語が南アフリカで大センセーションを起こし、ついには星々への道を切り開くかもしれない魔法の公式を持っていると称するその男と私は握手した。

二人はすぐに好都合な喫茶店を見つけて静かな場所にすわった。私のカバンの中には一冊のレビュー誌が入っているが、それにはアダムスキーの象形文字と驚くほどよく似た象形文字の刻まれた玉石を北部ブラジルで発見したというマルセル・オム教授の驚くべき記事が載っている(注)これはかつて円盤研究界で非常な話題となった。別掲記事「マルセル・オム教授の不思議な発見物」(参照)。私は相手がふくらんだ折込カバンと奇妙な肩かけカバンを持参しているのに気づいた。彼はそのふくらんだやつを調べてみるという私に渡した。それはアダムスキー象形文字を解読して発明したモーターの

一部分である。その物体は鋼製らしい。私はその重量と「生きているように見える」事実を口に出すと彼は微笑して言った。「それが生きていることに気づいて下さってうれしいです。ほ

ら、ここに磁石(複数)があります！」

それから彼はきわめて詳細にその重要性を述べて、明らかにその製作に関係あるほう大な量の仕事を示すファイ

ルを開いた。そこには数百の三角形のような図面があった。私はいかにもわかったような顔をしてしばしば偉そうにうなずいたが、同時に相手をあわれんだ。科学的なわけのわからぬ言葉がこちらの無理解な耳に響いてくるからだ。私は思った。

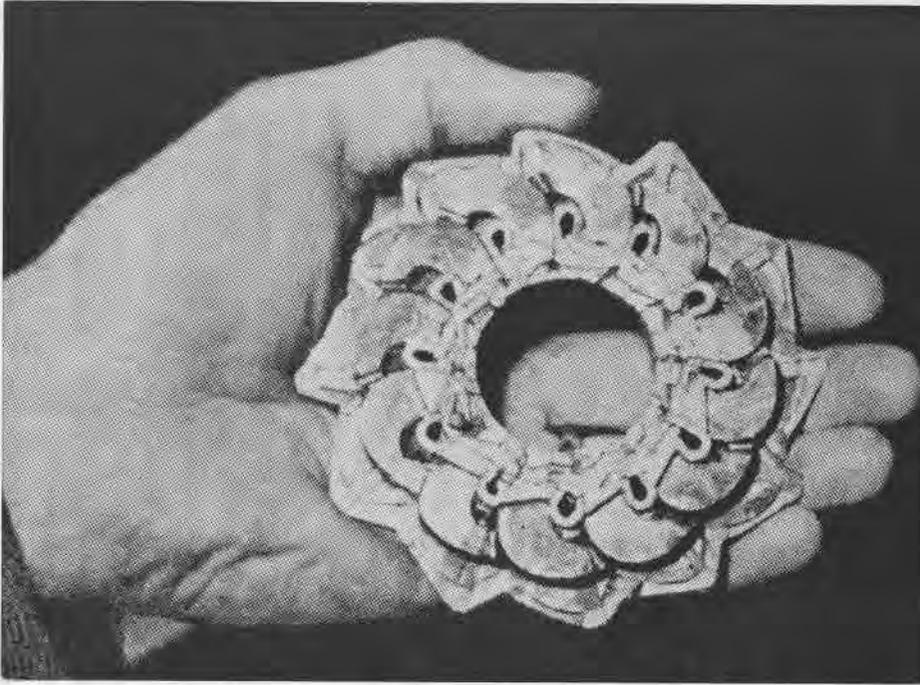
「バシル君、キミは救われないやつだなあ。そんなことあおれには何の意味もないよ！」

彼はわかっていたにちがいない。突然次のように尋ねたからだ。

「それであなただがあれほど見せたいといっていた雑誌には何が載っているのですか？」

ブラジルの象形文字に関するオム教授の写真を見せたとき相手の反応がどうなるだろうかと思った。彼は瞬間呆然となって叫んだ。「こいつは驚いた！ 全く奇怪なことだ！ 図形がさかさまになっている。だがこれをごらんさない！」彼はアダムスキー象形文字の二枚のプリントを取り出した。それは「空飛ぶ円盤実見記」に掲載されている写真をすばらしくきれいにしたものであることがわかった。続いて彼はアダムスキー写真とオム写真とを比較して、多くの類似点を興奮して指摘した。

二人のお茶はもう冷えていたが、それどころではない。「この雑誌を私にゆずって下さい。拡大鏡でもっと調べ



●バシル・バン・デン・バーク氏が金星文字を解読して発明した反重力モーター。

「たいんです」と彼は懇願した。

「喜んでゆずりますよ。だが時間がきた。シュテム誌の人たちを待たせるわけにはゆかない」。同誌も私がヨハネス・バーグに来たことを知っており、我々二人とインタビュースタッフがたつていたので。

シュテム誌の事務所へ急ぎながらバン・デン・バーグ氏はアダムスキー写真の立体的な内容と、拡大鏡で文字を調べるたびに新しい意味を発見した様子を説明した。「与えられた細目のすべては無限であるように思われます。アダムスキーの写真に彼らの意味を含ませることができるのはこの金星人たちはすばらしい科学者であるにちがいない。私は符号を解読するのに昼夜働きましたよ。たびたびやめようかとも思いましたが、こつこつと続けてやると難儀な仕事に成功したのです。まもなくモーターを作りました。すべての細目はそこにありました。最初のモーターが準備できた日を決して忘れません。完全に作動しました。その日は私の誕生日でした。それから「ブラザーズ(宇宙人)」に出会ったのです。」

二人はシュテム社に近づいたのでそれ以上に詳細を聞こうとはしなかった。地下から印刷機の音が聞こえてくる。私は三〇年前に自分が印刷所で働いていた頃を思い出した。当時は罪なき空飛ぶ円盤など知られてはいなかった

のに。

やがて二人は広々とした事務所へ案内された。型どおりの紹介の後、私は非常な不安をもって席についたが、そらはいらものの円盤とそれを操縦する人たちを防衛する立場に立つことを名誉に思った。心配する必要はない。私はまじめな友人たちの集まりの中にいる。彼らも「信ずる人」なのだ。

それは面白い体験で、インタビュースタッフは三時間近く続いた。またオム教授が議論の的になり、私の貴重なレビュー誌がもう一度持主を変えることになった。翌日の日曜日に掲載される記事に写真をつける必要があるからだ。

このシュテム社の人たちが示したように、あらゆる新聞のあらゆる編集者が円盤、特にレビュー誌に興味を示してくれればよいと思う。

うれしかったのはインタビュースタッフのバン・デン・バーグ氏が私の意見や評言を支持してくれたことである。また私はこのおだやかな取敢らない「やり手」がシュテム編集陣から明らかに尊敬されているのに感動した。

数時間後私はバン・デン・バーグ氏をバスまで見送ったが、ついにコンタクトの件については語らなかつた。読者に想像してもらうには彼の手紙を引用するより他に仕方がない。

「現段階ではつきりさせたい点は私とブラザーズとの会見に関して生じたシ

ュテム誌編集者による誤解です。最初のコンタクトではブラザーズはただ象形文字の解説において私を正しい軌道にもどそうとしただけでした。五年た

つてから私は動揺し混乱していたからです。その五年間にモーターはすでに完成していました。二度目のコンタクトは短時間で行われ、第一回目のコンタクトを確証しただけです。うわさとは違って、ブラザーズは自身のスケッチを持参したのではなく、また象形文字の解説を全然助けてはくれませんでした。くり返します。ブラザーズはただ従うべき正しい道を指摘しただけです。私は正道からはずれていて、自分の感情に頼ってブラザーズとのテレパシ

シクな交信力を失っていたからです。それがブラザーズの来訪の唯一の目的でした。それ以来私は多くの解決をなしとげ、自分自身の努力によってばく大な知識を獲得しました。ブラザーズは「感情による妨害」の愚かしさを教えてくれ、以来私は感情に対しては警戒的となり、こうして互いのテレパシー交信経路を確立させたのです。

私の目的はアダムスキー氏の真実性と、あの象形文字はこの世界のものではないことを万人に立証することにあります。私は象形文字のことを隠したまま「あの発明は自分一人で行ったのだ」とウソをつこうと思えば容易にできます。そうすれば地球上のだけ一人

としてそのウソに気づかないでしょう。アダムスキーでさえも！」

私は常にジョージ・アダムスキーを信じていたが、同様にバシル・バン・デン・バーグをも信ずるものである。

バン・デン・バーグ氏が円盤のモーターと同様な重力を遮断する画期的な二個のモーターを発明したのは一九六二年頃のことと、それは金星文字を解読し、更に金星人とコンタクトしてアドバースを受けたためであるといわれる。このモーターは磁石(複数)で作動するもので、外部からの電気エネルギーは必要としないという。

「あまりに簡単なので、『こんな物をどうして七歳の子供でも思いつかなかつたのだらう』と言って科学者たちは驚くだらう」とバン・デン・バーグ氏は述べている。彼はこれを一九六三年に米国へ持って行き一八カ国の科学者団に公開する予定であったが、その前に謎の失踪をうけた。何者かに拉致されたという噂もあるが、詳細は不明である。

金星文字ネガがアダムスキーに与えられたときの様子は Flying Saucers Have Landed (空飛ぶ円盤実見記)に掲載してあるが、その部分を完訳すれば次のとおりである。カッコ内の字句は訳者が加えた。(訳者)

(宇宙からの)訪問者が私の(写真の)原板を返してくれるという約束のため、私は絶えず警戒の状態を続けていた。私は望遠鏡をパロマー・ガードンの台地にすえた。そこははるか彼方まで景色が見渡せる場所の一隅で、広大な海が展開するが、これはパロマー山の斜面の広い台地なればこそ望見できる風景なのである。

一九五二年二月二三日(注)砂漠で最初に宇宙人とコンタクトしてから約三週間後の朝、頭上に響くジェット機の轟音で付近に何か起こったのではないかと思った。ずっとむこうに閃光が見えたが、すぐ消えた。「むこうで何かあったぞ。砂漠で見た円盤が私の(ネガの)ホルダーを返しに来たのかもしれない」と私は居合わせた者たちと言った。

ジェット機(複数)が円盤を追い続けていくのか、それとも円盤はジェット機が姿を消すのを待ってもう一度現れるつもりなのだろうか。

九時頃にまた空中に閃光が見えたので望遠鏡をそれに向けた。空にはジェット機の姿はなく、もし円盤が現れるつもりならば安全に来られるのだがと思った。

間違いはなかった。じっと見つめていると、円盤がこちらの方へ音もなく滑るように飛んで来るのが見えた。朝の太陽を受けてさまざまの明るい

色光をきらめかせるニジ色のガラスのような機体! うっとりとして私は見つけた。からだは緊張に波打ち、期待で背筋が震える。とうとう来た! まるで円盤の操縦者が私がここで待っているのを知っていたかのようだ! あたたかい希望の喜びが全身に満ち溢れた。「あれは私の友だ。再び彼と会えるのだ! ここへ着陸するだろう。きつと……」

しかし期待が大きすぎた。私の所から六〇〇ないし九〇〇メートル近くの谷から九〇ないし一五〇メートル上空で停止してじっと滞空するように思われた。

今度こそはすばらしい写真を撮ろうと、極度の意志力を用いて興奮を抑えながら私はすばやく二枚の写真を撮った。続いて、円盤が近すぎるのでこの位置から一度に円盤の全体を写すことが不可能なのに気づいて、(望遠鏡の)接眼鏡に取り付けたカメラを廻して(つまりカメラを望遠鏡に付けたまま画面を変えて)まだ停止している円盤を更に一枚撮った。四枚目を撮影したとき円盤はまた動き始めた。

あとで現像してみると最初から三枚は鮮明に撮れていたが、四枚目は動いたので、ぼやけたけれども悪くはなかった。

接眼鏡上のカメラの位置を変えているあいだに目測とあたりの距離との比

較によって円盤の大きさを慎重に計ってみた。砂漠にいたときは直径六メートルと思ったのに、今度は径約一〇メートルあることがわかった。私が測定し得た限りでは高さ四・五ないし六メートルだった。

私から三〇メートル以内近づいたと思われたとき、丸窓の一つがスッと開くや一本の手が伸びて、一月二〇日に宇宙の友が持つて行ったのと全く同じホルダーが地上に落とされた。それが放たれて円盤が頭上をすぎる直前に手が軽く振られたような気がした。

私はホルダーが落下して地面にとどいたとき岩にぶつかるのを見た。歩いて行ってひろい上げると、岩にあたった箇所が少しへこんでいるのが目についた。ポケットからハンカチを出して注意深くひろって包んだ。内部に何かあるかもしれないし、外部に指紋があるかも知れないので、きずつけないようにしようと思ったからだ。

そのホルダーが返って来たことはあの円盤が砂漠で見たのと同じものであることを立証したし、窓から手が振られたことにより、ホルダーを落とした人は私が(砂漠で)会ったのと同じ人であることを暗示していた。

得意満面の私を想像されたい。またも私は意識が高まって、一時に二つの世界にいるのだという自覚が起こるのだった。頭上を通してから円盤は台

地の小さな峡谷を越えて北方の山々のふもとへ向かって飛んで行った。

樹木の頂上よりも低く降りながら円盤は台地の上部にある井戸と一軒の小屋にあまり接近したので、私が前もって警告しておいた人々によって目撃され撮影された。円盤が小峡谷を越えるには数秒を要しただけで、すでに台地を飛び越えていた。しかしなお彼方の木々の上を低く、前景の山々のふもとに近づいて飛んで行く円盤をはっきりと見ることができたが、やがて東方へ急速に飛行し続けて青い朝もやの中に消えていった。

久保田八郎訳

### 宇宙問題探求者必読の書

★★なぜ空飛ぶ円盤は来るのか★★

フレッド・ステックリング/久保田八郎訳  
好評発売中! ￥650 円120

宇宙人から伝えられた人間の生き方を詳述  
テレパシー ■ 生命の科学

ジョージ・アダムスキー/久保田八郎訳

￥400 円120 ￥550 円120

文久書林

東京都文京区白山1-29-12  
振替・東京2521 Tel. (813) 2495

# マルセル・オム教授の 不思議な発見物

南米の奥地にあつた奇妙な古代文字の謎 常岡理太郎



マルセル・オム教授

オム教授の名が円盤研究界に急速に浮かび上がってきたのは、教授が円盤に関心を持つようになったからではな

年をへだてて同じような紋様が存在したという事実は、アダムスキーの体験の真実性を裏付ける有力な証拠となるように思われる。

オム教授は一八九七年にフランスで生まれた。アルジェリア北部のアルジュエ大学で考古学を学んだあと、母校でアラビア古典を教えていたが、その後ブラジルへ渡ってサンパウロに居住するかわら各種の科学団体のメンバーとなり、同市の「アメリカ人博物館」の館長となっている。その前にはアメリカ大陸で一五年間をすごして、地中海沿岸諸国の古代の遺跡を調査した。

また教授はピグミー族も研究し、サハラ砂漠の有名な岩石彫刻紋様等も研究した。一九四〇年にはアメリカ、ハイチ、ベネズエラ経由でブラジルへ行き、ついにそこへ落ち着いて、南米の考古学センターからアマゾン河流域の広大な地域を探索するように命ぜられた。そこで彼の輝かしい探検家としての一大業績が打ち立てられることになる。実際彼はブラジルの大未開地の神秘的な古代の遺物を組織的に発見調査した最初の科学者であるが、彼自身はこのブラジル北部一帯を、一万余年前に海中に没した失われた大陸「アトランチス」の一部であると確信していたのである！

さて彼の探検に移ることにしよう。一九四九年の秋、オム教授は夫人、愛

大の「マルアイ」その他数名の従者とパーティーを組んでブラジル北地を目指して探検に出た。もちろんこれが最初ではなく、この他にもアマゾン河流域一帯を踏査しているが、これはそのなかの一部分である。場所はブラジルの最北端、ベネズエラと英領ギアナとの国境地帯で人跡未踏の秘境である。

大体一口にブラジルといっても非常に広大な国土であって、人跡未踏地は至る所に存在する。教授一行の前進路には多大の困難と危険が待ちかまえていたが、愛犬のマルアイが再三教授を危機から救出して事なきを得るということがあった。目的地はブラジル北部の奥地とはいふものの、直線距離といえど北方の英領ギアナの海岸町ジョージタウンから五〇〇キロばかりの、アマゾンの支流であるブランコ川の上流のゴチンゴ川流域地帯である。このあたりは一帯に平野であるが、北側にベネズエラからギアナにかけてパカライマ山岳地帯が巨大な壁をなしている。北側からの侵入は容易ではない。次頁の図でわかるように、北端のゴチンゴ川流域にはセルラ・ド・ソル山（太陽の山の意）が二五〇〇メートルもあり、その他一〇〇〇メートル級の山が沢山あるからギアナ側からは簡単に入れないだろう。

図中、点線で教授一行の探検ルートが示してある。

く、ブラジルの秘境を探索した際にアダムスキー問題と重大な関係のある不思議な古代の文字と図形を発見したからである。この事件はかつてフライング・ソーサー・レビュー誌にも報道されたし、各国の円盤研究界でも話題となり、論議の的となったが、一万余年



ム教授自身はこれを「アトランチス文明の石の書物」と呼んでいる。すなわちこれは失われた大陸アトランチスの巨石文化の遺跡の一部であって、現在の文明とは全く関係のない物であると教授は考えているのである。

このペドラ・ピンターダへ来たとき豪雨に見舞われて一行は岩の内部へ入り込んでここで一夜を明かすことにした。一同が通路を通っているうちに偶然発見したのが「埋葬の洞窟」と「骸骨の洞窟」である。この後者においては多数の骨が発見された。ここで骨と共に夜を明かしたのだが、身を横たえている教授の眼前に多数の亡霊が出現して「血のいけにえの踊り」を演じたという。まことに恐怖すべき一夜であったと教授は述べている。

岩の内部の探険は興味深く、あちこちに小洞穴群や赤い色を塗ったドルメン(二〜三個の石の脚の上に平たい石を載せたもの)があり、儀式に使用したと思われる演壇も数箇所あった。明らかに太古の文明の人間が聖なる場所とした形跡が残っている。

古代の金星文字か

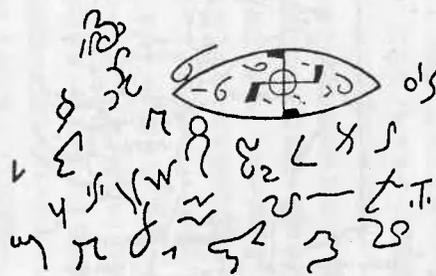
さて、マルセル・オム教授のこの探険行における重要な発見物はこのペ

ドラ・ピンターダそのものではなく、

ペドラのすぐ隣りにあった小さな奇妙な紋様である。これはある石器に刻まれていたもので、多年風雨にさらされてかなり摩滅していたために教授はさほど気にとめなかったが、一応参考資料として写し取ったのである。しかし後になってオム教授みずからアダムスキーの最初の著書「空飛ぶ円盤美見記」を読んだとき、飛び上がらんばかりに驚いた。なんとそこには教授が持ち帰った紋様とほとんど同じ種類の紋様と図形が金星人から与えられたものとして掲げられていたからである。この点について教授は「私はアダムスキーの書物を読むまでは、あの紋様についてほとんど関心はなかった」と述懐している。アダムスキーが「空飛ぶ円盤美見記」を出したのはオム教授が「太陽の子ら」を出す前であったから、アダムスキーがオム教授の発見を知るわけではない。第一、両者共互いに未知の人で、事前に連絡が行われた事実はないのである。これはアダムスキーの金星人メッセージが事実であったことを立証する重要な傍証であって、しかも「いずれ地球の土中からこれと同じような紋様の発見が報告されるだろう」と語った金星人の言葉を裏付けることにもなる。そして一万四千年の太古にも別な惑星の人間がこの地球に

のい、ある！

アダムスキーが金星人からフィルム上に記されたメッセージを受け取った模様については本誌の別掲記事「私は金星文字を解読した！」に正確な訳が

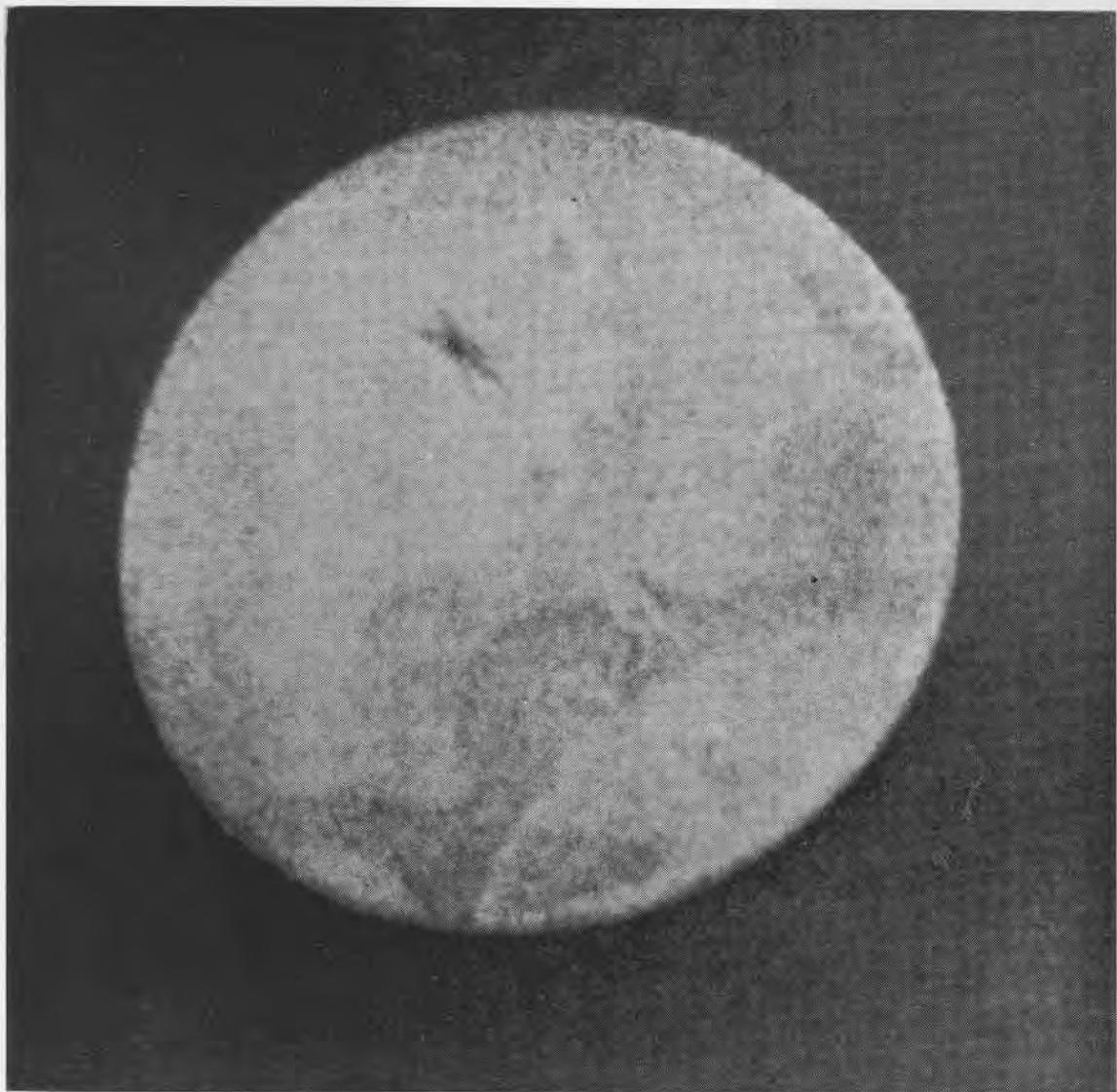


出ているので併読されたい。オム教授の紋様(右の図)とアダムスキーのそれとは象形文字が完全に同一ではないが、レンズ形の断面図状の図形とその中に描かれているスワスチカ(まんじ)は、フリーハンドで描かれているために多少のゆがみはあるにせよ、同一である。しかも両方共スワスチカの

中心部に小円が画かれている。

前述のとおりこの事件は円盤研究界で大問題となった。そして疑う人のなかには、アダムスキーとオム教授がグールになって打った芝居であると言って非難する人もいた。これに対してはアダムスキーもオム教授も全く何の反論もしていない。ただ教授の方が積極的にアダムスキーの体験の真実性を支持しているだけである。そのことは過去のフライング・ソーサー・レビュー誌に大きく掲載された。

オム教授によると太古において空を飛ぶ機械を用いていた偉大な文明がこの地球上に存在したという。ジャイアント・バード(巨大な鳥)を持つ人々がこの地上に存在した時代があった。その巨大なシンボルは今なおペルーやアンデスの高地に刻まれていて、翼の両端間の距離が一五〇メートルに達するのがある。これは非常な高空からではないと見られない。平たい地面または岩に刻まれたこのシンボル類は、宇宙旅行や空中戦をやった人々のシンボルとみなしてよいだろう。「私は大西洋沿岸の国々の口碑伝説や伝承詩などを研究した。またベルシヤ人、インド人、メキシコ人、ペルー人のそれらも研究したが、すべて巨鳥の伝説が確実に残っていて、それらは空中で火を噴いて大地を破壊しながら絶滅してしまつた」と教授は述べている。



## ●世界最古のUFO写真

●1883年8月12日、メキシコのサカテカス天文台で太陽の観測と写真撮影をやっていたM. ボニリャという人は、多数の小物体が太陽面を横切るのに気づいた。するとそのうちの1個が停止したのでこれを撮影すると、ふたたび他の物体群に加わった。彼はメキシコ市とプエブラの天文台に電報を打って現象を知らせたが、回答が返ってくるまでまだ不思議な現象は続いていた。返電によると物体群は両天文台にも見えたが、太陽面からかなりの距離があるようだという。このパララックスのためにボニリャは物体群が地球に近い空間を飛んだものと断定した。写真は1個の物体が停止した瞬間。中央の黒い本体から周囲に放射状のものが出ている。

★1974年2月21日の  
ラジオ・インタビューで★

# ●フランスの大臣、UFOを語る

ゴードン・クレイトン

これは、1974年1月28日（月曜）から3月22日（金曜）にかけて39回にわたってフランス・アンテルが放送したUFO研究シリーズの中で、1974年2月21日午後8時半、ロベールギャレイ国防大臣（当時）に対してフランス・アンテル記者ジャン＝クロード・ブーレが行った独占インタビューのテープ録音を翻訳したものである。その内容は翌日発行のフランス・ソワール、ル・パリジャン・リペレ、ローロール、ル・フィガロなどの各新聞に大見出しで掲載された。しかしこの重大ニュースを、イギリスのマスコミは全く無視し去った。

ジャン＝クロード・ブーレ「大臣、このたびはフランス・アンテルに画期的なインタビューをお許し頂き、またとに有難うございました。フランスの国防大臣がUFO問題に関し、御意見を発表頂くのはこれが最初と存じます。まず、聴取者の質問にお答え下さるための情報——つまり、このような機会がなかったら私たちが知らぬままに過ぎてしまうような情報を、大臣はお持ちなのかどうか、それからお伺いしたいのですが」

大臣「さあどうでしょうか。常に関心はありましたが、私がこの問題に係した時間は比較的限られており、したがって、本シリーズの放送中どんなことが言われているのか、そのすべてを知る立場にはありませんが、国防省の内部でも一部の人は本シリーズを熱心に聞いていることはよく知っています。私は、これらの現象に対してはきわめて広い心で接しなくてはいけないと深く感じるものです。説明のつかぬことを説明しようとするということにより人類は相応な進歩をとげました。さてUFOという言葉のもとに私たちが収集してきたこれらの視覚現象（私からはそれ以上は言えません）に関して、私たちの理解をこえた現段階ではかなり説明のつかぬものであることは確かです。

今日でも説明のつかぬもの、または

貧弱な説明しか与えられていないものがあるということは反駁できぬ事実であり、そこまでは申し上げても差し支えないでしょう。

これら未確認物体出現の目撃報告を収集し研究する目的のため、一九五四年、国防省内に一つの課が設立されました。私自身も一九七〇年までのこれらの目撃報告を、ある数量（約五〇例くらい）までは目を通しました。そのなかには、最も早いもので一九五三年一月二〇日、ヴィラ・クーブレの第一〇七空軍基地のジャン・ドハリ中尉の目撃例もありました。憲兵隊からの報告もあります。また、操縦士からの報告も、空軍中樞部の指導的地位にある高級将校からの報告もあります。どれもみな、細部まで不安になりそうなほど一致しているのです——みな一九五四年の出来事です。

ですから、これらの現象に対しては常に広い心を持ち続けなくてはいいなと思います——つまり、頭から否定するような態度ではないということとです。過去において私たちの祖先たちは、現在のわれわれにはほんの初歩的にしか思えない事でもいっさい否定してきました。たとえば、生物学に関する現象はいうにおよばず、ビエゾ効果、つまり静電現象などに対してもそうでした。実際のところ科学は、われわれがある時点において自分たちはあ

る現象について何も知らない。何も理解していないということを認めるときにはじめて進歩してきたのです」

ブーレ「大臣、ミラージュ・ジェット機がフランス上空でUFOを追跡したことがございますか」

大臣「私が目を通した相当量の報告を基礎にして言うなら、フランスではありません。しかし、レーダーが捕えたことは何度かあります。時に一九五〇年代にアキテーヌでレーダーが捕えた物体のことですが、一〇分間にわたってレーダーに映像があらわれ、当時は正体不明とされましたが、これは現在でも正体不明のままです。その反対に当時は不思議だと思われていたレーダーの映像が、あとになっていわゆる干渉波と判明した例も何度かあります。それにもかかわらず、すべての可能性を考慮しても、現在まで説明不能とされているレーダー像もあります。同様の現象は他の国でも報告されています。それはよく知られていることですね。米国でもたびたびありましたし、最近ではトリノでも起こりました。しかし、あなたの質問にもっと正確にお答えするならば、他国の状況と比較すればフランス空軍操縦士からのUFO目撃報告の数は割に控え目なものです。にもかかわらず、注目すべき例はやはり存在します」

ブーレ「大臣、本件に関して外国の

軍事団体とは連絡をとっていらっしやいますか」

大臣「連絡はしておりません。一九七〇年いろいろ、すべての報告はGEP A、空中現象調査会議に送付しております。何か異常な事件が発生したときはかならずそうするのです。操縦士からの報告もありますし、憲兵隊による調査もあります。事実、一九七〇年いろいろ空軍は、UFOは何らの危険をも代表しているものではないという見解を持つようになりまして——ですから科学的にこれらの現象を研究することには何の問題もありません。これはCNE S (国立宇宙研究センター)の仕事だと思えます。そこではポエール氏のような人たちが、私たちから見ても実に面白そうな研究をしているのです。ですから現在はまだ私たちがこういった問題に直接関係してはおりません。しかし、くりかえして言いますが何か不思議な事件が起

るたびにその報告はCNE Sに送られます。CNE Sは国全体にとっても重要な仕事をしているのです。」

ブルー「大臣、それでもやはり、フランス上空で起こる未確認宇宙現象は国防省筋にとっても重大関心事ではあるわけでしょう」

大臣「もちろんですとも。国防省は大いに関心を持っています。ですからこの問題を研究することにより何らか



●インタビューに応じるロベール・ギャレイ大臣 (右側)

の相互関係を発見しようと努力しているのです。私個人としては、たとえはポエール氏が述べているあの現象にも興味を持っています。つまり、磁気変化とUFOの出現がお互いに関連しているという現象です。いつの日か、それは単なる騒乱現象にすぎず特別の物体の出現とは関係ないということが解明されるかもしれません。しかし現在のところは、われわれの理解をこえた何物かがあることを認めざるをえないのです」

ブルー「もし軍用レーダーがUFOをとらえた実例を科学者に公開せよと要求されたら、大臣は何とお答えになりますか」

大臣「防空用レーダーが異常を発見すれば、それを科学者に連絡していいないという理由はないでしょう。私たちは現実に行っているのですよ。空軍や憲兵隊からの報告はすべて私のもとに集まります。私たちはそれを専門の科学者に直接に送付するのです」

ブルー「大臣、いま憲兵隊とおっしゃいましたが、このシリーズでフランス・アンテルは憲兵が調査を行って到達した結論について何度か放送したことがありますが——注目にあたいる結論です。円盤が着陸してその付近に宇宙人がいるのを見たと言撃者が報告しますと、それは事実と相違ないと憲兵

が断定するのはよくあることなのです。大臣ご自身はこのことをどう思われますか」

大臣「そうですね。もちろん私自身はもっと慎重でなくてはなりません。とはいえ、このことははっきり申し上げねばなりません。つまり、空軍や陸軍の憲兵、それに調査の責任を持つ憲兵隊から多数の報告が送られてきて、私たちがそのすべてをCNE Sに回送する状況をフランス・アンテルの聴取者が自分の目でごらんになれば、事態が重大であることはおのずから明らかになるだろう、ということですよ。

憲兵隊についての私の見解は、彼らは真剣に仕事をしているのだからということですよ。彼らはでたらめに報告を書きあげるのではありません。もしそのようなでたらめな報告が一つか二つでもあれば、憲兵隊の信用は失われたと考えて頂いてよろしい。事実、これらの報告の数は莫大なもので、内容もさまざまです。もちろんまだ、どれもこれも断片的なものばかりではあります。UFO問題に関してはきわめて広い心を持ち続けることこそ重要なのだということだけは申し上げておきたい。目撃者の真剣さを疑うことはできない一方、同時にそれからわずかなりとも結論を引き出すことは、現在ではまだ早すぎることです」

### 「大宇宙とUFO展」開催

#### ●福島のデパートでにぎわう

世界の関心を集めているUFO（未確認飛行物体）のナゾを探る「大宇宙とUFO展」が一九七五年五月二日から福島市米町の山田百貨店6階催し場で行われた。

福島民報社が福島市教委、福島テレビの後援、山田百貨店の協賛を得て11日まで開かれ、早くも初日から市民でにぎわった。

会場は「大宇宙」と「UFO」の2コーナーに分かれていた。大宇宙では地球人の宇宙史、大宇宙の中の太陽系、星の一生などパネルや模型を使い、宇宙をいろいろな角度から説明しており、小学生でもすぐわかるようになっている。

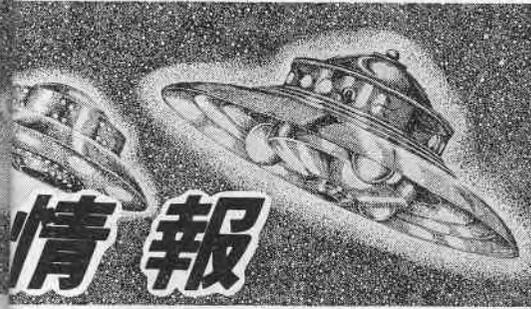
また、UFOコーナーにはUFOの説明から空飛ぶ円盤の実体図。模様の空飛ぶ円盤と古代人がセッティング、神秘と夢の世界が描き出されている。中では人場者の関心を集めているのは「私は空飛ぶ円盤を見た」で、国内外の空飛ぶ円盤の写真を思わず足を止め、くぎ付けになっている。入場料は、大人200円、小人100円だが、第一回山田祭を記念し大人、小人も50円。

### 静岡県藤枝市で UFO出現!

#### ●山の部落は目撃談でもちきり

「あなしたも見た」「わたしも見た」藤枝市葉梨字下之郷地区では、いま空飛ぶ円盤(UFO)の目撃談でも

# 情報



ちきり。20人近い目撃者がいて、数回にわたっているのだから「過熱」するの無理はない。目撃した主婦らの話を総合すると、第一回の出現は、一九七五年四月二十四日午後7時頃。葉梨小学校付近から西の方角(仰角5〜10度)に黄色の「球型物体」が現れた。光は折強くなくなり、弱くなったたりしながらゆっくり飛行したという。

2回目は27日。この日は夕方と夜の2回にわたって目撃された。ことに変わっていたのは主婦Mさんの目撃。Mさんの話だと、同日午後4時半頃、洗たく物を取り込みながら西の空を見上げると、中空にいわゆる円盤型の物体が静止していた。色は銀色で大きさは満月ぐらい。2〜3分目撃したが、いったん目を離したら振り返ったときにはもう見えなかったという。「おそなえモチを横から見た形に近く、真ん中にひさしのようなのが付いていた」とのことです。まさに円盤そのもの。

その後も1日、2日とたて続けに目撃した人があり、気味悪がって警察へ通報する人もいるほど。夜の目撃時間は7時から8時半頃、西方の一定空間に限って出現するなど単なる自然現象の誤認とは考えにくい面がある。円盤が現れると星が見えなくなり、円盤が山のかたに消えてしまおうと再び見えるようになるというミステリーじみたおまけまでついている。

(一九七五年五月四日付、静岡新聞)

### 「ふしぎな世界展」好評

#### ●山形のデパートで展示される

「ウワー、空飛ぶ円盤の写真だ」。山形市七日町一丁目の大沼デパートで、空飛ぶ円盤や心霊写真など、約100点を集めた「ふしぎな世界展」が一九七五年五月二日から12日まで開かれ、チビッ子たちばかりか、子供にせがまれてやって来た大人たち

にも好評。

同展では、心霊写真や円盤の写真のほか超能力があるかどうかテストするランプを変形させたESPカードや、リングからつるした振り子指でもって「イエス」「ノー」の2本の直線の交差点の上にかざし、質問する振り子が揺れて答がでる「魔法のふりこ」などが展示されている。つめかけ人たちは、結婚や就職、金銭運など思い思いの願いを込めて振り子をかざし「当たった」と喜んだりガッカリしたり。昨年以来のオカルトブームを反映して、この催し成功をおさめたようだ。

(一九七五年五月五日付、毎日新聞山形版)

延岡市上空に「怪光体」浮かぶ

### ●真珠のような物体がフワフワと

「あつ! UFOだ」。一九七五年五月十二日午後6時過ぎから同7時半頃にわたって、延岡市上空に真珠のように光る物体がフワフワと浮かんでいたからさあ大変。延岡市、いや日向市でも上を下への大騒ぎ。「ありやなんじゃ」、空を見上げて首をかきしげる市民。おそるおそる日向だけでも、万を数える人があやしく光る物体を見たはず。なかには望遠鏡でのぞいたり、カメラに収めた人もいた。おかげで、延岡の中心街、中央通りから幸町にかけて車がジュズつなぎ。チビッコからお年寄りまで怪しい光体にキリキリ舞いさせられたが、夕刊デイリー新聞社は問い合わせ電話の殺到に悲鳴をあげた。

夕刊デイリー新聞社に第一報がはいったのは、12日夜6時35分。夕刊デイリーさんですか。一読者です。が、頭の上に向か光る物体がありま

それから1分とたたぬうちに、けたたしい電話の音。全回線がかかってきた電話でふさがり、応待にテ

ンヤワンヤ。その間に編集専用電話を使って気象台、航空自衛隊基地、東大宇宙研究所、宮崎空港、アマチュア天文家、はては鹿児島内之浦、種子島まで確認のダイヤルを回してみが、「さあわかりませんなあ」と、つれない返事。

ならばできるだけ近くで見てやれと、編集局員の1人が愛宕山に登った。編者は「わからん」のただひこと。電話は容赦なくかかってくるが、どこに問い合わせてもナゾの物体の正体がかめないでは、もうどうしたらいいかわからなくなってきた。

何千回とあつた読者からの電話がまちまちで、たしかに信用していいかわからないが、たしかに銀色に光る物体があったのはまぎれもなく事実だ。延岡市旭中学校では、先生と生徒が口をアングリとあけて見たとかどえらい騒ぎになったらしく、東海では4つの点に、船倉町では、銀色のなかに黒い斑点があつたなどさまざま。

ある人はUFO、ある人は停止人工衛星だ。色も銀、紫、黄、赤と食い違う。夕刊デイリー新聞社で観測した範囲では、最初に見たときはジュエリングが光ったような感じで、大きさは点というより、5000メートル上空を飛ぶジェット機ぐらい。角度は天頂より約5度南だから、ほぼ真上。午後7時20分頃には夕日をおびてか、オレンジ色になり、それから20分後には闇につつまれてしまった。

こうしたなかで熱心に観測をつづけた人もいた。延岡市瀬の口町、カイ写真館経営、甲斐義啓さん(35)は、プロのウデを生かして、午後6時40分から7時20分まで、連続13枚の写真撮影、それを1枚分の大きさに拡大して焼き付けた。その

写真を見ると、ちょうどカメラリを正面から見たような形で、これは別項の延岡市中川原町の松田信一君(延岡商3年)の写真のスケッチとほぼ一致している。写真の3枚目と9、10、11枚は3秒間開放して写してあり、光体はわずかだが動いていることがわかる。

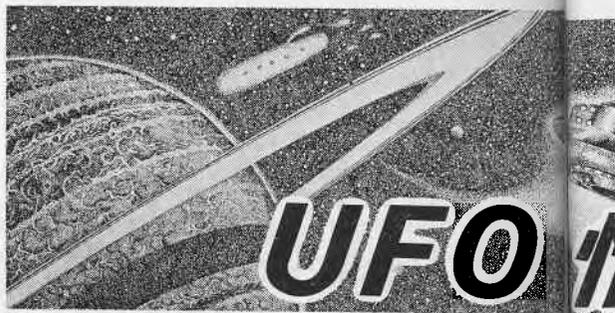
数ある話を聞いてみると、まず星ではないことはいえる。なぜなら午後6時半頃は日没前であり非常に明るいこと、あのくらい明るい星では月ぐらいの光度をもっていないといえぬ。日没後に西の空に見たと見うかがふりがあるが、あれはマイナス4等星という「宵の明星」。つまり金星である。

これは延岡市祇園町のアマチュア天文家、志木和博さん(28)に確かめたぐらいで、上空にあがれば風で押しながされるし、次第に小さくなって見えなくなるはず。人工衛星説も、上空がかなり明るかつたので、大ききなどから判断すると疑問点が多すぎる。飛行機やヘリコプターもあやしい。第一、あの時間に飛行機が延岡上空を飛んだ事実がない。すると、あの物体はいったいなんだろう。わからない。

◎こちらからは確認できない。延岡から問い合わせがきたが、人工衛星ではない。昼間肉眼では見えないからだ。そして人工衛星なら天空を横切るのに約10分間かかる。それくらいスピードだ。だから延岡市上空の光体は人工衛星だとは考えられない。

(鹿児島県内之浦・東京大学鹿児島宇宙空間観測所)

◎人工衛星を積んだロケットの打ち上げは9月の計画。そんな飛行物体はこちらからは見えない。人工衛星は電波で追跡するのだから、夜でも肉眼では確認できない。ましてまだ明るいうちには見えるはずがない。「光体」の正体? 想像がつかませ



(宇宙開発事業団  
種子島宇宙センタ  
1村尾忠義所長)

◎延岡から電話が  
あった。航空自衛  
隊の新田基地に問  
い合わせていたこ  
とだ。気象関係係  
員の話ではあれは  
星ではないといっ  
ている。光が激し  
く消えたり現れた  
りしている。何か  
サッパリわからない。

(運輸省宮崎航空  
事務所)

①問題の時間にレ  
イダーには映っていない。もちろん  
肉眼でも見えなかった。延岡市上空  
なら、普通飛行機が飛ぶ20000  
メートルの高度までの飛行物体だと  
すればレイダーはキャッチするし、  
その飛行機がフライトプランになか  
つたら緊急発進することになってい  
る。気球でも電波反射板が大きけれ  
ば映る。こちらにも問い合わせられ  
て10本前後かかってきたが、詳し  
い情報を集めている状態だ。人工衛  
星はレイダーには映らない。

は、レイダーには映らないが現象  
だけはレイダーに映らないので、そ  
れは考えられる。

●(航空自衛隊新田基地防衛部)

◎光弘君11旭中学校でクラブ活動が  
終わった時だから6時過ぎ頃、生徒  
が見つけて大騒ぎになった。理科の  
先生も双眼鏡を出していた。僕も双  
眼鏡のみたら、夕陽形で白色に光  
っていた。兄が天体望遠鏡を持って  
いるし、星座の観測をしていたこと  
もあってすぐ連絡した。

信一君「UFOの存在なんて頭か  
ら信じないほうだ。しかし、あの光  
りかたは星ではない。中学生の時3  
年ほど観測していたので、星のこと  
はだいたいわかる。すぐに45倍の

天体望遠鏡を出してみた。7時10分  
だった。丸い形で一部分に2本大き  
くもりあがっている筋が見え、周囲  
に黒いレンズを交えて観察してスケ  
ッチした。87倍ではもろあがった  
部分から三方に盛りあがったすじがは  
つきりみえた。周囲の黒い点もハッ  
キリした。1.14倍の望遠鏡に映っ  
た大きさは約8ミリ。相当に低いと  
ころにあったかと思う。それに望遠鏡  
に映る像が少しずつずれていった  
で、南の方へ少しずつ移動していた  
と思う。ジュラルミンのようなま  
るいボールだった。音はしなかったが  
金属の物体であることは確かだ。

(松田信一君18歳、光弘君14歳兄弟  
延岡市三軒家)  
(一九七五年5月13日付、夕刊デイ  
リー新聞)

市民総出のUFO騒ぎ

●延岡市上空に輝くナゾの発光体  
「空飛ぶ円盤だ」「宇宙人の来襲」  
一九七五年5月12日午後6時過ぎか  
ら同8時にかけて、延岡市内では上  
空に輝くナゾの発光物体をめぐり、  
市民総出のUFO騒ぎ。

見ると、聞く人によって時間や形  
はさまざまだが、話を総合するとナ  
ゾの物体は午後6時10分頃から8時  
にかけて、上空南より出現。色は  
まばゆい白色光からオレンジ、ある  
いは黄色に変化。形は円形形のク  
ラゲ型から長方形、だ円形、眼鏡型  
などいろいろ。

町のアマチュア天文家の説明では  
星ではないらしく、かといってジェ  
ット機の類でもないらしい。結局、  
この不気味な飛行物体、正体は不明  
のままだが、チビ子から老人、タ  
クシュー運転手、パイロットさんま  
までが、空を見上げて「ああでもない  
い、こうでもない」と思わぬコミュ  
ニケーション……。  
(一九七五年5月14日付、宮崎日日

新聞)

「UFO観測隊」を結成

●京都市の小、中学生グループ  
ナゾの飛行物体「UFO」の正体  
を、ぼくたちの手で突き止めよう  
京都府右京区梅津上田町の小、中  
生グループ6人が、このほど「UFO  
おびっこ観測隊」を結成、「ぼん  
まかい連日」といふおとなたを  
しる目に連日、熱心な観測を続けて  
いる。これまでにカラーを含め数10  
枚のUFO写真も撮影、大学ノー  
トの「観測日誌」も2冊目になる。

「同志社大未来科学研究会」も全  
国的な「網の目観測隊」の1つとして  
高く評価している。  
「おびっこ観測隊」は四条中1年の  
山田信司君(12)ら中学生3人と小  
学生3人。昨年11月15日夕、山田君  
らが同区松尾橋と自宅付近で「ナゾ  
の飛行物体」を目撃したのが始まり  
で、山田君らの話では、この物体は  
南西の空に現れ始め黒から金色、白  
銀色に輝きながらやがて消えたとい  
う。12月4日夕には、自宅前で東か  
ら南西へ超低空で動くエンジン色の物  
体を見つけた。ジグザグやらせん状  
に動き、4分後見えなくなった。同  
6日夕にも、自宅前でまた同じよう  
な物体が見え、音がしないことや光  
を点滅しながら回転することも確か  
めた。

山田君らはこうした体験を重ねて  
いるうち、しだいにUFOに興味を  
持つようになり、観測を始めた。  
「隊員」のメンバーも定着し、観測  
場所は自宅近くの児童公園など数カ  
所。三脚をつけたカメラや双眼鏡を  
持ち出し帰宅後は必ず「観測日誌」  
を1つつけている。大判の大学ノートに  
1日1ページずつ、天候、発見時  
間、場所、見え方方向、形、色、飛  
び方、目撃者の順で詳しく書かれて  
いる。  
その1部を紹介すると――。

◇一九七五年1月3日(小雨)午後  
6時2分/6分、自宅付近。南東  
南西。半球を2つ重ねた形で上半分  
は銀色に黄色を混ぜたような色、下  
半分は濃いオレンジ色。2秒おきに  
点滅しながら、ジグザグから回転運  
動したあとと雲の中へ。  
◇2月13日(晴)午後3時5分/7  
分、梅津北小3階から。北→北西。  
窓が4つついており、色は白銀。  
「母船」らしい。進行方向2番目の  
窓に「人影」あり。大きさはその飛行機  
の1.5倍、速さはその3分の1。  
やがて雲の中へ。  
◇4月6日(晴)午後7時54分/58  
分、児童公園。緑、黄、赤色の円盤  
状。南西→南東に音もなく飛び、い  
ったん雲の中に入ったあと再び現れ  
て、また雲の中へ。  
◇同30日(晴)午後7時53分/57分  
同じ児童公園。円盤状でそれをとり  
巻くように赤、青の小さな光が集ま  
り、点滅しながら一時滞空、南南西  
から西へ飛び去った。  
山田君らが目撃した物体は一体何  
か? UFO研究者たちが一般的に  
指摘するのとは異なる誤認のケース  
で飛行機の標識灯か、人工衛星か、  
それとも本当にUFOだったのか、  
観測はきょうも続けられている。  
(一九七五年5月15日付、読売新聞  
但馬丹波版)

国民のUFOに対する  
関心高まる!

●各地でUFO研究会盛ん

宇宙人の訪問か? または単なる  
目の錯覚か? 空飛ぶ円盤UFO  
(未確認飛行物体)が世界で騒がれ  
てから久しい。日本でも多くの「円  
盤同好会」が日夜調査・研究にいそ  
しんでいる。何かと世知辛い昨今に  
壮大な夢に生きている人たちといえ  
るが、

「あッ! 空飛ぶ円盤だ」「ワァッ  
すッ!」「アッ、アッ」  
春になるとが然、日本ではこうし

た騒ぎが多くなる。なにもこの時期  
だけをねらって、宇宙人が地球を訪  
問するわけでもないだろうが?  
だが、このところ三重県の津市で  
は空飛ぶ円盤があまりたくさんやっ  
てくることか、ついに「国際UFO  
研究会」(森田寛会)という会ま  
で設立された。なかには三重県警  
のお巡りさんまでが入会して活発な  
調査活動が続けられているそうだ。  
現在、空飛ぶ円盤専門誌として  
「UFOと宇宙(コズモ改題)」(隔  
月刊)が発行されているが、毎号多  
くの円盤実見談が掲載されている。  
また近頃では、一般の天文学や気象  
学関係の純学術誌にまで、読者から  
実見談が投稿されてくるそうだ。し  
かし「天文と気象」編集部は林完次  
さんは、熱心な人は自分で見たと  
いう円盤の写真を同封して来たりし  
ますが、UFOなどというのは、実  
際の学問的基礎がない人のいうま  
やしと同じもの。

円盤ファンにとってはハナハダつ  
れない林さんの言葉にもかかわらず  
UFOはテレビにも登場するように  
なった。つい先頃も、東京12チャ  
ネルでドキュメント放映された。だ  
が、UFOはテレビ界でもまだ正式  
な市民権を与えられていない。そ  
のせいか以前、UFOの番組をいつ  
か制作した日本テレビの矢追純一デ  
ィレクターのアド名は「宇宙人」  
「怪奇ディレクター」と仲間から多  
少の軽侮とアワレミの目(?)で見  
られていたという。

だがアダ名くらいはまだいい。あ  
るUFO研究会のSさんは世間に知  
られると変人扱いされるからと、家  
族にまで隠れて調査活動を続ける  
という涙ぐましい努力を払っている。  
それでも、各種マスコミに対する影  
響からか、日本人のUFOに対する関  
心も、ここ近年高まってきた。が、  
その関心の向け方が気にくわないと  
言うのは、仏文学者で、空飛ぶ円盤  
研究の著書を多く持つ野野威馬雄さ

んだ。  
「とにかく私共が、空飛ぶ円盤を研究している会にはこれこれこうした書きがある、こういっただけでも書きます。すると読者からも入会したいから紹介してくれと来る手紙には必ず、まじめに科学的に研究している会よりも、円盤をこ神体みたいにして、こさらに神秘めかしている会が指名してあるんですよ」と嘆いている。

日本人の度しがたい神秘好きというべきか、そうした会ではテレパシーとか、空飛ぶ円盤との霊的交流とかいって、多くの会員を集めているようだ。夢のない現代に失望した人々の魂のよりどころか？ 空飛ぶ円盤は神の啓示であるという宗教までできているというから門外漢は驚く。

一方、科学派のやり方も徹底しているようだ。日本空飛ぶ円盤研究会(代表 荒井欣一さん)では科学的厳正を期するために会員に円盤のトリック写真の作成を奨励している。トリック写真はだまされないためにまず自分たちで作ってみるという態度だ。こうした厳しい鑑定にたえ抜いた本物の空飛ぶ円盤の写真と、荒井さんは600枚は持っているというからスゴイ!

しかし、こうした態度が行き過ぎて「この写真もダメ、あの写真もトリック、これは雲を見間違えたものと、否定的意見が多くて、円盤研究をやっているんだか、円盤にケチをつけているんだかわからない会もある」(平野さんの話)というから、この道もなかなか厳しく、むずかしい。

(一九七五年5月15日夕刊、福島民報)

埼玉県羽生市にUFO?

●バイクの後から追いかけて来る  
「夜、バイクで走っていたら、突然目玉のように並んだ光が追って来て

明るいとこへ出たらスーンと消えた。もう怖くて怖くて鳥はだか立った」。羽生市で一九七五年5月15日夜、一高校生がバイクの試運転をしていたたこの出来事である。  
何やらミステリーめいたこの事実も、その後、話はクラスメートの間にも広がって、その未確認飛行物体(UFO)の正体を突きまようという、高校生たちは今年団体で調べると息まいている。はたしてこの物体の正体は何か？ 羽生の空の初夏の怪とは。

その物体を目撃したのは、羽生市東三―三―三五、不動産業増田啓一さん(44)の長男、熊谷商高2年生宏次君(16)。宏次君は15日、両親からバイクを買ってもらったのが、うれしくて、午後11時過ぎ、この日2度目の試運転をした。自宅前の県道を大越に向かって進み、約2キロぐらいで左折、町道に入って葛西用水方面へ向かう途中、同市東の火葬場交差点からさらに左折した。物体を見たのはこのとき。時間は午後11時30分。進行方向右側の20ノ30メートル上方で、宏次君から約20メートルぐらいのところに、乗用車のライトよりいくぶん暗めで、かなり大きな2つの光る物体が現れた。物体の上には3日月型の淡い光が、上弦で覆うようについていた。音もせずポーッとしているのに驚いた宏次君は、そのまま走り去ろうとして、何となく振り返ったとき、すぐ後ろから、その物体はビタリのY字路に追いつて来た。葛西用水のY字路に着いて、恐ろしくなった宏次君はまた左折、大越県道経由で自宅の方へ逃げ帰ろうとするが、光る物体は今度は左側20ノ30メートルのところに追いつて来たという。

光る物体は県道の明るいとこで消えたが、約400メートル追われ宏次君は、どうにか家へ逃げ帰れ同君の両親によると「うちへ入って来たとき、顔から血の気が引き、鳥はだ立っていて震えが止まらない様

子。やがて少しづつその状況を話してくれました」と話していた。宏次君は16日にはクラスメートにも「もう二度とあの円盤のようなものは見たくない」と同夜の恐ろしさを語っている。クラスメートも信じる者も信じない者が半々程度だが、探険隊が組織されて、この物体解明に乗り出しそうな気配もある。  
宏次君の通う熊谷商高物理担当の村岡文夫教諭は「見た生徒の目の錯覚や心理的要素による場合も考えられるし、光が雲に反射したりすることもある。物体なら動力源があり、電波への妨害などの影響が出ると思うのだが」と頭をかしげるばかり。さてこの週末どうなることか。  
(一九七五年5月17日付、埼玉新聞)

南魚沼沢町に光るUFO飛来

●地元の人たちを驚かす  
一九七五年5月17日、午後9時過ぎ、南魚沼沢町土樽で、光るUFO1個が現れ、たまたま夜空を見上げた地元の人たちを驚かせた。  
現れたのは同所の正面山(953メートル)の上空、国鉄越後中里駅前から湯沢町中心街を結ぶ線と、同山の屋根の交差する地点付近。ラゲビーボールを横にして板の台に載せたような形で、上下方向に青白い光が出ている。遠くからでも横15センチ、縦10センチの光るボールに見えるたとかで実際はなかなか動いたかと思う。ノロノロと音もなかな動いたかと思う。ノロノロと消え、数100メートル先にまた現れる。これが3度約30分間続いた。  
「自分はフロロに入っていて見なかったが、家族は全員見た。子供はエンパン、エンパンと興奮していた」と語るのは6日町署の高橋警務課長。この11日は夜にも、同じ場所でも署員3人が目撃したばかり。署内でもUFOの話でもちまきりだ。  
同所で昨年の春と秋に役場職員ら

によつて、ひんぱんに目撃されており、「目撃者を募り、UFOの『点と線』をたどってみる」などと意気込む人も出ている。  
(一九七五年5月20日夕刊、新潟日報)

高知県宿毛市上空にUFO

●音もなく、ゆっくりと北から南へ宿毛市の上空に見えたことのない飛行物体。やがて下ぶくれの円筒形で、かなりの上空をゆっくりと北から南へ流れるように飛んで行ったという。発見したのは同市沖須賀の市職員夫婦や付近の人たちで、一九七五年5月20日午前7時過ぎのこと。話によると、円筒形の物体はジュラルミンが朝日に輝くようにキラキラ光り、音も聞かえなかつたそう。  
「最初人がパラシュートで降りて来るのかと思つたが、上下の振動もなく、同じ姿でスーと飛んで行った。これは一体なんだろう。例のUFOではな」。  
宿毛測候所に問い合わせると「福岡や米子で観測用に気球を飛ばしたりするが、これだと円形。水のような雲だと七色に光るはずだ」。雲が北から南に流れていたため、何が風に吹かれたのかわからない。心当たりはないですねえ」と首をかしげている。  
(一九七五年5月21日付、高知新聞)

那須八溝山系に每晚「光る物体」が出現

●突然消えて、また現れて飛び去る夜空を飛ぶ発光物体はなんだろう。浅川町ではいまUFO(未確認飛行物体)の話題でもちまきりだ。昨年11月頃か天気の良い夜空に、南方の那須八溝山系から光る物体が現れ、突然消えてはまた光っている。大勢の町民が目撃しており「飛行機ではない。一体あれはなんだ」と夜空を仰いでカンカンガクガク。目撃者の話を総合すると。光の色は赤やオレンジ色、ちようと太陽が昇る感じだという。毎晩9時、10時、11時の3回、光を点滅させたり、突然消えてはまた現れたりを繰り返していき方面へ飛び去って行く。八溝山系から出てくるときは大きく見え、同町に近づくにつれて小さくなる。  
1回の出現で4ノ5個の発光物体が近づき、一緒になったりして飛んで行く。しかし、同町周辺の棚倉、石川、鮫川ではこのような現象は起きていない。  
浅川町では多くの町民が、謎の飛行物体を目撃している。家具店を営む渡辺喜一さん(47)谷子さん(41)夫婦は玉川村からの帰り、夜10時頃同町日渡橋付近で目撃した。車で通っていたところ上空を赤っぽい円盤のような発光物体が通りすぎて行ったという。「星とは違う輝き色なので車を止めて1分間ぐらいみていた」と話している。また、同町滝輪の農業岡部敬寿さん(41)一家は家族のみで「観測」を続けていた。「信号機のように点滅をしながら飛んで行くものもある」そうだ。岡部さんの隣に住む会社社長岡部光敏さん(33)は「この間なんか20数個が夜空に現れて舞い、まるでUFOの「運動会」だった」と話している。町民は「飛行機ではない」と確信しているが、なんだかわからない。いずれも「変だ、変だ」と言いながら毎晩夜空に繰り広げられるショーを楽しんでいる。  
(一九七五年5月21日付、福島民報)

那覇上空を飛行する「UFO」

●夜景撮影の高校生が偶然パチリUFOの存在をあなたに信じる? 信じない? 一九四七年アメリカで発見されてから論議を呼んでいるU

ではない。一体あれはなんだ」と夜空を仰いでカンカンガクガク。目撃者の話を総合すると。光の色は赤やオレンジ色、ちようと太陽が昇る感じだという。毎晩9時、10時、11時の3回、光を点滅させたり、突然消えてはまた現れたりを繰り返していき方面へ飛び去って行く。八溝山系から出てくるときは大きく見え、同町に近づくにつれて小さくなる。  
1回の出現で4ノ5個の発光物体が近づき、一緒になったりして飛んで行く。しかし、同町周辺の棚倉、石川、鮫川ではこのような現象は起きていない。  
浅川町では多くの町民が、謎の飛行物体を目撃している。家具店を営む渡辺喜一さん(47)谷子さん(41)夫婦は玉川村からの帰り、夜10時頃同町日渡橋付近で目撃した。車で通っていたところ上空を赤っぽい円盤のような発光物体が通りすぎて行ったという。「星とは違う輝き色なので車を止めて1分間ぐらいみていた」と話している。また、同町滝輪の農業岡部敬寿さん(41)一家は家族のみで「観測」を続けていた。「信号機のように点滅をしながら飛んで行くものもある」そうだ。岡部さんの隣に住む会社社長岡部光敏さん(33)は「この間なんか20数個が夜空に現れて舞い、まるでUFOの「運動会」だった」と話している。町民は「飛行機ではない」と確信しているが、なんだかわからない。いずれも「変だ、変だ」と言いながら毎晩夜空に繰り広げられるショーを楽しんでいる。  
(一九七五年5月21日付、福島民報)



だ見たことがない」と首をひねるが佐藤君は「僕も最初は信じられず足がガタガタふるえたが今は慣れた。雲がなくて微風のとぎにはよく見えるよ」と顔を紅潮させていた。さてこの正体は？

鹿兒島市上空でUFOが偵察？

●赤く光る10玉ほどの物体 「UFO（空飛ぶ円盤）じゃないでしよか。調べてみて下さい」。一九七五年5月26日夜、鹿兒島市紫原に住む秋田栄司君（16）＝甲南高校1年＝から南日本新聞社に電話があった。

秋田君の話では、同日午後8時2分から約5分間、城山方向から赤い光る物体が紫原上空にやって来た。よく見ると物体は2個。大きさは10玉ほど。それが紫原上空で偵察するかのようにつくりに旋回して再び城山方向に飛び去ったという。 さつ鹿兒島地方気象台に問い合わせたが「同時刻頃、ちょうど観測していません」との返事。ことしの2月以降だけでも、本社には、同種の物体、光線を見たという問い合わせが数回あり、なかには写真持参の人もいた。UFOに興味をもつ人には、この赤く光る物体「新たな情報」で、UFOの論議も盛んになりそうだ。

「空飛ぶ円盤」を作った 飛ぼう

●福井大のUFO研究会

福井の空に「空飛ぶ円盤」を飛ばそう―宇宙の未確認飛行物体―略してUFOは最近、全国各地でブームになっているが福井大学にもUFO研究会がこのほど誕生した。空飛ぶ

円盤を観測しようという話ではなくこのグループは、円盤を理論的に解明し、実際に作って飛ばすのだという。若者たちは専門書と首っぴきで少年時代からの夢に挑戦している。代表の金森繁夫君（19）は工学部の電子工学科2年。「自分らで空飛ぶ円盤を作ってみよう」と仲間を持ちかけた。今、実験する機会を捜している。メンバーは全員工学部。この10月から電子工学、電気工学、応用物理などを専攻するという学生たちだ。

みんな中学、高校生の頃からUFOに夢をかきたてられていた。石川県七尾市出身の田中均君（19）は「高校の夏休みは、一週間ぶつ通しで家の近くの空を見上げてました」と言う。他のメンバーもノンフィクションぶりの「空飛ぶ円盤同乗記」（G・アダムスキー著）や日本の学者の「超相対性理論」の研究著作に魅せられていた。

UFOの目撃者は2人。そのうちの1人、金森君によると「昨年の8月13日午後1時頃、大野市内で見ました。大野高の地学クラブの天体観測にOBとして参加したから、白くて丸い物が2つスーッと飛んでいった。1分ぐらいで雲に隠れた。僕は人工衛星や、流星はしょっちゅう観測しててそれでそれではないとわかるんです」と言う。

しかしこのUFO研究会の結成目的は、あくまで空飛ぶ円盤を作って飛ばすこと。「重力場には、すべてエネルギーが充満している。ひびきみエネルギー」というんですが、ここに高周波の電流を通してそのエネルギーを電流に変化させる。このエネルギー体になって地球の重力場に反発して飛ぶんです」と会員の「超相対性理論が土台になってます」とまじめ顔だが、素人にはわかりにくい。大学や民間のれっきとした研究機関でも、理論研究はされて

いるが、学界ではまだ公認されてないとか。 近くその筋の先進グループである京都大のUFOクラブと交流する計画だというのが、すでに会員の1人が空飛ぶ円盤のエンジン部にあたる「重力直接発電器」という物体を試作した。今、実験する機会を捜している。目標は卒業までに福井の空で飛ばしてみること。理論的には可能性はあるんだがなあ」と意気盛ん。

15ヶ月前の太平洋上で 怪火

●海上保安本部に調査依頼

UFO（未確認飛行物体）、例の空飛ぶ円盤のことである。これについて、第三管区海上保安本部に、横浜市内のUFO研究グループから妙な調査依頼が舞い込んできた。「15ヶ月前、太平洋上で、怪火」と言う報告があった。ひょっとしたらそれがUFOだったのでは？」というもの。

そこで係員が当時の日誌を調べてみると、それらしい記載が見つかった。「35年2月22日午後9時。付近を航行中の船から、火に包まれた飛行機らしきものが海に落ちるのを見た」との無線連絡あり。当時、飛行機事故では、と大騒ぎになったが、結局、該当する飛行機がなく、原因不明のまま捜査は打ち切られたという。

「おそらくなにかの見誤りだったんじゃないですか。UFOだなんてねえ」と言うのが担当官の答だった。こんな問い合わせは初めてという。「でも、海には、こういうたぐいの話は多いですよ。原因がわからないければ、わからないほどUFOへの夢をかきたてるんですね」

またも「アダムスキー型円盤」出現！

山口県でカラー撮影に成功 アダムスキー型と思われるUFO（未確認飛行物体）が山口県大津郡油谷町の川尻岬で、白昼カラー写真にパッチリ収められた。撮影者は地元青年らで、記念撮影した1枚に偶然写っていた。怪物は、赤味を帯びた昼光色に輝き、まるでベのフタ。UFOが、はつきり撮影されたケースは珍しく、研究家、マニアの間に論議を呼び起こしそう。 1枚の美しいカラー写真が、いま記者の手もとにある。図柄は平凡。写真の中央に、こげ茶色のジャンパーを着た長髪の青年が、おどけたポーズをとっている。バックは小高い岬の上。その頂上には小さな白い灯台がポツンと立っている。丘の背後は、青々と澄み切った空。左手下には、エメラルド色の日本海が広がっている。 アダムスキー型と思われるUFOは、この平凡で美しい写真にはつきりと写し出されていた。

UFOは灯台の右横手の松林のすぐ上に、ぼっかりと浮かんでいるように見える。高さは約150メートル。形はホローなべのフタを連想させる。中央に写っているこの長髪の青年はこの岬、つまり、本州北西端の山口県大津郡油谷町の川尻岬から車で10分ほどの距離にある同町久津で、ハマチ養殖業をやっている林克好君（23）、写真の撮影者は林君の妹、美樹さん（15）＝向津久中学校三年＝。 一九七五年4月4日、金曜日。林君と美樹さんは春休みで、東京から遊びに来ていた親せきの東京都目黒区下目黒に住む山元茂君（13）＝中学1年＝、同町大浦のいとこ磯中秀彰君（12）＝向津久小学校6年＝を連れて川尻岬へ遊びに出かけた。

この4人が林さんの家を出たのは正午すぎ。岬に到着したのが、午後12時20分頃だったという。一しきり4人で岬を遊び歩き、林君が父親十三夫さん（42）から借りてきた新品のニコマートELで写真を撮り始めたのが1時過ぎだった。 問題の写真は、ネガの7枚目。岬では5枚目になりました」と林君。岬の4枚目までは、林君が撮影し、問題のUFO写真は美樹さんが写したものだ。時間は「1時半から2時の間だった」としか林君が記憶していない。時間どころか、その写真にUFOが写っているようとは、だれ1人気づいていない。 その日撮影したのは岬で19枚。自宅では3枚。36枚撮りだったが、そのまま、同町人丸（ひとまる）の田中写真館へ現像を依頼。4月中旬に十三夫さんが受け取りに出かけている。 異常に気づいたのは、その時点だった。家族で見ていると、その1枚にUFOがはつきりと写っている。 最初に見つけたのは十三夫さん。 「船かな、と思っただけですが空に船が浮かんでいるはずがないのですね」といまだにフに落ちない顔。林君と美樹さんは記憶をたどって見たが「音は全然聞こえなかった。飛行機なら絶対にわかる」と口をそろえる。 全く、偶然に撮影された、このUFOは「空飛ぶ円盤実見記」を書いた米国の哲学者、天文学者である故ジョージ・アダムスキーの名をとったナベフタ型UFO「アダムスキー型」に酷似している。しかし、UFOに対する写真の判定は難しい。研究者の間では「はつきり、写真に写っているものほど疑ってかかれ、」が常識。本紙では、真偽を確かめるためにカメラを確認してみたが、チリやゴミやレンズのシミなどではなかった。また、UFO部分を拡大して

みたが、前の人物にピントが合っているため、拡大するほど、ぼやけてしまいが、ニセ写真の疑いは全くない信じてよい。  
(一九七五年6月2日付、新聞西新)

### 室蘭市上空の夕空に “白光”現る

●小学生が手製カメラで写す

「お母さん、これが空飛ぶ円盤だよ！」  
室蘭市白鳥台上空に飛来した謎のUFO(未確認飛行物体)を白鳥台に住む小学生が見事写真撮影に成功した。

この小学生は、室蘭市本室蘭小学校6年1組の佐藤利行君(11)。さる2日午後4時頃、自分の家の窓から南西約80メートル離れた隣家の上空に、突然、白光を放つ謎の円盤が飛来したのを目撃、とっさに手元にあった子供科学雑誌の付録の組み立て工作カメラで手動シャッターを切り、みごと、UFOを写真に捕えたもの。半信半疑だった母親の京子さんに証拠写真を見せてびっくりさせ利行君は愛用の手製カメラを手に得意満面だ。

利行君が撮影した写真には、民家の上空にかなり大きなものと推定できる円盤型の不思議な飛行物体が「低空飛行」の状態を写っている。利行君の説明によれば「大きなお皿を伏せたようで、上部が黒く、下部は白光を放っていた。空中に約40秒間、ゆっくり左旋回しながら停止し、やがて、北から南の空へ変な飛び方で音もたえず飛んで行ったという。

白鳥台では、これまでもたびたびUFO騒ぎがあり、利行君もこれまで2カ月間に1度の割合で3回も目撃していた。  
「UFOは確かに白鳥台へやって来る」ということを友だちにみせようと思っていた利行君は、購読している学研の子供雑誌「科学」6月号の

工作付録としてついていた箱型プラチック製のカメラを組み立て、ひそかにUFO飛来のチャンスを待っていた。

そして、この日も家の窓から何気なく空を見上げていた瞬間、北から南へゆるやかに飛行する異様な白光物体を目撃したのも。

利行君は、この日もいじっていた愛用のカメラをよきよきに向け、民家上空で「一時停止」したUFOに、手動シャッターを切った。時計の秒針をちらみながら、光が入らないように大急ぎでカメラを押し入れに突っ込み、窓に戻って見上げた時飛行物体はゆっくり左旋回を続けながら音もなく南の空へ飛び去った。時計を見ると約40秒間、このUFOが空中に停止していたことがわかったという。

「僕は、UFOが白鳥台へ来ることを知っていたから、ちっとも怖くなくなつたよ。でも、自分で現像してみても、自分で見たとおりののが写っていたのでうれしかった。お母さんに話しても、そんなもの存在しないよ」と笑っていたが、写真を見せたら、学校の友達や先生に写真を見せると、みんなが「なるほど、これはUFOだ」と、びっくりしたり感心したりで大騒ぎ。利行君の写した写真もすべて白鳥台では時ならぬUFO騒ぎがまき起こっている。  
(一九七五年6月6日夕刊、室蘭民報)

### “UFO”の出現回数増える？

●目撃や写真撮影が最近多くなる

空飛ぶ円盤があつちこちで「目撃」されたり写真に撮られたり、いままよつとした円盤ブーム。この空飛ぶ円盤。つまり未確認飛行物体のUFOということばは小さい子供まで知っていて、現代の子供たちは月にウサギが住むとは思っていないが、空飛ぶ円盤は実在すると信じて

いる。だから子供たちは、宇宙人や空飛ぶ円盤はメルヘンの世界ではなく、現実のものと考えている。  
UFOの目撃例や写真撮影の数が目立って多い。実際に出現が多くなったのか、それとも子供ばかりではなく多くの人がこれに関心を寄せているせいかもしれない。

ところで、宇宙に散在する何億かの星の中には、生物の生命を宿した星がたくさんあるだろう。これは満天の星空をながめてみると、そんな空想が果てしなくひろがっていく。

したがって、地球以外の星は全部死の世界だと考えるより、どこかの星に生物が住んでいて、そこから生物たちが空飛ぶ円盤に乗って地球にやってくる——空想をたくましくした方が、子供たちの夢ばかりではなく、大人たちにとっても、心のひろがりがあるだろう。  
息詰まるような現在の世相の中でこのUFOブームも、そんなところか心のよりどころを求めているのかもしれない。

●静岡市登呂四丁目・中川新一  
(一九七五年6月8日付、静岡新聞)

### 暗やみの空にびく光る物体が ふりわり

●大阪府池田市のゴルフ場で目撃

暗やみに近い山の上のびく光る物体がふりわり。と、金属音を残して、あつちこちの間に下ろす。一九七五年6月15日未明、北摂連山の南端池田市中原町の伏見ゴルフ場の寮で寝ていた従業員数人の体験だ。「空飛ぶ円盤や」「そんなアホなものもあるかい」。そろそろ寝苦しい初夏の夜が生んだUFO騒ぎ。

午前3時半頃、寮の2階に寝ていた水井政和さん(22)が頭に刺さるような痛さを感じ、何やら金属音を聞いたような気がして窓を開けると、約200メートル離れたゴルフ場の上空に、びく光る物体が直徑20メートルぐらいの円形。「まさしく円盤」。すぐ同僚をたたくまでこして回り、15分後外に出て見たところ、もう見えなかったという。  
(21)も異様な音に目を覚まし、窓を開けるとぐにやぐにやとゆれる白っぽい物体とその向こうに円形の大きな物体が、ピカッと光を放つて姿を消した。「幽霊のような物体が何か呼びかけているようでもあり、体が自然に浮いてしまうようで、こわくなり必死でベッドにしがみついていた。半日たつたいまも頭が痛い」と気味悪そう。寮には13人が泊まっていたが、ほかに目撃者が1人。水井さんは中学生時代から天体に興味があり、空飛ぶ円盤にも好奇心十分で、「異常な音や形からホンモノの円盤かも」。他の5人は「夢でないことは確か。正体は何だろう」と頭をひねっている。  
(一九七五年6月16日付、朝日新聞)

### UFOの専門書などを集めて 交換討論

●秋田市聖霊高校UFO研究同好会

UFO、いわゆる未確認飛行物体についての関心が、最近高まってきており、資料や文獻を集めている人も多い。そのひとつが秋田市の聖霊高校UFO研究同好会。

昨年5月に発足し、現在の会員10人。専門書、雑誌の切り抜きなど各種の参考資料を集めて、週2回、お互いの情報を持ち寄って交換と討論し合う。中には大学ノートにビッシリとUFOについての発見日時や場所を書き込んである熱心な生徒も。しかも単に円盤を見たとかいうだけではなく、常識では解決できない

古代史のナゾにUFOが関係しているのではないかと、考え研究している。全員UFOの存在を信じているが残念なことだれもUFOを目撃したことがなく、最大の弱点とか。しかし、9月の学園祭にはUFOコーナーを設けて、日ごろの研究成果を発表しようとして張り切っている。  
(一九七五年6月16日付、秋田魁新報)

### UFO人口激増、実在も信じる

●10・20代を中心に10万人

夏はUFO(空飛ぶ円盤)の季節である。最近の目撃記録では6月4日茨城県南部で、ほとんど同時に10数人が夜空に「未確認飛行物体」を確認している。  
UFO東京接近か——とSF的な発想をする人もいるが、とにかく「UFOの盲点」とされた日本に、このところしばしば出没しているのは事実のようだ。  
それを反映してUFO人口も激増している。10・20代を中心に10万人が、UFOの存在を信じているというデータもある。信じるだけでは足りなくてナゾの解明に熱中している「UFO研究者」はざっと3000人。研究会は100近くある。そのなかには、会員数9700人を誇る大組織もあり、大阪に創設17年のしにせがある。SF小説で活躍している作家たちの多くは、UFO研究者でもある。

UFO熱に、油を注いでいるのは角川文庫から刊行されたエリリッヒ・フォン・デンケンのシリーズである。デンケンは、スイスの考古学者で古代の遺跡を丹念に訪ねる。そこに、UFOのこん跡を見つめる努力が続いている。つまり、UFOはずっと昔から地球を訪れているという仮説である。  
(一九七五年6月26日付、栃木新聞)

米國がオズマ計画というのをたてて宇宙のかなたに生存するかもしれない知的生命体と交信しようと実験を行ったのは一九六〇年代のことである。ところが何の反応もないので、うやむやになってしまい、結局中止されたが、大気圏外の「人間」と交信しようという地球人の意欲は高まるばかりで、今度は米ニューメキシコ州の砂漠に二万台の電波望遠鏡を一〇〇平方マイルの地域にわたって設置し、超大型コンピュータにコントロールさせて、宇宙からの信号をキャッチしようという「サイクロップス計画」が樹立され、これを実現させようと米国内で運動が推進されている。

### 宇宙の知的な信号をキャッチ

ところがこれより早く大気圏外の生命体から来ると思われる知的な信号をキャッチした科学研究機関があった。カリフォルニア州エコーラ研究所がそれである。これは一九七一年一月二九日に電波望遠鏡とは異なる装置でパルス信号を受信したもので、電磁波スペクトルの範囲をこえた波長だとジョージ・ローレンス所長は言っている。

これに應用された伝達エネルギーは地球の物理学では全く未知のものであったらしく、この信号は光速度を超えていたというから、時間と距離に無関

# 大気圏外生命体とのコンタクト？

ある謎の通信

宇宙空間から来た  
知的な謎の信号は  
進化した他の天体  
から来たのか？

増野一郎

係なテレビシートの搬送波に似たものと考えられるが、詳細は不明である。

とにかく、現代物理学で解決できない現象をすべて嘲笑し去るどころやらの国の素人・ジャーナリスト・学者連を尻目に行われている英米の科学者の研究には瞠目すべきものがある。

地球大気圏外の星々では「電波」というような時代遅れなエネルギーでなく、もっと高度な伝達法を応用して星間で即時通話が行われているのかもしれない、と考へても不合理ではない。

モハービ砂漠でのこの大発見は全く偶然の産物であるが、科学界では正式に認められていない。いつの時代でもそうだが、いかなる大発見でも最初はかならず他の学者から反撃されるのである。

### ローレンスのすばらしい実験

その日、ローレンスは何をやっていたか？ 彼は砂漠で植物を相手にとりくんで、人間と同様の生命体たる植物も何かの信号を発信しているにちがいないと考へ、そのことを証明する現場実験を行っていた。彼が開発したのはすぐく高感度の「得体の知れない」奇妙な機械で、遠方の植物から放射される波動をとらえて増幅し、テープに録音するというわけだ。しかし作業の合間にうっかりしてこの機械を三〇分間

ほど大熊座の方へ向けたのである。だが機械はやはり何かの「信号」を記録し続けたばかりか、それが生物から送信されたものであることはすぐわかった。なぜなら、宇宙空間から来るこの信号は砂漠の植物から来る信号と同種類のものだったからだ！

この受信機はファラデー管でもって既知のあらゆる宇宙放射線から絶縁されているので、電磁波スペクトルを利用した通信ではない。しかも一定のパターンのくり返しであって、地球人の通信科学では到達不可能なかな宇宙空間の発信源から来るものであることは明瞭であった。

直流をアナログ変換法で交流に変えたと生物信号が電気から音に変換するので、これをテープに録音する。ふるえ声の歌うような音を聞いて、ローレンスは身ぶるいするような興奮におそわれた。すわったままヘッドフォンを少しずらしてローレンスは体をこわばらせて緊張していた。光学系と電子系の機械を複雑に組み合わせた測定機から6インチ屈折望遠鏡が突き出て黒いシルエツトとなっている。この望遠鏡にファラデー管が取り付けてある。

ローレンスは方位を測定してジェット機の計器盤に似た装置に連結された録音機のスイッチを入れた。

それからの三〇分間はまさに夢心地であった。科学者としての冷静な態度

を失いがちになるのを一生懸命に抑制しながら、感情を押し殺した平板な調子の声で状況をしゃべって録音してゆき、次に望遠鏡の角度を調べて、狙撃兵のようにファインダーの中心に星を見定めて、更に三度目のチェックをしてからマイクを取り上げた。

間違いはない。大熊座の方向から強力な非電磁波信号がたえまなく流れて来る。他の測定機ではキャッチできないような信号だ。ローレンスは頭を振ってから一〇月の夜の寒さが身にしみる暗い砂漠にうつろな眼を向けた。自分の五官の延長である周囲の機械に奇妙な信頼感がわいてくる――。

想像もつかぬ遠い宇宙空間の知的生物から送信されるのかもしれない非電磁波信号の記録を眼前にして、ローレンスは頭がクラクラしてきた。宇宙の生物は数百万年も以前からこの「生体放射線」で交信をしていたのか！ 電磁波の通信などはまるで旧式ではないか！ こうなれば光速度の壁で頭を悩ませる必要もない。星間の即時通話も可能となるだろう。ローレンスはあらためて自分の過去の業績を振り返って、その貧弱さと地球というケシ粒の上の人間の存在、広大さわまりない大宇宙の神秘に思いを馳せて、しばし冥想した。優秀な海洋学者、歴史家、地理学者、世界最初のレーザ―光線の研究者、四六冊の著書執筆等の輝かしい

経歴の持主も、この信じがたい現実には圧倒されてしまい全く声も出ないまませまりくる砂漠のたそがれの中に独り身動きもせずにたたずんでいた。

### 植物は人間の想念に反応する

エコラ研究所というのは最近では放射能研究、医学と農業両面での生物磁気研究、NASA(米航空宇宙局)の委託による大気圏外研究などを主に行っている。この所長であるL・ジョージ

・ローレンスは広い心の持主であり、学者としてはきわめて進歩的な人である。一体に英米の科学者の進歩性は日本の比ではない。先年来世を騒がせたユリ・ゲラーにしても(関工學博士をはじめとする電通大系の少数の科学者がその超能力を研究しておられるにしても)、一般の科学者は全く無視しているが、英国ではロンドン大学の主任物理学教授がゲラーを科学的に徹底調査して超能力の実在を証明している。約一〇年前の一九六六年には米国で植物が発する生体放射線の研究が始まった。

現在は日本でもよく知られているがこの年ニューヨークのポリグラフ(ウツ発見機)の専門家であるクリーブ・バクスターが、ポリグラフに連結した植物に水をやるとその植物が神経電流を発生することを発見したのである。

最初バクスターは水分が葉まで到達する時間を測ろうとしたのだが、驚いたことに、植物は人間と同じような反応



●エコラ研究所長L・ジョージ・ローレンスはモハービ砂漠の植物を研究していた。そのとき彼の特殊装置は思いがけなく宇宙からの生物通信を受信し始めた。

を示したのだ。彼は気まぐれに葉を一枚燃やしてみようと思ったが、まだマツチをすらないうちに——正確に言えば、燃やしてやろうという考えが彼の心中に浮かんだとたんに——ウソ発見機の針が猛烈に揺れたのである！そこで、植物だけでなく動物などの生命体もテストしてみたが、結果は同じだった。

植物の葉や茎を粉々に切りきざんでも、**「暴力」**に関係ある想念に対しては、完全な姿でいたときと同じような強い反応を示した。熱湯の中へ生きた小エビを投げ込むと遠い位置の二本のフィロドロンが小エビの死に反応を見せた。これは一種のテレパシー現象である。小エビ以外の生命体の死に対しても、フィロドロンはやはり反応を示した。いろいろと条件を変えてもやはり同じである。こうした実験の結果は国際超心理学会報の一九六八年冬季号に発表されたが、これは植物その他動物など、生命体のすべてが人間の愛情に答えるという昔からの言い伝えを科学的に立証したものである。

## 自然は目的を持って万物を創造する

過去数世紀にわたって多くの科学的発見がなされてきたが、それが学者にとって奇異に見えれば正統科学の枠内には入れられなかった。学者、素人のいかに問わず各自の個人的体験から人間の心というものはいつか宇宙の神秘を開くカギと直接につながっているという急進的な結論に達するように導いたアインシュタイン、テスラ、マルコーニ、エジソン、その他の人々の足跡は輝かしい光を放っている。だがそれも正統物理学を基準とした論理的思考を通じてのことではない。「空気より重い物は空中を飛ぶことはできない」と言ってライト兄弟に忠告した物理学者の例を想起すれば、先人たちの偉大な精神も理解できようというものである。

既知の物も未知の物も、宇宙の法則に反するものはすべて存在することはできない。これを言い替えれば存在する物はすべて宇宙の不可欠の一部分なのであり、したがってその場所と目的を当然持っているはずである。自然界では理由もなしに万物が創造されることはない。だから意識・知覚力・理性などは他に言いようがないので「心」と呼ばれているが、これはきわめて重

要な力の属性であり、しかも存在するものであるから、心が創造された目的に奉仕しなければならないのだ。

「宇宙には知識が充滿している。人間の仕事はそれを読み取ることだ」とはマサチューセッツ工科大学のウエイン・パター博士の言葉である。そして科学の目的もまさにそうなのである。

しかし科学者の頭は固い。彼らの頼みの綱は伝統と権威である。そのため真理に接近するかわりに科学的官僚主義の網を張りめぐらせようとする。ある意味では今日の科学は中世の宗教と同じ状態だと言っても過言ではない。一部の科学者はきわめて進歩的であるにしてもまだ大半の学者は超保守的で自分たちが定めた法則からはみ出た事象は認めようとはしないのである。

ところが大自然は人間の作った法則など眼中にない。人間が進歩したければ自然にしたがって研究をすればよいのであり、これこそ宇宙の法則なのである。「神は宇宙とサイコロ勝負などなさらぬものだ」とアインシュタインは言っている。

マルコーニ、テスラ、エジソンらは時々電磁波でない不思議な信号を大気圏外から受信したと報告したことがある。しかし研究費の援助を停止されるのをおそれ、彼らはそれ以上の研究をしなかった。そのため、テスラはゼネラル・エレクトリック社に恨みをいだ



くようになったし、シユタインメツとウエステイングハウス社との関係が悪化したこともある。なぜ実業界は狭量なのか。理由は簡単だ。儲からないことに金を出したくないからだ。

### 地球に似た惑星は他にも無数にある

保守的な科学者や実業家が「利益のない研究や生産」に無関心である一方地球のような惑星は宇宙空間に無数に存在するという考えは、学者の嘲笑にもかかわらず大衆の意識に浸透するようになってきた。真に進歩的なアイデアを出すのは学者か素人か、いったいどっちなのだろうか？

一六〇〇年の恐ろしい事実を思い出してみよう。「地球以外にも無数の世界がある。そのなかには地球よりもっと輝かしい栄光に満ちているのがある」と述べた若きジェズイット僧、ジョルダノ・ブルーノは、今日のだけでも知っていることを主張したというだけの理由で火あぶりの刑に処せられたのである！だがそれにしてはブルーノはあの驚くべき知識をどこで仕入れたのだろうか？単なる直感で知っ

たとは考えられないものがある。

しかしこれほどに歴史が変化してもなおかつ次のような、およそ信じられないほどの時代遅れな言葉を吐く科学者がいる。

「太陽のように惑星を持つ星が他にも存在することを証明した者はいない。我々は宇宙でも特異な存在なのかもしれないが、行って見た者がいない限りだれにもわからない」

これは一九三〇年代から四〇年代にかけて一流の天文学者だったフォレスト・モルトン博士の言葉である。

多数の科学者は星間距離があまりに広大なために宇宙旅行については楽観的ではない。親子数代にわたらなければ遠い星にまで到達して帰還できないからだ。

だがその心配はないだろう。地球人が出かけてなくても、どこかの惑星に進歩した人類がいるかもしれないからである。私たちに必要なのは彼らの「電話番号」を知ることだ。もしすぐれた英知を持つ人類が我々地球人に連絡を試みているとすれば、こちらの「受信機」が故障しているのかもしれない。電波望遠鏡では不可視波長の電磁波しかキャッチできないのだ。

### 「精神」こそ物質の創造者であり支配者である

そんなことは空論だと言う人があるだろうが、ジェームズ・ジーンズ卿の言葉を引用してみよう。

「今日では世界は機械的なものではないという考え方が主流になろうとしている。宇宙は巨大な機械というよりもむしろ巨大な「想念」であるように思われる。精神はもう物質の領域に偶然飛び込んで来た侵入者とは見られなくなった。精神こそ創造者であり、物質界の支配者ではないかと考えられるようになってきたのである」

あのすばらしい映画にもなった「紀元二〇〇一年宇宙の旅」の著者であるアーサー・C・クラークの言葉を借りれば「宇宙は私たちが考える以上に不思議であるばかりでなく、私たちが考えることができる以上に不思議なものなのである」

既知の電磁波スペクトルだけを見ても——それらのエネルギーの場に光速の五百万倍の速度（他に適当な言葉がない）を与えられる可能性があることは別として——驚くべきことだが、このエネルギー場を凍結して私たちが「固体」と呼んでいるものに変化させることができるのだ。この精神の領域と物質界との「結合」は現在の科学知識に相反するものではない。

科学には必ず壁が立ちただかつていて、これにつき当たるときがくるが、そのときは自然が門戸を開いてくれる

のであるから、それを待たねば解決法は出ないだろう。

重力、電気、人間の思考、物質、エネルギーの観念などについても、我々の考え方を根本から変えてしまわねばならぬ時期がさし迫っている。この思想革命が成就すれば、人類の新しい船出への道が開けるはずだ。その時こそ人間は全く新しい理論によるエンジンを完成し、一生を犠牲にすることもなく遠くの星を、他の世界を訪問するようになるのだ。

ソビエトの科学アカデミーも、我々が「重力」と呼ぶあの不思議な吸引力を説明して明日の超大馬力エンジンを駆動する新動力の制御法を発見するために必死の努力を続けている。

### 歴史上の偉人たちは真実を知っていた

歴史上の大思想家たちは自分の考えを伝えるのにいろいろな比喩や象徴に頼らなければならなかった。それもきわめて巧妙にひかえ目である。その考えが自分たちの生きていくうちにはとても大衆に理解されないように自然が目に見えぬ「壁」を張りめぐらしていることを、彼らはよく知っていたからだ。偉大な古典を読むと多くの科学者、哲学者、数学者たちがどんなにすぐれた文章家であり、自分たちの思想

をうまくばかしていたかがよくわかる。彼らの「暗号」は、同時代の人中でも特にすぐれた少数者にしか解読されなかった。古代の僧侶や魔法使いはこうして不敬な民衆や高圧的な権力者から秘密の奥義を守りとおしてきたのである。

魔法、錬金術、占星術、その他これに類するもの（選ばれた少数の弟子にしか伝えられなかった秘法）の大部分は、今日の科学では常識となっていることが多い。もしガリレオがレンズを組み合わせた「魔法の筒」で星をのぞくのがもう百年早かったら、彼は間違いなくジオルダーノ・ブルーノのように焼き殺されてしまっただろう。

「不思議の国のアリス」の著者ルイス・キャロルも「ガリバー旅行記」を書いたジョン・ササン・スイフトも数学や医学、天文学などに詳しく、時勢よりかなり進んでいた。だからこそ彼らは当時、子供の読物としか思われなかった風刺文学の形で書かざるをえなかったのである。

このことは「アラビアン・ナイト」など空中飛行をあつかった作品についても言えることなのだ。

## 紀元前四千年？の世界地図

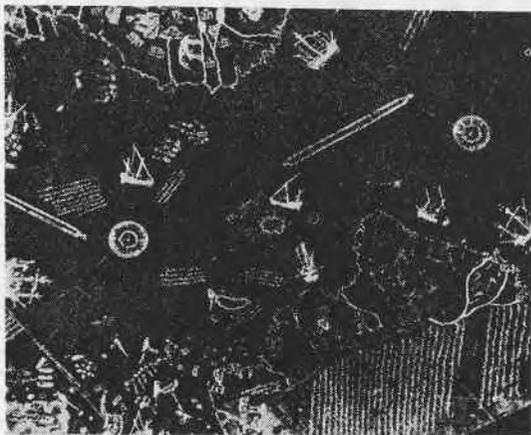
一五一三年にトルコ海軍のピリ・レイス提督は、ローマ、フェニキア、ギ

リシャ、バビロニア、スメールの地図製作者たちが作った古地図の写しの一大コレクションを入手した。このピリ・レイスのコレクションは現在ではほんの断片しか残っていないが、それは明らかに空中写真を基にした世界地図で、その原板は紀元前四千年か、おそらくそれ以前に撮影されたものと思われる。

現代の地図製作専門家の意見ではこれは現在エジプトのカイロのはるか上空から地上を撮影したものだ。

ピリ・レイスの地図は写真の遠近法どおり近景は大きく、遠景は小さく歪んで描かれており、最近になってワシントンの米国水路局のスタッフの手によって正常な形に投影されるまで、ピリ・レイスの時代からずっと、解読不能の奇妙な地図としか考えられなかったのである。ところが一度解読されると驚くべき事実が明らかになった。これは立派な地図であるばかりでなく、南極付近にも未知の島々が描かれていたのだ。

それから国際地球観測年（一九五七年）の間に米国の一四三機動部隊が、二マイルから三マイルにも及ぶ厚い水を通して地震波による測定を行って、



●トルコ海軍のピリ・レイス提督は古地図のコレクションを入手した。現存するこの1枚はむかし空中から撮影されたものだと言われている。

ピリ・レイスの古地図が細部まで正確で信頼できるものであることを証明した。やはりこの地図ははるかな高空の一点から撮影されたのだ。しかも今から四千年以上も昔に！

空間から見おろしてこの地図の原本を作成したのはいったい何者だろう。そして、ノーベル賞受賞物理学者のエンリコ・フェルミがその著書で問いつけているように、彼らはどこにいたのだろうか？

## 宇宙からの信号は地球へのメッセージか？

L・ジョージ・ローレンスの最近の

体験、特に生物信号の記録（オリジナル・テープはワシントンのスミスソニアン国立博物館の科学文書保管所に保存されている）こそは、宇宙に生命が存在することの明白な証拠となるだろう。ローレンス自身は、あれは宇宙からの郵便配達人の「郵便ですよ」という呼び声ではなかったかと考えることがある。彼は更に、このようなメッセージを受け取るほどの人はあのピリ・レイスの古地図を作成した宇宙人の子孫なのであるまいか、とさえ主張するのである。そのような人たち（たぶん彼自身をも含めて）はひょっとしたら、こういったメッセージの解読能力を遺伝により授かっており、生物信号の形で送信されて来た宇宙通信を理解できるのではなからうか？ それともこれらの生物信号は、方角を失った宇宙船に対する搜索・誘導ビーコンなのだろうか。

ローレンスの記念すべき発見は、彼が一九七一年一〇月号の「エレクトロニクス・ワールド」に「宇宙通信」と題する論文を発表し、その中で次のように述べたあとでなされたのである。

「——私たちは、行方不明となった宇宙船についてのあのインディアン伝説が事実かどうか実際に当たってみた。

その宇宙船はビスガ・クレター（州間道四〇号線の近く）から遠くないモハービ砂漠の地下深く埋もれている

と語り伝えられている。いろいろと尾ひれのついたこのインディアン伝説によれば巨大な宇宙船が墜落して地下深くめぐりこみ、溶岩の大流出の原因となつたという。

ローレンスが誠実ですぐれた科学者であることは確かである。彼の結論には正しくない点もあるかもしれないけれども、全部が間違っているわけではないことも確実である。彼の考えには少し空想的にすぎる傾向があるにしても、歴史上のすぐれた発明発見は、必ず最初は一風変わった狂気の沙汰だとか考えられる、ということをお忘れはならない。発見者や発明者の正しかったことが証明され、そのあとで初めて、風変わりな点や特異な点はすべてその天才のあらわれだったということが理解してもらえるものだ。

未知の科学の分野の研究は時間を食う手さぐりのもどかしい仕事であり、その評価には十分の注意を払う必要がある。前後関係全体の中から一つか二つの誤りをとりあげていっさいを非難し、貴重な研究を狂人のしわざとして葬り去ってしまう——これは人類がしばしば繰り返してきたあやまちなのである。

彼は語る。「私たちは一九七二年の三月と四月に実験を行って成功した。四月一〇日午後一〇時三〇分（太平洋標準時）に明らかに宇宙からと思われ

る異常な信号を記録したのだ。この現象は弱いものではあったが、他に電波妨害はなかった」

### 人類は精神的革命を経験しつつある

現代という重大時期に、人類は想像も及ばぬほど遠大な精神的革命を経験しようとしている。マスコミによって報道されたのはそのごく一部にすぎない——それにその全部が確実な根拠によるものでもない。しかし、まだ割合に原始的な進化の段階にある私たちがそのような広大な前途の可能性に目覚めるなら、銀河系のはるかかなたにいる地球人以外の知的生命についても考えてみないわけにはゆかなくなることだろう。

それらの知的生命は、科学においても英知においても、卓越した意識においても、私たちよりも百年以上も、いやことによれば百万年以上も進化しているかもしれない。アメーバには自分を顕微鏡で観察している生物学者の存在も性格も感知できないように、彼らの次元も私たちの英知を超越しているかもしれないのだ。

私たちが研究者の言葉を受け入れようとして受け入れまいと、いっさいの証拠（それに平均の法則）が、私たちの銀河系からはるかな星雲のかなたまで進

化した文明の存在するを指し示している。宇宙からの生物放射線にふれた地球人も一人や二人ではないこともまた確かな事実である。

宇宙をもっとよく理解しようとする人間精神の影響を排除しようと、物質主義科学はあらゆる試みを企ててきた。その結果的論は衰退し、天文学は無味乾燥な不毛の事実と数字の集積だけになりはてた——そこには生命も目的も意義もない。まるで私たちが堪え忍ばねばならない大きな災難のようになだ。

だが「新しい物理学」と超心理学の研究が盛んに行われるようになり、保守的な天文学者たちも、ESPのような非物理学的——少なくとも超物理学的——事実が存在することを認めないわけにはゆかなくなってきた。

最初の二、三代のコンピュータが出現してからというもの、人類はその感覚を発達させるのに——顕微鏡的にも宇宙的にも——ますます技術に頼るようになった。そのことは、無限に広い鋭敏な精神エネルギーにとつてはしばしば有害であり、逆に言えば精神を退化させるような技術を創り出す原因となつてしまったのである。

私たちの身体と頭脳を形作り、それに活力を与える精神は、宇宙のいかなる地点とも決して無関係ではありえないのだ。

人類以外の生命——それが大熊座の付近にいようと銀河系のどこにいようと——との交信は人類の能力で可能なのだ。それは以上述べてきたことからおわかりいただけだと思う。その方法をヒエロニムスの機械によろうとも、ローレンスの生物エネルギー場の受信機によろうとも、それとも直接に心から心によろうとも、たいした相違はないといつてよい。

既成科学の方法論を——そのわずらわしい儀式と伝統もいっしょに——頑固に押し進めることこそ、宇宙のあなたに采える文明とホモ・サピエンス（人類）との交信への道を開くのに最大の障害となるかもしれない。

既成科学は、あらゆる研究者を電磁波スペクトルのせまい範囲のみに閉じ込めた上で他の非科学的な宇宙通信研究はいっさい拒否し、金力と権力を駆使して従来の研究をかたくなに続けてゆくことだろう。

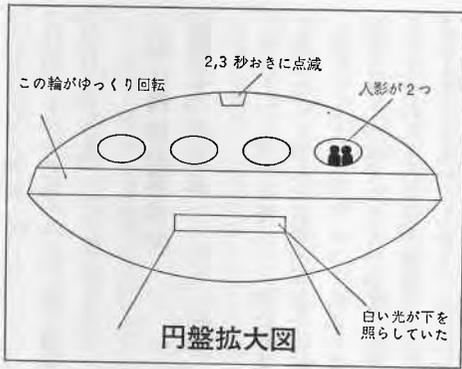
巨大な皿型電波望遠鏡では受信不能な宇宙通信をすでに受信した者がいることを、既成科学は決して承認しようとはしないだろう。そして近年人々が金と時間と努力をつぎ込んで建造しようとしているのは不適当な「電話交換台」なのではあるまいか。

本当の二一世紀の宇宙通信制御盤は生物放射を基礎としたものになるのではないだろうか。

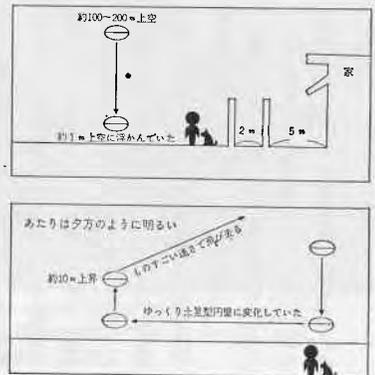
# UFO 目撃レポート

- ① 匿名希望 (14) 八東中学2年
- ② 一九七三年8月4日午後10時頃
- ③ 千葉県千倉市の千倉海岸
- ④ 晴れ
- ⑤ 5〜15分間
- ⑥ 一緒に散歩していた旅館の犬。この犬、円盤が着陸するとすぐくふるえてこわがっていた。
- ⑦ 倍率10倍の双眼鏡。
- ⑧ 直経30〜40メートルのだ円型の白熱電球 (点灯時) と同じようなオレンジ色。窓のようなどころに人影らしいものが見えた。
- ⑨ 海岸から10メートル位先の上空(約)200メートル上空からすごい速さでだ円

- ▼ 凡例 ▲
- ① 氏名(年齢)・職業・学校名
  - ② 目撃日時
  - ③ 目撃地点
  - ④ 天候
  - ⑤ 目撃継続時間
  - ⑥ 同時目撃者
  - ⑦ 観測機器・方法
  - ⑧ 物体について
  - ⑨ 飛行状態その他
- ( ) 内は目撃者の住所



形の光体が飛んできて、海面から1メートル位上空に浮かんでいた。飛び去る時は10メートル位上へ上がって右手上空に飛び去った。光っていたのでよくわからないが、何度も土星型円盤に変化したようだ。速度を増すにつれ赤

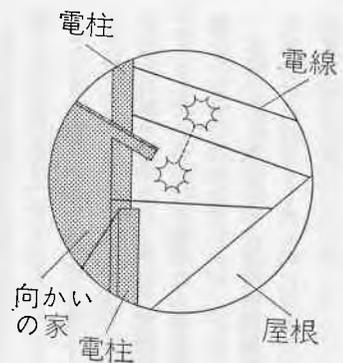


っぼくなった。

双眼鏡で見たときは、すごくまぶしくて見ていられないほどだった。土星型円盤に何度も変化するのは、どういう意味があるのかわからないが、円盤の形が変化することを確かめたときは驚いた。(〒680-06 鳥取県八頭郡八東町日田七九三)

\* \* \*

- ① 工藤由利子 (中3) 桐朋女子中学校
- ② 一九七五年1月15日午後4時30分頃
- ③ 自分の家の2階の窓から
- ④ 晴れ
- ⑤ 約30秒
- ⑥ なし
- ⑦ 肉眼と双眼鏡 (10倍) Four Star Binocular
- ⑧ ⑨ 1月15日午後4時30分頃部屋の両戸を閉めようと思いきや空を眺めると、南西の方向に1等星より少し



大き目の星のようなものが輝いていた。まだ4時30分頃だからかなり外は明るかった。特に南西の方向は明るさが強く、夕日が薄いだいだいがかっていた。雲も少しあった。

この明るさからして1番星にしては早いと、とっさに双眼鏡をとりだしてピントを合わせてみた。するとその物体は激しく輝いて形が変わらずパッパッと長い間点滅しては輝いていた。10秒位すると上の方へ少しずつ動き出して、それがわかったのは同じ状態で見ていて図のように電線の下にあった物体が上へ上がっていったからだ。ゆっくり上がっていくと、光が少し弱まりそのまま消えてしまった。そのあとは影も形もなくあたりにはどこにも星が出ていかなかった。

(〒122 東京都調布市仙川町一―一五 一四)

\* \* \* ① 匿名希望

②一九七五年2月20日午後10時15〜20分頃

③自宅ベランダから

④快晴、夜だったので星がよく見えた。

⑤実際はもっと長かったかもしれないが見た時より木かげにかくれたのか、消えたのか、そうした時間を入れると20秒だった。

⑥なし

⑦肉眼

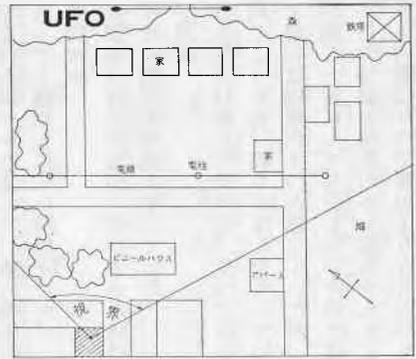
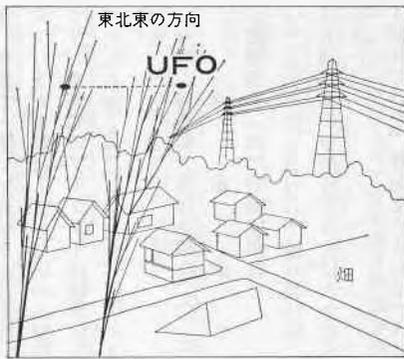
⑧だ円形のように赤色、手に定規を持って伸ばした時の3ミリ位の大きさ。

⑨どちらかというが遅いスピード。仰角5°。推定飛行方向は東から北へ。飛行中の形体の変化なし。間をおかずチカチカチラチラした赤色光。

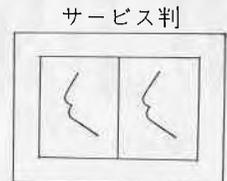
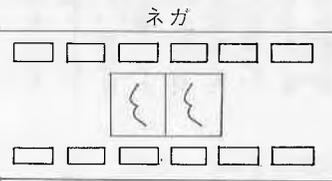
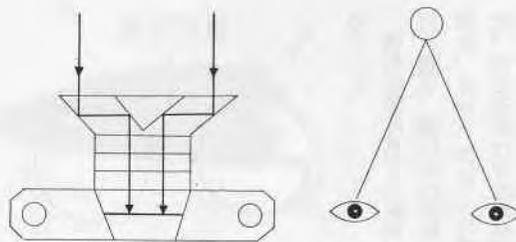
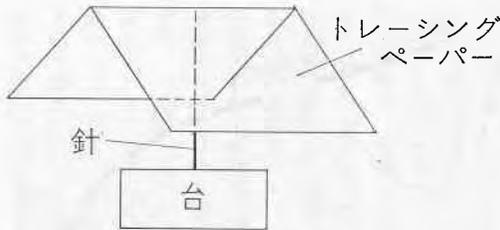
明確なUFOの形、たとえばアダムスキー型とかその母船のような形はしていませんが、以前見たときと同じような予感が感じられ今回赤色だ円形のUFOを3回、白色円形1回、赤色だ円形1回をそれぞれ目撃しました。

ちなみに日時は、1回目が小学生の時、東京・中野区真上、昼。2回目が去年の夏の夜、3回目も去年で11月15日午後6時頃、南の空で点滅しない赤色だ円形。そして4回目が同年12月1日。

私はUFOが見える時はきまって歓喜の情が湧いてきます。円盤から出てくるスピン波の影響かもしれない。



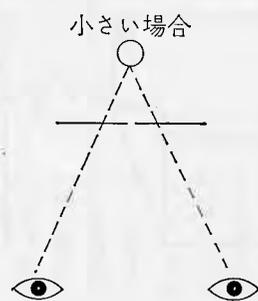
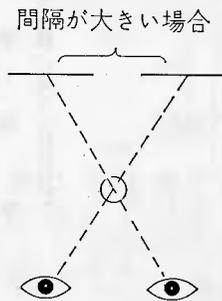
しかし目撃したときには自分だけか、あるいは多くて2人なので人に完全に円盤だということが言えないのが実情です。また音を発せず光度変化も一定していないのです。赤色発光は飛行機ではないのは明らかですが、ヘリコプターと間違えることもあると言う友人もいます。そういうことがあるのでし



ようか。もしできれば誌上でお答えいただければと思います。今度の場合その日に日本テレビ「木曜スペシャルUFO特集」で放映して空を映した後、空を見上げていた人も大勢い

ると思いますからヘリコプターでないということがわかると幸いです。次に貴誌への感想ですが、表紙はワラデスとのコンタクトまで夢見ていた僕としてはNo9以前のよう写真の方が落着いていいと思いますが、いまだに「UFOと宇宙」を知らない人のためにはNo10の方がわかりやすいと思います。

No9の内容で「ジョージ・アダムスキーはまだ影を投げかけている」「UFOは人類を宇宙に導いている」「仏典の中にもあった天竺人の地球来訪」は特集号だけあって特に良く、No



9、No10を通してカイネマティックスについて興味深い記事があり、目を見張った。これについてテレビでやって見たという次のような装置を使ってカイネマティックスを実験してみたところ、1メートル以上離れた所からでも実際にクルクルと回転しました。

UFOの撮影についての意見で、それも一眼レフに限られますが、立体（ステレオ）撮影を行うといいと思います。ステレオ撮影とはご承知のように前頁の図のようにするもので、このような立体写真測量をはじめ医学、気象、天文観測、交通事故調査などにも利用されていて、以前はステレオカメラというものがありませんでしたが、今は35ミリ一眼レフ用のステレオアダプターを使います。これの利点は第一に、前頁の図のように写ることにあります。つまりUFO写真でよく問題になる写真のキズではないかとか、後から書いたものではないかということに証明の役を果たすこととなります。2つを合わせてみればわかるからです。これでも信じない人がいたら唐変木と言えるでしょう。

また、立体になっているので方が一偽作しようというワルがいたとしても同じものを位置をずらして2つ書かねばならず、2重露出したとしてもカメラの手前で細工すると遠近感があるのてわかってしまいます。

ステレオ・アダプターにはどの一眼レフにも使えるステッツ（イツキ産業）のブランド品、アサヒペンタックス用の専門的なものなどがあって写したのを見るスライド写真用ビューアーもあります。またプリントからそのまま壁に写したのでも立体視できます。こう書いてはいるのですが、小生、不況で一眼レフカメラが買えないので、まだ実験はしていないのが実情です。ただこのアダプターは標準レンズにしか使えないことをつけ加えます。

（干瀧 埼玉県大宮市小深作二〇三）

\* \* \*

①笠間茂夫（31）空調技術者

②一九七五年二月十一日午後6時15分

③北浦和駅から徒歩で5分位のところの真上。

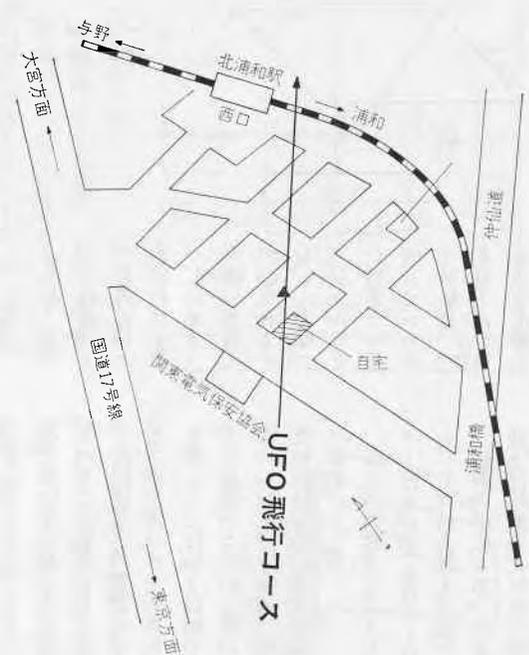
④晴れていた。星がたくさん出ていて空全体が賑やかな感じで、飛行物体があっても識別しにくい環境だった。

⑤約20秒

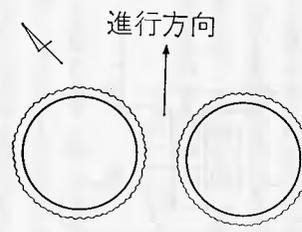
⑥妻がそばにいたが、呼びよせた時はすでに判別不可能となっていた。

⑦肉眼

⑧大きさは約5センチ位。2つで星と同じような色。周りがぼんやりしていて最初は円盤が2つと思っていたが、間隔を一定にして進行していたので後からの知識を得たのから総合するとどうも円盤は1つで窓のようなものが2

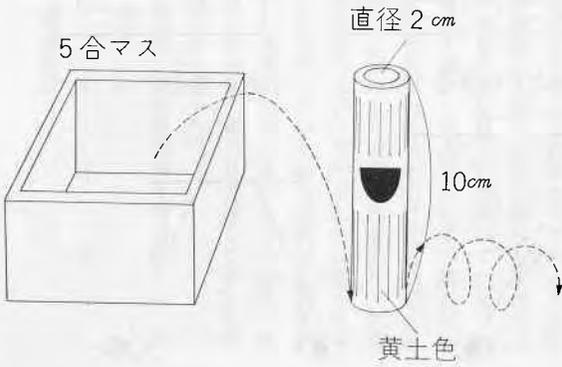


円盤がかなり出沒したというものと同じものかもしれないと思ってる。  
（干瀧 埼玉浦和市 常盤九一五一）



つあったのかもしれない。機体は注意しなかったで見えなかったのか気がつかない。音はなかった。

①畑加津雄（電々公社社員）



飛行状態は真上で南西から東北の方向を飛び、飛行中の形体の変化、色の变化、光度の変化、点滅などなかった。推定速度は普通の飛行機位。音はない。高度は約1キロ。  
この私見たのは読売新聞に出ていた7日から15日にかけて青梅市付近で

②一九四五年2月頃

③自宅の台所

④約20秒

⑤夫の妹(当時八歳)

⑥台所の真中に置いてある大火鉢に妹と二人で温まりあっていた時、突然図のような物体が台マスから飛び出し、約5秒静止したあと、図のような動き方で流し(台所)の裏へ消えた。

(〒6師 京都市右京区太秦東蜂閣一五電々公社社宅二二〇八号)

\* \* \*

①匿名希望(女性、18歳)

②一九七五年3月31日午後8時50分から5秒

③自宅付近

④晴れ

⑤5秒間

⑥わからない

⑦肉眼

⑧ステイブン・ダービシャー少年が写真を撮ったような形の物体。つまりアダムスキー型のもので、その大きさははっきり言えないが、2/3メートル、もしくは5/6メートル位あったかもしれない。物体は白っぽく輪郭がわからないほど周りがぼんやりとしていた。おそらくフォース・フィールドではないか。

⑨私の家の近くは木更津の航空自衛隊の基地があり、よく飛行機が飛んでいるのを見かけるのだが、この円盤は低

く飛ぶ飛行機よりもっと低く、そして飛行機の10倍位の速さで飛んでいた。しかもその飛び方は直線的で流れるような感じだった。「UFOと宇宙」ではよく見ていたが、まさか自分がそれを目撃するとは夢にも思ったことがなく、びっくりしてしまった。方向は北から南の方向へ飛んだ。

(千淵 千葉県木更津市中央二一八一八)

\* \* \*

\* \* \*

①矢田智裕(13) 埼玉県上福岡市立第二中学校2年

②一九七五年4月7日午後6時22分頃

③埼玉県上福岡市北野二丁目一二二(自宅付近)

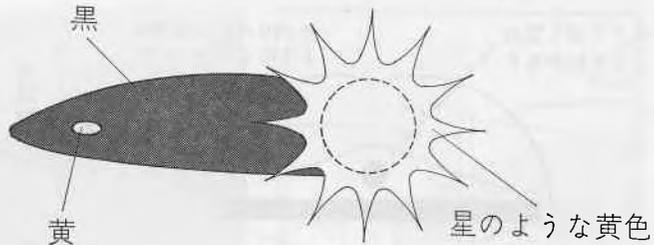
④曇り

⑤約3~5分

⑥矢田一江(母) 山口次郎(友人) 山口達夫(友人) 近所の主婦たちの計11人。

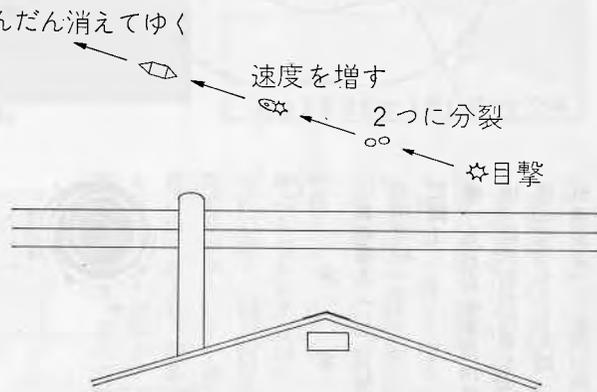
⑦肉眼。3倍オペラグラス、6×24%ファインダー

⑧物体は3回形を変えた。まず最初発見したときは星のように明るく輝いていたが、しばらくすると大きくなり、明るさも増した。次に大きさも前の半分ほどになり、2つに分裂した。色は黄色。次に流線形になり前方には黄色く光る所が



あり、後方には星のような黄色い色をしてる部分があった。その次は真中に四角形、両端には三角形の羽根のようなものが出てきた。その時の色は三色に分かれていたが、何の色だったかははっきりしない。

⑨自宅の前方の坂道で遊んでいたら、友だちが星のように光っているものを発見、方向は北だった。その物体は点滅していた。しばらくすると西の方へ動いた。やがて二つに分かれてそのままの状態だった。それを3倍のオペラグラスで見たが、球体には見えな



が、だんだん薄くなり、静かに消えていった。

(千淵 埼玉県上福岡市北野二一二)

\* \* \*

①井口和男(会社員)

②一九七四年9月6日午後8時30分

③静岡県用宗海岸

④曇り、時々わか雨

⑤肉眼で5/6分、双眼鏡で10分。

⑥会社の人たちで鈴木健司、中丸正志、大杉登、朝日奈とおる、何組かのアベック、私たちより離れた所で反対

った。それで望遠鏡をのぞくため家の中に急いで入り、ファインダーをのぞいたときはすでに形は変化していた。その形はスケッチのような流線形だった。物体のスピードはだいたいぶあつた。そのあとはスピードは同じくらいだが形を変えて飛行していた

方向を見ていて消えざわを目撃したという地元の人2人。

⑦ 双眼鏡、肉眼

⑧ 赤いウズを巻いた火の玉。オレンジ色になり3つのだ円形の先に、さらに皿を2枚合わせた円盤状に変化する。それに30メートル以上の細長い葉巻状の光。

⑨ 厚い雨雲のため星も飛行機も何も見えない所から急に赤い小さな火が雨雲のかなり下の方に現れた。(双眼鏡ではまっ赤な火の玉がウズを巻いていて火が飛び散っていた)。スピードはかなりゆっくりでフラフラしながらラセン状に手前にゆっくり進んで来た。その途中でオレンジ色になると同時に3つに分かれ、今度は1つになって数倍の大きさになり、燃えるようになるようになって形が皿を2枚重ねたような状態に変わり、その位置に2〜3分位滞空していた。月より明るかったようだ。

そのうち初めと同じ赤い火球に瞬間的に変わるとラセン状になり、あっという間に後ずさりして消えてしまった。この間数秒。消えたあと、あたりの雨雲の中に細長い30メートル以上の黄色の光が動かずに光っていた。それは雨雲の中から光を出していて、双眼鏡ではよく見えるが、肉眼ではわずかにわかる程度。5分以上光を出していた。距離は30〜60メートル、音は全く

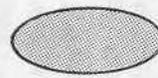
出していなかった。

その様子を図で説明すると、

1. 厚い雨雲のため、星も飛行機も何も見えないところから急に雨雲の下に現れ、双眼鏡では真っ赤な火の玉がウズを巻いてぶつぶつと飛び散っていた。
2. 2分間(朝日奈)。そのあとふらふらしながらかなりゆっくりしたスピードで手前に来る。
3. 大きくかなり近かったので双眼鏡で見えなかつた。色がオレンジ色に変わると同時に3つに分散し、1分後かなりゆっくり手前に来た。

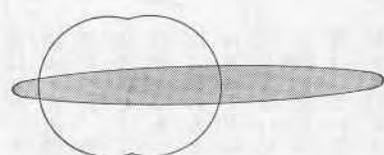
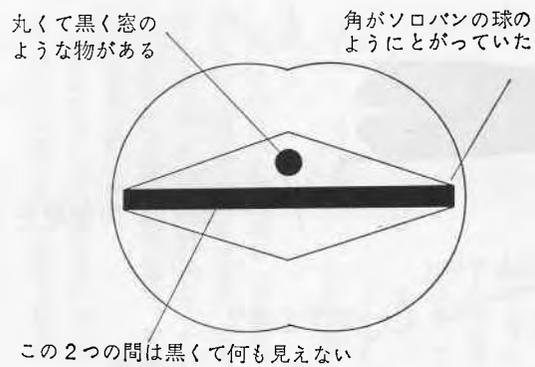
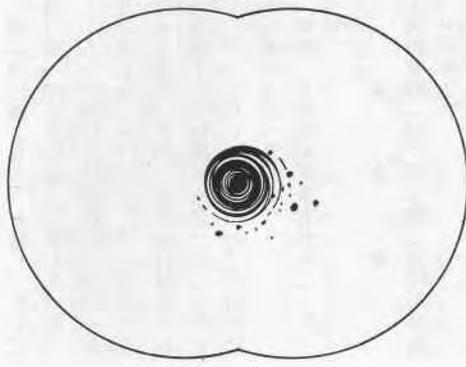
3. 大きくかなり近かったので双眼鏡で見えなかつた。色がオレンジ色に変わると同時に3つに分散し、1分後かなりゆっくり手前に来た。

3分滞空、双眼鏡を3人交代でのぞいた。周りが厚い雲におおわれていたので、ひととき周りが明るくなった。鈴木、井口、中丸はこの動きについて



てこういつていた。上下に振動していた、双眼鏡で見ている間にこちらに進んでくるなら大きさが変わってくるはずなの

に止まっているので、一定だ、た。  
4. 初めと同じ小さい赤い火の玉に瞬間的に変わり、ふらふらとラセン状にあつという間に後ずさりして消えた。数秒の間。  
5. 消えたあたりの雨雲の中の方から30メートル以上の細長い黄色の火が動かずに5分以上光っていた。肉眼ではわずかし見えなかつた(大杉、中丸、井口)。  
(千一柳 静岡県浜松市砂山町一八



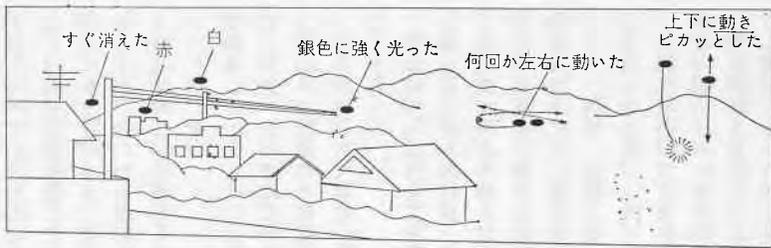
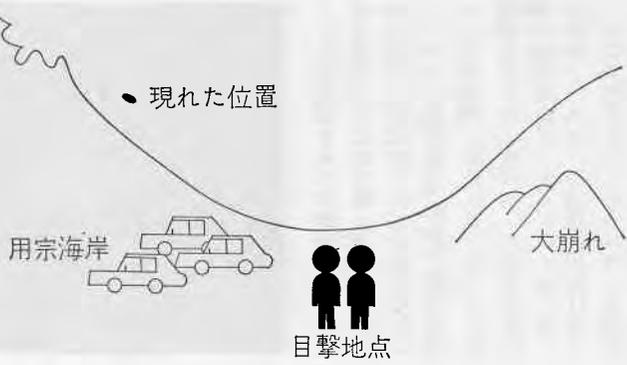
① 鳥嶋信久(13) 長崎県諫早市立北諫早中学校一年

記録1

● 一九七五年3月10日午後6時45分頃、信久君が汽車を撮るため2階の屋根に登ろうとした時「兄ちゃん! 何か飛ばよっ」と弟の音がするので、見

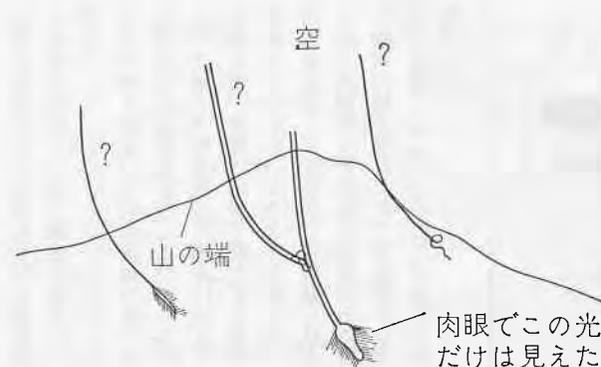
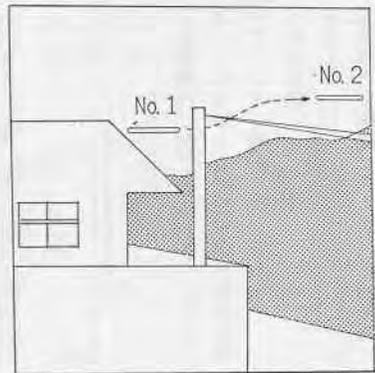
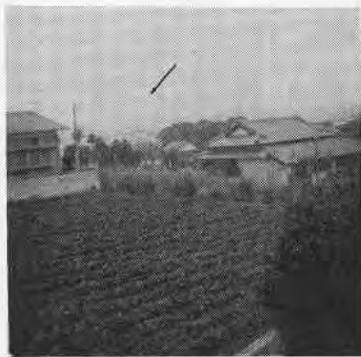
- ⑥ 鳥嶋弘之（小4、弟） 藤井攻（信久君の担任） 原口和幸（同中学の先生）
- ⑤ 約10分
- ④ 晴れ
- ③ 自宅2階の窓から
- ② 一九七五年3月11日午後4時30分頃
- ① 記録2

ると南西方向に計7個の円盤らしき光る物体を見つけた。かなり遠方の山手に赤、オレンジ、金色と光っており、その中の2個は強く光った。音は全くしなかった。急いで手もとのカメラのシャッターを2回切った。同時目撃者は弟、いとこ、母の3人。



の計4人。  
 ⑦ スケッチ、肉眼、写真撮影  
 ⑧ 母船一機  
 ⑨ 私は学校で鳥嶋君からの報告を受けたのでより詳しくチェックするため午後4時、同中学校の先生（原口氏）と共に鳥嶋君の自宅へ急行、昨日見たという部屋から現場のスケッチをし、兄弟の意見をもとにスケッチに7個の円盤の位置や大きさを印す。

その後2枚のフィルムを目撃参考記録として残そうということになり、本人が続げざまに写した。（No.1、No.2写真参照、写真撮影時に本人は何やらキラッと光るものを見たというが、我々は肉眼では確認できなかった）



● 一九七五年3月13日  
 記録3  
 学校で岩下、福本両君から「昨日12日鳥嶋君の家へ行き午後7時頃、再び南西の山すれすれの空に一個の光る物体を見た。その物体がスーッと大村湾の海面へ下降し、途中で消えた。かなり

撮影後、直ちに私と鳥嶋兄弟と3人で写真店に出かけ、特に昨日は10日の撮影の事情を説明して丁寧に扱うことを願いネガ傷など作為的なことをしないようにし、14日後の仕上げを待つことにした。

暗かったし、写真は写したけれど心配だ」との報告を受ける。撮影者、福本君（No 3 写真参照）。このときの目撃者は信久君を含めて計3人。

記録 4

●一九七五年三月十四日

私（藤井）一人で写真店に出かける。

「まだ現像元より送って来ない。こち



らから注意書きをつけ送付した（注意書き参照）のでおそらく焼きつけその他の事情で手間をとっているのです。17日か18日にまたおいでください」との返事。

記録 5

●三月十八日

信久君が一人で、写真店に出かける。

「あなたが写したという10日の写真は

真黒で写っていませんでした。でも最後の2枚は位置を違えて光の線が空に写っています。ネガの傷ではないと思います。念のため最初の1枚を調べさせますので、しばらくお貸しください」とのこと。

記録 6

●その後、日付けははっきりしない。

2枚のネガをそれぞれ拡大してもらいネガの傷や汚れではないという証明をしてみよう。

以上について考えてみると、確かに写真を見る限り飛行機、雲など単なる自然現象やネガの傷とは思えない。2枚の写真を撮り終えるのに5秒とかかからないうちに光の線がはっきりと左から右へと移動し距離も高さも違っていることがわかる。

それに最近続けざまに鳥嶋君の近所の小学校の子供たちも同じ方向の山手や空に物体を見ていること。また間もなく開港する日本初の海上空港（長崎空港）の近距離であることなど考え合わせ、単なる見誤りとして片付けられないと思う。

写真屋で調べてもらったところ、写真屋としての証明をしてくれた。その文章は「当店でネガ及びプリントを調べた結果、キズ、汚れ等は見あたりません。株式会社 カメラの城島」。

（報告者住所・〒84 長崎県諫早市城見町一〇〇〇、諫早市立北諫早中学校

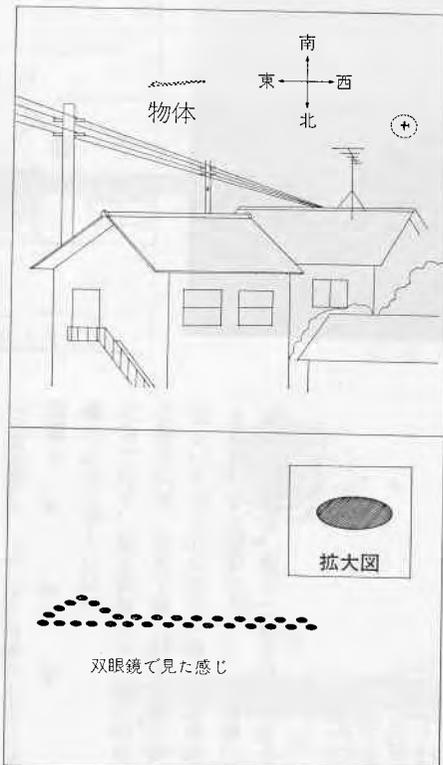


藤井文

\* \* \*

⑧ 黒に近いグレイの色をおびた長円形の物体で約30〜40個の物体が集まっていた。

⑨ 仰角20〜30度、方向は南東の空の薄い黒の中を東に向かって飛行していた。ラボックの光体の片側だけのような感じで、全体は肉眼で見えなかった。一本のエンピツかハシのような感じで、母船かと思っていたが、双眼鏡で見ると30〜40個の2列に並んだ長円形の飛行物体の集まりだった。高度は5000〜6000メートル以上と思われる。



① 池田雅行 (26) イラストレーター

② 一九七五年五月二十一日午前0時25分頃

③ アパート2階のベランダから

④ 約30秒間

⑤ なし

⑦ 肉眼と双眼鏡 (テルスター 30×50)

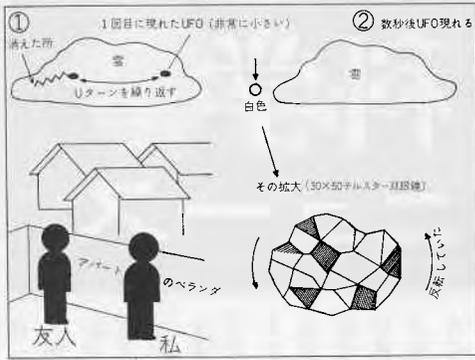
(〒108 東京都中野区若宮二二二〇一〇、白樺荘)

\* \* \*

① 行田実

② 一九七五年五月七日

③ 中野区若宮町の友人、池田雅行氏宅



のベランダから  
④ 晴れ  
⑦ 肉眼と双眼鏡 (テルスター 30×50)  
⑧ 発見の第1回目は、午後2時頃、頭上の雲の中に出たり入ったりする黒い小さな物体を友人が目撃、僕に告げてくれる。初めのうちは鳥だと思っていたが、よく見ると翼らしきものはなく、弧線を描きながら凄いスピードでUターン、ジグザグ飛行を数秒間くりかえして雲の中に消えてしまった。その間友人池田氏は双眼鏡をのぞいていた。

2 回目はその黒い物体が見えなくなってから直後で、この時も友人が発見して僕に「あそこを見ろ」と1回目と同じ所を指さした。見ると白いかなり大きな円形状をした物体 (黒い物体

⑧ 1 回目は全体が銀色で中央がオレンジに光っていた。2 回目は銀色で中央

- ① 後藤文夫 (12) 落合中学1年
- ② 1 回目 一九七四年六月二十日 日中
- 2 回目 一九七五年三月五、六日 頃の昼間
- ③ 新宿区中落合の落合中学校 (1 回目)
- 中落合のミツバ児童公園 (2 回目)
- ④ 1 回目・薄曇り 2 回目・晴れ
- ⑤ 1 回目・20 分位 2 回目・30 秒位
- ⑥ 自分のクラスの男生徒15人 (1 回目)
- 児童公園の子供たち3~4人 (2 回目)
- ⑦ 両方とも肉眼

の約30倍) が浮かんでいるのが見えた。僕は友人の双眼鏡を借りて見るとその物体は、多面体になっているようでクルクルと反転しながらゆっくり動いているのがわかった。その時池田氏は素早くカメラをとり出し、シャッターを切った。

その時、そこを通過した航空機はなく、また地上から空中に物体を舞い上げるほどの風は吹いていなかった。僕がこれら2つの物体を円盤だと確信できた理由は全く異質でしかも今まで見たことのない2つの物体が同じ位置、同じ時刻に現れたことである。

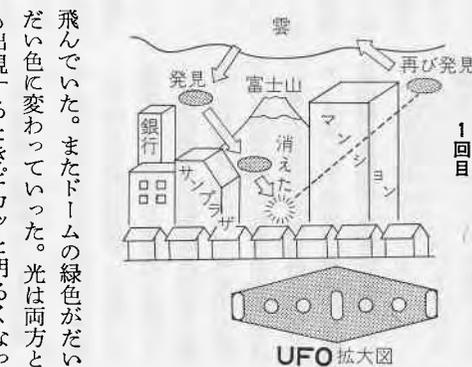


下から見たスケッチ

⑨ 1 回目は西から東へ進み、それから北、西へと飛行を繰り返しかえした。2 回目ははじめ水平飛行していたが、突如消えたりした。



① 四 東京都新宿区中落合一一四





**耳の不自由な人の  
発声訓練器開発**

●明大電気工学科で4月に  
耳の不自由な人に自分の声を  
「見ながら」発声の訓練をする  
新兵器がこのほど完成した。し  
くみは、人間の声の波形をブラ  
ウン管に映し出し、目で見るこ  
とで発声の良し悪しを知る方  
法。

製作したのは川崎市多摩区生  
田の明治大学生田校舎の電気工  
学科計測制御研究室で4月15日  
に公開され、その名を「スピー  
チ・トレーサー」(発声訓練装

置)」という。

同研究室では、石田義久助手  
が中心になり、小川康男教授、  
本多喬教授の指導で、数年前か  
ら訓練装置の研究、開発にとり  
くんで、その間、ことばの不  
自由な人のための音声合成装置  
をつくり上げてきた。

今度完成した装置は、小型の  
電子計算器といえるもので、声  
の波形が現れる画面(オシロス  
コープ)、発声が正確だったと  
きに点灯するランプ、声の大き  
さが適当かどうか確かめるメー  
ターなどがついている。画面に  
表す基本的な波形は、声の音  
程、音声の特徴を示す波形の2  
種類。

障害のない人の音声波形を画  
面に映し出したまま自分がマイ  
クで同じことばを吹き込み、両  
方の波形が近づくように訓練す  
るわけだ。また、音声波形を確  
認するためのスロービデオ装置  
もついている。

それは約6分の1秒分の母音  
が、子音をひとことずつ再現で  
きるだけ。

これまでの試用結果では、機  
械の「冷たい」判定が、子ども  
たちにかえって受け入れられ上  
達も早いという。

**X線、中性子の  
調査衛星打ち上げ**

●インドがソ連との協力で

インド初の人工衛星が4月19  
日、ソ連のロケットでソ連領内  
から打ち上げられ、近地点五六  
三キロ、遠地点六一九キロ、周  
期九六・三分、赤道南五〇・七  
度の軌道に乗った。重さは約三  
六〇キロ、衛星に積み込まれた  
機器は正常に作動している。

同衛星は「アリアバド」と命  
名され6カ月間軌道を回り、X  
線天文学的調査、太陽からの中  
性子、ガンマ線や電離層内の粒  
子、放射線を測定する。

同衛星の打ち上げは、インド  
政府宇宙研究機関とソ連科学ア  
カデミー間の科学協力に基づく  
もので、現在飛行制御は打ち上  
げ後3日してインド側にバトン  
タッチされている。また、衛星  
から送信される科学情報は兩國  
の地上局で受信される。

**ガン治療薬に  
DDMP有力**

●以前マラリヤ治療に使用

ガンが征圧できるのではない  
か——との大きな期待をよせて

アメリカとイギリスでいま20年  
前にマラリヤ治療用に開発され  
たDDMPという薬の試験が進め  
られている。(4月21日報道)

英国立マースデン病院のレオ  
ナード・プライス博士は「十分  
な試験後でないとは確かなことは  
言えないが、最近5年間で一番  
期待が持てる薬だ」と興奮気  
味。

現在八〇〇人を超す患者が兩  
国でこの研究に参加、どのガン  
に一番効果があるかを調べてい  
る。

DDMPは他の薬が効かない  
ガン細胞でも殺してしまうこと  
肺、脳、じん臓、すい臓などの  
組織によく集まることなどの利  
点がある。大量に長期間与える  
ほど効果があるが、患者の骨髄  
を破壊する危険な副作用がある  
ため、それを抑える薬が必要だ  
という。

**気胸器の携帯用を開発**

●以前の10分の1の大きさ

肺がパンクする奇病「自然気  
胸」がこのところ増え続けている  
が、その自然気胸用に携帯に  
便利な小型気胸器が開発され  
た。(4月28日報道)

新型気胸器は高さ20センチ幅

21センチ、奥行き10センチの小  
型で、従来の携帯用気胸器に比  
べて体積は10分の1以下。

医師が往診のカバンに入れて  
簡単に持ち運べる。

従来の気胸器は、2つの水タ  
ンクに納められており、上のタ  
ンクから下のタンクへの水の落  
差を利用して空気を送りこんだ  
り、空気を抜きとったりする仕  
組みになっていたため、小型に  
出来なかった。

開発したのは東京・世田谷の  
日産厚生会玉川病院で自然気胸  
の治療に取り組んでいる武野良  
仁医長。

**X線透視に画期的方法発明**

●X線の量も少なく高い安全性

「X線の発見以来恐らく最大の  
発明」(英タイムズ紙)という  
人体透視写真の新技術が5月29  
日、特殊フィルム、レコードな  
どの生産で知られる英国のエミ  
社(本社ロンドン郊外、ミドル  
セックス)が発表、脳や内臓疾  
患治療に画期的な進歩をもたら  
すと注目を集めている。

発表によると、これまでのX  
線による方法は単一光線で人体

を通り写真フィルムに写される仕組みだったのに対し、新しい方法は特殊な操作板を使って数一〇〇本に分けたX線をいろいろな点から体内に透視、その光線の変化をフィルムでなく高感度の結晶体で検出する。その変化の検出結果をコンピュータにかけて、より明解な体内器管の写真に得る仕組みという。

この新技術の最大の利点はX線をこれまでのように使うならば、骨や金属体などは比較的簡単に写せたが、胃とか腸、脳内

部、つまり内臓器管の撮影にはバリウムや静脈注射による造影が必要だったのをいっさい不要としたこと。この新発明の方法だと、患者はカメラの前に立つだけで安全であるほか、透写されるX線の量もこれまでよりずっと少なく、しかもその結果がより早く、より鮮明に得られるという。

### ガン細胞増殖現象の カギをつかむ

●がんセンターの矢追研究員ら 人間のからだに巣食ったガン細胞は、なぜ無制限に増殖してしまうのか—このナゾを解くカ

ギと見られる物質の分離・精製に、このほど成功した。(5月14日報道) この物質は、細胞自身が分泌する特殊たんぱく質で、細胞増殖を著しく促進する。

成功したのは、国立がんセンター研究所・矢追義人研究員と群馬大医学部生化学教室・五十嵐靖之助手で、矢追研究員は一つの仮説として「ガン細胞はこの物質を自分の周囲に過剰に分泌しどんどん増殖するのではないか」と考えている。

動物のからだは多種多様な形態、機能を持つ無数の細胞で構成され、しかもお互いに増殖などをコントロールし合い、一つの「細胞社会」を形成しているが、ガン細胞は、生体内でも、「細胞社会」のコントロールを受けずにむやみに増殖する異端児であり、培養に際しても正常細胞のような現象をほとんど示さない。

ところが正常細胞を培養する場合でも、培養液としていったん多数の細胞を培養したあとの液を使うと、低密度でも順調に増殖する。これからすると増殖を続ける細胞が増殖に必要な物質を培養液中に放出していると

しか考えられない。この物質の正体がわかれば、ガン細胞がむやみに増殖する理由もはっきりすると考えられる。

実験材料としては、ニワトリがタマゴからかえる発生初期段階の胚(はい)細胞を使った。これをサラの中で培養したあとカーベットの増殖促進物質をイオン交換樹脂や超遠心分離装置などで精製した。一〇〇個の培養ザラから取れた増殖促進物質は約四〇〇マイクログラム(一マイクログラムは一〇〇万分の一グラム)。このたんぱく質を1日1回ごく微量ずつ、細胞培養液に加えたところ、最初六〇〇個だった細胞が、1週間後に約2万個にまで増殖した。

これに対して、このたんぱく質を加えない培養系では1週間たっても二五〇〇個までしか増えなかった。このたんぱく質は実に普通の8倍も増殖を促進したことになる。

### 十島村の御岳から 突如噴煙

●火山の爆発か否か不明 5月2日午後5時26分、鹿児島県の海上自衛隊鹿屋航空基地に

入った連絡によると、沖縄航空所属の大型対潜しょう戒機P2 J4712号(機長・空閑繁三佐)が、鹿児島県鹿屋郡十島村(トカラ列島)諏訪之瀬島の御岳(七九九メートル)から噴煙が高さ二五〇〇メートルにのぼり北東の中之島上空まで達しているのを目撃した。

同島は鹿児島市の南二三〇キロの霧島火山帯にあり、御岳は古くからの活火山。最近、噴煙をあげたのは3月13日、27日、28日の3回で、一五〇〇—二〇〇メートルの高さだったという。

5月2日の噴煙が爆発かどうかははっきりしないが、島ではとくに異常がないという。

### カリムスキー火山が大噴火

●5月現在、観測不明の状態

カムチャツカ半島のカリムスキー火山が5月12日大噴火を起こし、火山灰やガスが一五〇〇メートルの高さまで噴き上がった。同火山はカムチャツカの活火山のうち最も活動的なものの一つで、噴煙のため観測は不可能となっている。

### 高温に耐える 繊維合成に成功

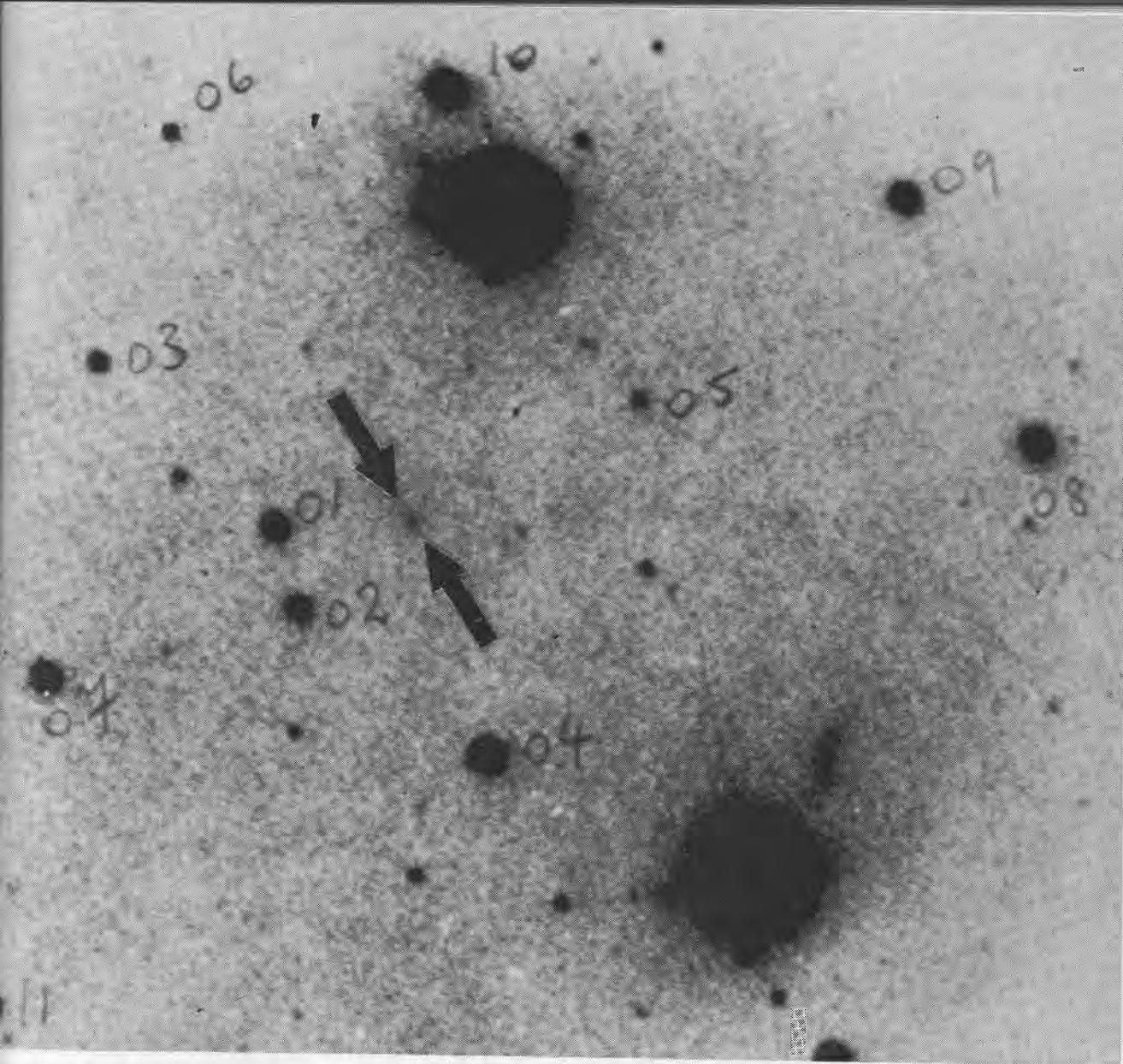
●航空機、原子炉に使用可能

「一〇〇〇—二〇〇〇度の高温に耐える超強度連続繊維の合成に成功した」と東北大金属材料研究所付属材料試験炉利用施設(茨城県東茨城郡大洗町)の施設長、矢島聖使教授が研究グループが5月16日発表した。

この繊維はケイ素(Si)と炭素(C)の結合体の炭化ケイ素(シリコンカーバイト)で、1ミクロン以下から数10ミクロンまで直径を自由にコントロールでき、15ミクロンのものでも引張強度は平方ミリメートル当たり三五〇キログラムとピアノ線を上回る。

また、この繊維をアルミニウム、ジュラルミンなどの軽い耐熱金属と複合させると、少なくとも一四〇〇度まで耐えることができるのとみられ、強度と耐熱性を兼ねられなかった従来の合金にとって代わり、各分野で威力を発揮できる。

製造方法はケイ素と塩化メチルを銅などの触媒を使って結合させた「有機ケイ素化合物」とさらにポリエチレンのような高



## ●最も遠い星雲の撮影に成功

米カリフォルニア大学のハイロン・スピンラッド教授が7月1日発表したところによると、80億光年のかなたに銀河系の5～10倍大の新星雲を発見し写真撮影に成功した。この星雲の出す電波は20年前、英ケンブリッジ大学の天文学者らによって捕えられ“3C 123”の登録ナンバーがつけられていたが、内部構造は知られていなかった。スピンラッド教授は昨年秋、ハミルトン山リック天文台の120インチ望遠鏡を使ってアレアデス星団の近くに見える新星雲の撮影、分光学的な測定などに成功した。これまで80億光年の写真がとれたのは初めて。今までの最高が1960年にパロマ天文台が捕えた50億光年。この新星雲は数兆個の星の集まりから出来ており、1年間に4兆3000億キロのスピードで地球から遠ざかっている。(ワイド・ワールド・フォトズ提供)

分子の有機重合体を熱処理などで反応させる。こうして出来たケイ素を含む重合体をナイロンやレーヨンを作るのと同じ方法で糸にして引っ張り出す。これを一五〇〇―二〇〇〇度ぐらいで熱処理し、余分な炭素や水素を分離させて炭化ケイ素の繊維とする。

量産もコストも以前のものと比べて有利であり、実用化の方向にも航空機の主要部分に複合した合金を使えば、軽量化により速度も従来の2倍になり風圧に十分耐えるという。その他原子力製鉄、発電にも幅広い応用ができ、産業界に強い反応を呼び起こすものとみられる。

ブラックホール解明に  
人工衛星打ち上げ

●米・エクスプローラー52号

ブラックホールを解明するため、米国は人工衛星「エクスプローラー52号」をこのほどケニア沖にあるイタリアの海上ロケット発射台から打ち上げた。  
(5月21日報道)

同衛星は、宇宙の根源を探る「ウルフ」衛星シリーズの第3弾。一九七〇年12月12日に打ち

上げられた同シリーズ最初の、「エクスプローラー42号」はブラックホールの存在を示すような証拠を送信してきている。

ブラックホールは巨大な密度を持つ星で、引力が非常に強い。ため、光でさえその引力圏を脱することができないと考えられている。

### 国産人工衛星めざし ロケット製作

●三菱重工大江製作工場  
宇宙開発事業団が実用衛星打ち上げをめざして開発したNロケット(3段式)の1号機が5月20日、三菱重工名古屋航空機製作所(植田忠七社長)の大江工場(名古屋港区大江町一〇)で報道関係者に公開された。

全長三二・五七メートル、重さ九〇・四トン、直径一・六五―二・四四メートル。これまでわが国で製造されたロケットでは、大きさ、推進力とも最も大きく、この8月から9月頃、種子島宇宙センターから打ち上げ予定の技術試験衛星用のロケットとして使われる。製作費は一機約五〇億円。

### Nロケット打ち上げの リハーサル行う

#### ●種子島宇宙センター

この夏に誘導3段式Nロケット1号機による初の技術試験衛星I型の打ち上げを目指している宇宙開発事業団は、5月28日鹿児島県熊毛郡種子島の種子島宇宙センターで、Nロケットの地上試験機を使って衛星打ち上げのための最終点検の総合リハーサルを行った。地上試験機でのテストは3月中旬から続けられてきたが、この日で終わる。6月からのいよいよ本番のN1号機の据え付け作業が始まる(5月28日報道)。

### 日本の通信放送の衛星を NASAで打ち上げ

#### ●まず52年度に三衛星

宇宙開発事業団の気象、通信放送の3衛星をNASAに打ち上げてもらう日米両政府間の書簡交換が5月24日行われ、52年度に静止気象衛星、実験用中容量静止通信衛星、実験用中型放送衛星の3つの人工衛星が米国のロケットで、米国の基地から打ち上げられることが本決まり

となった。

NASAはこれまでカナダ、西独、イタリアなど多くの国の人工衛星の打ち上げを援助してきたが、日本の人工衛星を打ち上げるのは、初めてである。

通信衛星は将来の大容量通信衛星の開発に必要な準ミリ波の通信実験などを行うもので、重さは三四〇キログラム。放送衛星はテレビの個別受信が可能な大型放送衛星開発に必要な技術をテストするもので、重さは三五〇グラム。

### 新しい星発見

#### 「一九七五E」と命名

●ソ連で、タス通信が報道  
ソ連のクリミア天文台はこのほど新しい星を発見し、その名を暫定的に「一九七五E」と命名したと4月9日、タス通信が伝えた。

このすい星は、しし座とかに座の境界線上にあり、目下のところ、かすかな赤みを帯びているという。このすい星の太陽を回る周期ならびに次にいつ見えるかなどは、同すい星の軌道を計算したのち発表されるとい

### ペテルギウス撮影に成功!

#### ●オリオン座のアルファ星

米国のキットビーク国立天文台の天文学者が、地球から五〇〇光年隔ったオリオン座のアルファ星「ペテルギウス」の表面の写真撮影に成功した。撮影フィルムを製造したイーストマン・コダック社によると、太陽以外の恒星の表面の状態を写真撮影したのは初めてである。(5月24日報道)

撮影に成功したのは同天文台のロジャー・リンズ博士らの研究チームで、世界第2位の直径4メートルの反射望遠鏡が使われた。ペテルギウスの表面には太陽裏面に見られるような温度の高低を示す斑点に似た熱いガスと冷たいガスの部分が見られ、天文学者は対流を示すものと考

えている。  
ペテルギウスは、肉眼でも見える最も明るい星の1つで、オリオン座の北東のすみにあり、太陽の直径の約八〇〇倍もある赤色巨星。

リンズ博士らは、熱いガスからの光と冷たいガスからの光を正確に「選別」するため、干渉法を使い、さらに露出時間を短

くし、大気のゆらぎを最小限にとどめ、光を増幅するためイメージインテンシファイア(光増幅装置)を使用した。

### 8つの科学衛星を 打ち上げる

#### ●ソ連、1つのロケットで

ソ連は5月28日、8つの科学衛星コスモス(遊号―遊号)を1つのロケットで打ち上げた。第1周期一一五・八秒、平均高度一五〇〇キロ。ソ連は七〇年から1個のロケットで数個のコスモス衛星を通常、年間2度ずつ打ち上げており、ことしも2月に打ち上げている。

### 宇宙船内で玉ねぎを栽培

#### ●サリュート4号

タス通信が伝えたところによると、宇宙船サリュート4号のクリムク船長のセバスチヤノフ飛行士は、5月30日、船内で植物を育てるための「オアシス装置」を作動させ、玉ネギとエンドウの栽培に着手した。2人は無重力状態のまま、ある程度成長した草木の栽培やこん虫の育成実験も開始する。

「宇宙栽培」実験は、1月から2月にかけてソユーズ17号の船内でも実施されたが、その際「オアシス装置」とは生物の成長に必要な酸素などを自動的に供給するシステムだと説明されている。

### 6月初め、金星9号を打ち上げる

●ソ連、太陽系惑星探査が目的  
ソ連は6月8日、宇宙空間および太陽系惑星の探査を目的とした自動惑星ステーション、「金星9号」を打ち上げた。同ステーションは、人工衛星の間軌道から宇宙に発射され、予定通り飛行を続けており、10月頃金星周辺に到達する予定。

### ステゴドン、完全な姿で出土

●中国で、体長8メートル  
中国西北部甘肅省でこのほど2百万年前に絶滅した象の一種ステゴドンの化石がほぼ完全な姿で出土、復元されて北京自然博物館に展示されている。

出土したのは同省合水県黄土高原。水利工事中、山腹で見つ

かり発掘作業の結果、頭がい骨、腰骨をはじめ指骨や四肢の骨など一三二本。さらに舌骨まで完全に残っていた。

大きさは肩までの高さが約4メートル、体長約8メートルで、現存のアフリカ象より大きく、発見場所にちなんで黄河象と名付けられた。

発掘した時、この象はうつむいたような姿のままで埋まっており、水を飲むようにして川か湖沼にはまり込んだものと推定されている。

また日本でもステゴドンの化石の一部が瀬戸内海や千葉、神奈川県で発見されている。

### 黄金都市プカラを発見

●英探検家2人によって

5月31日の英大衆紙デーリー・メールは「全世界の探検家たちの夢だった南米インカ帝国に収められた『黄金都市プカラ』が2人の英国人探検家によってついに発見された」と、1面トップで報道した。

2人はロンドン大学講師（人類学専攻）で、これまでも南米探検で多くの新発見をした実績のあるデービッド・デービス

博士と、スポーツ解説者のロス・サーモン氏。

この「失われた都市」はアンデス山脈がアマゾン流域のジャングルと接するあたりの岩壁に囲まれた高知にあり、周囲には約一・六キロの壁がめぐらされている。デービス博士は「我々これがプカラだと確信している。この町に巨額の黄金が眠っていることも間違いない」と語っているが、正確な位置については「心ない探検家たちに荒らされる恐れがある」と沈黙。近くヘリコプターを使って精密な調査をやる計画を明らかにしている。

なお、2人は5月30日南米から帰国し、多数の写真や黄金のオノ、金塊などを証拠品として持ち帰っている。

### 「史記」解釈に新たな資料見つか

●馬王堆漢墓の出土品から

湖南省長沙の馬王堆3号漢墓から出土した帛書の中から現存する「戦国策」に類する書物が発見され、専門家の注目を集めていたが、その全文が解読され

6月4日に発売された月刊誌の

「文物」（一九七五年第4期）で初めてその全容が明らかにされた。

これによると、全書は27編一七〇〇全字から成り、うち11編は現在ある「戦国策」及び「史記」と同じ内容のもので、その他の16編はすでに二〇〇年以上も失伝していたものと判明した。

この仕事は新進気鋭の考古、文物、歴史学者を糾合した「馬王堆漢墓原書、整理小組」の手で完成されたもので、新出版の「文物」誌上に「馬王堆漢墓出土原書『戦国策』訳文」として紹介されている。

この訳文の後には、馬雍氏の「帛書『別本戦国策』各編の年代と歴史的背景」と題する論文が記載されており、それによると、戦国時代の著名な論客であり策略家だった蘇秦について記述があり、「史記」には様々な過ちがあったとし、なかでも重大な間違いは燕の昭王の時代に活躍した蘇秦が、昭王の即位の20年近くも前に死亡したと記している点をあげている。

また「史記」に記載された斉の湣王の紀年が誤っているとし、湣王の即位年間は18世紀（紀元

前二〇一―二八四）だったのが「史記」では四〇〇年（紀元前三二―二八四）となっている点などを指摘している。そして、今後「史記」や現存する「戦国策」を引用する際には新しく翻訳された史実を根拠とし、十分に注意する必要があると論じている。

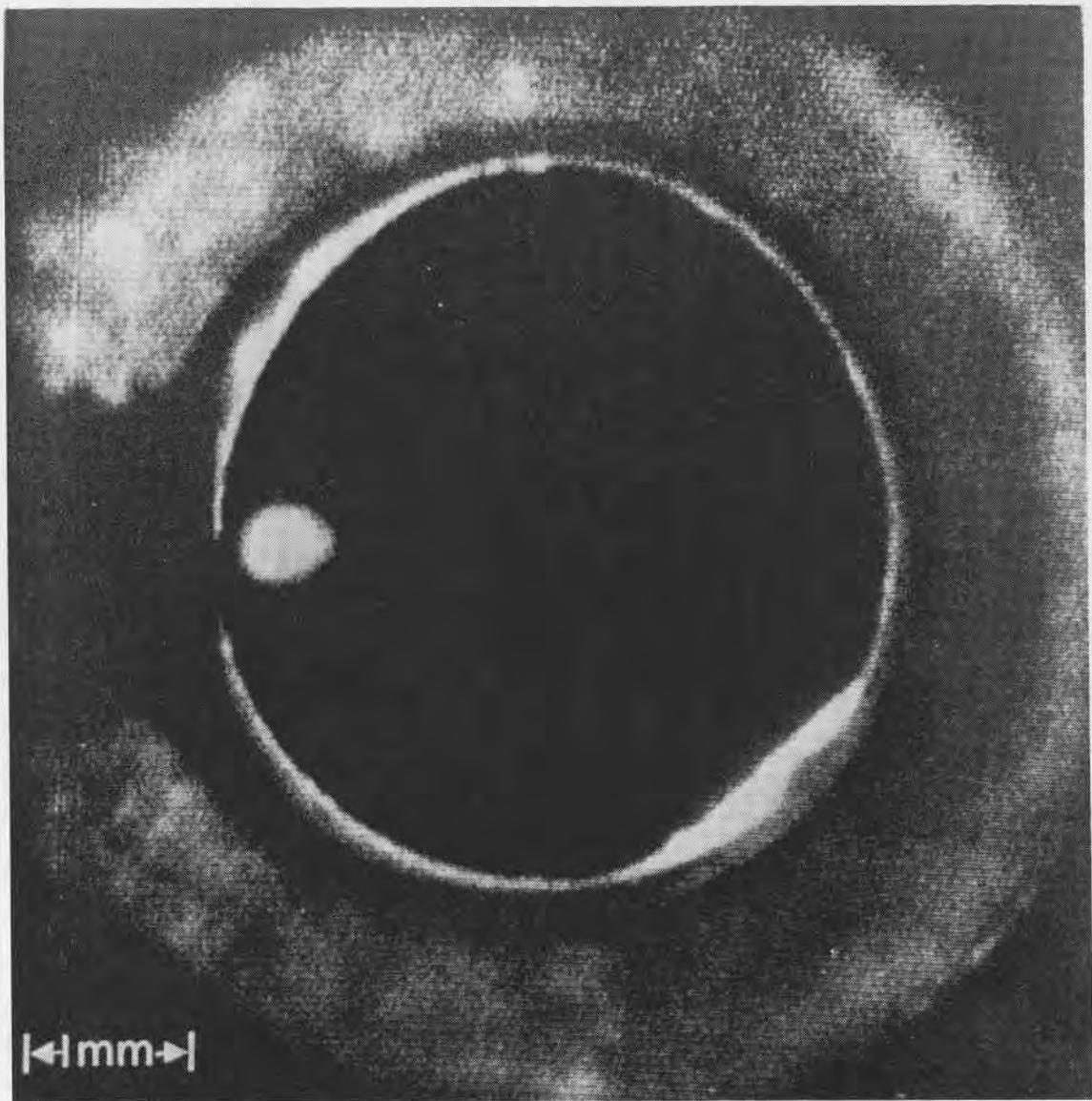
現存の「戦国策」は、日本には宇多天皇（西暦八七三―九三〇）の時代に渡ってきた。そして徳川時代になって、一般庶民の間にも親しまれ、「漁夫の利をしめる」とか「虎の威を借る狐」といったことわざの原典はここから来たものといわれている。

### 文明と隔絶した種族発見

●ミンダナオ島のジャングルで

6月10日付のフィリピン英字紙フィリピン・デーリー・エクスプレスによると、ミンダナオ国立大学人類学講座のサミュエル・プリオネス教授を団長とする調査団が先日、フィリピン南部、ミンダナオ島のジャングル

奥深くで旧石器時代そのままの「文明の隔絶した」生活をしている未開種族を発見した。



## ●流動する電気

今年5月19日に米カリフォルニア大学の物理学者は流体状に見える電気の写真を発表した。それによると、極端に冷却したゲルマニウムの小さな円形クリスタルの中で、レーザー光線で発生した“電子穴ドロップ”と呼ばれるものが見える。中央より左寄りの白い玉が流動するドロップの赤外写真で、周囲の光るリング状のものはクリスタルの縁から散った赤外線である。ドロップは直径約30分の1インチで、10億×1万個の電荷を含んでいる。(ワイド・ワールド・フォトズ提供)

そのあと、ぐるぐる巻きされた布切れを解き、遺体を明るみにさらす作業が始まる。推測によるとクレオパトラと同時代に生きたとされるこの少女が骨をくだかれて死んでいる理由としては、妊娠したために石を投げつけられて殺されたのか、当時の2輪立て戦車にふみにじられ

発見された種族は周辺部族の間で「タラアンディン」(野性の人)と呼ばれており、腰ひもで下半身をわずかに隠した同種族の男たちの写真が同紙に掲載されている。なお、この種族の人数、文化程度などは不明。

### クレオパトラ時代の ミイラ解剖

#### ●英マンチェスター大学

英国のマンチェスター大学の研究陣が二〇〇〇年以上前のエジプトのミイラの解剖研究に着手した(6月12日報道)。対象となったのは、マンチェスター博物館所蔵のミイラ。

予備研究の段階で行われたX線透視写真で、ミイラは14歳から16歳の少女、両足のすねから下がくだかれ、頭がい骨も折れていることが判明した。

た「世界で初めての交通事故の犠牲者」かの2つの説が立てられるという。

それらの説についての解明のほか、マラリヤ、住血吸虫病などの風土病の有無、歯の研究、食事の状況まで追及し、またガンにかかった可能性の有無にも取り組むという。

研究に加わるのは、マンチェスター大学のロサリー・デビッド教授をはじめウイジントン病院のトップ博士らエジプト研究界の権威者たち。

## 二二〇〇年前の湿屍体発掘

### ●中国、漢の文帝時代のもの

中国湖北省でこのほど二二〇〇余年前の男性の「湿屍体」がほぼ完全な形で発見されたことが6月19日明らかになった。今回発見された遺体は漢の文帝の時代(第5代皇帝)紀元前一八九一(一五七年)のものと推定されるという。

これは3年前発見された馬王堆漢墓の軀侯夫人の遺体よりやや新しいが、ほぼ同時代のものであることは間違いないようだ。その遺体は約50歳の男性で、全身水につかった「湿屍

体」だった。

これまですでに解剖も終わっていたが皮膚には弾力があり、内臓も完全であり、胃か腸、おそらく胃カイヨウのような病気で死亡したらしい。体のうち損傷しているのは眼球だけで、盗掘にも会っておらず、完べきな保存状態だという。その調査の結果では、漢の文帝の時代(約二二〇〇年前)の人で、前回の馬王堆と異なっているのは、遺体が粘土や木炭、しっくい、厚い木材の棺などにおおわれていないことなどである。

## 太陽エネルギー吸収に

### 衛星使用

### ●20年後、その可能性発表

6月25日明らかになったところによると、米ボーイング社はこのほど約57平方キロの鏡を装備した巨大な衛星を使って太陽エネルギーを集める方式を提案した。

提案者はゴードン・ウッドコック、ダニエル・グレゴリー両研究員で2人で考えている「パワーサット」と呼ばれる巨大な衛星は、通常の原子力発電所の10倍に相当する一〇〇〇万キロ

ワットの電力を供給することができる。

この衛星が6基あれば現在日本の電力需要を十分まかなえ、米国の場合でも需要は35%ないし40%は満たせるものとみている。

この宇宙発電所の重量は七万一〇〇〇トンで、これを地球に近い軌道上で組み立てたのち地球から約三万五〇〇〇キロの宇宙空間へ移動する仕組である。これらの衛星の鏡により集められたエネルギーは電気に変えられたのち、マイクロウェーブを使って地球に送電される。またこのプロジェクトは決して夢物語でなく20年の歳月と準備に六〇〇〇万ドル(約一八〇億円)をかければ実現可能と述べている。

## アステカ洞穴壁画を発見

### ●日本の写真家、昨年取材中に

メキシコの密林、蕃刀をふるって道を開きながら進んだ奥に深い溪谷、バラカンカ・グランデがあった。垂直に切り立つ断崖が行く手をさえぎる。そこで世界で初めてのアステカの洞穴壁画が発見された。発見したのは

写真家の並河万里さん(特)。

「いまはまだ、発見したときの興奮が忘れられない」ほどの「出会い」だった。そのいきさつはこうだ。

発見した日は昨年の12月2日土地の人たちの奇妙な風習を取材するため、メキシコ人類学博物館研究員のカルロス・ヘルナデス・レイエスさんの案内でメキシコ人のサン・フランシスさん、助手2人、映画カメラマン1人の計6人で山に分け入った。メキシコシティーから南東60キロのバラカン・グランデの水源のあたりが目的地。そこでカミナリを呼ぶ祭りを撮影する予定だった。ところが雨が降り出し洞穴に入ったとき発見した。こうした壁画はここだけでなくその場所の下流の洞穴1つ、またその下流に5つの洞穴の壁画を見つけた。

その結果、並河さんは一三〇枚をフィルムにおさめた。

後日調査の結果、アステカ後期(一五・一六世紀)のものだと判明、古代メキシコ社会の学的研究に大きな貢献を与えると評判になっている。

## パイオニア10号、未知の力で回転

### ●木星と土星の中間地点で

NASAが6月13日明らかにしたところによると木星と土星の中間の地球から一三億七九〇〇万キロ離れた地点を飛行している米惑星無人探測器「パイオニア10号」が宇宙空間で未知の力に遭遇し、不思議な回転運動を始めた。

NASAによると、パイオニア10号は原因不明の方向転換を起こしている。また、同10号の回転軸は1日に12分の1度の割合で変わっているという。原因について、同10号の機能不全か惑星間の現象が考えられるとしている。

NASAの科学者の間では、宇宙のチリ層を通過した可能性もあるとみている。この不思議な回転は最近始まり、3週間前から一定の割合で起こるようになった。

パイオニア10号は一九七二年3月、打ち上げられ、一九七三年12月に初めて木星を探索、一九七八年には太陽系を離脱すると予想されている。



## 「太陽熱発電」テストプラントの開発に成功

人類のエネルギーは太陽に始まって太陽に終わるといわれているように、エネルギー資源の枯渇、並びにエネルギーの変換・輸送・消費にともなう発生する環境汚染、特に人類の最後の公害ともいわれている熱汚染の障壁から人類が脱却するためには、太陽エネルギーの広範囲にわたる利用が最も望ましい。

このような観点から太陽エネルギー利用技術の研究開発を軸とするナショナルプロジェクトとしてサンシャイン計画が昭和19年度から通産省電子技術総合研究所でスタートした。

電子技術総合研究所エネルギー部、エネルギーシステム研究室では、サンシャイン計画の一環として、太陽熱発電システムの研究開発を進めてきたが、このほど世界にさきがけて、ユニークな分散形（曲面集熱形）太陽熱発電テストプラントの開発に成功した。

このテストプラントは幅2メートル、長さ3メートルの放物面の鏡で太陽の光を集め、それを熱に変える熱交換装置、夜間発電のための高温蓄熱装置などがそろっている。鏡はいつも太陽の方へ自動的に向くように高性能自動同期追尾方式を備えており、鏡の焦点には直径3センチの銅のパイプが取り付けられている。表面の温度は摂氏350度（最高）にもなる。また熱を伝える方法として、パイプの中に圧縮空気を流す熱伝達システムがある。

このテストプラントのように高効率の集熱システム、蓄熱・熱交換システム（タービン発電システム）、トータルシステムの計測・制御保護・監視システムによって構成された「分散形太陽熱発電テストプラント」としては、世界

最初のものである。

「太陽熱発電」は牧草地のような広い場所に設置しなければならないのが難点だが、公害が少なく、電力需要の多い夏などには絶好である。

このテストプラントの開発により、わが国の「太陽熱発電」の研究開発は、5年後には1000キロワットの発電所をつくる計画で、今後大きく進展するものと予想され、その意義はきわめて大きい。

### サンシャイン計画

通常サンシャイン計画と呼ばれる通産省工業技術院の「新エネルギー技術研究開発」は、西暦2000年まで続けられる長期的なナショナルプロジェクトで、クリーンな国産エネルギー開発と、石油中心のエネルギー体系からの脱却を目指している。この計画は5つの研究分野から成り立っており、まず太陽エネルギー技術では、太陽熱発電システムと安価な太陽電池の開発を進めている。水素エネルギー技術では、熱分解による水素の製造、燃料電池による発電等の研究開発を実施するとともに、水素エネルギーシステムの全般的な研究を行っている。これらの研究の他に、総合研究として新しいエネルギー技術のたねとなる成果を求めるとともに、各種エネルギーの位置付け、社会へのインパクトを検討し、研究開発全体を正しく方向づけることを行っている。

●写真は東京、田無市の通産省電子技術総合研究所で開発され、一般に公開された「太陽熱発電」テストプラントの全景。

連載科学記事

# 原子・銀河系・理解

ダニエル・フライ

(4)

## 10 物理法則の非線形性

数千年の間、地球人類のより進んだ思索家たちは地球人類という牢獄の束縛を断ち切って自由に宇宙に飛び出し、無限の宇宙の最も遠い所まで調べること成功する日を夢見てきた。しかしながら、ほとんどの人にはその夢は満たされる可能性のないものであると思われた。

いま、私たちはこの夢が現実的なものになり、この世代の人が宇宙に出ていくという事実が気がついている。

筆者は最近の講義の中で、いまハイスクールの一年あるいは二年生である若者の何人かが三〇回目の誕生日の前に火星や水星の表面に立つであろうという意見を述べてきた。ほとんどの読者にとってはこの予言は楽観的すぎると思えるかもしれないが、物理学の発達はその研究にたずさわっている最先端の人々をさえ驚かす程に急速に進んでいる事実がある。

小さな惑星のむしろやっかいな境界から逃げようとする人間の試みは常に宇宙の四つの基本要素「重力」「空間」「時間」「エネルギー」の理解不足によって妨げられている。いつも、重力と空間が大きすぎ、エネルギーと時間が小さすぎると思われている。一九〇

五年頃に、これらの要素は絶対的なものではなく、人が常に考えてきた程に独立した存在でもなく、それらは、変数の要素であり、他の要素に関係した値をもつという注意が与えられた。最初の弱い理解の光が物理的、物質的科學によって生じた絶対的な決定論という厚いスクリーンを通り抜けようとしてもがき始めていた。

不幸なことに、私たちの科学者達はこの明るい真実の微光を追跡するかわりに、真実を理解する必要もなく使える数学的な公式にまで落とすことよって習慣の力で一般的なバタンの知識に発展させようと試みただけだった。アルバート・アインシュタインが一九〇五年に世に出した一連の数学の公式を彼は「特殊相対理論」と呼んだ。私たちはそれから「絶対の宇宙法則」を見いだそうと試みてきた。

私たちは彼が数学を前面におしだした序文を無視して彼が防ごうと希望した思考ブロックを創り出してきた。

この問題については後で述べるとしてまず「物理法則の非線形性」ということについて考えるのに時間を使う方が賢明のようである。

ほんの数十年前まで、宇宙を支配す

る物理法則は線形であると考えられていた。すなわち、試行錯誤や観察と試験によって、私たちがある時間に観察できる自然の小さな断片のすべてに正しいと思われる一連の法則を明らかにしてきた。そこでこれらの法則が自然のどんな断片においても——それが私たちの観察点からどんなに遠く離れていようと——正しく仮定した。しかしながら物理学の研究が小宇宙——すなわち、原子の内部を調べること——に入り込むときには、私たちが習慣としてきた法則と一致しない法則を使っていることがわかった。これらの法則はまた線形であるように見えるが多少異なった応答を導くように思われた。これと同じような（線形性に対する）妨害状況が大宇宙の調査でも発見された。天文学者たちが数百万光年の彼方の宇宙を見つめることができる巨大な望遠鏡を開発したときに彼らは物理法則が明確な変化を受けているように見えることを発見した。そのころ、私たちは自分自身の観測範囲内では線形性を有しているが、異なった基本的な性格をもった三組の物理法則に慣れようとして試みていた。そのとき、相対性原理の展開によって、これらの違った線形法則は実際には線形ではなく、かつそれぞれが違った法則ではないということを理解しはじめた。否、少なくとも理解すべきだった。これらの法則

は、一つの大きな自然法則の曲線の広く分割された三つの断片にすぎなかったのである。

肉眼や簡単な測定器で観測できる量を処理する限りでは、観測しているセグメント(断片)が曲線のほんの小さい部分であるので曲線の直線性からのずれが検出できない程わずかであるために私たちは曲線の曲率を検出することができないのである。

私たちの日常生活での一般的なメカニズムにつながる実際的な目的で見ればこれらの法則は依然として線形であると考えられる。そう考えると、計算が簡単で結果の誤差は無視できる。同様な理由で、小さな家の土地を測っている人は地球表面の曲率を考えに入れないことが必要だなどとは考えない。曲

率を無視した結果の誤差は杖を打つ場所を決めるのにはなんの影響も与えないからである。しかしながら、もし測量士が州や大陸のように大きな場所を正確に計測しようとするならば、地球表面の曲率を考えることはやむをえないことである。そして、このためには曲率半径の十分正確な知識が必要である。

自然法則の曲率半径を正確に決定することの必要を理解したのは恐らくこの問題に一生の大部分と仕事の大部分をささげたアルバート・アインシュタイン博士が最初であった。博士が得た結論は沢山の教科書を埋め、物理学の進歩にこの上もなく貴いものであることを証明している。これらの結論は原子核エネルギーの利用の道を指摘し

考えられる多くの内容を含んでいるが、いまだ完全に理解されていない。相対性問題への現在の数学的なアプローチに付随する困難さは数学自身を間違えるという点ではなく、それを説明しようとするときに使う方法や言葉が、しばしば間違った考えや仮定に導くという事実にある。

アインシュタイン博士によって世に与えられた相対性理論においては、一般に自然法則は線形であるが、その法則が作用している「空間」は「曲がっている」と考えられている。この概念は線形性からのすべての差異がたった一つの仮定によって説明しうるもので、最も単純な数学的な表現を提供してくれる。不幸なことに私たちの数学的表現のほとんどと同様に、この概念は心に把握されるものが少ない。曲がった空間などは頭の中に描きようもなく、紙の上にも書けない。空間が曲がりの内側ならば、外側は何かという疑問が常に起こってくる。

私たちが普通に自然の「法則」や規則に適用している線形数学は誤差を測定しうる範囲に拡張すると正しくなくなる。自然法則は無限遠方に達する直線にそってはいかず有限な半径をもつ曲線にそっているからである。永遠の宇宙においては、どんな面でも、この曲線は凹になるが、この法則は空間ばかりでなく時間を通して作用す

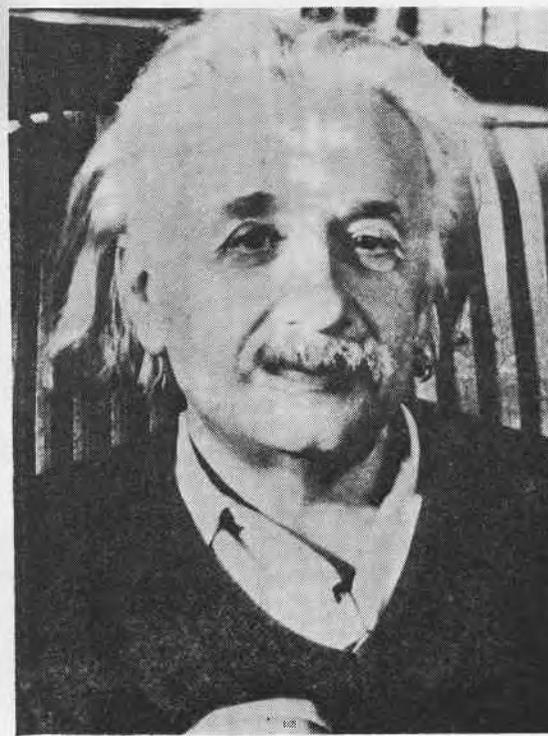
るので「正弦波」や「波」で表現するよりも早く理解されるかもしれない。「基点」(この曲線の中立線)はゼロであり、このゼロをあらわす線の上あるいは下にくる部分は法則の正と負の相を表現している。

このことから、自然法則の効果が観察点でゼロになる位置と条件があることや、その位置や条件を越えると法則は負となり、観測者に対する効果が逆になることがわかる。

(「観察点」とか「観測者」という言葉を繰り返すことは、自然のどんな基本要素も、定められた位置と条件で考えられるとき以外には現実性も意義もないという事実がしばしば忘れられるので、これを強調するために必要なのである)

そこで、私たちは曲がった「空間」に作用している「線形法則」の現存する数学的な仮定を自然法則の曲率に基づいた概念に置き替えるならば、この概念に私たちが適用する現在受け入れられている数学を無視したり、変えたりすることがないとわかるだろう。数学は依然として同じ方法で適用され、同じ結果を与えるのである。

しかし、この変換によって、自然法則の作用を心の中で描いたり紙に図を書くことができるようになるだろう。このとき、私たちは理解の方向に大きく一歩踏み出したことになるだろう。



●アルバート・アインシュタイン博士 (共同提共)

# 11 重力

人類が宇宙旅行の夢を実現するための最大の障害は恐らく「重力」という名を与えられている要素である。その発見は、小学生の教科書の中で、十七世紀の数学者で物理学者であったアイザック・ニュートンによってなされたとされている。もちろん、実際にはすべての人が生まれると同時にこの重力を発見しており、うしろから崖をよじ登って来ようとしている穴グマの頭に玉石を最初にころがした石器時代の人間は実際にこの力を応用したのである。しかしこの主題を最初に数学的に完全な解析をしたのはニュートンである。彼の結論はのちに観測と実験によって立証され、相対論の時代になるまで事実上挑戦するものはなかった。

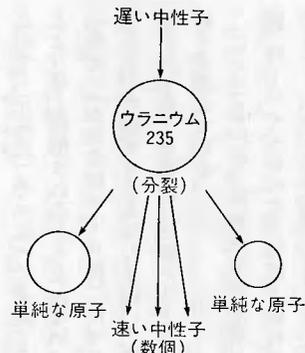
簡単に言うと、重力はすべての物質にそなわった性質であり、万物の間で相互に働く引力として現れるというのがニュートンの結論であった。二つの物体の間の引力の値はお互いの質量の積に直接比例し、相互間の距離の二乗に逆比例するといわれた。地球とその表面にある物体の間の引力は、その物体の「重量」であると述べられている。

力か距離の二乗に逆比例して変わるということのむずかしさは、もし距離がゼロになったとしたら力が無限大になるべきだという点にある。人間が地球の表面で立ったり寝たりしている二つの物体の間の距離はゼロとなり人間の重量は無限に大きくなるべきである。この仮定に対する答は「重心」と呼ぶ質量の中心にこの力が作用するという点であり、地球の表面にいる人間は依然として地球の重心から四〇〇〇マイルも離れているということである。しかしながら、この説明は新しい問題を創りだす。もし、このことを文字通り受け入れたとすると、もし地球の中心まで井戸を掘るかシャフトを伸ばして人間がこのシャフトを降りて行くと彼の体重は重心に接近するにつれて増加し、重心に達すると無限大になるだろう。もちろん、実際には彼の体重は減少し、彼の重心が地球の重心と一致した時にゼロになる。重力は「物体」にはなく、物質の粒子に存在するのだという説明をしていくが、地球の中心では人は各方向へ彼を引きつける沢山の粒子と考えられ、その力の合力はゼロとなるだろう。

重力を各々の原子間で独立に存在すると仮定するならば、地球と人間に関する限りは解ける。しかし距離がほとんどゼロになる原子自身の内部についてみるならば力は無限大となり、最初の問題が再び私たちを悩ませる。私たちが観測するスケールを変えただけで、その問題は解けなくなる。ニュートン粒子（陽子や中性子）間に存在する結合エネルギーと呼ばれる引力は私たちの説明能力をはるかに越えた強烈なものであることは確認されている。しかしながら、この力は質量の増加につれて増加したりはしないが、ある点ではゼロとなり、実際に負になることもある。

ウラニウム二三五の原子の原子核にニュートン質量の単位である中性子を加えることによってこの事実を示すことができる。これを行わせると原子核内の重力は増加する代わりに負になる。すなわち、その粒子での引力は斥力となり、この粒子はかなりの早さで分裂を始める。しかしながら、膨張の間にいくつかの新しい重心が作られ、各々の質量は小さくなるので、非常に活性なものである。この結果、二つあるいはそれ以上の単純な原子が作りだされる。

ほとんどの教科書では、この現象を原子の「分裂」と述べている。そこには原子を分裂させる原因となる中性子の「衝撃」あるいは運動エネルギーが存在するという暗黙の了解がある。こ



れが事実だとしたら、高速の中性子は低速のものよりもより容易に確実に原子を分割しうることになる。実際にはその逆が正しい。高速の中性子はウラニウム原子を分割しないだろう。核分裂が起こる前に「原子核内に侵入」することができるよう熱速度まで遅くしてやらなければならない。

時々中性子は原子核に直接達することなくウラニウム原子に捕獲されるだろう。中性子は比較的長い時間（核物理学上の時間で）、多分数秒から数分の間原子核を回るかもしれない。

いつか中性子は原子核に落ち込み、「遅発性分裂」が起こり、このことは分裂が中性子の衝撃ではなく、原子核内に中性子が「存在」することそのものが膨張をおこす結果になるのだということを再び証明するものである。

膨張と結果としてのいくつかの単純な原子への凝結は完全にランダムな過程である。多くの単純なタイプの原子は凝結であるが、その小さな原子はど



●アイザック・ニュートン (共同提供)

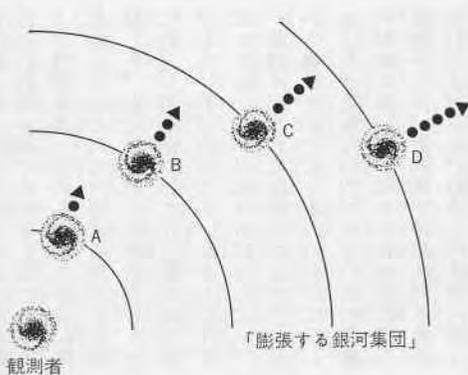
重力の法則が表現されている方法が原因で、重力は二つの物体の間の引力としてしか明確にできないと一般的に仮定されてしまっている。しかしながら、それが必然的に真実であるべきだという論理的な理由もないので、これは思考の必要性はない。事実それが真実としたならば、それは重力場を、二つの物体の間の引力であることはもちろんであるが斥力は生ずることはで

の場合にも大きな原子における陽子と中性子の比ほどに多くの中性子を内蔵しない。それで常に数個の中性子が残ることになる。

もし、十分に調べ、考えられるならば、この現象は重力そのものの性質へのいくつかの研究の手掛かりを与えてくれるだろう。しかし、しばらくの間重力場がある条件で負になるということが実証することを観測することで満足しよう。

長年の間、他のすべての場と同様に重力場は二つの極を持っているに違いないと考えている学派があった。彼らはその極を重力とレビティと呼んだ。彼らは、いくつかの物体や材料はある量のグラビティをもっており、他のものはある量のレビティをもっているとして仮定した。レビティをもつものはグラビティをもつものによって反発されるだろう。この理論は結局信じられなくなり、完全に捨て去られた。その理由は証明されなかったからではなく、実際にそんなものをもっていない物体や材料にレビティをくっつけようと沢山の試みがなされたからである。たとえばあるときには水素やヘリウムガスは軽い袋や包みの中に入れてと重力場に抗して上昇するという理由で、このようなガスはレビティを有していると仮定された。しかし、その上昇はレビティによるものではなく、単にその比重

量がおしよけた空気の比重量より小さかったためだということがすぐに実証された。特別な材料や物体にレビティ量を考えようとする多くの不成功に終わった試みのうち、この理論はレビティという言葉がユーモラスなナンセンスという言葉と同義語であったという



評価を受けるほど評判が悪くなった。しかしながら、この理論を考えた哲学者たちはその最初の仮定においては完全に正しかった。グラビティとレビティは特別な物体の性質ではなく、すべてのものがその条件になるかもしれないのだということを理解することを怠っただけである。

さて、小宇宙(原子の内側)の負の重力を観察してきたが、大宇宙(銀河

間)における負の重力を観察しよう。「膨張する宇宙」に関して近年多くの技術論文が書かれているが、その中に膨張するべき理由や論理的な説明が見つけうるだろうか? 宇宙の引力の理論では、宇宙にあるすべての物質は、急速に一つの巨大な塊になるべきである。それとは逆に私たちは「銀河系」や「銀河集団」などと呼ぶ非常に大きな星の集団のすべてが、観測者からの距離が大きくなっていくような速度でお互いの集団から後退しつつあることを発見する。その後退速度は光速に近く、私たちから最もへだたったものについて計算されている。

観測されている宇宙の状態と存在する宇宙の引力の概念とを相容れさせるべき試みとして数多くの興味はあるがほとんど確信のない理論が進められてきている。宇宙論のいくつかはある時期に宇宙の中のものがある一つの巨大な星あるいは「原子」の中に含まれていたと提案している。それが何かわからないがいくつかの理由でこの原子が爆発し、星の集団となった物質を外に投げ飛ばし数億年後の今日私たちが観測しているような運動を与えた。この理論は最初にアッペ・レマイアによって提示され、「大爆発理論」として日常用語になる位知られている。それは一時期にはよく知られたが、宇宙の大きさや性質についての知識が増加する

につれて、現存の自然の線形法則の概念に照らしあわせるとそのような理論は成立しないことが明らかになった。

第一に、そのような想像もできない程巨大な質量の物体は、どんなに高い温度を仮定してみても、ニュートンの法則のもとでは重力場は非常に強烈になり、光の速度以下では脱出速度になりえないだろう。事実この巨大な太陽から放射される光でさえも完全に脱出することはなく、その周囲を回る小さな軌道を回るだろうということが計算されている。しかし、物理法則の曲率の概念から、存在する物体に付加される質量は、その各部の間の引力を必然的に増加するのではなく、ある条件のもとでは場を負に変え、引力を斥力に変える原因となるかも知れない。銀河系の全物体の質量と距離が、お互いに関して重力曲線の正の部分にあるので、銀河系内の個々の物体間には引力が存在するのだという推論によって現在の宇宙の観察された運動を説明できる。各銀河系との広い宇宙においては、曲線はゼロ・ラインの下にきて、その結果銀河系間では斥力が存在する。このことは、知られている宇宙(訳注)私達の太陽を含めた銀河系)では物質が比較的一様に分布していると思われるが、全体としては均一分布ではなく比較的規則的に同じように集中をしている理由を説明してくれる。

★ ★ ★ ★ ★  
一九五八年七月、マサチューセッツ工科大のバリー・ムーンとコネチカット大のドミナ・スペンサーはフランクリン・インスティテュートの雑誌に「宇宙の原理と宇宙の常数」というすばらしい論文を載せた。これは、銀河や銀河集団内では正の重力と各集団間の負の重力がこれらの観測されている運動を説明するための実際的な方法を提供してくれることを論理的、数学的に示してくれるものである。

一九五九年一月発行の「アストロノミティックス」誌に、カリフォルニア工科大のフリッツ・ツビッキは「ニュートンの重力の法則は真に普遍?」と題する論文を載せた。この論文でツビッキは銀河集団の重力場は集団間ではゼロになっていることを観測結果が示していると指摘した。

★ ★ ★ ★ ★  
この点について、「この説明は天文学者や理論物理学者には興味のあるものかもしれないが、私たちが宇宙旅行することを達成するのにどう援助してくれるのか?」と言う人がいるかもしれない。この回答は、私たちの希望を達成するのにうまく使えるようになる前にまず物理法則を理解しなければならぬということだ。

人間は宇宙旅行への夢の中で、地球から脱出するのにたった三つの可能性だけを考えてきた。第一は重力は破壊されなければならない。このことは、重力場の作用が、宇宙船の出発を邪魔しないように地球と宇宙船の間で停止されなければならないということであ

る。この思想によって沢山の高度の想像物語が書かれたが、そのような条件が達成されそうな希望を私たちに与えてくれるような理論も実験も現れなかった。

最初の可能性に絶望したので二番目に行こう。重力が遮蔽されなければならない。何らかの遮蔽物が宇宙船と地球の間におかれ、それがあつた間だけ重力場をさえぎるか吸収し、重力は宇宙船には作用しなくなる。ここで再び私たちの希望を起こさせる想像とそのような機能を持つ見込みのある物質が発見されないために失望する現実とを見した。かなり抑えられた希望をもって第三の可能性にいこう。重力は克服されなければならない。私たちは非常に大きな力をかけなければならない。一歩踏み出すのに法外なエネルギーという犠牲を払っても重力の引力に抗して上昇するだけの力である。この最後の計画において、私たちはある程度の成功をした。計器類が地球を回る軌道に打ち上げられ、あるものは月へ送られ、いくつかは太陽を回る軌道に乗せられた。

しかしながら、本当の解答は得られていないように思われる。人が一つの自然法則を他のものに対抗させて自分の目的を達成しようとする時、彼はそれが不経済で骨の折れるプロセスだと気がつく。船尾から岩を

投げることによってポートを推進することが完全に可能であることは真実であるが、他の可能性を知っている知的な人が選ぶような方法ではない。第一に、投げられた岩はポートやあとに残っている岩を加速するだろう。長い旅をするとしたら必要な数の岩を蓄えておくポートのスペースを見つけないければならないという大きな問題がある。生ずる推力は岩の質量と初速を掛けた値に等しいのでそこには三つの制限要素があることは明らかである。岩の必要総質量はそれを入れるポートの大きさによって制限される。次に使用できるエネルギーの総量である。(これは私たちがエネルギーの真の性質をほとんど理解していないという理由だけによる要素である)その次は現状で最も重大な要素であるが、投げられる腕の機械的強度が制限されていることである。

ロケットにおいては、この「岩」は燃焼室の中で結合、あるいは「燃える」燃料によって生じたガスによって代表され、高温高圧のガスは船尾の孔あるいは「ベンチュリ」を通して噴射される。燃料の量はロケットの大きさによって制限されるので、全推力を増加させる方法は発射速度を増加させることだけであり燃焼室内のガスの温度と圧力を上げることによってのみ達成しうる。使用できるエネルギー総量に關係なく、生じさせうる推力の量は内



●1967年3月22日オハイオ州ヤングスタウンでトム・ダウニー少年が撮影した円盤

念によってこの問題を克服しようという試みがある。この場合はイオンや光子が投げ出される岩として使用される。イオンや光子は高温や高圧を必要とせずにより高い速度を達成できるという点で原子や分子に対して基本的な有利さをもっている。

しかし、そこには実際の装置にこの概念を具体化するのに大きな障害がある。同時に近い将来に経済的な宇宙旅行へと導いてくれそうもないようだ。

この辺で何か見逃しているものがあるかどうか私たちの立場を再検討する必要がある。私たちは「打ち負かせないならば仲間になれ」という古い言葉を忘れてしまったらどうか？

私たちは数世紀の間、重力を「打ち負かそう」として試みてきた。重力を破壊しようとして失敗し、その効果から自分達を遮蔽する方法を考えてきたが発見することはできなかった。それよりも強い力で重力に対抗することによってそれに打ち勝とうと試みてきたが、むだで、やっかいなプロセスを発見しただけである。重力と戦う考えをやめて、重力を利用する可能性を考えはじめる時期ではないだろうか？

すべての自然の要素と似て、正の値はもちろん負の値も重力が持っていることを学んできた。宇宙船を建造したあとで、宇宙船が重力曲線の負の部分にあるように条件を調整できたとした

ならば宇宙船は石が塔の上から地面に落下するように容易に自然に地球から「離れるように」落ちていくだろう。

もちろん、負の重力場が存在することが示されているとはいっても、それは原子の内部と銀河間空間にだけしか発見されていないという反論が出されるだろう。地球に関しては重力曲線の負の部分に宇宙船をどのように置くことができるか？ この問題に対する回答は、私たちがすでに学んだ通り、自然法則が絶対的なものでなく相対的なものであるという事実の中にある。

すなわち、一つの法則の曲線の大きさや形は他の法則の値や位置に関連している。ウラニウム二三五の原子核はたった一つの単位質量を付加することでゼロ・ライン以下になり質量は二三六となる。ゼロ・ラインに近いウラニウム二三八の原子核は依然として曲線の正の側に存在している。この理由は重力曲線の形が質量の存在だけでなく電荷の数と位置によって修正されるからである。

それらの法則についてよく理解するとき、一つの観察点としての地球と他の観察点としての宇宙船の間に、私たちが望む通りどんな形の曲線も作り出すことができるだろう。

あなたが棒磁石を持ち、知識はあるが教育されていない一人の人間に同じ形の軟鉄の棒を持たせ、それらの棒の

性質を決定するために、二つの物体を調べたり、テストするように言っているところを想像してほしい。調べた人が確実にリストにのせる性質の一つは二つの物体の間に相互に引き合う「固有」の性質があるということだろう。

彼は一つの棒の一端を他の棒の一端に近づける時に、引きあう条件が観察されるのがわかるだろう。恐らく彼はこの引力はこれらの物体の固有な性質で、どんなことが行われても持続しつづける性質だと結論づけるだろう。

もちろん、私たちは絶縁されたワイヤーを軟鉄棒にまきつけ、ワイヤーに電子の流れを生じさせると引力ではなく斥力が二つの棒の間に作りだされるということを知っている。この場合、私たちは永久磁石の磁場を破壊したり遮蔽したり、むりやり押し込めたりしたわけではないことに注意してほしい。私たちは単に磁場に反発する場を作りだしただけで二つの物体は一緒になろうとするよりも分離しようとするようになったのである。

同様の可能性が重力場に関しても存在する。結果はこれと同じ方法では達成されないだろうが、重力場に極性を与える方法を見つけ出すことは非常に困難だということはない。それが不可能であるという古い仮定を私たちはすぐに捨てるべきである。

# 実在する 超感覚と念力

現代科学でとらえられないからといって、超感覚を否定はできない。科学は少しずつその門戸を開いているのだ。

工学博士 関 英男



●これはESP訓練測定器である。右側の装置で4個のボタンのどれかを押し、4種のスライドのどれかに照明がついてみえる。的中したか否かは左側の装置でタイプされ、結果は一目瞭然である。もし、人間が単なる物質器械であれば、多数回試行して的中する確率は25パーセントである。しかし、実際には25パーセントを超える人が多いのである。これは人間は単なる物質器械ではなくて、超感覚をもつことの証拠である。(本文参照)

## ○自然科学の限界

自然科学を一通り学んだ一般人の人は、現代のすべての現象を科学的知識で説明できるものだという信念をもちやすい。だから熱も力も加えないでスプーンが曲がる等ということは到底あり得ないことだと考える。また、未来のことがわかったり、以心伝心等を期待するのは全く非科学的だといって取り上げない風潮も一部にみられる。

一方、自然科学を一通り学んだ上に、さらに進んで、その最前線を切り開いている一部の研究者の多くは、現代のすべての現象を既存の科学的知識で説明できる等とは考えていないし、まだまだ未知の領域が沢山残っているという事実気づいている。もし、在来の科学で説明のつかない現象があったら、それを説明できるように、科学の範囲を広げてゆかなくてはならないのである。また、我々は科学に限界があるということを知ったとき、勢い謙虚な気持にならざるを得ないのである。

広大な宇宙に思いを馳せるとき、地球だけが高度の文明をもっていてこれに匹敵する他の天体はないと考えるのは偏狭な話である。最近、天文学の専

門家が、天体観測の結果をもとにして、いろいろな仮説をたて、推定した

結果によると、銀河系の中にさえ、生活可能な星が二〇億あり、文明人のいると思われる星が約二〇〇万あり、中でも電波で通信のできるような工業文明をもった星が四〇万あるといわれている。もちろん、これらの数字は仮定のおき方によって変わってくるが、地球外に文明があることだけは確かであり、むしろ、地球以上に高度の文明があるであろうと想像するのは当然といってよい。かれらは多分、現代の物理学で知られている物質よりもっと微細なものを知っているだろう。また、従来何もないと信じられていた真空の性質も知っているだろう。さらに、われわれが今まで全く知らなかったエネルギー源の存在についても知っていて、空飛ぶ円盤等の航空に利用しているかもしれない。その他、光や電波よりもっと速い粒子、たとえばタキオンを使って相互に通信しているかもしれない。

これらのことを考え合わせながら、最近頻発しつつある超常現象をみると、これらの現象を在来科学で説明で

きないからといって、拒否するのではなく、むしろ前向きに事実を事実として取り上げ、在来科学を未来科学へと発展させるべきではなからうか。つきに、現状で知られている超常現象のす

## ○超感覚の内容

超感覚というのは、五感によっては知覚できないような外界の事実を認識したり、外界の影響に反応することである。一般には単にESPといわれることが多い。超感覚と同じ意味である。ちょうど、未確認物体のことを単にUFOとよぶようなものである。筆者が最近までに超感覚の内容を分析し、さらに分類してみた所によると、多少学問的になるかもしれないが、つぎの表のように総括されると思う。

ESP	未来……………予知
	現在……………透視
	過去……………テレパシー

最初、デューク大学のライン教授が超心理学研究をはじめた頃、ESPの内容としては

べてを網羅することはできないとしても、せめて超感覚と念力に関するいくつかの事例をあげて、確かに実在するものであることを示してみたいと思うのである。

ESP	透視
	予知
	テレパシー

の三種だけとしたが、その後に見えられたバクスター効果等を参考にしたら、ESPの理論的考察等を加えると、必ずしも完全な分類ではないことがわかってきたのである。もちろん、理論的考察といっても、在来科学の範囲内で処理できるものではないから、勢い、ある仮説をおいて進めなければならぬ。

それが筆者のいう幽子情報系の仮説である。いま、その仮説について議論する余裕はないので、すぐ内容の説明に入っていくことにしたい。

まず、予知というのは、合理的な推論でわからないような未来事象を知ることである。同じ未来事象でも、何年何月何日の何時何分何秒に日食が起るといふようなことは、天文学の専門

家が合理的な推論をすればわかる。しかし、東京地方に近く地震が起こりそうだと推定はできても、それが何月何日に起こるか、ということとは現代の科学で断定することができない。もっと卑近な例をあげると、サイコロを振る前にどの目がでるかを当てること等は予知である。

生物と無生物とを問わず、人間以外の物の状態を、五感以外の感覚で知るのを透視という。これに対して、他の人間の心の状態を五感以外の感覚で知ることをテレパシーという。たとえば、密閉された金属の箱の中の物をあてたり、双眼鏡でもみえない遠方の光景を、あたかもすぐ目の前で見たり聞いたりしているように知るのが透視である。一方、テレパシーは、何もしゃべらない人の心の中を知ることである。

潮行は、五感でわかるような記録が残されていない過去の事象を時間的にさかのぼって知ることである。たとえば、三億円事件犯人の足取りのように、多数の警察官を動員し、長年月かけてもわからないことを一瞬にして言い当てるような能力である。

以上の子知、透視、テレパシーおよび潮行のようなESP能力をほとんど完全に近いまでもっている人は、知られているだけでも何億人かに一人位の割合で現に存在する。

たとえば、昨年日本にきたイスラエ

ルのユリ・ゲラーとか、ケネディー大統領の暗殺を予言したアメリカのジョン・ディクソンとか、現にオランダ警察に協力して多数の犯人をみつけているクロアゼト等がそれである。しかし、世間にはあまり知られない人々、知られることを拒否している人も相当数にのぼるはずである。現に、昨年ユリ・ゲラーのテレビ放映をみた日本国内の多くの青少年少女は超常能力のあることを示した。多分、潜在している

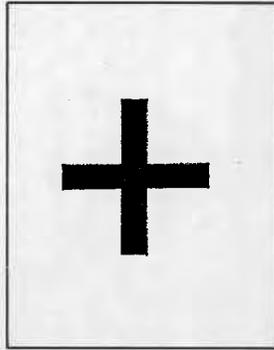
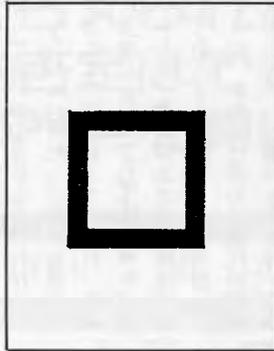
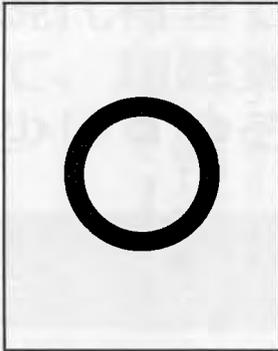
人々の数は二〇人に一人位の割合で存在するであろう。そして、つぎに述べるような器械を使って試験してみると、ほとんどすべての人間や、すべて

の生物に超感覚があると想像される。これは、従来の自然科学、とくに生物学の知識をもってしては到底説明のつかないことである。

## ○超感覚を訓練し測定する器械

今から約三〇年位昔、エレクトロニクスがあまり発達していなかった頃、

デューク大学のライン教授はESPカードを考案し、これを使ってテストす



### 第1図

ESPカードに使  
われている図柄

れば、だれでも超感覚をもっているものであることを統計的に示した。

ESPカードはトランプそっくりの大きさで、それには第1図のように五種類の図柄が用いられた。各々が五枚ずつからできているから、合計二五枚となっている。この順序を滅茶滅茶にしてから裏返しにし、よく精神を統一してから、表側を目でみないで、表側の図柄を順次透視してゆくのである。全部終わってから、実際目でみた図柄とくらべて的中率を出すわけである。

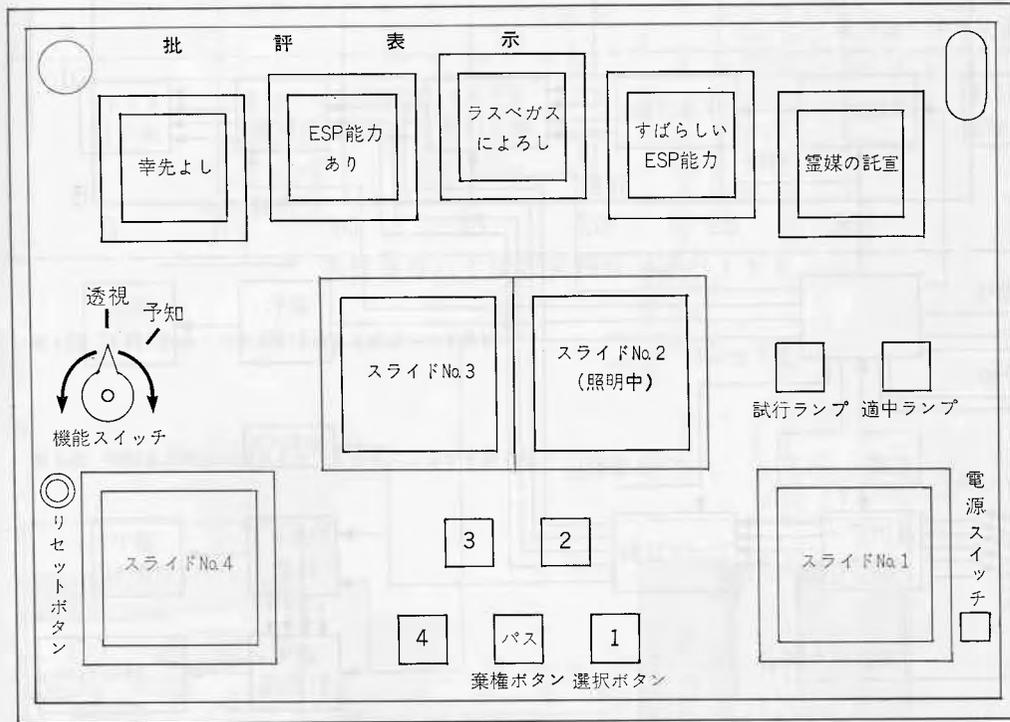
このようなテストを何回も何回も繰り返した後、的中率を計算してみると、統計数学の理論からは二〇パーセントに近づかなければならないのに実際には大抵それより大きな中率になる。

つまり、精神統一などしないのでために答えたときには、必ず五枚に一枚当たるわけである。二〇パーセント以上の的中率に達するということは、多かれ少なかれ、超感覚があることを意味する。ライン教授は一〇年以上もこの実験を多くの人について繰り返して、確かに超感覚はあるという結論に達した。

同じESPカードを使って、予知もテレパシーもテストできる。たとえば、カードを滅茶滅茶な順序に切る前に答えさせれば、予知テストになり、切った後に答えさせれば透視になる。また二人の被験者を使い、両者を遠く

離れた所におき、一方がカードを見、他方が時間だけ打ち合わせてそれを見てるといふことにすれば、テレパシー

のテストになる。ライン教授のテストで一番成績のよかった一人は、七〇〇回以上の実験



第2図 ESP訓練・測定器の外観

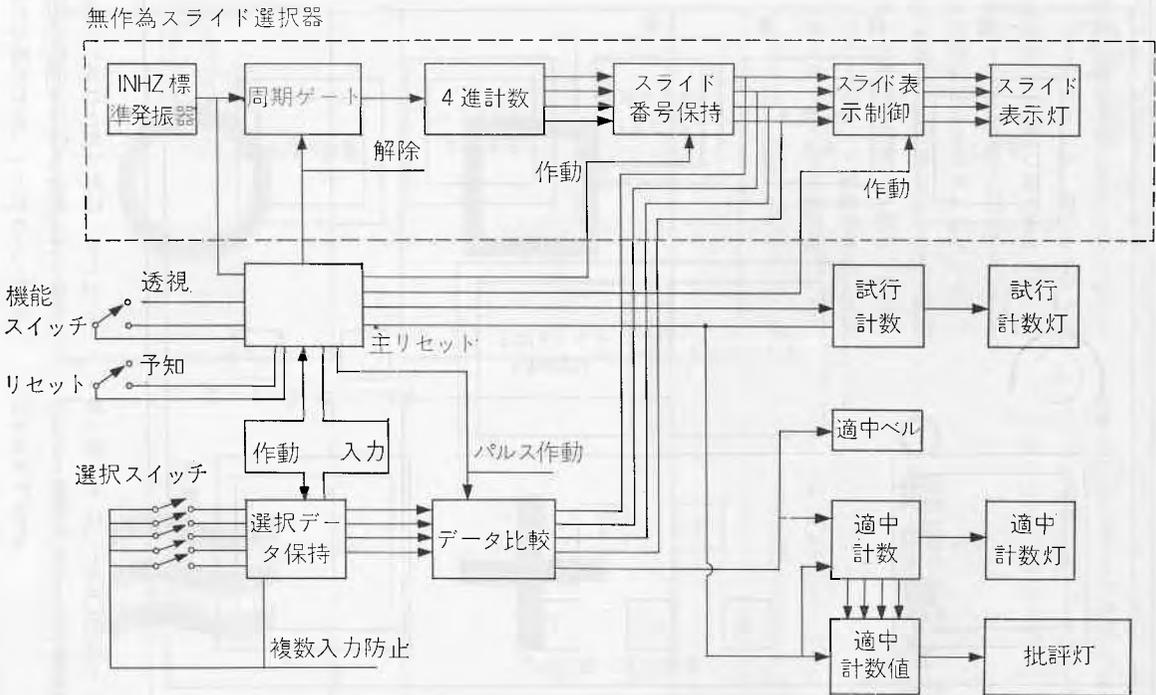
で、一回(二五枚中)につき約八枚平均的中をした。もし、超能力がなかったとすれば、偶然の中ということになり、偶然による平均的中は二五枚中五枚しかないわけである。多くの人々の平均的中は七枚以上となったと報告している。ESPテストはコロラド大学でも行われ、一二〇〇回余りのテストで、平均的中五・八三枚であり、その中の三五〇回余りでは実に平均的中六・八五枚であった。一九四八年頃までの記録で、最高の平均的中を示したのは、ニューヨークのハンター・カレッジのものであった。一人の少女について、七四回のテストを行った結果、平均的中一八枚という成績をあげている。

しかし、右のような方法は、結果を知るまでに手数と時間がかかる欠点があった。そこで、発達したエレクトロニクスを応用して、超感覚を訓練し測定する器械が一九七二年R・ターグによって発明された。そして、カリフォルニアのアクアリアス・エレクトロニクスという会社で大量に生産されている。七六頁のESP訓練・測定器の写真は筆者が今年四月初め同社を訪れ、さらにスタンフォード研究所にターゲットを訪れたとき撮影した写真の中の一枚である。これだと極めて短時間にだれでも超感覚の能力を測定できるばかりでなく、訓練してしだいにその能力を

開発することもできるのである。

この器械の前面パネルには第2図のような表示やボタンがついている。さきに述べたESPカードでは図柄が五種類だったのに対して、この場合にはきれいなカラースライドが四種類である。通常は暗くしてみえないが、各スライドの裏の照明ランプがつくと見えるようになっていく。スライドの下に四つの選択ボタンと一つのパスボタンがあり、スライドを照明するどれか一つのランプがつくのは、五つのボタンのどれかを押したときだけである。押したボタンの番号と照明されたスライドの番号が一致したときは的中ということになり、的中ランプが点火したり、ベルが鳴ったりして、被験者は手ごたえを感じる。ここがESPカードにくらべて優れた点であって、被験者はこれによって鼓舞激励され、さらに成績が向上するようになってゆくのである。つまり、この器械は超感覚能力を測定できるばかりでなく、訓練上達の役目も果たせるのである。被験者はまた、精神統一の結果、的中する見込みのない場合にはパスボタンを押して棄権することができる。そのため、被験者に強制することによるストレスを防ぐ効果もある。

機能スイッチを「透視」の位置においた場合には、どのスライドが照明されるかは電子回路の方で決定されてい

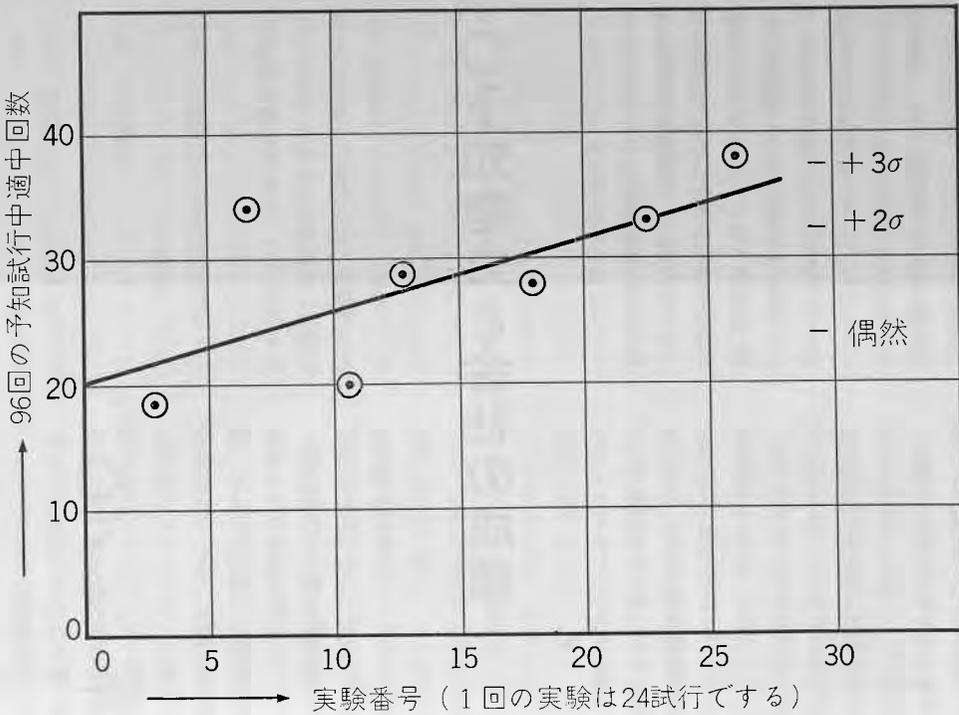


第3図 ESP訓練・測定器の系統図

るが、選択ボタンのどれかを押さないとランプはつかないわけである。また、機能スイッチを「予知」の位置においた場合は、選択ボタンを押してから、四分の一秒後、または一秒後でない、どのスライドが光るかきまらない。「テレパシー」能力の測定をしようとするときは、機能スイッチを透視の位置におき、約七メートル半のケーブルを通してテレパシー付属装置に接続する必要がある。この付属装置は本体と同じ四種のスライドと四個のボタンがあるだけの簡単なもので、電源等は本体から供給される。テレパシーの送り手は付属装置の方に陣取って、本体の前にいる受け手がボタンを押す前にすでにスライドの絵をみて知っているのである。だから、送り手の心が受け手に感じるならば、的中率は上がるわけである。

やや専門的になるが、第3図にESP訓練・測定器の系統図を示した。図の上部に破線で囲んだ部分がスライドを無作為に選択するための電子回路である。各スライドは毎秒二五万回の割合で切り換えられ、どれか一つを選ぶようになっている。左の下の選択スイッチの番号と電子回路で選択されたスライド番号とはデータ比較回路で的中か失敗かを判定し、右下の表示装置等に送られる。

もう一度七六頁のESP訓練・測定

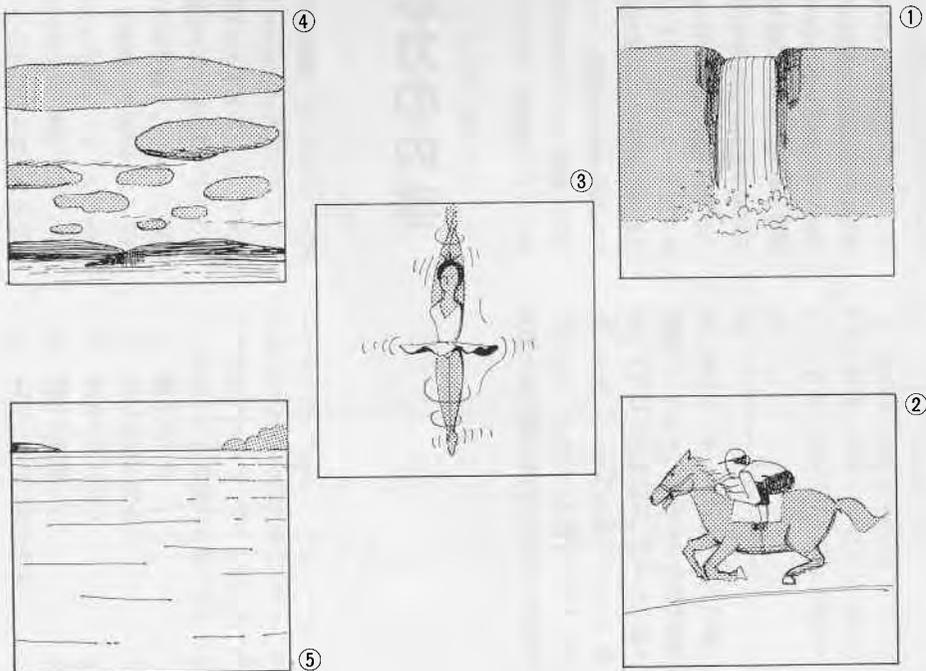


第4図 ESP訓練・測定器で上達する経過を示す曲線

器の写真を見ると、本体の左にもう一個の箱があり、そこから白い紙テープがたれ下がっている。これは試験成績を記録してくれるプリンターという付

属装置である。これには何回試行したか、そのうち何回的中したか等一目でわかるようにプリントされるようになっていいる。選択ボタンを一回押すのを

第5図 被験者が時間の概念をどうとらえているかを試す図



一試行という。通常二四試行が実験の単位であるが、超感覚があるかどうかを判定するには、多数回の実験を繰り返す必要がある。一実験つまり二四試行をすると、第2図の上方に批評表示

がでる。それはスライドの的中回数によって、つぎの五段階の批評文句が照明表示される。

適中六枚以上……幸先よし

八枚 ” ……ESP能力あり  
 一〇枚 ” ……ラスベガスによろし  
 二枚以上 ……すばらしいESP能力  
 一四枚以上 ……霊媒の託宣

一連の実験が終わり、この批評をみて、リセットボタンを押せば、照明が消え、新しくつぎの一連の実験に入るわけである。

ターゲ氏がある被験者について、右のような方法で予知の実験を繰り返したところ、第4図のようにだんだん到達することがわかった。横軸は実験番号を示しているから、実験は二八回繰り返されている。縦軸には四回の実験、つまり九六試行の間の出した回数をとってある。

超感覚のない場合は理論上二四回しか的中しないわけである。その点に偶然と書いてある。

## ○予知能力と会社の成績

ニューワーク工業大学のディーンとミハラスキの両教授はちがった方法で予知能力の試験を一〇年以上にわたって続けている。かれらは数百人の経営者についてテストしてみた結果、確かに予知能力のある経営者の運営している会社の成績は上々であることを統計的に示した。

かれらのテスト方法というのはこうである。まず、被験者に対しては、後でコンピュータで無作為な百ケタの数字を打ち出す予定であることを告げておく。それから、被験者に一回一数字ずつ、後で打ち出されるであろう数字をパンチカードに記入するように命ずる。百数字記入し終わった後、コン

ピューターからでてくる数字と比較し、的中率をコンピュータで計算する。もし、この予想に超感覚が作用しなければ、的中率は一〇パーセントとなるはずである。

多くのテストをした結果、ある人々は二四パーセントという高い中率を示し、他の人々は二パーセントという低いものもあった。

年高五〇〇〇万ドル以下の中企業に携わる社長だけの一団のテストの結果、一〇パーセントを超える的中率（平均は一二・八パーセント）のグループの会社はいずれも、五年間で利益を倍増していたのに対し、一〇パーセント以下（平均は八・三パーセント）

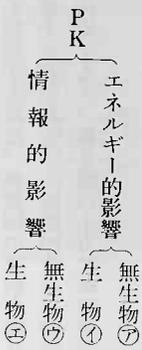
のグループの会社はいずれも五年間で利益増加は倍以下であった。

また、右の予知能力テストがつぎの心理テストの結果と相関をもっていることは、実に興味深い。つまり、被験者に対し時間という概念が、つぎのどの項目に類似しているか？ という質問を試みたとする。

（前頁第5図参照）

## ○念力の内容

念力というのは、従来知られているような物理的エネルギーや装置を仲介することなく、被験者の意志によって、現実の物に及ぼす直接的な影響のことである。一般にはPKといわれることが多い。念力と同じ意味である。筆者が最近までに得た情報をもとにして、PKの内容を分析し、さらに分類してみたところによると、多少学問的になるかもしれないが、つぎの表のように総括されると思う。



約三〇年前、デューク大学のライン

- ① はげしく水の落ちる滝
  - ② 騎手の疾駆
  - ③ 老婦人のスピンの
  - ④ 大空のひろがり
  - ⑤ 動かぬ大洋
- とすると、予知能力の高い人々は①を採用するのにくらべ、低い人々のグループは③④と答えるのが多く、③は中性であった。

教授が超心理学研究をはじめた頃はPK一本で、それ以上の細分はしていなかったが、一九七〇年頃になって、研究プログラムの便宜上、つぎの三種に分類し、一九七二年頃までの研究進捗をつぎのパーセントで示したのであった。



ここで、MTというのは動く物体、LTというのは生物、STというのは静止物体を意味する。ラインはMTの実験としてサイコロを投げ、中心線の右と左に落ちる確率を等しくしておいて、念力によって、その確率が変化す

ることを統計的に確かめているのである。L Tに属する念力現象は植物の生長とか、心霊治療のようなものであり、S Tにはスプーン曲げや念写がある。

筆者の分類でも、エネルギー的とか情報的とかいう言葉は全く便宜的なものであって、両者の区別を厳密にすることは極めて困難である。しかし大きっぱにいつて、ただ物が動きだすとか、曲がるとか、熱が出るとかという程度の現象をエネルギー的に名づけ、文字が写るとか、絵が現れるとか、送り手の特定の想念にだけ反応するとか、受け手の特定の生理的变化を伴うとかいった種類の現象を情報的に名づけているのである。そう割り切ってしまうと、たとえば、サイコロが右に落ちるか、左に落ちるか、二者択一をエネルギー的とし、サイコロの六種の目のどれがどれかの六者択一を情報的とするか、迷うところであるが、便宜上、P K—M Tにいてあることを考慮し、両者ともエネルギー的とみるのが適当だと思ふ。

だから、筆者の分類では⑦にいられた。その他、⑦に属する現象としては、スプーン曲げ、発火現象、物品引き寄せ等である。

④には人体浮揚が考えられる。手品でも人体を横にして、一端だけ棒で支えるショウがあるが、それではなく、

正座した人が、その人の意志で地上から数十センチの高さまで浮揚できるということである。

⑤には念写が考えられる。文字、絵および実際風景がカメラのレンズを通してことなく、単に光学的密封された感光膜に写る現象である。一九一〇年、福来友吉博士によって念写が発見された当時は白黒だけの写真であったが、今日ではカラー写真でできるばかりでなく、ボラロイド式ができてからは、その場ですぐ念写の結果がわかるようになった。

⑥には心霊治療、血管収縮およびバクスター効果などが入り、いっそう興味深い。そして、これに属する現象は純然たるP Kというよりも、大抵の場合、ESPを伴って現れるものである。たとえば、心霊治療の場合、透視によって患部が明瞭に認知され、その部分に想念を集中して治療効果をあげるのである。また、血管収縮は遠隔の地にある送り手が、受け手にとって最も関心のある人名を思念するだけで、受け手の血管が収縮するもので、テレパシーの補助手段として利用することができる。また、バクスター効果とい

うのは、ニューヨークのクリーブ・バクスター氏が一九六六年に、天南星(てんなんしょう)科の植物であるツル草の細胞電流が人間の想念によって変化することを発見してから有名になった現象である。

人間が植物を燃やしてしまおうと思っただけで、メーターははげしく振れる。犬がそばを通ったり、熱湯に子エビを入れたりしてもはげしく振れる。これは植物の側からみれば一種の超感覚であるが、さきのべたESPは人間が中心であったために、テレパシーの分類にはいれなかったのである。しかし、プシー通信といえ、その中に、テレパシーもバクスター効果もふくめることができる。

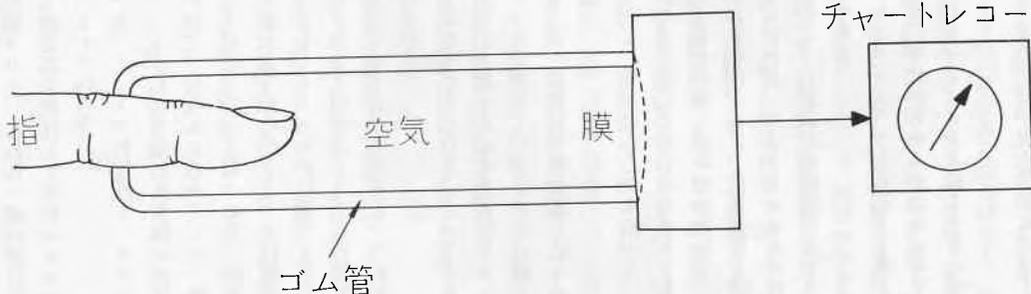
プシー通信  
人間対人間：テレパシー  
生物対生物：バクスター効果  
血管収縮

ページ数の関係で、ここには、血管収縮を応用したプシー通信について述べてみたい。プシーというのはESPとP Kの総称した名称である。

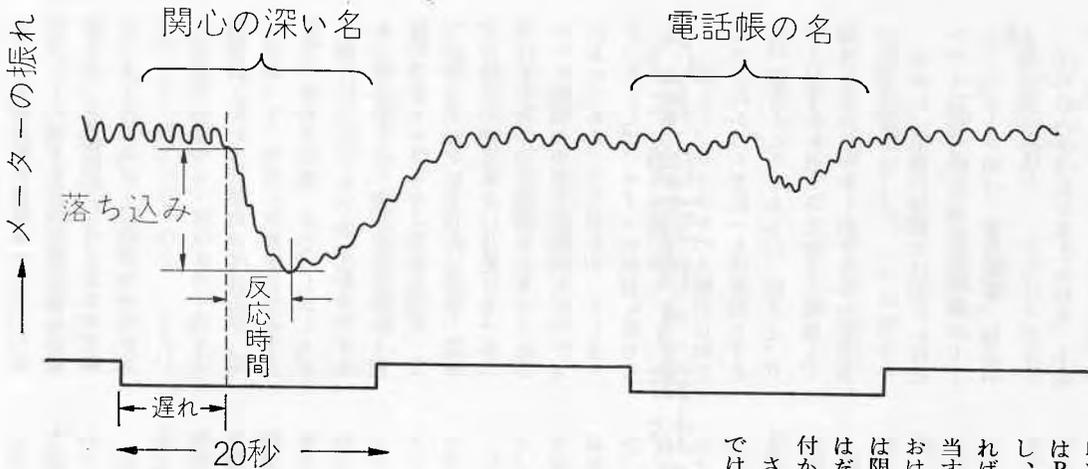
## プシー通信

機械・電気交換器

チャートレコーダー



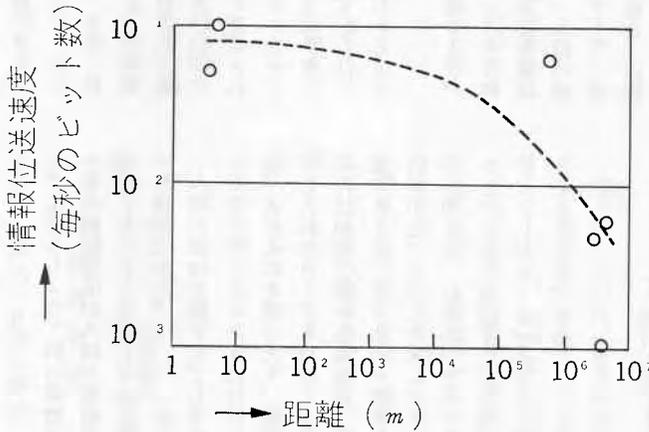
第6図 プレシズモグラフィ



第7図 血管収縮の時間的变化

一人の人間の想念が他の人間の血管収縮を惹き起こすことができる。これはPKにおける③の分類に入る。しかし、もしこれを応用して通信したとすれば、ESPにおけるテレパシーに相当する現象となる。ただし、ESPにおけるテレパシーはだれでもできるとは限らない。それに対して、血管収縮はだれでも起こり、しかも受け手が気付かない間にも起こるのである。

さきに述べたニューワーク工業大学ではミハラスキーやディーンがこの方



第8図 生物通信における距離と情報伝送速度 (Kogan による)

法で通信の実験をしているのである。筆者は今年四月ここを訪れて実験の様等について見てみた。まず、指に第6図のようなゴム管をはめる。それがたどえばミハラスキー教授の人差指であり、かれはそれをはめてベッドに仰臥しているとす。指の血管が膨張・収縮するにつれて、ゴム管の中の空気圧は時々刻々に変化し、他端の膜を振動させる。この振動を適当な機械・電気変換器で電流の変化に直し、別室にあるチャート・レコーダーでその変化

を記録させる。これら一連の部分からなる測定器を総称してプレジズモグラフとよんでいる。

一方、ディーン教授はミハラスキーのベッドから相当離れた別棟の部屋に腰かけて、何枚かあるカードの一枚を取り上げて、ジッと見つめる。両者間の距離は最小四〇〇メートルは離れているから、もちろん声は聞こえない。ミハラスキー自身はディーンの見ているカードがどれであろうと、一向にわからない。

それにもかかわらず、ミハラスキーの可愛いお嬢さんの名を書いたカードをディーンが見ているときは、第7図のように、曲線に明瞭な落ち込みができる。

しかし、電話帳からでも拾った、かれにあまり関心のない名のカードを見ている場合の落ち込みは少ない。

これを利用すると、伝送速度を問題にしなければ、ちょうどモールス符号電信のような形式の無線通信ができるわけである。

プレジズモグラフを利用する考えは一九五〇年代からチェコスロバキアのステパン・ファイガーによるものである。

ファイガーは一九六〇年にニューワークのディーンのもとにきて、プレジズモグラフを共同で改良したといわれている。

通信距離四〇〇メートルからしだいに遠くまで延長され、フロリダ・ニューワーク間を結ぶようになった。これは千数百キロに相当するだろう。そして、かれらは最後に、約四五〇〇キロをへだてたフランスとニュージャージーの間でも通信できるようになった。一九六八年にはソ連、チェコおよびブルガリアでも、符号によるプシー通信の成功が伝えられている。

第8図はブレシズモグラフとは異なつた方法でプシー通信を行つたソ連のコーガンが公表した実験結果である。このデータをみるかぎり、地球上の通信としては伝送速度は低いかもしれないが、将来木星と地球との通信を必要とするような場合、電波以上の性能を発揮することとなる。なぜかというに、電波は木星に到達するのに片道一

時間程度かかるわけであるが、プシー通信では時間を要しないといわれているからである。

本文のはじめの方で、地球以上に文明の発達した天体があるにちがいないことを述べたが、かれらの通信手段は多分巧妙なプシー通信法ではないかと想像される。超感覚と念力とを総称したプシー現象は確かに実在するのである。

プシー現象があるとかないとか騒いでいる地球文明の愚かさをかれらは笑っているかもしれない。かりに、銀河系内の文明の数が二〇〇万とすれば、二つの文明相互の平均距離は約五〇〇光年となり、プシー通信によらなければ、通信に一〇〇〇年間待たなければならぬことになる。

従来の自然科学でまだ知られていない要素があると想像される。これを究明することが、科学の範囲を広げ発展させることにつながるわけである。そのため、まず仮設をもうけなければならぬ。その仮設は、すでに知られている現象を説明できるものでなければならぬ。

従来の物理学では電子、中性子数種類の安定な素粒子と、数百種の短寿命素粒子のことしか知られていない。しかし、プシー現象を説明するためには、それらよりも二〇ケタも小さいプシー粒子群を仮定しなければならぬと思われる。なぜなら、現実の物質の間を自由自在に通過でき、また、現代物理学で知られているよりはるかに短い波長の光を放射するようにみえるからである。

また、一方において、光速より速い粒子、たとえばタキオンのようなものを考えなければならぬ。タキオンを粒子という用語がある。なぜなら、エネルギーがゼロのとき、無限大の速度になるからである。無限速度ということとはA点とB点とが直結するということであり、粒子というには程遠い概念である。さらにまた、円盤に乗って他の天体に行ってきた青年の記録等を見ると、どうしても、光速を超えて飛んでこなければ帰ってこれないような遠い天体に行つて、二、三時間で地球

に帰っている。このことから逆に考えると、現実の物質が一度タキオンに変換し、再び現実の物質にもどると仮定せざるを得ない。つまり、タキオンというものが別にあるのではなく、物質の別の姿と考えざるを得ない。また、物質の発生・消滅の現象をみていると、真空というものの性質を再検討しなければならぬし、真空の中を光が進むのも、相対論の仮設にもとづくのではなく、何らかの媒質を通してである、と想像される。その媒質こそ、ときに素粒子になり、ときに波動となり、ときにタキオンとなるのではあるまいか。

般若心経の最初の文章はこの仮設を裏書きしているように思う。すなわち、色即是空、空即是色を解釈すると、素粒子の奥には波動がある、波動の奥にはさらにプシー粒子がある、ということになる。

物質と精神とは結局一つのものであって、このことをしっかり把握しないから、病気をしたり、災難にあつたりするのである。これは新しい科学の暗示となるであろう。

## 〇むすび

手品や詐術ではないプシー現象は確かに実在する。ここにあげた例は、数多いプシー現象の極めて限られた一部にすぎない。これを従来の自然科学で説明することはできない。

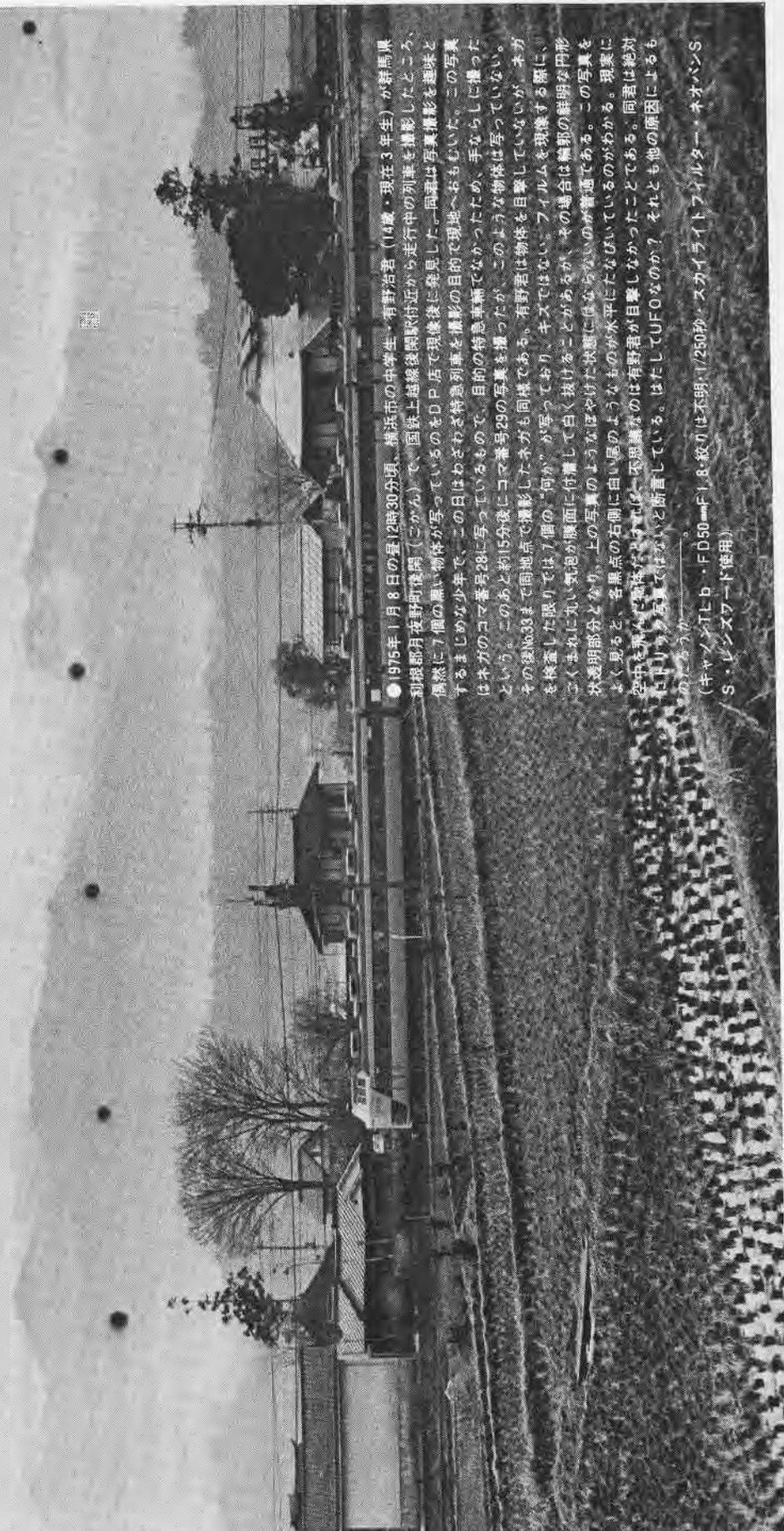
なぜなら、自然科学はまだ完成したものでないからである。しかし、いつ、どこでも再現できるような現象で

なければ、自然科学研究の対象にはならない、と主張する人々もある。それらの人々は条件ということをおぼろげに忘れている。自然科学の現象でも、条件が全部揃わないかぎり、いつ、どこでも再現できるものではないものは沢山ある。プシー現象も条件さえとのえ、必ず実現する。問題は、その条件の中に、

# ●これは何だ？ UFOか、それとも

●1975年1月8日の星12時30分頃、横浜市の中学生・有野治君（14歳・現在3年生）が群馬県別根郡月夜野町霞岡（こがね）で、国鉄上越線後閑駅付近から走行中の列車を撮影したところ、偶然に7個の黒い物体が写っているのをD.P.店で現像後に発見した。同店は写真撮影を趣味とするまじめな少年で、この日はわざわざ特急列車を撮影の目的で現場へおもむいた。この写真は本ガのコマ番号28に写っているもので、目的の特急列車でなかったため、手おらしに撮ったという。このあと約15分後にコマ番号29の写真を撮ったが、このような物体は写っていない。その後No.33まで同地点で撮影した本ガも同様である。有野君は物体を目撃していないが、本ガを検査した限りでは7個の“何か”が写っており、キズではない。フィルムを現像する際に、ごくまれに丸い気泡が腰面に付着して白く抜けることがあるが、その場合は輪郭の鮮明な円形が透明部分となり、上の写真のようなぼやけた状態にはならないのが普通である。この写真をよく見ると、各黒点の右側に白い尾のようなものが水平にたなびているのがわかる。現像に空中を飛ぶ物体が写ったのは一応思議なのは有野君が目撃しなかったことである。同君は絶対に「UFO」だ、とまでは言えないと断言している。はたしてUFOなのか？ それとも他の原因によるものか？

(キャンベルF1.8・絞りは不明・1/250秒・スカイライトフィルター・ネオパンS・S・レンズワード使用)



これでよいのです。その理由を明らかにするために、もういちど、微分の定義にしたがって計算をしてみることにします。

$$\begin{aligned} f'(x) &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(x+h) - f(x)}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{\{2(x+h)^3 - 5(x+h)^2 + 4(x+h) + 7\} - \{2x^3 - 5x^2 + 4x + 7\}}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{2(x+h)^3 - 5(x+h)^2 + 4(x+h) + 7 - 2x^3 + 5x^2 - 4x - 7}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{2(x+h)^3 - 2x^3 - 5(x+h)^2 + 5x^2 + 4(x+h) - 4x + 7 - 7}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{\{2(x+h)^3 - 2x^3\} - \{5(x+h)^2 - 5x^2\} + \{4(x+h) - 4x\} + \{7-7\}}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \left\{ \frac{2(x+h)^3 - 2x^3}{h} - \frac{5(x+h)^2 - 5x^2}{h} + \frac{4(x+h) - 4x}{h} + \frac{7-7}{h} \right\} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{2(x+h)^3 - 2x^3}{h} - \lim_{h \rightarrow 0} \frac{5(x+h)^2 - 5x^2}{h} + \lim_{h \rightarrow 0} \frac{4(x+h) - 4x}{h} + \lim_{h \rightarrow 0} \frac{7-7}{h} \end{aligned}$$

となりますが、ここまではよろしいでしょうか？ この最後の式の第1項から第4項までのそれぞれは、なんのことだかおわかりでしょうか？ そうですね、それぞれ、 $(2x^3)'$ 、 $(5x^2)'$ 、 $(4x)'$ 、 $(7)'$  のことでした。したがって、結局、

$$f'(x) = 2x^3 - 5x^2 + 4x + 7$$

のときは、結論的に、

$$f'(x) = (2x^3)' - (5x^2)' + (4x)' + (7)'$$

のようになることが、明らかになりました。

前回の講座(本誌13号)で、 $x$ が $t$ の次のような関数

$$x = -4.9t^2 + 30t$$

であるときは、 $x$ を $t$ で微分した $\frac{dx}{dt}$ は、

$$\frac{dx}{dt} = -9.8t + 30$$

であるということ——そして「今は深く考える必要はありません。あとでお話しします(あせってはいけません!)」と書いて、やがて、はっきりさせることを示唆しておきましたが、納得されたでしょうか？

念のためにその経過を示しましょう。

$$x = -4.9t^2 + 30t$$

ですから

$$\begin{aligned} \frac{dx}{dt} &= (-4.9t^2)' + (30t)' \\ &= -4.9 \times (t^2)' + 30 \times (t)' \\ &= -4.9 \times (2t) + 30 \times (1) \\ &= -9.8t + 30 \end{aligned}$$

となるからです。

さて、一般的に、 $g(x)$ と $h(x)$ を、どちらも $x$ の関数とすると、その和 $g(x)+h(x)$ も $x$ の関数になります。この和の関数を $f(x)$ としますと、つまり

$$f(x) = g(x) + h(x)$$

のときは、

$$f'(x) = g'(x) + h'(x)$$

となるのが定義から証明されますが、証明はみなさんの練習ということにさせていただくことにしまして、ここでは、公式として紹介だけすることにします。

関数の差の関数のとき、すなわち

$$f(x) = g(x) - h(x)$$

のときも、全く同じで

$$f'(x) = g'(x) - h'(x)$$

です。

(だからといって、2つの関数 $g(x)$ と $h(x)$ の、かけ算やわり算の形になっている関数については、

$$f(x) = g(x) \times h(x) \quad \text{のとき} \quad f'(x) = g'(x) \times h'(x)$$

とか、

$$f(x) = \frac{g(x)}{h(x)} \quad \text{のとき} \quad f'(x) = \frac{g'(x)}{h'(x)}$$

にはなってくれません。上のようになってくれれば、公式としても、たいへん憶えやすいのですが、少々、癪です。

ですから、

$$\begin{aligned} f(x) = 2x^3 \times 5x^2 \quad \text{で} \quad f'(x) &= (2x^3)' \times (5x^2)' \\ &= (6x^2) \times (10x) = 60x^3 \end{aligned}$$

とか

$$f(x) = \frac{3x^2}{7x^5} \quad \text{で} \quad f'(x) = \frac{(3x^2)'}{(7x^5)'} = \frac{6x}{35x^4} = \frac{6}{35x^3}$$

などとしては、絶対にいけませんよ。

これらについては、あとでふれる予定です。

今回は、微分概念——その意味と方法——の概略を説明いたしました。そのため、こまかい数字や、数値計算がすくなくなかったので、とくに、根気が必要だったのではないのでしょうか。

以上でおわかりのように、微分というのは、ある関数で運動している物体があるとすると、その全体の平均速度を出すのではなく、刻々と速さが変化する物体の瞬間的な速度を出すということになります。600kmの距離を3時間で走る列車は $600 \div 3 = 200$ とやれば平均時速200kmになりますが、これは微分ではありません。なぜなら列車というものは駅を出発した頃はまだ速度が遅く、しだいに早くなって、最高速度に達したあと次の駅に近づくとふたたび速度を落としてゆるやかになりますので、その1瞬1瞬の速度が違うからです。この1瞬1瞬に変化する速度の割合(勢い)を探り出すのが微分なのです。

今回の勉強は、微分の応用が主な内容です。

(筆者は中学校教諭)

$f'(x) = 1x^{1-1} = 1x^0 = 1$ となり、結局答えは1。

②  $f(x) = x^2$  は、公式の  $n=2$  のときに相当します。  
だから

$$f'(x) = 2x^{2-1} = 2x^1 = 2x$$

③  $f(x) = x^3$  は、公式の  $n=3$  のときに相当します。  
だから

$$f'(x) = 3x^{3-1} = 3x^2$$

などという調子です。

ついでに、 $f(x) = x^5$  ならば、 $f'(x) = 5x^4$  です。

とくに、右辺が定数(横文字ではなく、ある定まった数)であるような関数の微分はどうなるのでしょうか。

⑤  $f(x) = 4$

で考えてみましょう。これも微分の定義通りすすめればすぐ結論が出ます。

$$\begin{aligned} f'(x) &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(x+h) - f(x)}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{5-5}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{0}{h} = \lim_{h \rightarrow 0} 0 = 0 \end{aligned}$$

そこで、定数の数字のかわりに代表選手として  $c$  という文字であらわすことにすれば、右図からもわかるように

$f(x) = c$  の場合の  $c$  の微分は「0(ゼロ)」になるといえます。

以上で、 $x$ 、 $x^2$ 、 $x^3$  などおよび定数の微分は一応理解できたことと思います。そこで、それらに係数(横文字の前に来る数字)の付いた  $2x$  とか  $4x^2$  とか  $7x^3$  などの微分の勉強にうつことにしましょう。まず

⑥  $f(x) = 2x$

から、はじめます。

どんなときでも、やはり定義に従いさえすればそれが求められるものになりますから、計算しますと、

$$\begin{aligned} f'(x) &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(x+h) - f(x)}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{2(x+h) - 2x}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{2x+2h-2x}{h} = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{2h}{h} = \lim_{h \rightarrow 0} 2 = 2 \end{aligned}$$

です。つぎに

⑦  $f(x) = 4x^2$

のときは、

$$\begin{aligned} f'(x) &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(x+h) - f(x)}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{4(x+h)^2 - 4x^2}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{4\{(x+h)^2 - x^2\}}{h} = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{4(x^2 + 2xh + h^2 - x^2)}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{4(2xh + h^2)}{h} = \lim_{h \rightarrow 0} 4(2x+h) = 4 \times (2x) = 8x \end{aligned}$$

です。

⑧  $f(x) = 7x^3$

も考えてみましょう。

$$\begin{aligned} f'(x) &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(x+h) - f(x)}{h} = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{7(x+h)^3 - 7x^3}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{7\{(x+h)^3 - x^3\}}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{7(x^3 + 3x^2h + 3xh^2 + h^3 - x^3)}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{7(3x^2h + 3xh^2 + h^3)}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} 7(3x^2 + 3xh + h^2) \\ &= 7 \times (3x^2) = 21x^2 \end{aligned}$$

というわけです。

このなかの、 $f(x) = 4x^2$  と  $f(x) = 7x^3$  の2つをならべて形の類似点から、ひとつの法則を出してみましょう。

$f(x) = 4x^2$  のときは、これを微分すれば  $f'(x) = 4 \times (2x)$  で  $8x$   $f(x) = 7x^3$  のときは、 $f'(x) = 7 \times (3x^2)$  で  $21x$  でした。

注意ぶかい方は、もう気がつかれたことと思いますが、( ) のなかの  $2x$  と  $3x^2$  は、それぞれ、 $x^2$  と  $x^3$  の微分——記号で書けば、 $(x^2)'$  と  $(x^3)'$  のこと——ですね。

ですから結局、 $4x^2$  や  $7x^3$  などの微分は、それぞれ、つぎのように、演算を機械的にすすめればよいということが、おわかりになるでしょう。

$f(x) = 4x^2$  のときは、 $f'(x) = 4(x^2)' = 4 \times (2x) = 8x$   
 $f(x) = 7x^3$  のときは、 $f'(x) = 7(x^3)' = 7 \times (3x^2) = 21x$  というようにです。

これらのことから、すでに頭のなかで予想しておられるように、これを公式化して、

$f(x) = ax^n$  のときは、 $f'(x) = a \times (x^n)' = a \times (nx^{n-1}) = anx^{n-1}$  と考えて計算すればよいことが、証明されています。ですから、 $f(x) = 2x$  のときも

$$f'(x) = 2 \times (x)' = 2 \times 1 = 2$$

と考えれば、この公式で求められることが理解されると思います。

つまり、 $x$  の右肩にある指数を  $x$  の前にもってきて、その数字と掛け合わせるとともに、右肩の指数から1を引けば、これが微分の計算法であり、答えの「導関数」になるのです！

「ナーンだ、小学生でも暗算でやれるじゃないか！」と思わず歓声があがることでしょう。

このことは、あとでもっと正確に説明します。

### <関数の和の微分>

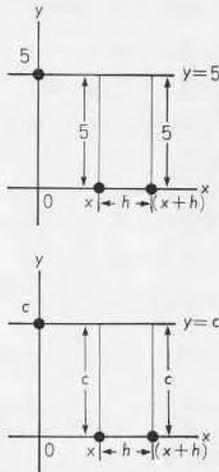
以上で、 $2x^2$  や  $5x^2$  や  $4x$  や  $7$  などのひとつひとつを微分することは、定義から求めることも、公式で機械的に計算することもできるようになったわけです。

それでは、これらがプラスやマイナスで連結されている関数である  $f(x) = 2x^3 - 5x^2 + 4x + 7$  などの微分は、どのように計算をすすめればよいでしょう。

機械的に

$$\begin{aligned} f'(x) &= (2x^3)' - (5x^2)' + (4x)' + (7)' \\ &= 2 \times (x^3)' - 5 \times (x^2)' + 4 \times (x)' + (7)' \\ &= 2 \times (3x^2) - 5 \times (2x) + 4 \times (1) + 0 \\ &= 6x^2 - 10x + 4 \end{aligned}$$

のようにしてよいのなら、いちばんわかりやすいのですが、これでよいのでしょうか？ 結論からいうと、



ということになります。

この式は、任意の  $a$  について成立していますから、 $a$  のかわりに 1 個の変数  $x$  で置きかえれば

$$f'(x) = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(x+h) - f(x)}{h}$$

となり、この式は変数  $x$  の自動変化によって、 $a$  のときはもちろん、あらゆる点での微分をあらわせることを示しています。こうしてできた  $x$  の関数  $f'(x)$  を、関数  $f(x)$  の導関数ともいいます。

たとえば、 $f(x) = 3x^2$  の導関数は  $6x$  となり、これを  $f'(x) = 6x$  と書きあらわします。

### 〈微分と記号〉

微分の勉強には、いろんな記号が出てきますが、いまひとつ、記号を紹介しておきたいと思います。

いままで、変数  $x$  のふえた量 ( $x$  の増分) を  $h$ 、変数  $y$  のふえた量 ( $y$  の増分) を  $k$  として、 $h$ 、 $k$  を使って考えてきましたが、 $h$  にあたる  $x$  の増分を  $\Delta x$  (デルタ・エックスと読みます) これに対応する ( $k$  にあたる)  $y$  の増分を  $\Delta y$  であらわすこともよくありますから、これにも馴れてください (この「 $\Delta$ (デルタ)」というのは「ほんのわずかの」というような意味です)。

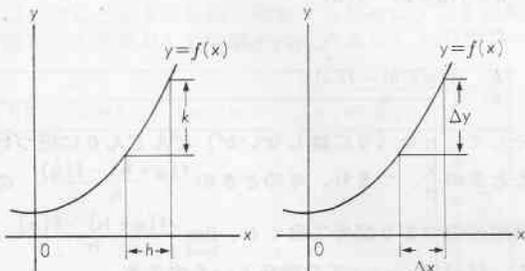
$\Delta x$  や  $\Delta y$  の利点は、一目で  $x$  の増分か  $y$  の増分かわかることにあります。反対にその欠点は、馴れないあいだは  $\Delta x$  を、 $\Delta \times x$  の意味だと勘違いしたり、 $\frac{\Delta y}{\Delta x}$  を

うかつに、 $\Delta$  で約分して  $\frac{y}{x}$  にしようとしたりすることが、よくあることです。

でも馴れると大へん便利な記号ですから、うんと勉強して早く馴れてください。

$\Delta x$ 、 $\Delta y$  を使うと、 $\lim_{h \rightarrow 0} \frac{k}{h}$  は  $\lim_{\Delta x \rightarrow 0} \frac{\Delta y}{\Delta x}$  となります。

$h$ 、 $k$  から、 $\Delta x$ 、 $\Delta y$  にも早く馴れていただくために簡単な比較図を添えておきましょう。



$\frac{\Delta y}{\Delta x}$  の、 $\Delta x$  をどんどん 0 に近づけるときの  $\frac{\Delta y}{\Delta x}$  の

極限の値は、もちろん  $\lim_{\Delta x \rightarrow 0} \frac{\Delta y}{\Delta x}$  と書くわけですが、いち

いち  $\lim_{\Delta x \rightarrow 0} \frac{\Delta y}{\Delta x}$  と書くよりも、簡単に、 $\frac{dy}{dx}$  (ディーワイ・ディーエックスと読みます) と書いてもよいことになっています。

$y$  も、 $f'(x)$  も、 $\frac{dy}{dx}$  も、みんな、関数  $y=f(x)$  を  $x$  で微分したもののことで、同じものの別名です。たとえば、山田建吉君のことを、「ヤマさん」と呼んだり、「ケ

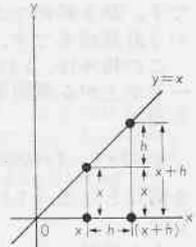
ン坊」と呼んだり、「山田くん」と呼んだりすると同じで、場面場面でも便利なものを使えばよいのです。

### 〈簡単な関数の微分〉

それでは、具体的にいくつかの基本的な関数を微分してみましょう。

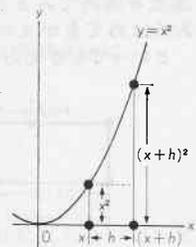
①  $f(x) = x$  のとき。

$$\begin{aligned} f'(x) &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(x+h) - f(x)}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{(x+h) - x}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{h}{h} = \lim_{h \rightarrow 0} 1 = 1 \end{aligned}$$



②  $f(x) = x^2$  のとき。

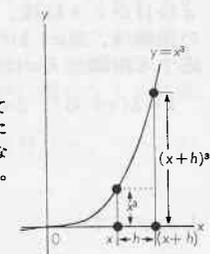
$$\begin{aligned} f'(x) &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(x+h) - f(x)}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{(x+h)^2 - x^2}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{(x^2 + 2xh + h^2) - x^2}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{2xh + h^2}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} (2x + h) \\ &= 2x \end{aligned}$$



③  $f(x) = x^3$  のとき。

注  $(a+b)^3 = (a+b)(a+b)^2$   
 $= (a+b)(a^2 + 2ab + b^2)$   
 $= a^3 + 3a^2b + 3ab^2 + b^3$   
 この公式は中学の段階ではまだ出て来ませんが、よく見ると  $(a+b)^2$  に  $(a+b)$  を掛け合わせただけの簡単なものであるのです、おぼえておくと便利です。

$$\begin{aligned} f'(x) &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(x+h) - f(x)}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{(x+h)^3 - x^3}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{(x^3 + 3x^2h + 3xh^2 + h^3) - x^3}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{3x^2h + 3xh^2 + h^3}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} (3x^2 + 3xh + h^2) \\ &= 3x^2 \quad (\text{この } n \text{ はどんな数字でもよい}) \end{aligned}$$



④  $f(x) = x^n$  のとき。

$x$ 、 $x^2$ 、 $x^3$  の微分の結果から考えると

$$f'(x) = nx^{n-1}$$

という公式が得られることがわかります。2項定理といって、 $(a+b)^n$  の展開公式がありますが、この2項定理を使えば、かんたんに上の公式を得ることができます。

機会があったら、みなさんで導いていただくことにして、いまは結果を公式としてあげておくことにとめます。利用価値が大きい公式ですから、おぼえておいたほうが便利です。

この公式で、①、②、③の微分を、機械的にやってみましょう。

いちいち本質や定義にたしかえられないで、公式によって機械的に結果を得ることができることも数学のすぐれた特徴でもあるのです。

①  $f(x) = x$

は、 $f(x) = x^1$  のことですから、公式の  $n=1$  のときに相当しますので

です。

だから、 $\lim_{h \rightarrow 0} \frac{k}{h} = \lim_{h \rightarrow 0} (12 + 3h) = 12$

です。動き始めてから、2秒「目」の速度は12m/sだという計算結果です。

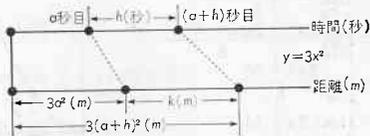
この物体は、1秒目が6 m/sでしたら、だんだんスピードが上がる運動をしていることもついでにわかりました。

$y = 3x^2$  (xは時間(秒), yは距離(m))

を例にとって、「1秒目」と「2秒目」の速度を求めました。

こんどは、もっと一般化するために、まず a 秒目の速度を求めてみましょう (この「a」にはどんな数字をあてはめてもかまいません)。

といっても考え方と計算はいままでと全く同じです。



出発後 a 秒目の物体の距離は  $3a^2$  (m) です。a 秒目から h 秒後、つまり、出発してから (a+h) 秒目の距離は、 $3(a+h)^2$  (m) ですから、時間差 h 秒間に対応する距離差 k m は、

$$\begin{aligned} k &= 3(a+h)^2 - 3a^2 = 3(a^2 + 2ah + h^2) - 3a^2 \\ &= 3a^2 + 6ah + 3h^2 - 3a^2 \\ &= 6ah + 3h^2 \end{aligned}$$

したがって

$$\frac{k}{h} = \frac{6ah + 3h^2}{h} = 6a + 3h$$

ゆえに

$$\lim_{h \rightarrow 0} \frac{k}{h} = \lim_{h \rightarrow 0} (6a + 3h) = 6a$$

です。

a 秒目の速度は、 $6a$  m/s だということです。任意の a でこういう結論になるということは、あらかじめいちいち計算してみなくても

b 秒目の速度は、 $6b$  m/s であり、

c 秒目の速度は、 $6c$  m/s である——などのことを示しているわけです。

この結論は、a 秒目、b 秒目、c 秒目などの速度は  $6 \times ( )$  の、( ) 内に、それぞれ、a、b、c などを入れかえればよいということですから、変数 x を 1 個 ( ) 内に入れておけば、変数 x の自動変化で、 $6x$  はあらゆる時点での速度をあらわすことができることがわかりました。

これを利用すると

x=1 のとき、つまり 1 秒目の速度は、 $6 \times 1 = 6$  (m/s)

x=2 のとき、つまり 2 秒目の速度は、 $6 \times 2 = 12$  (m/s)

など、さきほどにくらべて大へん求め具合が楽になります。

$y = 3x^2$

からできた関数  $6x$  を  $y'$  であらわして

$y' = 6x$

と書きます。

あとでまたふれますが、 $y'$  という記号は、x の関数 y を、x で微分したことを表わす記号の一つです。

### 〈微分とは何か〉

いよいよ、待望の「微分」という言葉が出てきましたので、ここで、微分のもつ意味と定義を述べておきましょう。

y が x の関数であるとき

$y = f(x)$

とあらわします。つまり

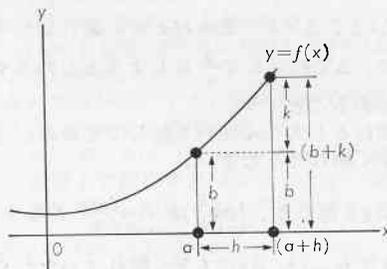
$b = f(a) \dots\dots\dots (1)$

だとします。

つぎに、x が a から h だけふえて (a+h) になったとき、それに対応する y は、b から k だけふえて (b+k) になったとします。これを式であらわすと

$b+k = f(a+h) \dots\dots\dots (2)$

です。



(2)-(1)から

$k = f(a+h) - f(a)$

だから

$\frac{k}{h} = \frac{f(a+h) - f(a)}{h}$

(分子全体はk)

そして、h を (0 にはしないが) どんどん 0 に近づけたときの  $\frac{k}{h}$ 、つまり、そのときの  $\frac{f(a+h) - f(a)}{h}$  の

極限の値つまり記号で書くと、 $\lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(a+h) - f(a)}{h}$

を、f(x) の、x=a での微分というのです。

この定義を念頭において、さきほどのことをふりかえてみますと

$y = 3x^2$

で、1 秒目の速度とは、つまり、x=1 での  $3x^2$  の微分であったし、2 秒目の速度とは、x=2 での、 $3x^2$  の微分であったことがおわかりでしょう。

x=a での f(x) の微分を、 $f'(a)$  であらわします。

この記号をつかうと

$f'(a) = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(a+h) - f(a)}{h}$

では、いよいよ、

$$0 \div 0 = \square$$

は、どうでしょう。  
が  $\square$  の答えです。

← 等しい  
← かける  
 $0 \div 0 = \square$  にあてはまる数

← 等しい ← かける ← 等しい ← かける ← 等しい ← かける  
 $0 \div 0 = \square_0$ ,  $0 \div 0 = \square_5$ ,  $0 \div 0 = \square_{-1.3}$

あれあれ!  $\square$  は、どんな数でも、0 と掛け合わせると 0 になってくれるので、みんな答えになれることがわかりました。「どんな数でも、みんな答えです」ということは、結局、答えがないことと同じです。0 も答えのひとつですが、0 をふくめて、なんでも答えですから、答えを 0 とかいたら、まちがいのです。

$$6 \div 0$$

$$0 \div 0$$

などのように、「0 で割った」とときには、答えはないのです。つまり、0 で割り算はできないのです。

というようなわけで、時間差が小さければ小さいほどよいからといっても、0 にしたらダメですが、「どんどん 0 に近づける」ほど、速度は正確になるはずですが、表を見てください。正確になるはずということは、表の上で、速度も、あるナニかにどんどん近づいているはず——ということ。ナニに近づいていると思えますか? あとで、はっきりさせますが、速度は  $6\text{m/s}$  にどんどん近づいているのです。

要約しますと、1秒目からの時間差をどんどん 0 に近づけると、求める速度は  $6\text{m/s}$  にこれまたどんどん近づきます。この目標のような  $6\text{m/s}$  を 1秒「目」の速度というのです。

0 にはしないが、限りなく 0 に近づけるとか、そのとき、きっちり  $6\text{m/s}$  にはならないが、限りなく  $6\text{m/s}$  に近づくとというような、動的な思想、無限という思考が微分や積分の特徴的な思想であり方法ですから、このところを十分味わいながら勉強してください。

### <無限と極限>

以上のことをより正確に理解するために、いまいちど表をつくりなおして勉強をすすめましょう。

A	B	B ÷ A
1秒目からの時間差(秒)	1秒目(3m)のところからの距離差(m)	
9	297	33
1	9	9
0.1	0.63	6.1
0.01	0.0603	6.03
0.001	0.006003	6.003
...	...	...
$h$	$k$	$\frac{k}{h}$
↓	↓	↓
0		6

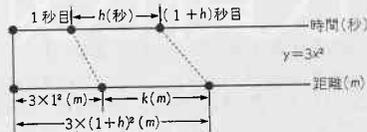
この表のなかの  $h$  (秒) は、1秒目からの時間差で、それに対応する距離差を  $k$  (m) としました。

$h$  と  $k$  を使って先ほどの確認事項を再現しますと、「 $h$  をどんどん 0 に近づけると、対応する  $k$  も変化して、 $\frac{k}{h}$  がどんどん 6 に近づくと」ということでした。

この確認事項を、 $h$  や  $k$  を使った式でいっそう、確実に理解したいと思います。

時間と距離の関係を  $h$  や  $k$  で図示すると、次図のようになることはいままでと同じですから、おわかりの

ことと思います。



1秒目の距離は  $3 \times 1^2 = 3$  (m) です。

そして、1秒目から  $h$  秒後、つまり、はじめから考えると  $(1+h)$  秒目の距離は  $y = 3x^2$  の公式を思い出して下さい

$$3 \times (1+h)^2 = 3(1+2h+h^2) = 3+6h+3h^2 \text{ (m)}$$

ですから、1秒目からの  $h$  秒間で

$$(3+6h+3h^2) - 3 = 6h+3h^2 \text{ (m)}$$

動いたことになります。

だから、時間差  $h$  秒間に対応する距離差  $k$  m は

$$k = 6h + 3h^2$$

です。したがって

$$\frac{k}{h} = \frac{6h+3h^2}{h} = 6+3h$$

となります。この式から、 $h$  を (0 にはしないが) どんどん 0 に近づけると、 $\frac{k}{h}$  つまり  $6+3h$  の  $h$  を (0 にはしないが) どんどん 0 に近づけるわけですから、 $3h$  は (0 にはならないが) どんどん 0 に近づき、その結果、 $6+3h$  は、(6 にはならないが) 限りなく 6 に近づくことが明らかになってきます。

この「どんどん近づく」ことを記号「 $\rightarrow$ 」であらわして、上の内容を

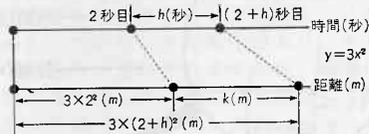
$$「h \rightarrow 0 \text{ のとき } \frac{k}{h} \rightarrow 6」$$

とか

$$「\lim_{h \rightarrow 0} \frac{k}{h} = 6」 \text{ (limは、リミットと読みます)}$$

などと書きます。

この調子で、2秒目の速度を求めてみましょう。みなさんも練習問題のつもりで、まず自分でやってみてから次をお読みになったほうが面白いと思います。



2秒目の物体の距離は、 $3 \times 2^2 = 12$  (m) です。

2秒目から  $h$  秒後、つまり、はじめから  $(2+h)$  秒目の物体の距離は

$$3 \times (2+h)^2 = 3(4+4h+h^2) = 12+12h+3h^2 \text{ (m)}$$

ですから、時間差  $h$  秒間に対応する距離差  $k$  m は

$$k = (12+12h+3h^2) - 12 = 12h+3h^2$$

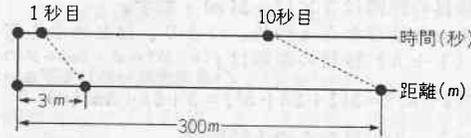
となります。したがって

$$\frac{k}{h} = \frac{12h+3h^2}{h} = 12+3h$$

ているわけではありませんから誤解なきように。

$$y = 3x^2$$

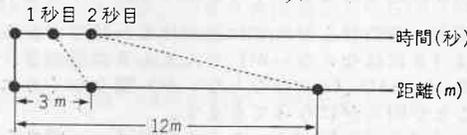
そして、この物体の1秒目の速度を求めてみましょう。1秒目は、物体は出発点から、 $3 \times 1^2 = 3(m)$  のところで、10秒目は、出発点から、 $3 \times 10^2 = 300(m)$  のところに進みます。下の図をごらんください。



1秒目から10秒目までの9秒間で297m動いたこととなりますから、もしこの間等速運動で動いたとするならば、1秒目の速度は

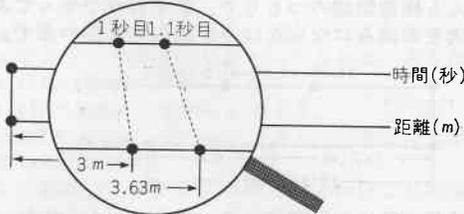
$$297 \div 9 = 33(m/s)$$

だということになります。そこで念のために、こんどは1秒目と2秒目とから考えてみましょう。2秒目は出発点から、 $3 \times 2^2 = 12(m)$  のところですから、下の図からわかるように、1秒目から2秒目までの1秒間に、9m動いたこととなりますので、この間、等速だと考えると、1秒目の速度は9m/sとなって、はじめの結果と一致しません。



この結果から、この物体は等速運動ではないことがわかります。そのうえ、1秒「目」の速度を求めるのですから、時間差が大きければ大きいほど、速度の変化も大きいので、時間差をできるだけ小さくした測定の結果を、フィルター（速度＝距離÷時間）に通して、その瞬間の速度を代表的に表現すべきだということになります。

そこで、1秒目と1.1秒目を考えると、時間差は0.1秒間で、だいぶ小さくなります。1.1秒目は、出発点からの距離は、 $3 \times 1.1^2 = 3.63(m)$  ですから、下図で



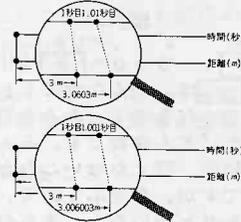
示されるように、0.1秒間で0.63mの動きということで  $0.63 \div 0.1 = 6.3(m/s)$  の速度です。

時間差を、もっとちぢめて、1.01秒目とでみればさらに正確になるはずですが、1.01秒目は、物体は出発点から、 $3 \times 1.01^2 = 3.0603(m)$  の距離のところですから、0.01秒間で、0.0603mの動きとなって、 $0.0603 \div 0.01 = 6.03(m/s)$  の速度といえます。

0.01秒間、つまり100分秒でも、数学では、1秒「目」という「一瞬」を考えるには、まだまだ大ザッパすぎというわけです。

それでこんどは、時間差を1000分秒間(0.001秒間)で考

えてみるために、1.001秒目とで計算してみましょう。1.001秒目には、この物体は、出発点からの距離が、 $3 \times 1.001^2 = 3.006003(m)$  のところですが、0.001秒間に、0.006003mの動きですから、速度は、 $0.006003 \div 0.001 = 6.003(m/s)$  です。



1秒「目」という課題からみると、これでも、まだまだ大ザッパだといわれてしまうのです。

いったい、どこまで試みれば、課題を達成したといってくれるのでしょうか！

このために、いままでの経過を次のように表に整理してみます。

1秒目からの時間差(秒)	計算された速度(m/s)
9	33
1	9
0.1	6.3
0.01	6.03
0.001	6.003

1秒「目」の速度を求めるには、考える時間差が小さければ小さいほど正確なものに近づくことが、理屈のうえからだけでなく、この表からもうかがえます。でも時間差はできるだけ小さいほうがよいといっても、0.0001秒間は、0.001秒間よりは小さいが、0.00001秒間のほうが、もっと小さいわけですから、こんなことを考えるとキリがありません。

それでは、いっそ、ひと思いに、時間差を0秒間で考えたらどうでしょうか。

0秒間でと、1秒目と1秒目とで考えることですから、もちろん物体の動きは0mです。

つまり、0秒間に0m動いたともいえますから、速度は、 $0 \div 0 = \square (m/s)$  で、 $\square$ が答えになるはずですが。

が、こんな割り算をしたことがありますか？

「 $0 \div 0$ は0だ」などといっではいけませんよ。

$$6 \div 2 = \square$$

の $\square$ は3ですね。割り算は掛け算の逆算ですから、 $\square$ をなににすれば、除数の2と掛け合わせて被除数の6になるかを考えると、それにあてはまる数が $\square$ の答えで、この場合は、「 $2 \times 3$ が6」ですから、答えは3なのです。割り算の答えの原理を図示すれば、下のようになります。

$$\begin{array}{l} \swarrow \text{等しい} \\ \text{かける} \\ 6 \div 2 = \square \end{array}$$

それでは

$$6 \div 0 = \square$$

は、どうでしょう。 $6 \div 0 = \square$  の $\square$ はなんでしょう？ そうです。 $\square$ を、どんな数にしても、0と掛け合わせれば0になってしまうので、どうしても6にはなりません。ということは、どんな数も $\square$ の答えにはなれないのです。つまり、答えがないのです。

## 中学生にもわかる微分積分(2)

三好要市

■前号では関数についてくわしく説明しました。今回より待望の微分にはいりますが、なんといっても関数というものの基礎をしっかり身につけておかないと理解がむづかしくなりますから、本号の記事を読んで意味がよくわからない人はもう一度前号を読み直して下さい。それと、 $(a+b)^2 = a^2 + 2ab + b^2$  というような乗法公式もよく頭に入れておいて下さい。

### <等速運動>

いま、ある物体が10秒間に300m動いたとしましょう。この物体の速度は、どう表現すればよいでしょうか？ いろいろな表現のしかたがあると思います。

- 10秒間で300m動く速さ
- 5秒間で150m動く速さ
- 2秒間で60m動く速さ
- 1秒間で30m動く速さ
- 0.2秒間で6m動く速さ
- 0.1秒間で3m動く速さ
- 0.001秒間で0.03m動く速さ

などです。

これらはどれも、この物体の速度を正しく表現しているのですが、たとえば、このなかの2つ

- 5秒間で150m動く速さ
- 0.001秒間で0.03m動く速さ

を、同じ速度のことだと判断するまでには、ちょっと迷ってしまいますね。

それで、速度をあらわすには、「5秒間で」とか「2秒間で」とか「0.001秒間で」とかはよして、「1秒間で」で表現することに統一すれば、いちばんわかりやすいし、他の速度ともくらべやすいので、ふつうはそのように表現します。

ですから、上の場合はこの速度の表現の代表は1秒間で30m動く速さです。

「1秒間で30m動く速さ」のことを「秒速30m」とか「30m毎秒」とか「30m/s (30メートル・パー・セカンドと読みます)」などと書きます。

ご存知のように、速度を求めるには

速度＝距離÷時間

という式で計算しますが、これがつまり「△△秒間で」の表現を「単位時間1秒間で」の代表的表現になおしてくれる一種のフィルターなのです。

(時間の単位を「分」にすれば「単位時間1分間で」、「時間」にすれば「単位時間1時間で」になることは、もちろんです。)

つまり

5秒間で150m →  $150 \div 5 = 30(m/s)$

0.2秒間で6m →  $6 \div 0.2 = 30(m/s)$

0.001秒間で0.03m →  $0.03 \div 0.001 = 30(m/s)$

などという具合にです。

この例のように、10秒間でみても、0.1秒間でみても、一瞬のような0.001秒間でみても、どこでも速度が30m/sであるというように、測る時間が長くても短くても、どこで測っても、速度が一定であるような運動を、等速運動といいます。

等速運動は、つねに一定の速さで一様に動く運動ですから、速さのイメージを想像するためには、便利で基本的な概念です。

### <速度が変化する運動>

ところが、私たちのまわりには等速運動ではない現象がたくさんあります。

たとえば、走っている自動車がブレーキをかけてから止まるまでの一瞬一瞬の速度はスローモーション映画で見るとわかりますが、どこもみんなちがいます。一瞬一瞬の速度は次々小さくなって、ついに最後の瞬間、速度が0になって自動車は止まったということになるのです(走っている自動車がブレーキをかけた場合、ブレーキペダルを踏んだとたんにビタリと止まるのではなく、きわめて短時間内に徐々に勢いが落ちてやがて止まるのです)。

ですから、ブレーキをかけてから止まるまでは、等速運動ではありませんね。それに、道路には信号もあるし、混雑度もさまざまだし、直線コースやカーブも組み合わさっているいろいろな条件があり、それらの条件に応じて自動車が運転されますから、極端に言えば、その速度は速くなったり遅くなったりして時々刻々ちがうと考えたほうがよいでしょう。

このように、私たちのまわりには等速運動でないものが多いのです。

等速運動は(たとえば速度はつねに30m/sであるというふうに)どここの速度も一定ですが、速度が刻々変化しているものは、出発後1秒目の速度はどれだけだったかとか、6.8秒目の速度はどれだけだろうかということが私たちの重要な問題になってきます。

### <瞬間の速度>

x秒目に出発点からの距離がymであり、yはxの次のような関数になって運動している物体を考えてみましょう。(自動車の動きを思い浮かべてもよいのですが、ただしあらゆる自動車が、すべてこの関数で、運動し

## UFOs &amp; SPACE

No. 14 September-October, 1975

Price ¥390

Published by Universe Publishing Co., Ltd.

© 1975 All rights reserved

## (Captions for Color Photographs)

**ADAMSKI-TYPE SAUCER APPEARS OVER TOYOTA, AICHI PREFECTURE** Cover

At about 6:30 p.m. on August 3, 1975, Jiro Sugiura (47), an employee of Toyota Motor Co., Ltd., was setting his camera on a tripod in an attempt to take a picture of fireworks from the upstairs window of his house, when suddenly a grey flying saucer appeared from the southern sky and came to a standstill for a few seconds. He took 4 pictures of the object in succession in haste, then the saucer abruptly went out of sight. After five seconds, a cigar-shaped object appeared again in the sky which he snapped two shots while he witnessed it. The photograph on the cover is one of them.

**UFOs OVER HABIKINO, OSAKA PREFECTURE AND IWATSUKI, SAITAMA PREFECTURE** P.2

On May 18, 1975, at about 3:30 p.m., Yoshitomi Arai (14), a middle school boy of Habikino, was taking pictures of birds in the yard of his house in Takawashi, when he saw a grey, round object flying from the west and hovering above his head for one minute. He succeeded in taking five pictures of the object in succession. Later it went east. The picture shown here is the fourth one. (Top)

On the same day, Masaaki Nozawa (14), a middle school boy of Kawaguchi, Saitama Prefecture, was standing by the swamp in Iwatsuki at about 3:15. Suddenly a strange, round object came down out of an eastern cloud, and flew away westwards after hovering a few minutes. He snapped one shot during the three minutes sighting. A few people fishing there also saw the object.

**AFTERIMAGE OF AN OBJECT?** P.3

Having an impression that "something" would be taken, Michio Fukuhara (19), a company employee, got on the roof of his house with his camera and tripod on June 24, 1975, and took a picture of the dark sky. After developing the film, he was surprised to see a strange, winding line of light on the negative, which he did not notice at that time.

**UFO APPEARS OVER KAMAKURA, KANAGAWA PREFECTURE** P.3

It was on July 22, at about 9:30 that Yumi Takahashi (13) of Kamakura went out of her house to enjoy the evening cool. Then, at 9:30, the middle school girl discovered a mysterious object hanging in the sky. She called her brothers Makoto (14) and Keizo (10), who witnessed the object slightly ascend-

## 〈表紙写真説明〉

● **アダムスキー型円盤  
豊田市に出現!**

愛知県豊田市の豊田自動車工業株式会社社員・杉浦二郎氏(47歳)が、今年8月3日午後6時30分頃、花火を写そうとして自宅2階でカメラを三脚にセットしていたところ、空如南の空から円盤が出現して数秒間静止した。物体はにぶいネズミ色を帯びている。あわてて連続4枚シャッターを切ると、フッと消えた。すると約5秒後に細長い葉巻型の物体が出現し、約10秒間目撃したあいだに連続2枚撮影。これもV字型に飛んでフッと消えてしまった。表紙写真はネガのコマ番号「9」を拡大したもので、上部のドーム、下部に少し見える球型ギヤーともアダムスキー撮影の円盤(スカウト・シップ)に酷似している。杉浦氏はそれまでUFO問題には全く関心がなかったという。他に目撃者はいない。

## 撮影データ

●1975年8月3日午後6時30分頃(晴)。オリンパス OM-1・ズイコーF1.2・絞りF8・ $\frac{1}{125}$ 秒・フジカラー-N100。

ing from south to east. It rumbled while passing over their house. The picture was taken by Makoto who ran out of the house with his camera. They said that the object was circular while hovering, and then it became oval when flying, containing two small, brilliant circular things.

**MYSTERIOUS FLYING SAUCER MANEUVERING OVER TOKYO** P.4-5

On May 7, 1975, Masayuki Ikeda (26), an artist of Nakano Ward, discovered a few strange objects maneuvering under the clouds through his binoculars. Soon after they went into a cloud, he saw another milk-white object turning round by the same cloud and took four pictures of it (photographs No.1 to No. 4). Then the object descended to the altitude of 20 meters, and flew away. A few people who happened to be near his apartment house also saw it. Ikeda is a fine person who sees UFOs so often, and his wonderful stories are contained in this issue from P.8

**AGAIN, GOLDEN UFO OVER TOKYO** P.6-7

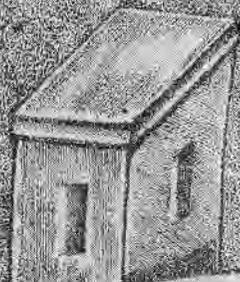
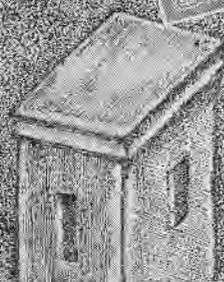
Tatsuya Yoshikawa (40), an executive-director of a company of Ota Ward, succeeded in taking an 8mm movie picture of a strange golden object flying fast over his apartment house near the Second Keihin High Way at about 3:20 a.m. on August 3. The picture on P.6 shows an enlargement of the object seen in the frames on P.7. Yoshikawa witnessed it with his son Shin and his wife Yukiko for about two hours! He claims it was a UFO, not an airplane or a star, because the brilliant object sometimes looked oval and flew at very high speed and halted occasionally.

# ユーゴスラビアの UFO出現騒動



ソ連圏のUFO現象  
イワン・ボボナシツェウツァノフのレポート3

逆転UFO事件



ピツキ・テカニ修道院の奇妙な壁画は  
古代の宇宙船を描いたものか？  
ユーゴスラビアで発生した目撃  
騒動の謎の飛行体の正体は？



# ビソキ・デカニ修道院の奇妙な壁画

ドナルド・E・キーホー（米海軍退役少佐でUFO研究者）が書いた「空飛ぶ円盤は実在する」は、ユーゴスラビアのUFO問題をとり上げた最初の書物である。そしてUFOは大気圏外から来るといふ一般的な概念が、一九四九年五月七日にチトー上空で一機の円盤状UFOが目撃されたという記事の中で述べられている。それ以上の詳細な様子は残念ながら書いてないが、キーホーがこの情報を米空軍から直接に入

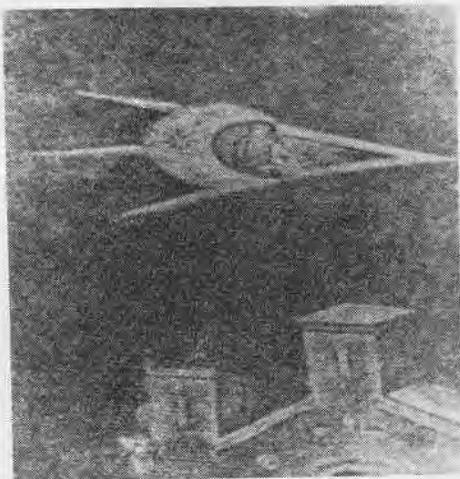
手したことは確実にわかっている。ユーゴスラビアも「有史以前の」UFOの出現活動に関係があったと考えてよいだろう。一九四九年以来、数個の不思議な物体がユーゴスラビアの上空に見られているが、特に一九五四年と六七年、六九年、それに一九七一年がUFO出現のブームであった。

これについて説明する前に、まずサラエボのA.A.A.K（天文学宇宙旅行協会）によるUFOの分析結果に注目することにしよう。

ユーゴスラビアには奇妙な物がある。各地の男子修道院の壁に絵が描いてあるのだが、これがUFOに関連があるらしいのだ。そ



●ビソキ・デカニ修道院の壁画の部分図(1) 左が西で右が東



●壁画の部分図(2)

●ビソキ・デカニ修道院



れらの壁画のなかで最も奇妙なのは、ユーゴスラビアで最も魅力的かつ立派に保存されているビソキ・デカニ修道院のフレスコ壁画である。一九六八年以来、多数の専門家がこの特殊なフレスコ画に興味を寄せてきた。この修道院の最大のドームの中にある有名なフレスコ画「キリストの磔刑」中の二カ所の部分が、UFO研究者、科学者、ロケット工学専門家、空想家、懐疑論者などの論議的になってきたのである。有名な科学記者トリフン・ミコビッチは、ボルダ紙の一九六九年七月二六日付にこのフレスコ画について書いたが、その要約は次のとお



●ピソキ・デカニ修道院の内部

りである。

「磔刑図」の左上方と右隅、それにキリスト像のバックの青の中に二個の物体が描いてある

が、その形、大きさ、見かけ上の運動などを見ると、どう見ても現代の宇宙ロケットとしか思えないのである。昔はこの物体は太陽と月をあ

らわしていると考えられていたが、最近の研究ではこの推測は信じがたいものであることを示している。この時代の多くのフレスコ画が太陽または月をあらわしていることは事実だが、ピソキ・デカニ修道院の「磔刑図」は特異な存在である。この絵の物体の中に半裸体の人物像が描かれているのだ。まるで宇宙船を操縦しているパイロットみたいなのである（右頁の写真）。この当時に描かれた太陽と月の絵はすべて東から西へ動いているようにあらわしてあるし、風の吹く方向も図像学的方法によってすぐわかるのである。しかも描かれた太陽と月はその放射線を地上の方に出している。ところがこの修道院の絵は西から東へ動いているように描かれているために、太陽と月ではないというのが第一の理由となる。次に、物体から出ている放射線が垂直でなく水平になっているのである。そして「宇宙飛行士」らしい人物がその物体を操縦しているように見えるのだ。この三点は、フレスコ画に飛行中の二機の宇宙船を描いたものという結論に達することになる。左側には機首の丸い物体から長さの異なる六本の水平なビームが出ており、右側の「乗物」は先端が三角形にとがっていて、うしろへ三本の放射状のものを放っている。この物体中の小さな男は進行方向にむかってすわり、ある距離をおいてその後方からやって来るように見える左側の物体の方を見ている。

すでに述べたように、中世のフレスコ画には

しばしば太陽と月が描かれているので、比較するための資料は十分にあるが、この修道院の壁画のようなものは見当たらない。たとえバデカニ修道院と同じ時代の建築物である。ペクの修道院には太陽と月を描いた多数のフレスコ画があるけれども、これらは「本物」の太陽のきわめて正確な描写である。ペクの「太陽」はすべて等しい長さの放射線がリング状に取り巻いているので、太陽を象徴化したヒマワリのようにも見える。伝説によると、西暦三三三年、キリストの磔刑の日に「日食」が起こったと考えられており、そのためにペク修道院の磔刑フレスコ画だけは太陽を光のない状態で示してある。そこでデカニの絵画も同じ「光のない」太陽として描かれたもので、ロケットらしき物体は太陽なのだと考える人もあるだろう。

ペク修道院のコレクションの中にはやはり磔刑を示す有名なエルサレム聖画があるが、ここでもキリスト像の上方に太陽と月の絵を見ることがができる。これらはしかし人間の目で見るといつもそうであるように痛ましく写実的に描いてある。この絵の空中には人間の姿はなく、十字架に関して太陽と月の位置は全く異なっている。これを見る人は、正確に設定された伝統的なパターンを中世の聖像画家たちが尊重した良心を感じるのである。

デカニ壁画の太陽と月の絵に関係があると思われる宇宙船について論議することになると、この説の熱心なチャンピオンたちは、磔刑に関

連した新約聖書のある部分（これには暗い太陽ばかりでなく地震のことも述べてある）はその当時に出現した宇宙船に関連があるのかもしれないと考えている。

問題は、デカニのフレスコ画を描いた画家たちがこのように解釈して、そのためにキリストの頭上に宇宙船を描いたのか、ということだ。それとも画家たちは存命中に宇宙船を見て、それを忠実に描いたのだろうか。あるいは今は失

## ユーゴスラビアの UFO 出現騒ぎ

ここで同協会のことを述べておこう。この協会は UFO の目撃に関する海外の記事によく引用されるが、一般には悪く思われている。その理由は、一度ならず我々はユーゴスラビアの目撃事件についてマニアから報告を受けるけれども、同協会はこうした現象を「説明のつかない」とか「わけのわからない」ものと声明するらしいからである。だが、実際には、同協会は UFO の研究グループではないのだ。ユーゴスラビアには UFO 研究グループはない。したがって同協会の仕事は UFO に関する報告を勝ち誇って世界に発表することではなく、むしろ UFO 事件については懐疑的なものである。同協会はロケットと天文学を広めようとするアマチュア天文家、大学講師、数学教師、物理の学生などのグループにすぎない。もし UFO が出現す

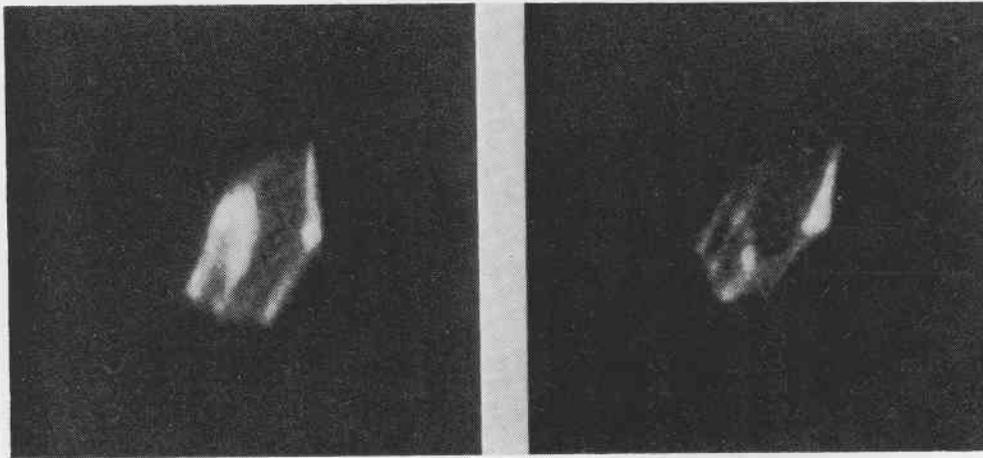
われた何かの資料から描写したのか、または全くの空想だったのか？

新約聖書の文章の解釈は自由だが、たしかなのは、キリストの死のときに人間が操縦する宇宙船が出現した記録はないということである。天文宇宙旅行協会会長のムハメッド・ムミノビッチは次のように言っている。「こうした絵画は各自の考えどおりに解釈されてよい」

れば同協会はその事件を取り上げるが、たゞそれを説明しようとするにすぎないのである。

この点でそのメンバーたちは一九六八年一月一八日にユーゴスラビア上空で見られた未確認物体に関して立派な仕事をしている。これは全世界の UFO 専門誌に真実の UFO として掲載された。その内容は次のとおりである。

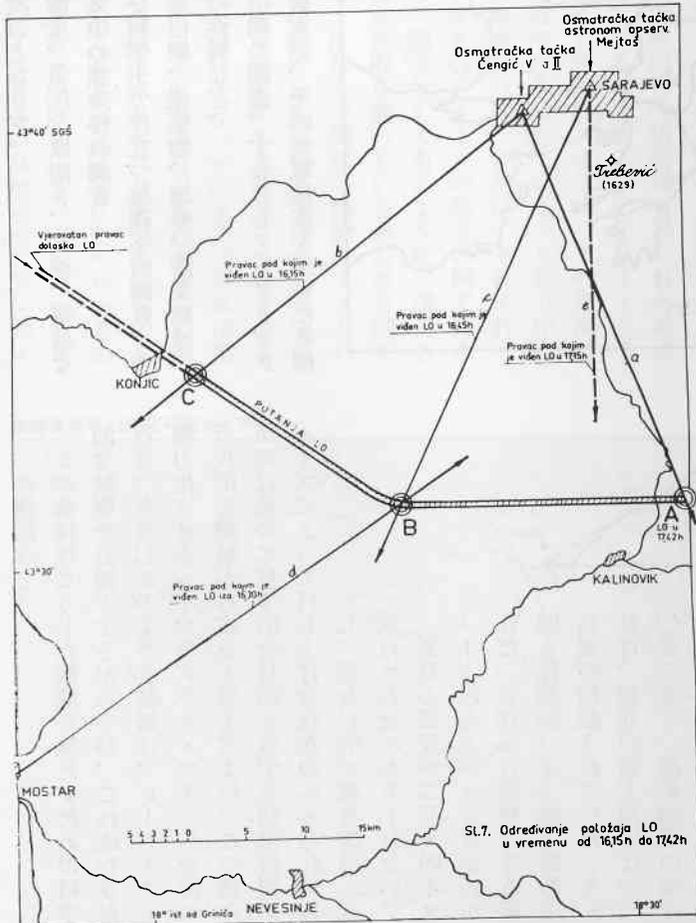
「そのときは白昼だったが、物体はその光輝のためにすぐよく見えた。その輝きは後に西方に出現した金星のそれよりも少なくとも一〇〇倍はあった。物体は方位角二〇〇度の方向を飛んでいた。仰角約四〇度である。最初は濃い青色で、次に白青色に変わり、最後は赤くなつた。中心部には強烈な輝きが見えたが、これはあとで消えた。最初の星々が出てきたとき、物体の大部分は、中心部だけ別として、透明にな



●1968年10月18日、サラエボで撮影されたUFOの連続写真。天文学宇宙旅行協会の会員が写した。

ったように見えた。一七時一五分頃、物体はサラエボ天文台の南側におり、一八時五〇分頃に望遠鏡の視野から消えた」  
協会の幾人かは二八・五倍の屈折望遠鏡を用

●上段写真中の物体の飛行コース



いて数枚の写真撮影した。フィルムはアグファで、カメラはゼニスである。この写真のうち二枚は鮮明に写っており（上段の写真）、他の二枚は大体に良好だった。物体は円錐形で、一部分は強く光っていた。飛行中にターンしたが、これは写真でもわかる。

この事件はユーゴスラビアの一般人の好奇心を高めた。サラエボ、モスタル、コニツその他の無数の住民が見たからである。新聞やラジオが報道したが、その性質についてはだれも語らうとはせず、政府はいかなる説明もしなかった。結局、写真すらもスケッチやリポート以上の知識を与えなかったのである。協会は徹底的な調査を行うことにした。そして最初の結論は、いかなる種類の気球でもないということであった。二種類の地方紙に協会の手で広告が出されて、もっと詳細な情報を集めることになった。協会は更にグループを結成して、正体を究明することにし、六カ月後には「一九六八年一月一八日に見られた物体の正体」と題する四

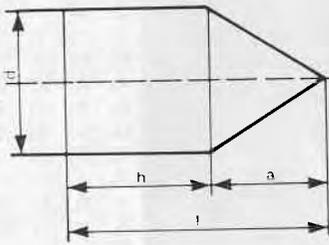
二頁の小冊子を発行した。飛行物体の測定の可能性を考えた後、協会はUFO研究者のために計算データを出した。次のとおりである。

物体の高度はサラエボの上空二五・四〇キロメートルである。飛行コースの作図は目撃者のデータと一致した。物体は平均秒速八・八メートルで移動した。

成層圏の気流が物体の横流れを生ぜしめた。したがってそれ自体の推進力を持ってはいない。全重量は八〇〇キロである。

結局、一〇月一八日にユーゴスラビア上空で見られて、「未確認」としてUFO関係文献に載り、これほどの騒ぎを起こした物体は、どこから来たのかわからない成層圏気球だったというのである！

ここで最後の疑問が残る。「この物体はいかなる目的をもつのか、そしてどんな装備がしてあるのか？」  
 どうみてもこの飛来のは上空から地上を観察するためであろう、ということになる。詳

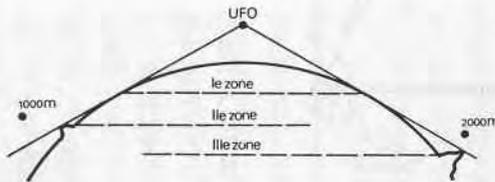


a = 23 m  
 d = 28.5 m  
 h = 27 m  
 l = 50 m



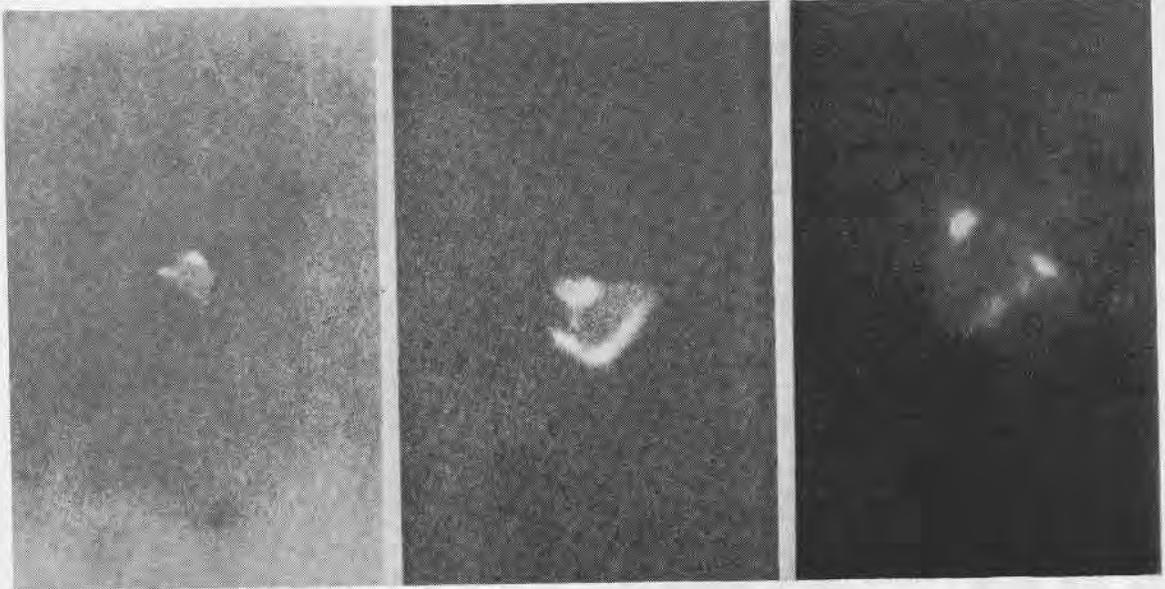
Observation area shaded

- 1 細に言えば次のとおりだ。  
 温度、湿度、気圧、風向き、風速、電荷など、空気中の諸条件の調査。
- 2 軍事及び科学上で役立つ地理学的調査。すなわち通信網、建築物、地形、産業地域、地磁気の性質など。
- 3 電波通信網の調査。すなわちテレプリンター、無線電話、その他電磁波を用いた各種



の機能など。  
 この物体はこうした機能を果たすための科学的な装置を必要とするだろうが、これはむりだろう。ただしこのような装置は、「リーダー」さえない力化させる「インテグラル・コイル」を持つ近代的な機械から成ると考えてよい。この種の気球は純粋に科学的な目的を有する科学研究グループによって打ち上げられたのかもしれないし、別な目的で軍事施設から飛ばされたのかもしれない。

飛はされたのかもしれない。  
 気球の高度が二五・四キロメートルだということがわかれば、気球から観察できる範囲も見当がつく。地上撮影用装置が積載されていたと考えれば、視界の最大角度は一二〇度となり、撮影地域の幅は六八キロメートルである。物体がユーゴスラビアの中央部上空を飛んだということは注目にあたいする。この物体が集めた情報を高周波電波で基地へ送信できる装置を持っていてと考えれば、地上から見える範囲の決定は重要である。このことを念頭におけば、基地や受信センターの位置について推定できる。理論上の目撃範囲は地上の湾曲度



●左から1970年5月16日、9月29日、71年10月8日にサラエボで撮影された物体。

によってきまるが、もっと厳密に言うと、地面の凹凸の性質によってきまるのである。信号が受信される範囲は図で示されているが、その幅はその海拔の高さできまる。

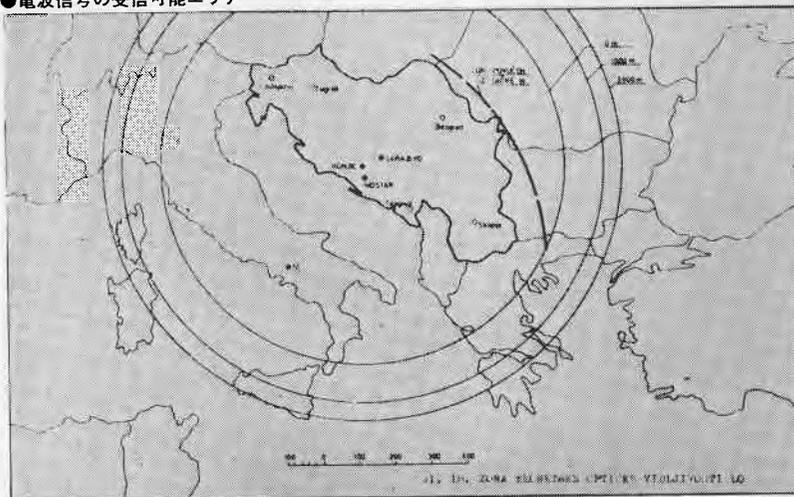
最初のゾーンでは信号はあらゆる地点で受信されるが、第二のゾーンでは海拔一〇〇〇メートルの地点でしか受信できない。第三のゾーンでは海拔三〇〇〇メートル以上の土地となる。ユーゴスラビアと近隣各国を示す地図がこの詳細を示している。

この受信帯域の半径はそれぞれ五七〇、六八〇、七二〇キロメートルとなる。この各エリアはUFOの高周波信号受信帯域と思われる地点をすべてカバーする。海拔二〇〇〇メートルの図で示される最も外側のエリアは、その高度で受信される地域だけを示している。しかし中心部に最も近い他の二つのエリアは、それぞれ一〇〇〇メートルと二〇〇〇メートルの高さの同じ地点を示している。図で示してあるように、送信される信号は我々を取り巻いているあらゆる国に受信できることになる。気球の移動コースからみると西の方のどこから打ち上げられたとも考えられる。かりにイタリアのどこかだとすると(地図では「M」となっている)、これは海拔二〇〇〇メートル以上あり、これを中心に弧を描くと、この弧はユーゴスラビアの領域の全部を含むことになる。このことからわかるのは、物体がユーゴスラビア上空のどこにいたにせよ、信号は、イタリアのM地点で二五・四キ

ロメートルの上空を飛んでいた物体から受信される可能性があるということである。M地点がイタリアに定められたのは、物体が西から来たからである。しかしイタリア以外の国のどこかの地点であってもよい。こうした推測はUFOの目的などに関する多数の仮説の一部分にすぎない。

ところが協会のメンバーは更にUFOを見た

●電波信号の受信可能エリア



のである。これも写真に撮られ、協会によると同じ性質のものだということである。つまり成層圏気球だというのだ。この目撃はサラエボヤその近郊で発生した。日時は一九七〇年五月一日、九月二九日、七一年一〇月八日である。協会がこのような重要な役割を果たしたのには二つの理由がある。まず第一に、こうした調査態度は全世界のまじめなUFO観測者にとって価値があると我々は考えていること。UFO目撃レポートというものは感違いが排除されればより以上価値が出てくるからである。第二に、我々は協会メンバーの熟練した腕前と、UFO問題に対して示しているまじめな態度を強調したいからである。このことはもちろん協会が成層圏または大気圏外物体に関して意見を表明する際に信用を得ることになる。したがって我々はユーゴスラビアのUFO騒ぎに関する協会の判断に敬意を表している。

一九五四年一〇月一日と同月二五日のあいだにユーゴスラビア上空で円盤が目撃された。最も重要な目撃証人たち（低空で飛んだ円盤群と高空を飛行した巨大な葉巻型物体を見たという）は、ルブリヤナ、サラエボ、ベオグラード周辺の地域に住んでいる。数千の人々が目撃しており、協会の意見では、このブームは同じ年の一〇月と十一月に起こったフランスの事件と大いに共通しているという。しかしフランスの場合と違ってユーゴスラビアの事件はほとんど新聞には出なかった。注意を引いた実例は皮肉

に取り扱われて、これは不幸にもユーゴスラビアのブームの再調査を不可能にしている。円盤出現事件はフランスと同様に一九五四年八月末から十一月末まで記録された。このときはフランスのブームも終わっている。フランスのブームは一九五四年一〇月の前半であるが、ユーゴスラビアのブームは同月の後半である。資料不足のためブーム発生の地理的な範囲は推論の域を出ない。

続く数年間、新聞社はやはりこのUFO問題に注目しなかった。ユーゴスラビアでは噂が流れたけれども、これは外国の刊行物から情報が入って来たからである。しかしバルカン半島諸国と同様、ここでもUFOをめぐる沈黙は一九六七年の終わりに破られたらしい。その年の一月と一二月に、イワングラードの住民が数機のUFOを見たと言張したので。このUFO群はシンメトリカルな円陣をつくって移動し、絶えず高度を変えて、ついに驚くべきスピードで消えた。

この頃はひどく湿っぽい季節だったが、コモビ森林ではその上空を物体群が低空で飛んだあと、原因不明の大火災が発生した。火事の原因を調査中に、不可解な損傷を受けた樹木群が見された。旋風に襲われたかのようにぼつきりと折れている。さすがにユーゴスラビアの新聞も事件に注目した。同じ頃、ジェット機よりも速い多数の物体が不可解な飛び方をしたという報告がゴルベクから出たあとには特に注目したの

である。レーダーでその位置をつきとめることは可能だったが、正体は不明で、ユーゴスラビアの軍用機がむだな追跡をしたあと、物体群は他の都市や村々へ移動した。また、コスメット州の州都プリズチーナの約一〇〇名の住民が一機のUFOを目撃し、これが異常に輝く星のように見えたと報告している。当時空中には一機のジェット機がいたが、物体はもっと高空を、もっと速く飛んでいるように見えたという。

同じ秋に、数十名の人がベオグラード、ザグレブ、ゴルベクなどの上空をUFO群が飛ぶのを見ている。コモビの森林とソフィアやプリズチーナの諸都市が同じルートにそっていることは注目にあたいる。このことから、こうした場所のすべてが飛行コースの直線網の存在を示している結論づけるのは早計だが、たしかに奇妙ではある。協会はこれについて何も発言しようとはしなかった。事件の詳細な資料が不足していたし、入手できた資料も研究用としてはあまりに異常であったからである。

最後に付言すると、一九七一年にユーゴスラビアでは一九六七年と同じUFOブームが発生した。この調査はまだ始まっていない。しかし、このブームについては諸外国のUFO誌にしばしばセンセーショナルな記事や結論が掲載されているけれども、この「噂」の正体は多数のプラスチック製気球だったと我々は考えている。

7年後——1982年  
太陽に向って全惑星が一直線に並ぶ!

全米の話題をさらった  
衝撃の予測レポート!

# 惑星直列

地球は  
大地震で  
壊滅する!

大好評発売中

日本図書館協会選定図書  
J.R.グリビン/S.H.プレージマン 著 平野正浩 訳  
B6判・224頁★定価750円 千160

金沢文庫

東京都千代田区神田小川町2-2710 ☎03(295)0241・2

●自然界にはまだこんなに未知な現象がある

## スーパーネイチャー

ライアル・ワトスン/牧野賢治 訳  
四六判上製三〇頁/定価一八〇〇円

- 本書は、自然界のもろもろの現象のうち、現代科学の次元でとらえられないもの、未解決のものを網羅し、それらを著者独自の見地から、現代科学の論理的延長として把握した欧米のベストセラーである。
- 本書は次のような実例を述べる(抜粋)。
- すべての生物は、太陽、月、惑星の周期に対応している。われわれ人間は、自分のなかに生物時計をもっている。
- 潮汐の干満が月によって左右されるように、すべての生物もまた、月により影響をうけて

- いる。
- 占星術は科学的に根拠がある。星占いや惑星の研究には、実際の有用なものが多い。
- 北半球では、子どもは五、六月に他の月より多く生れる。人間はいまも生殖期をもつ。
- すべての人間は、電気的・磁気的な生命の場を所有する。これが「オーラ」という神秘的信仰と合致する。
- 動物は地震のおこる前に震動をキャッチする。同じように人間は、場所に鋭く反応する。
- 人間はものごとのコントロールが可能であ

- る。ギャンブラーがその意志を鍛え、勝ちたいと念ずれば、幸運を掴むことができる。
- カメレオンは、自分の見ることのできない背景とどのようにして調和するのか。
- 催眠とは、夢とは、そしてテレパシーとは何か。
- 針灸療法は科学的にみて合理的である。
- サケは自分の生れ故郷の河に帰ることをどうして知っているのか、また、シジュウカラが牛乳ビンのふたをあけて、ミルクを飲むことを、どのようにして学習したか。

蒼樹書房

東京都文京区水道2-14-2-201  
☎(03)-942-0205/振替東京126764

日本超科学会雑誌

# 超科学

第4号 特集 超科学実験装置 送料共500円  
 主要記事 UFO探知機の製作  
 キリリアン写真機の製作。  
 オーラ測定器の製作

第5号 特集 ユリ・ゲラー再来日 送料共500円

**ジュニア会員新設**

入会金500円 年会費2000円  
 学生に限り入会できます。

●会員は下記の品1割引!

- 四次元波受信機(4Dメーター) サホテンの歌が聞け、ウン  
 定価39,000円 送料1,000円 発見機としても使用できます。
- 超心理学実験機(念力測定器・サイメーター)  
 定価15,000円 送料1,000円(小型)9,500円 送料500円
- ESPカード 定価500円 送料55円
- 魔法の振子 定価400円 送料55円

〒248 鎌倉市小町1-15-17 TEL0467(25)3035  
 (橋本電子研究所 所長・橋本 健)

## 日本超科学会

# UFO探知機

超高感度

国産唯一の本格的磁気探知機!

秋の夜のUFO観測に必携!!  
 既に60台が全国で活躍中!!



T-3b型

- T-5型.....¥ 9,000
- T-3a型.....¥ 18,000
- T-3b型.....¥ 19,000



■その他、連続観測用のACアダプター及び、補助電池ボックス(新製品)があります。

申込先: 〒213 神奈川県川崎市高津区長尾1606

折田 至

Tel.044-866-8347

●カタログ請求は100円切手をお送り下さい。

## TAMA SOUL BOOKS

### 念力スプーン 真実だ

ゲラー効果はトリックか真実か。日本の超能力少年達による実験証明。市村俊彦 内田秀男 芝山輝共著 六八〇円(一六二〇)

### UFOは第二の黒船だ

宇宙的ルネッサンスと逆産業革命によって、公害、戦争、大変動の危機を回避する。坂元ツトム著 六八〇円(一六二〇)

### 宇宙哲学

地球人類より数万年も進化した他惑星人から伝えられた宇宙の真実。アダムスキ1著 久保田八郎訳 四八〇円(一六二〇)

### ソ連圏の四次元科学

80億円の国家予算でUFOテレパシー、念力の研究を軍事や宇宙開発に応用しようとする共産圏アカデミー上巻(ソ連前編)下巻(ソ後ブルガリア・チェコ編)オストランダー他著 照洲みのる訳 各巻1150円(千200)

### ノストラダムス大予言原典

大地震、パニック、第三次大戦への宇宙人の介入など世界三大予言者の未来を集約。西暦3000年までの予言書「諸世紀」の全訳と解説ノストラダムス著ロバート編 内田秀男監修 大乗和子訳 保存版2400円(千200)

## 異色考証

### キリストは日本で死んでいる

日本の古代遺跡に刻まれた神代文字が物語る驚異の歴史。神武天皇以前の太古の記録、シヤカ、キリストの来日、古代大陸文明の世界的交流を多数の遺跡写真で解説する。宇宙考古学の原典復刻! 山根キク著 九五〇円(一六〇)

## エドガー・ケイシー秘密シリーズ

### 新刊 夢予知の秘密

夢であなただの未来を知る。毎夜見る夢の中には、超意識からの未来への警告や健康へのアドバイス、ビジネスや生活に関する助言がある。これは横尾忠則氏も激賞した、夢を実生活に活用するための画期的夢解釈の本である。エルセ・セクリスト著 山田考男・久保田洋子共訳 一三〇〇円(一六〇)

### 転生の秘密 超能力の秘密

二五〇〇件の生まれ変わりの実例を分析。職業能力の前生的基礎、親子の因縁、病と前生他。ジナ・サーミナラ著多賀球訳 九五〇円(一六〇)

自分の前生を知る方法。超能力開発七箇条など超能力の原理と、宝石応用ESP等実践法。ジナ・サーミナラ著 十菱麟訳 九五〇円(一六〇)







越しのときに紛失してしまっただのか、見当たりませ  
感でした。このようなことが下積みになっていろいろ  
あるんでしょうね。この手紙を出すにあたって  
も、母に「気遣いだと思われからやめなさい」とい  
一言、私はガーンときました。でもこんなことで何  
かためになるのではと思いいんを取る気になつた  
のです。母もラゲビ型UFOを目撃しているの  
にわざわざ出さうとすると勇気が出ないのか馬鹿だ  
と思われからということと終わってしまおう  
このようなことからもUFOに対してのちまたの  
人たちの関心がなごさざるのが本当に困つてしま  
います。私も出来るだけわかってもらおうと知り合  
いの人たちに話すが、やはりしらけてしまつた  
です。(シヨボン「UFOと宇宙」愛読者の皆さん  
ん、このよちなちをたの人たち早く理解してら  
えるよう、よりよい証獲を得るため天体を観測し、  
研究しましょうね  
様々なUFO記事本当に苦勞様です。今後も貴  
社の活躍を期待します。  
後藤惠美子(21)  
(〒100-112 宮城県柴田郡大河原町大谷字さき沼二  
三二七)

UFOの研究クラブ会員募集!  
一カ月二回コピー式新聞(二〇月二〇日)発行。  
二月五〇〇円です。UFOにもっと近づいてみま  
せんか? まだUFO写真もあります。詳しくは二  
〇田切手同封して申し込みください。  
木村 務  
(〒100-51 岐阜県土岐市泉町大和町)

「宇宙の四次元的世界」「超対称性理論入門」「空飛  
ぶ円盤製作法」etcの著書で知られ、現在逆重力機関  
の研究を続けておられる清家新一氏をささやかなが  
らも援助出来るような会を結成したく、好意ある  
方々の連絡をお待ちしております。  
野口文明  
(〒100-112 埼玉県新座市池田一―二一九 榎本マン  
ション305号)

宇宙に目覚めた頃からの孤独感に死を思ふ張り詰  
めた気持ちに似ている。これが私の心境である。そ  
れは人として、地球人として、宇宙人としての真実  
を求めたためならば、それだけが私の愁でもあ  
る。地球最後の日は近い将来確実にやっ  
てくると思定するならば、それは子供が確実に老人に  
なることを意識しないのに似ている。  
また、本誌12号で菅沼さんの言う「あの青年は精  
神病院に入った―何となく淋しい」という言葉が  
鋭く胸を痛めた。同じ本誌の「北海道で撮影された

UFO一の欄で龍崎さんは、もつと心のつながりを  
と訴えている。私も同感である。UFOを考へてい  
る人々が「精神病者などとはとても悲しい」  
そのために「生活相互協同研究会」という会を発  
案した。この目まぐるしい社会の中で、その渦に巻  
き込まれないためにできるだけ交流をし、助け合  
い。最後に「UFOと宇宙」の出会いを心から感謝し  
ている。  
久米田義信(24)  
(〒100 愛知県一宮市城崎通り六一―二二)

こんにちには、元気で過ごしておられますか。め  
たに手紙とか葉書は出さないのですが、一つ困  
たことがありましてこれを出すことになりました。  
それは「宇宙人」という言葉です。「宇宙人」と話を  
してました。その中で私は「宇宙人が会いに来な  
いかなあ」と言いました。ところが兄は「それは  
おかしい」と言っています。理由を聞いてみますと、  
「宇宙人」といふのは、当然地球人も含まれるわけ  
で、地球人なら常に会っているじゃないか―というこ  
とです。私も考えてみて、なるほどと思いました。  
しかしそれを正しく表現するには「地球以外の宇宙の  
友」としか言えません。こんな長つたらしい言葉で



●阪上清久(画) No.4

なく、一言の適当な言葉はないものでしょうか。  
最後にアダムスキの言っている宇宙の法則「哲  
学を理解できる人は素晴らしい人です。さらにそこ  
で終わらず、実行する人は宇宙の進んだ友の仲間入  
りが可能となるでしょう」  
佐藤 龍  
(〒980 宮城県塩釜市山の寺一〇―一)

★譲ります

●本誌No.8、10、11を適個で。また「星新一氏」  
の著書20冊を適個で。また大陸書房「聖書とU  
FO」(定価950円)を700円で。すべて無  
キズ。ハガキで連絡を。  
小貝和己(〒100-011 埼玉県北足立郡吹上町本町一  
九一―二)

●UFO 宇宙の謎(角川文庫) 海の知患者イ  
ルカ(現代教養文庫)以上3冊をタダで譲ります。  
もちろん全部美本です。欲しい方は往復ハガキで連  
絡を。  
中村友嘉(〒100 東京都板橋区蓮沼町二一六 金  
沢荘内)

●本誌No.4を送料共3500円で。破れ、汚れ、  
切り抜きなど一切なし。但し一名様限り。  
信田 裕(〒100 東京都調布市小島町四九二五  
有沢方)

●顕微鏡(10×20×20)を3000円 双眼鏡(40  
×)3000円 虫メガネ(特大サイズ)1000  
円 方位磁石(夜光性・ストップ付)1000円  
トランシーバー(2kmくらい)2000円(多クキ  
ズあり)ケンコーP(30×20)2500円(新品  
品)「インカ帝国の探検」2000円 「写真で見  
る空飛ぶ円盤・宇宙人」4000円 新品  
の「空海」「小島門」「コインブック」を適個で  
「月球談」「UFOとネズ湖」「四次元のミステリ  
ー」を全部で8500円(バラ売可)でどうし  
ようか。すべて送料共です。連絡は往復ハガキでお  
願ひします。  
小野寺典之(〒100-011 宮城県泉沼市松崎片浜一  
二〇)

●アポロ11号の発射砂眺みから月面での興味深い宇  
宙飛行士の活動の様子を長時間テープに録音してあ  
ります。希望者にC-60カセットに1時間録音して  
お分け致します。詳細は往復ハガキにて。..  
柴田信男(〒100 東京都府中市白糸台一―六二―  
四)

●金属探知器(新品同様で2回使用のみ、イヤホ  
ン006P一個付)を送料共3000円/12500  
円で。地上望遠鏡(メーカー不明、倍率は20倍  
くらい。説明書を紛失したので、よくわかりませ  
ん)を送料共2000/15000円で(三脚取り付

け可能。  
齊藤智博(〒100-117 新潟県中蒲原郡村松町寺町)  
●本誌No.2、No.4を各々1000円以上で。No.5  
/No.8をご希望の価格で譲ります。(ただし、送料  
別)。詳しいことは往復ハガキで連絡を。..  
白井 隆(〒100 神奈川県横浜市警見区矢向六一  
三二六)  
●本誌No.1、No.10(切り抜き無し、全般的にキズあ  
り) UFO写真集(キズ無し)「世界の謎」「宇  
宙人の痕跡」「大陸書房」「空飛ぶ円盤ミステリ  
ー」「空飛ぶ円盤の真相」「それでも円盤は飛ぶぞ」  
「これが空飛ぶ円盤だ!」「空飛ぶ円盤は実在する  
!」「空飛ぶ円盤同乗記(高文社) その他「天文  
ガイド」「天文と気象」とも10年8月より最新号  
まで、まとめて172冊括けています。買ってくだ  
さい! すべて買ってくださった方に本誌別冊「U  
FO写真集」タダで差し上げます。  
岡田善貴(〒100 大阪府茨木市春日一―四一四一  
電0726-277-3881)  
●「タロット占いの秘密」定価9000円 「靈感術  
入門」定価6000円の以上2冊を適個で、まずは往  
復ハガキで。..  
斉藤切切(〒100 東京都江戸川区小松川一―四九)  
●本誌別冊「UFO写真集」とニコニコ双眼鏡(7×  
50CF 定価21800円) 故障なし)を送料共  
10000円でお譲りします。連絡はハガキでお願  
ひします。  
布田雅敏(〒100 東京都品川区南品川四一―一  
七)

●本誌No.4、No.11までなるべくまとめて高く買って  
ください。No.7、No.11まではあまり読んでない日  
新品同様(No.8のグラビアが印刷機でできた折り目  
が少しついています)なるべく直接引き渡しのでき  
る方、往復ハガキでお願ひします。  
丸山正美(〒100 埼玉県与野市上落合八四一)  
●本誌No.3、2冊 埼玉県与野市上落合八四一) UFO写  
真集(2冊)を持っています。古い蛇腹の付いたス  
プリングカメラ(もちろんまともな作動するカメラ  
名と購入年と程度をお知らせください。  
平沢恭子(〒100 福井県敦賀市松島五九一 原電  
B1二五)  
●本誌別冊を1000円で譲ります。  
田原 満(〒100 神奈川県川崎市幸区小向三九一)  
2/3回使用のゴダックポケットカメラ30(1)  
2カ所傷あり)を13000/15000円くらい  
で。説明書、ケース(6700円)マジキューア  
プエクステンダー(9900円)付き。ハガキ(往復)  
で連絡を!  
吉原正栄(〒980 新潟県長岡市日赤町二―二二

(二)  
●スリーピーチ製ST 63 P型を平別で20000円で譲ります。今年の四月購入した品です。詳しくは葉書で連絡を。  
●日沖五(千羽)24 茨城県行方郡牛嶋町牛嶋) カメラ用八段式三脚を送料共32000円。地上用正立プリズムを送料共20000円。パロールズ(倍率が2倍になる)を送料共15000円。H(ハイイグレス)20%、M H 6%、9%(接眼レンズ)を送料各13000円。連絡は往復ハガキで。  
●酒井健治(千羽) 東京都足立区竹ノ塚二一八-1E L可。  
●本誌No 2 (新品同様)を30000円で。連絡T E L可。

(七)  
●ナショナルのカセット、4000円くらいで。ラジオ、8石2000円くらい、6石10000円くらいで。これは一部です。カタログあり、まずは手。  
●若尾秀次(千羽)11 群馬県勢多郡赤城村勝保沢(八)  
★護って下さい。  
●本誌No 1 / No 10の全部を40000円くらいで譲ってください。No 11から読み始めましたもので。ハガキで連絡をしてください。  
●加藤みゆき(千羽) 東京都目黒区五本木二一五三(八)  
●「水品の中の未来」早川書房刊、「予言」弘文堂刊をお持ちの方、適価でお譲りください。連絡はハガキか電話で。  
●嶋村光男(千羽) 東京都八王子市日吉町四一四 電話0426-22-0997

●本誌創刊号/No 4までのいずれか1冊で結構ですが、もしよければ、パスカールの宇宙人誘いかい事件の正確で貴重な資料を信用のおける方から譲っていただきます。詳しくはハガキで連絡してください。小林文人(千羽)06 鳥取県八頭郡八東町日田七九三)  
●本誌創刊号/No 9まで、50000/60000円くらいの値段でどうですか。お手紙をください。できれば美本を。電話でも結構です。  
●赤松徹郎(千羽)42 宮城県加美郡中新田町字南町一八〇)  
●一眼レフカメラをお持ちの方、できるだけ安くお譲りください。(多少の傷はかまいません)  
●高橋裕一(千羽)25 宮城県牡鹿郡牡鹿町鮎川浜山

●本誌No 1 / No 4までとNo 6を定価かそれ以下でお願いします。まずはハガキで知らせてください。  
●秋山賢二(千羽) 神奈川県横浜市鶴見区馬場二一五-1四 電話045-573-8533  
●本誌愛読者の方で、U F Oの写真を写しておられる方、焼増して送って。送料、写真代当方負担  
●荻山岩男(千羽) 広島県広島市大洲五一七(四)  
●本誌創刊号/No 4を20000円前後、No 6を50000円前後で譲ってください。また高文社「空飛ぶ円盤同乗記」を適価でお願いします。送料当方負担  
●安井美佐子(千羽) 東京都府中市是政三三三十九 電話0423-64-0720  
●本誌No 2、No 6を15000円で譲ってください。別々の場合はNo 2を10000円、No 6を5000円で。いずれも送料共の価格です。ハガキで連絡をください。  
●仲嶋美由貴(千羽)14 京都府相楽郡南田城村今山)  
●本誌創刊号/No 3までを送料込みで40000/45000円で譲ってください。まずはハガキか電話でご連絡ください。待っています。  
●菊川泰全(千羽) 奈良県北葛城郡河合町池部 電話07455-6-2361  
●本誌創刊号/No 4までを20000円以下で譲ってください。パラパラなら一冊5000円、ポロポロはダメ。まずはハガキで。  
●龍島昭彦(千羽) 新潟県新発田市城北町一四一(二)  
●本誌ファンの方でU F Oの写真を写された方、焼き増しを一枚譲ってください。送料共1000円です。ハガキか電話で。まずは葉書で連絡。  
●八木泰雅(千羽) 東京都調布市染地三一一 多摩川住宅ロー一五-1〇四)  
●本誌創刊号/No 9までを送料共で40000円以内で譲ってください。まずはハガキで連絡。  
●杉本佳史(千羽) 奈良県奈良市百楽園四一八-1五)  
●本誌No 1 / No 3までできるだけ安く譲ってください(バラ可)。またU F O写真を募集します。白黒なら1000円以下、カラーは2000円以下、特別よく撮れているものは3000円くらいで買い取ります(あまりよく見えないものはダメ)。できれば同じ写真を2/3枚。封筒に写真と希望の値段を書いて送ってください。本誌の連絡は往復ハガキで。  
●堀川誠一(千羽)01 千葉県流山市十太夫二一九-1五七)  
●本誌創刊号/No 4までを20000円前後で譲ってください。まずは往復ハガキで連絡をお願いします(各一冊なら4000円前後)。

野沢一郎(千羽)31 栃木県宇都宮市石井町二二九(八)  
●本誌創刊号/No 4までを定価で譲ってくださる親切な方、ご連絡ください。お願いします。もちろん送料はこちらでお払います。一冊でも結構です。  
●西郷良和(千羽) 東京都文京区西片一九一三三)  
●本誌No 1 / No 3を30000円で譲ってください。少し汚れは可。切り抜き、書き込み不可。まずはハガキで。  
●近藤政利(千羽) 大阪府東大阪市高井田一三七七)  
●本誌創刊号/No 2を適価で譲ってください。破損がなければ、若干の汚れ、書き込みのあるものも歓迎。ハガキで連絡してください。  
●井原慶二(千羽) 北九州市戸畑区丸町二二二-11三三)  
●私は本誌の大ファンであり、かわいそうに創刊号がありません。どなたか送料別で25000円で譲ってください。美品に限りませんが、超美品には追加分も考えます。ハガキの連絡を待つ。  
●小野高嗣(千羽) 北海道旭川市川端町一〇 旭西下宿内)  
●本誌創刊号/No 2を、あつかましいとは思いますが、定価どおり6000円で譲ってください。送料は当方が負担いたします。往復ハガキで連絡してください。

●福沢 勉(千羽)02 福岡県嘉穂郡稲葉町西岩崎)  
●本誌No 3 / No 4の新品をお持ちの方、D A Xの懐中時計(27000円)で新品同様の物です。と交換してくださいませんか。ただし美本に限り。また高文社の「空飛ぶ円盤同乗記」を適価でお譲りください。連絡は往復ハガキでお願いします。  
●窪田博史(千羽) 愛媛県東宇和郡宇和町鬼屋二一四二一七)  
●本誌No 1 / No 4までをどなたか40000円くらいで譲ってくださいをお願いします。  
●大塚宏和(千羽) 都内葛飾区金町六八一〇 電話03-6607-2985)  
●本誌No 4、No 7を譲ってください。連絡は往復ハガキでお願いします。  
●今井春樹(千羽) 千葉県市川市曾谷七二四一三)  
●鳴門市にお住いの方、どなたでもよいですから、本誌No 1 / No 6を一週間ほど貸していただきます。また1974年10月29日付の徳島新聞をぜひ譲ってください。お礼はします。  
●赤松克美(千羽) 徳島県鳴門市里浦町里浦字坂田三〇二-11)  
●超相対性理論「四次元世界の謎(正・続)」  
●加賀の鳥をそれぞれ半値で。  
●水原英一(千羽) 東京都調布市菊野台三二五一 大野寮四一〇二)

●本誌創刊号/No 4、No 6を30000/40000円(送料共)くらいで。高文社の「円盤シリーズ」を適価でお譲りください。  
●塚田久貴(千羽)01 神奈川県中郡大磯町生沢二八)  
●新聞、雑誌などに載ったU F O関係の記事を当方へお送りください。コピーでもかまいません。詳しくは往復ハガキでご連絡ください。  
●逢坂輝夫(研究会)  
●本誌No 2、4、5を合わせて20000円(送料共)にて譲ってください。(美品希望。まずは電話でご連絡を。八時以降にはお問い合わせ)  
●高橋典男(千羽) 千葉県鴨川市広場九七八 電話0709-12-4281)  
●本誌創刊号とNo 2をお持ちの方、私の所持するG・アダムスキー著「空飛ぶ円盤同乗記」と黒沼健著「空飛ぶ円盤の謎と怪奇」いずれも美本です。以上二冊と交換していただけます。連絡は往復ハガキでお願いします。  
●志田敏夫(千羽) 静岡県浜松市高林町八九四)  
●本誌創刊号/No 5を送料共一冊40000円で売ってください。なるべくなら、括して売ってください。一冊でも結構です。美本希望。連絡を待っています。  
●松田博樹(千羽) 岩手県盛岡市上米内字米沢八九)  
●ヨガに関する書物をお譲りください。お礼は円盤関係の本です。  
●加藤悦子(千羽) 北海道函館市赤川通り四九一五)  
●本誌No 6を40000円くらいで譲ってください!  
●野崎雅敏(千羽) 愛知県名古屋市中南区呼続町四一(一四)  
●正野威馬雄著「円盤に乗った青年の話」と(北海道のあの事件について詳しく書いてあります)アダムスキー著の「円盤に関する本か、天体望遠鏡に関する説明書(初心者向き)と交換してください。まずはハガキで連絡を。  
●前島さち子(千羽)03 岐阜県加茂郡川町下藤生二〇五八)  
●本誌創刊号を20000円(送料共)でお譲りください。まずはハガキで連絡を。  
●窪田光良(千羽) 北海道札幌市中央区南六条西二〇丁目)  
●本誌創刊号/No 5まで(全部まとめて40000円)で近くの人譲ってください。連絡を待っています。  
●鈴木俊克(千羽) 静岡県浜北市東美園八八八 電話05358-7-1256)

●本誌創刊号/No 4、No 6を30000/40000円(送料共)くらいで。高文社の「円盤シリーズ」を適価でお譲りください。  
●塚田久貴(千羽)01 神奈川県中郡大磯町生沢二八)  
●新聞、雑誌などに載ったU F O関係の記事を当方へお送りください。コピーでもかまいません。詳しくは往復ハガキでご連絡ください。  
●逢坂輝夫(研究会)  
●本誌No 2、4、5を合わせて20000円(送料共)にて譲ってください。(美品希望。まずは電話でご連絡を。八時以降にはお問い合わせ)  
●高橋典男(千羽) 千葉県鴨川市広場九七八 電話0709-12-4281)  
●本誌創刊号とNo 2をお持ちの方、私の所持するG・アダムスキー著「空飛ぶ円盤同乗記」と黒沼健著「空飛ぶ円盤の謎と怪奇」いずれも美本です。以上二冊と交換していただけます。連絡は往復ハガキでお願いします。  
●志田敏夫(千羽) 静岡県浜松市高林町八九四)  
●本誌創刊号/No 5を送料共一冊40000円で売ってください。なるべくなら、括して売ってください。一冊でも結構です。美本希望。連絡を待っています。  
●松田博樹(千羽) 岩手県盛岡市上米内字米沢八九)  
●ヨガに関する書物をお譲りください。お礼は円盤関係の本です。  
●加藤悦子(千羽) 北海道函館市赤川通り四九一五)  
●本誌No 6を40000円くらいで譲ってください!  
●野崎雅敏(千羽) 愛知県名古屋市中南区呼続町四一(一四)  
●正野威馬雄著「円盤に乗った青年の話」と(北海道のあの事件について詳しく書いてあります)アダムスキー著の「円盤に関する本か、天体望遠鏡に関する説明書(初心者向き)と交換してください。まずはハガキで連絡を。  
●前島さち子(千羽)03 岐阜県加茂郡川町下藤生二〇五八)  
●本誌創刊号を20000円(送料共)でお譲りください。まずはハガキで連絡を。  
●窪田光良(千羽) 北海道札幌市中央区南六条西二〇丁目)  
●本誌創刊号/No 5まで(全部まとめて40000円)で近くの人譲ってください。連絡を待っています。  
●鈴木俊克(千羽) 静岡県浜北市東美園八八八 電話05358-7-1256)

初回金  $\frac{1}{10}$  で★ おてもとへ **均等** ★ **10ヵ月払い** 全品ともお求めやすい

ご不満のときは返品・交換・解約もできます・安心してお申込み下さい

★ ★

注文字番号82-607  
**ニコルスRK-6091**  
60%屈折型 径緯台式

【定格格】  
対物レンズ60%ア  
クロマート、焦点距離  
910%、集光力73倍、  
分解能1.93秒、極限  
等級10.7等星

【附属品】  
接眼レンズHM6(152  
倍)、HM12.5(73倍)、  
HM20(45倍)星野写  
真雲台付6×24ファ  
インダー、天頂ミラ  
ー、サングラス、ム  
ーングラス、木製三  
脚、バランスウェ  
イト2コ、フレキシ  
ブルハンドル2個

初回金4,500円 円1,000円  
分割払金(円)4,500円×9回  
分割払価格45,000円  
現金払価格39,800円



★ ★

**大口径超高性能**  
80%大型屈折型  
注文字番号82-801  
**ニコルスRK-8012**

月つきわずか  
8,500円!

【定格格】  
対物レンズ80%ア  
クロマート、焦点距離  
1,200%、集光力131  
倍、分解能1.45秒、  
極限等級11.3等星

【附属品】  
接眼レンズHM6、H  
M12.5、HM20、星  
野写真雲台付8×30  
ファインダー、天頂  
ミラー、サングラス、  
ムーングラス、木製  
三脚、バランスウェ  
イト2コ、フレキシ  
ブルハンドル2個

初回金8,500円 円1,500円  
分割払金(円)8,500円×9回  
分割払価格85,000円  
現金払価格75,500円

<光軸修正付>  
初回金8,950円 円1,500円  
分割払金(円)8,950円×9回  
分割払価格89,500円  
現金払価格79,500円



**超高性能双眼鏡**  
彗星の発見に!

注文字番号83-008

**サターン8**

8倍双眼鏡 8×30%



只今  
特價  
セール  
中!

【定 格】  
対物有効径 50%  
倍 率 8倍  
実 視 界 7.5°  
明 る さ 14.4  
ひとみ 径 3.8  
重 量 570g

初回金2,000円 円600円  
分割払金(円)1,000円×7回  
分割払価格9,000円  
現金払価格8,000円

**スポーツの  
観戦に!**

注文字番号83-016

**サターン16**

16倍双眼鏡  
16×50%



【定 格】  
対物有効径 50% 明 る さ 9.6  
倍 率 16倍 ひとみ 径 3.8  
実 視 界 3.5° 重 量 1050g

初回金3,500円 円800円  
分割払価格1,000円×10回  
分割払価格13,500円  
現金払価格12,000円

二光カタログハウスチェーン  
営業時間 AM10:00-PM7:00

**ビバ店**

年中無休

〒133 東京都江戸川区南小岩3-7-10  
TEL 03(832)0713

ビバ光電店秋葉原店

（印鑑をご持参下さい）

示 告 告 の 商 品 は ビバ 店 に て 展 示 販 売 中 / お 意 ぎ の 方 は 、 こ の 来 店 下 さ い 。 初 回 金 で お 持 ち 帰 り O K !



**今すぐのご注文は**

- ご注文番号か品名を紙に書いて、月賦は初回金と送料を現金書留封筒でお送り下さい。
- 一時払いは同じ方法で現金価格と送料をお送り下さい。

あて先

〒133・東京都小岩局48号  
**ニコー技研(株)**  
74係

**カタログのお申込は**

**只今無料進呈中**

商品をよりくわしく知りたい方は、カタログをお申込み下さい。下記のカタログ進呈券をハガキのうらにはってお送り下さい。無料でお送りいたします。



カタログ進呈券74係

〒133 東京都江戸川区南小岩3-7-10 **ニコー技研** 74係 03(650)0405

この広告についてのご不満や苦情は独自に調査、お答えします。東京都江戸川区西小岩3-31-11新井ビル2Fニコー消費者相談室 ☎03(672)8558

新設計高性能  
圧倒的人気  
全品完全保証

新発売

ニコルス  
カスタムシリーズ

たしかな品質・合理的良心価格・お手軽な均等払い

注文番号82-001

ニコルスMS-1149

114mm反射型 経緯台式

【定 格】

対物主鏡 114mmア  
ミナイズ済、焦点距  
離900mm、集光力265  
倍、分解能1.0秒、極  
限等級12.0等星

【附属品】

接眼レンズHM6(150  
倍)HM12.5(72倍)、  
6×24ファインダー、  
サングラス、木製三  
脚、フレキシブルハ  
ンドル

初回金3,000円 円1,500円  
分割払金(円)3,000円×9回  
分割払価格30,000円  
現金払価格26,000円

注文番号82-605

ニコルスRS-6091

60mm屈折型  
上下微動装置付

【定 格】

対物レンズ60mmアク  
ロマート、焦点距離  
910mm、集光力73倍、  
分解能1.93秒、極  
限等級10.7等星

【附属品】

接眼レンズHM6(152  
倍)、HM12.5(73倍)  
6×24ファインダー、  
天頂ミラー、サング  
ラス、木製三脚、フ  
レキシブルハンドル  
2個

初回金2,300円 円900円  
分割払金(円)2,300円×9回  
分割払価格23,000円  
現金払価格20,000円

注文番号82-603

ニコルスRJ-6010

60mm屈折型 上下微動装置付

月つきわずか 1,950円/

【定 格】

対物レンズ60mmアク  
ロマート、焦点距離  
1,000mm、集光力73倍、  
分解能1.93秒、極  
限等級10.7等星

【附属品】

接眼レンズHM6(166  
倍)HM12.5(80倍)、  
6×24ファインダー、  
天頂ミラー、サング  
ラス、木製三脚、フ  
レキシブルハンドル

初回金1,950円 円900円  
分割払金(円)1,950円×9回  
分割払価格19,500円  
現金払価格16,500円

注文番号82-606

ニコルスRK-6050

60mm屈折型 赤道儀式

明るく  
鮮明な像

【定 格】

対物レンズ60mmアク  
ロマート、焦点距離  
500mm、集光力73倍、  
分解能1.93秒、極  
限等級10.7等星

【附属品】

接眼レンズHM6(83  
倍)、HM12.5(40倍)、  
HM60(25倍)、星野  
写真雲台付6×24フ  
ァインダー、天頂ミ  
ラー、サングラス、  
ムーングラス、木製  
三脚、バランスウェ  
イト2コ、フレキシ  
ブルハンドル2個

初回金4,400円 円1,000円  
分割払金(円)4,400円×9回  
分割払価格44,000円  
現金払価格38,800円

# ★本誌バックナンバー

((9月号までの旧題号は「コスモ」))

★わが国唯一の《空飛ぶ円盤》専門誌「UFOと宇宙」は今や世界のトップクラスを行く専門誌！ 全国のUFOファンに大反響！  
★バックナンバーは貴重な記事と写真の宝庫！品切れ後はすべて絶版となる。在庫あるうちにぜひ入手し、UFO研究資料として保存しよう！今すぐユニバース出版社業務部へ直接に注文しよう！  
★1~4・6号は売切れ、絶版。5号・8号はいよいよ残部僅少！  
送1冊 ¥115 (3冊 ¥250) ※5冊注文の場合は4冊と1冊の2袋に分けて送りますので、送料として4冊分 ¥250+1冊分 ¥115、計 ¥365をお送り下さい。

**第5号** (1974年3月発売) ¥330  
●日本古来の天空人出現考(2)斎藤守弘 ●複雑怪奇な点滅光跡の謎高梨純一 ●円盤の中に連れこまれた男(2)南山宏 ●シンガン州光体目撃事件アレン・ユートク ●私の目撃体験記 ●太陽エネルギーと水で無限の燃料を！ ●神々の戦車(完) E・D・デニケンその他

**第7号** (1974年7月発売) ¥330  
●ガルダの発見黒沼健 ●大ピラミッドはUFOの記念碑か？志田真人 ●アルゼンチンの奇怪なUFO着陸事件 O・A・ガリンデス ●海上に着水した円盤/W・ヒューラー ●空飛ぶ円盤はGエジンガド？橋本健 ●宇宙・引力・空飛ぶ円盤(2)レナード・クランプその他

**第8号** (1974年9月発売) ¥330  
●マンテル大尉の悲劇荒井欣一 ●イタリアの不思議な小人出現事件セルジオ・コンティー ●千葉県に出現した大空円盤 ●ネス湖における悪魔ばらいの儀式とUFO着陸 ●天体オーラと宇宙電界の謎内田秀男 ●宇宙・引力・空飛ぶ円盤(3)レナード・クランプその他

**第9号** (1974年11月発売) ¥400  
●UFOによる米軍機追尾事件賢静 ●スペインに出現した円盤と乗員 ●ジョージ・アダムスキーはまだ影を投げかけている ●ゴードン・クレイトン ●地震の鍵をにぎるマンテル対決/竹内均 ●宇宙・引力・空飛ぶ円盤(4)レナード・クランプその他

**第10号** (1975年1月発売) ¥360  
●銀色の服を着た宇宙人高梨純一 ●科学を曲げる男、ユリ・ゲラーゴードン・クレイトン ●世界の謎を探る宮本正太郎 ●NASAの活動とその未来中村政雄 ●UFO情報 ●UFO目撃レポート ●宇宙・引力・空飛ぶ円盤(5)レナード・クランプその他

**第11号** (1975年3月発売) ¥360  
●月面は円盤の中継基地か椎沢潤一郎 ●ニューヨーク州の着陸事件レッド・フリーチャー ●UFO情報 ●UFO目撃レポート ●1980年代の宇宙連絡船河島信樹 ●アダムスキー型円盤、尾道市に出現！ ●宇宙・引力・空飛ぶ円盤(完)レナード・クランプその他

**第12号** (1975年5月発売) ¥360  
●甲府市にUFO着陸！ ●オーストリアの光るカタツムリ状物体E・ペルガー ●古代の天空人エーリッヒ・フォン・デニケン ●UFO情報 ●UFO目撃レポート ●科学ニュース ●重力波とは何か千葉二郎 ●ソ連圏のUFO現象(1)シベリアの謎の大爆発 その他

**第13号** (1975年7月発売) ¥360  
●千葉市にアダムスキー型円盤出現！ ●円盤に乗った宇宙人を見た！ ●炎をぶく不思議な物体 ●UFO情報 ●UFO目撃レポート ●宇宙通信のためのテレバシー通信市村俊彦 ●中学生にもわかる微分積分(1)三好要市 ●ソ連圏のUFO現象(2)ルーマニアのUFO出現事件 その他

# 豪華版 わが国最初の《空飛ぶ円盤》写真集

## UFO写真集

第①集

絶賛発売中！カメラでとらえた驚異の記録！  
¥1300 千300

戦後世界各地で目撃され、日本にもひんぱんに出現して重要問題となった神秘の飛行物体の正体は？ 全国のUFOファンの要望にこたえてUFO研究界の第一人者久保田二郎が和英両文で解説★世界のめずらしい貴重な写真の集大成★カラー写真21点、白黒写真33点・大画面★ワイドな画面からグーッとくる迫真感！★A4版(21cm×29.7cm)・極上アート紙使用★美麗カバー付き豪華版・長期保存可能

# バインダー

☆☆ ¥400 1~2個 ¥300 ☆☆☆  
☆☆ ¥600 3~4個 ¥600 ☆☆☆

●1カ年6冊分一括保存用必需品  
●極厚手表紙、布装、表面背共金文字箔押。本社宛直接ご注文下さい。

■当社刊行物が書店にない場合は、振替・現金書留・小為替・低額切手等で当社宛直接ご注文下さい(収入印紙は不可)。代金あと払いの注文はおことわりします。

■最近、住所不明で返送される郵便物が増えています。ご注文の際は必ず郵便番号・住所(アパート名なども記入のこと)・氏名・電話番号・注文品名・号数・冊数を明記して下さい。ユニバース出版社

送る先 東京都台東区秋葉原三の三、ユニバース出版社UFO資料調査部 アキバビル

●UFO関係記事の原稿も募集  
四百字詰原稿用紙(4枚)四〇枚まで。  
採用分には原稿をさしあげます。

●UFO目撃報告と写真を募集  
UFO(未確認飛行物体)の目撃報告と写真を募集します。左に掲げた各項目を参考に、なるべく正確な詳細な報告をお送り下さい。掲載された分には薄謝を呈します。写真の場合はできればネガもいっしょにお送り下さい。ただし本誌に掲載後に偽作であることが判明してトラブルが生じた場合、本誌は一切の責任を負いませんので、その点をあらかじめご了承下さい。その他、各種新聞雑誌などに掲載されたUFO関係の記事・写真類の切抜きも歓迎します。

●UFO目撃報告用参考事項

- (1)目撃者住所氏名(できれば本人の写真を添える)、年齢、職業(学生の方は学校名・学年)、電話番号(匿名を希望の場合は本名明記の上、その旨を付記すること) 同時目撃者の有無、その他。
- (2)目撃場所地名、付近略図、時刻、天候、目撃継続時間、その他。
- (3)物体飛行物体の形(スケッチを添えること)、大きさ、色、その他。
- (4)飛行状態、仰角、方向、飛行中の形態の変化、飛行中の色の変化、飛行中の光度の変化、推進速度及び高度、その他。
- (5)観測機器使用の場合はその機器名、性能その他を付記する。
- (6)撮影用具カメラを使用の場合はカメラ名、使用フィルム、レンズ名、絞り、シャッタースピードその他のデータを付記する。

★本号より12頁分大増頁敢行！飛躍的に充実しました。アンケートによる読者のご要望にこたえたもので、定価アップもわずか30円。奉仕価格です。★近來国内各地にひんびんとアダムスキー型円盤が出現。日本にUFOが集中しているのかな？謎は深まるばかり。★多数のアンケートに感謝。すべて隔々まで目を通し有益な資料として一括保存します。「すばらしい専門誌だ。カンパレノ」の声が圧倒的でした。(K)

印刷所 大日本印刷株式会社  
昭和五〇年一月一日発行  
(隔月)奇数月(一日発売)  
定価三九〇円・送料共二八〇円  
年々購読料・送料共二八〇円  
(地方の書店で入手できない場合は本社へ直接注文下さい)

●本誌掲載記事・写真の無断転載を禁じます。  
●海外の記事はすべて翻訳転載取得済。

編集発行人 (コスモ出版社改め) 久保田二郎 第14号  
発行所 株式会社 ユニバース出版 社  
〒110 東京都台東区秋葉原三の三  
電話(255)8784 代表  
振替・東京119478  
アキバビル

Across the Editor's Desk

### 当社編集部員募集

業務拡張のため左記の要領で編集部員を募集します。応募者は履歴書を添えて願書を業務部宛ご送付ください。

- 1.本誌読者でUFO問題に詳しい方。
- 2.大学卒業男子。
- 3.雑誌編集の経験三年以上ある方。
- 4.年齢三十五歳以下。
- 5.当社は完全週休二日制。各種社会保険完備。交通費全額支給。実方により高給優遇。

株式会社ユニバース出版社

# スリーピーチUFOシリーズ

・UFOシリーズは正立像です。天体用(倒立像)はUFOシリーズより価格が安く成ります。

<p><b>No.MTZ40S</b> アクロマートレンズ 口径 40mm 倍率 ズーム変倍 15×~40×</p> <p>¥ 9,000 送料 ¥600 (¥7,200)</p> 	<p><b>No.ST60A-UFO</b> アクロマートレンズ D60mm F800mm 倍率 100× 44× 上下微動装置</p> <p>特価 ¥18,000 送料 ¥1,000</p> <p>(天体地上兼用)</p> <p>性能 1.93秒・10.7等星・73倍</p> 	<p><b>No.ST63A-UFO</b> アクロマートレンズ D60mm F1,000mm 倍率 125× 55× 上下微動装置</p> <p>特価 ¥19,500 送料 ¥1,000</p> <p>(天体地上兼用)</p> <p>性能 1.93秒・10.7等星・73倍</p> 	
<p><b>ビクトリー701-UFO</b> アクロマートレンズ D60mm F700mm 倍率 114× 56× 上下微動装置 水平微動装置</p> <p>特価 ¥25,800 送料 ¥1,200</p> <p>(天体地上兼用)</p> <p>性能 1.93秒・10.7等星・73倍</p> 	<p><b>No.ST67A-UFO</b> アクロマートレンズ D60mm F1,000mm 倍率 125× 50× 上下微動装置 水平微動装置</p> <p>特価 ¥30,500 送料 ¥1,200</p> <p>(天体地上兼用)</p> <p>性能 1.93秒・10.7等星・73倍</p> 	<p><b>グレートビクトリー700-UFO</b> 屈折赤道儀 アクロマートレンズ D60mm F700mm 倍率 117×56× 経緯微動装置 経緯目盛環</p> <p>特価 ¥35,800 送料 ¥1,200</p> <p>(天体地上兼用)</p> <p>性能 1.93秒・10.7等星・73倍</p> 	
<p><b>No.ST1000-UFO</b> アクロマートレンズ 屈折赤道儀 D60mm F1000mm 倍率 167× 80× 40× 経緯微動装置 経緯目盛環</p> <p>特価 ¥43,800 送料 ¥1,500</p> <p>(天体地上兼用)</p> <p>性能 1.93秒・10.7等星・73倍</p> 	<p><b>No.SST600</b> アクロマートレンズ 屈折赤道儀 D60mm F910mm 倍率 150× 73× 45× 経緯微動装置 経緯目盛環</p> <p>特価 ¥42,000 送料 ¥2,000</p> <p>(天体地上兼用)</p> <p>性能 1.93秒・10.7等星・73倍</p> 	<p><b>No.SST76</b> アクロマートレンズ 屈折赤道儀 D76mm F910mm 倍率 151× 73× 36× 経緯微動装置 経緯目盛環</p> <p>特価 ¥55,000 送料 ¥2,000</p> <p>(天体地上兼用)</p> <p>性能 1.5秒・11.2等星・118倍</p> 	
<p><b>No.SST80</b> アクロマートレンズ 屈折赤道儀 D76mm F1,250mm 倍率 208×100× 50× 経緯微動装置 経緯目盛環</p> <p>特価 ¥62,000 送料 ¥2,000</p> <p>(天体地上兼用)</p> <p>性能 1.5秒・11.2等星・118倍</p> 	<p><b>プリズム双眼鏡(アクリマートレンズ・ケース付)</b></p> <p>← <b>No.SB1030</b> 倍率10× D30mm 特価 ¥8,000 送料 ¥500</p> <p>← <b>No.SB1050</b> 倍率 10× D50mm 特価 ¥11,000 送料 ¥600</p> <p>← <b>No.SB2050</b> 倍率20× D50mm 特価 ¥12,000 送料 ¥600</p> <p>← <b>No.KB3070</b> 特大型高さ26cm 倍率30× D70mm 特価 ¥33,000 送料 ¥1,000</p>   		<p>( )内は学生特価 (くわしくは 切手180円 同封の上、総合</p> <p><b>カタログNo.12</b> お申込み下さい</p> <p>屈折式望遠鏡 反射式望遠鏡 望遠鏡部品 双眼鏡 顕微鏡</p> <p>〒121東京都足立区 平野 3-7-17</p> <p><b>K.K.スリーピーチ</b> サービスセンター UFO係</p>



ヤマモト

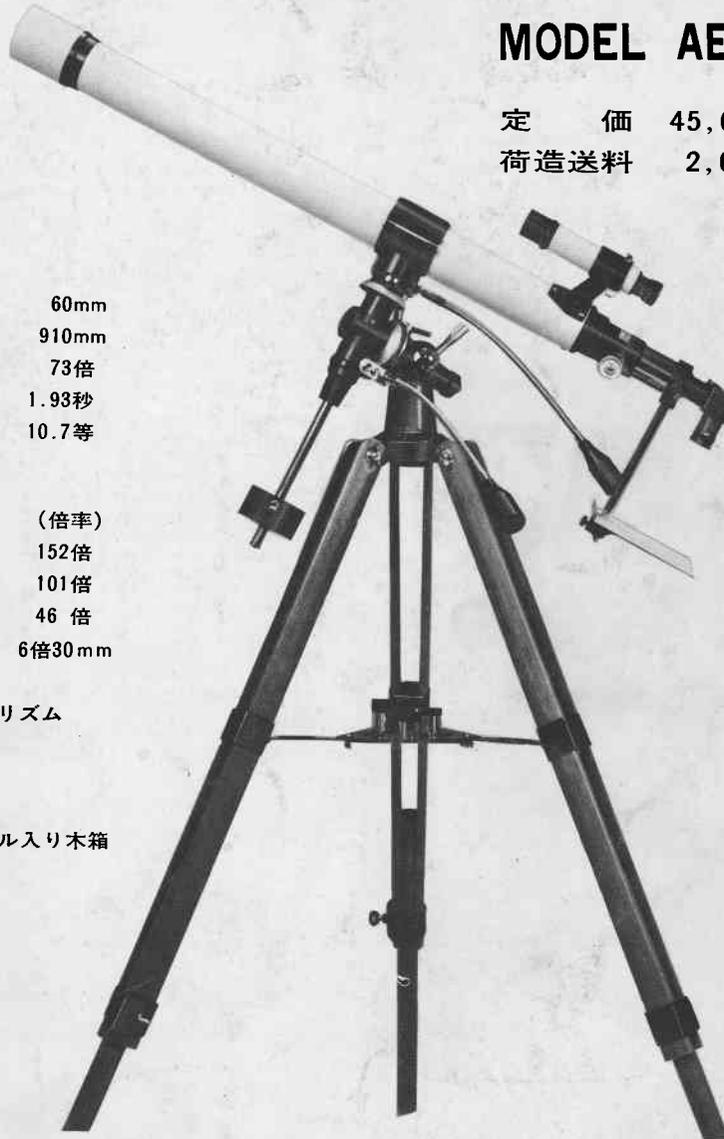
# サテライト天体望遠鏡

## 60mm屈折赤道儀

### MODEL AE-61

定 価 45,000円

荷造送料 2,000円



#### ●光学的性能

有効径	60mm
集点距離	910mm
集光力	73倍
分解能	1.93秒
極限等級	10.7等

#### ●付属品

接眼鏡	(倍率)
HM-6mm	152倍
HM-9mm	101倍
H-20mm	46倍
ファインダー	6倍30mm
天頂プリズム	
地上用正立プリズム	
太陽投影板	

#### 格納箱

発泡スチロール入り木箱

ヤマモトの天体望遠鏡は海外で絶賛を博しております

メーカーからユーザーへ！  
通信販売のお知らせ！

●上記の他各種あります。詳しくは115円切手同封の上カタログをU係へ御請求下さい。

株式  
会社

# 山本製作所

東京都板橋区大原町5-3  
電話 966-2408 郵便番号 174